九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告

—15—

小郡市所在大板井遺跡の調査

下　巻

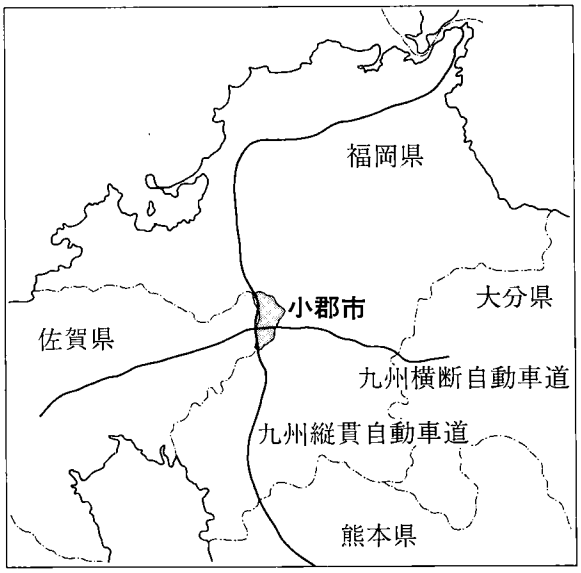
1988

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係
埋蔵文化財調査報告
—15—

小郡市所在大板井遺跡の調査

下　巻



本　文　目　次

Ⅴ　大板井遺跡Ⅶ区の調査 …… 1
1．調査の概要 …… 1
2．遺構と遺物 …… 1
(1)　弥生時代の住居跡 …… 1
(2)　弥生時代の土壙 …… 16
(3)　弥生時代の甕棺墓 …… 85
(4)　古墳時代・歴史時代の住居跡 …… 87
(5)　歴史時代の土壙 …… 97
(6)　その他の遺構 …… 99
(7)　石器・土製品 …… 103

挿　図　目　次

第1図　大板井遺跡Ⅶ区遺構配置区割図（1/400） …… 2
第2図　1号住居跡実測図（1/60） …… 3
第3図　1号住居出土土器実測図①（1/4） …… 4
第4図　1号住居出土土器実測図②（1/4） …… 5
第5図　2号住居跡実測図（1/60） …… 6
第6図　2号住居出土土器実測図②（1/4） …… 6
第7図　2号住居出土土器実測図①（1/4） …… 7
第8図　4号住居跡実測図（1/60） …… 8
第9図　6号住居跡実測図（1/60） …… 9
第10図　6号住居出土土器実測図（1/4） …… 10
第11図　8号住居跡実測図（1/60） …… 10
第12図　9号住居跡実測図（1/80） …… 11
第13図　10号住居跡実測図（1/60） …… 12
第14図　10号住居出土土器実測図②（1/4） …… 12
第15図　10号住居出土土器実測図①（1/4） …… 13
第16図　13号住居跡実測図（1/60） …… 14
第17図　13号住居出土土器実測図（1/4） …… 15
第18図　19号住居跡実測図（1/60） …… 16
第19図　19号住居出土土器実測図（1/40） …… 16
第20図　1号土壙実測図（1/20） …… 17
第21図　1号土壙出土土器実測図（1/4） …… 18
第22図　2号土壙実測図（1/30） …… 19
第23図　2号土壙出土土器実測図①（1/4） …… 20
第24図　2号土壙出土土器実測図②（1/4） …… 21
第25図　2号土壙出土土器実測図③（1/4） …… 22
第26図　3号土壙実測図（1/30） …… 23
第27図　3号土壙出土土器実測図①（1/4） …… 24
第28図　3号土壙出土土器実測図②（1/4） …… 25

第29図　4号土壙実測図（1/30）…… 26
第30図　4号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 27
第31図　4号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 28
第32図　4号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 29
第33図　4号土壙出土土器実測図④（1/4）…… 30
第34図　5号土壙実測図（1/30）…… 31
第35図　5号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 32
第36図　5号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 33
第37図　6号土壙実測図（1/30）…… 34
第38図　6号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 36
第39図　6号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 37
第40図　6号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 38
第41図　6号土壙出土土器実測図④（1/4）…… 39
第42図　6号土壙出土土器実測図⑤（1/4）…… 40
第43図　6号土壙出土土器実測図⑥（1/4）…… 41
第44図　6号土壙出土土器実測図⑦（1/4）…… 42
第45図　6号土壙出土土器実測図⑧（1/4）…… 43
第46図　6号土壙出土土器実測図⑨（1/4）…… 44
第47図　7号土壙実測図（1/30）…… 45
第48図　7号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 46
第49図　7号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 47
第50図　8号土壙実測図（1/30）…… 49
第51図　8号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 50
第52図　8号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 51
第53図　8号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 52
第54図　8号土壙出土土器実測図④（1/4）…… 53
第55図　10号土壙実測図（1/20）…… 53
第56図　10号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 54
第57図　10号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 55
第58図　10号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 56
第59図　11号土壙実測図（1/20）…… 57
第60図　11号土壙出土土器実測図（1/4）…… 58
第61図　12号土壙実測図（1/30）…… 58
第62図　12号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 59
第63図　12号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 60
第64図　13号土壙実測図（1/20）…… 61
第65図　13号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 62
第66図　13号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 63
第67図　13号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 64
第68図　13号土壙出土土器実測図④（1/4）…… 65
第69図　14号土壙出土土器実測図（1/4）…… 66
第70図　14号土壙実測図（1/20）…… 66
第71図　15号土壙実測図（1/20）…… 67
第72図　15号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 68
第73図　15号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 69
第74図　16号土壙実測図（1/20）…… 69
第75図　16号土壙出土土器実測図（1/4）…… 70
第76図　17号土壙実測図（1/30）…… 71
第77図　17号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 72

第78図　17号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 73
第79図　17号土壙出土土器実測図③（1/4）…… 74
第80図　17号土壙出土土器実測図④（1/4）…… 75
第81図　17号土壙出土土器実測図⑤（1/4）…… 76
第82図　17号土壙出土土器実測図⑥（1/4）…… 77
第83図　17号土壙出土土器実測図⑦（1/4）…… 78
第84図　17号土壙出土土器実測図⑧（1/4）…… 79
第85図　18号土壙実測図（1/30）…… 80
第86図　18号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 80
第87図　18号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 81
第88図　19号土壙実測図（1/20）…… 82
第89図　19号土壙出土土器実測図①（1/4）…… 83
第90図　21号土壙実測図（1/20）…… 83
第91図　19号土壙出土土器実測図②（1/4）…… 84
第92図　21号土壙出土土器実測図（1/4）…… 85
第93図　1号甕棺墓実測図（1/20）…… 85
第94図　1号甕棺実測図（1/4）…… 86
第95図　3号住居跡実測図（1/60）…… 87
第96図　5号住居跡実測図（1/60）…… 88
第97図　5号住居出土土器実測図（1/3）…… 89
第98図　7号住居跡実測図（1/60）…… 89
第99図　7号住居出土土器実測図（1/3）…… 90
第100図　11号住居出土土器実測図（1/3）…… 90
第101図　11号住居跡実測図（1/60）…… 91
第102図　12号住居跡実測図（1/60）…… 92
第103図　12号住居出土土器実測図（1/3）…… 92
第104図　14号住居跡実測図（1/60）…… 93
第105図　14号住居出土土器実測図（1/3）…… 94
第106図　15号住居跡実測図（1/60）…… 95
第107図　15号住居出土土器実測図（1/3）…… 95
第108図　16号住居跡実測図（1/60）…… 96
第109図　16号住居出土土器実測図（1/3）…… 97
第110図　20号土壙出土土器実測図（1/3）…… 97
第111図　9号土壙出土土器実測図（1/3）…… 98
第112図　9号土壙実測図（1/30）…… 99
第113図　1号土壙墓出土遺物（1/3）…… 99
第114図　1号土壙墓実測図（1/20）…… 100
第115図　17号住居跡実測図（1/60）…… 101
第116図　20号住居跡実測図（1/60）…… 101
第117図　Ⅶ区出土石器及び土製品…… 102

図版目次

図版1　大板井遺跡Ⅵ区西全景（直上）
図版2(1)　大板井遺跡Ⅵ区西全景（西から）
図版　(2)　大板井遺跡Ⅵ区西全景（東から）
図版3(1)　1号住居跡
　　(2)　2号土壙

(3)　1号土壙土器出土状態
(4)　1号土壙完掘後
図版4(1)　3号土壙
(2)　5号土壙
(3)　6号土壙
(4)　7号土壙土層
図版5(1)　7号土壙下層土器出土状態
(2)　27号土壙
(3)　27号土壙
(4)　27号土壙
図版6　大板井遺跡VI区東全景（直上）
図版7(1)　大板井遺跡VI区東全景（西から）
(2)　大板井遺跡VI区東全景（西から）
図版8(1)　大板井遺跡VI区東全景（東から）
(2)　大板井遺跡VI区東全景（東から）
図版9(1)　24号土壙
(2)　25号土壙
(3)　27号土壙
(4)　30号土壙
図版10　大板井遺跡VII区全景（直上）
図版11(1)　大板井遺跡VII区全景（東より）
(2)　大板井遺跡VII区全景（西より）
図版12(1)　7号住居跡周辺
(2)　調査区西部
図版13(1)　1号住居跡周辺
(2)　9号住居跡周辺
図版14(1)　6号住居跡周辺
(2)　1号住居跡
(3)　2号住居跡
図版15(1)　19号住居跡
(2)　1号土壙
(3)　3号土壙土器出土状態
(4)　3号土壙完掘後
図版16(1)　2号土壙
(2)　2号土壙
(3)　2号土壙
(4)　2号土壙
図版17(1)　4号土壙完掘後
(2)　5号土壙
(3)　6号土壙土器出土状態（一部除去）
(4)　6号土壙土器出土状態（一部除去）
図版18(1)　6号土壙完掘後
(2)　7号土壙
(3)　8号土壙
(4)　10号土壙
図版19(1)　11号土壙
(2)　12号土壙
(3)　13号土壙
(4)　16号土壙

図版20(1)　17号土壙
(2)　18号土壙
(3)　19号土壙
(4)　1号土壙墓
図版21(1)　7号住居跡
(2)　11号住居跡カマド
(3)　15号住居跡カマド
(4)　20号住居跡
図版22(1)　16号住居跡
(2)　16号住居跡カマド
(3)　9号土壙
図版23　VI区西出土土器①
図版24　VI区西出土土器②
図版25　VI区西出土土器③
図版26　VI区西出土土器④
図版27　VI区西出土土器⑤
図版28　VI区西出土土器⑥
図版29　VI区西出土土器⑦
図版30　VI区東出土土器①
図版31　VI区東出土土器②
図版32　VI区東出土土器③
図版33　VI区東出土土器④
図版34　VI区東出土土器⑤
図版35　VI区東出土土器⑥
図版36　VI区東出土土器⑦
図版37　VI区東出土土器⑧
図版38　VII区出土土器①
図版39　VII区出土土器②
図版40　VII区出土土器③
図版41　VII区出土土器④
図版42　VII区出土土器⑤
図版43　VII区出土土器⑥
図版44　VII区出土土器⑦
図版45　VII区出土土器⑧
図版46　VII区出土土器⑨
図版47　VII区出土土器⑩
図版48　VII区出土土器⑪
図版49　VII区出土土器⑫
図版50　VII区出土土器⑬
図版51　VII区出土土器⑭
図版52　VII区出土土器・甕棺・青磁
図版53(1)　VI区西出土石斧
(2)　VI区西出土石庖丁・石鎌
図版54(1)　VI区西・東出土石剣
(2)　VI区西出土スクレイパー・錐
図版55(1)
(2)　VI区西出土石製品・土製品
図版56(1)　VI区東出土石斧①
(2)　VI区東出土石斧②

図版57(1)　VI区東出土石斧③
(2)
図版58(1)　VI区東出土石鏃
(2)
図版59(1)　VI区東出土砥石
(2)
図版60(1)　VI区東出土土製品
(2)　VI区西・東出土旧石器
図版61(1)　VII区出土石器及び土製品
(2)　VII区出土石器
図版62　VI区西2号溝出土土器
図版63　VI区西3号溝出土陶磁器
図版64　VI区西9号溝出土陶磁器①
図版65　VI区西9号溝出土陶磁器②
図版66　VI区西9号溝出土陶磁器③
図版67　VI区西9号溝出土陶磁器④
図版68　VI区西9号溝出土陶磁器⑤
図版69　VI区西9号溝出土陶磁器⑥
図版70　VI区西9号溝出土陶磁器⑦
図版71(1)　VI区西9号溝出土陶磁器⑧
(2)　VI区西13号溝出土陶磁器①
図版72　VI区西13号溝出土陶磁器②
図版73　VI区西13号溝出土陶磁器③
図版74　VI区西13号溝出土陶磁器④
図版75　VI区西13・18号溝出土陶磁器
図版76　VI区西13号溝出土陶磁器⑤
図版77　VI区西13号溝出土陶磁器⑥
図版78　VI区西18号・VI区東14号溝出土陶磁器
図版79(1)　VI区西18号溝出土陶磁器
(2)　VI区東14号溝出土陶磁器
図版80　VI区東14号溝出土陶磁器①
図版81　VI区東14号溝出土陶磁器②
図版82　VI区東14号溝出土陶磁器③
図版83　VI区東14号溝出土陶磁器④
図版84　VI区東14号溝出土陶磁器⑤

表　目　次

表1　VII区出土石器・土製品重量石材一覧 …… 103
表2　VII区出土石器・土製品器種別数量一覧 …… 104

V　大板井遺跡Ⅶ区の調査

1．調査の概要

Ⅵ区西西端より西へ約150mの位置がⅦ区である。旧状では、当区は微高地の南端にあたり、南側はやや低地で工事以前は水田が広がっていた。当区では調査以前に道路部の盛土工事が開始されたため、調査予定地より南へ延びる遺構の拡張調査が不可能であった。故に、遺構の一部は未調査のまま道路下に眠っている。Ⅶ区の調査面積は約1,000㎡で、検出した遺構は弥生時代中期の住居跡８軒、同じく後期１軒、同じく中期の土壙19基、古墳時代後期から歴史時代にかけての住居跡８軒、同じく土壙２基があり、他に弥生時代中期の甕棺墓１基、青磁碗を副葬した中世墓１基がある。調査区内での位置は第１図を参照のこと。

※　遺構番号変更について

変更した番号は下記のとおり。旧→新

J21→J18	D13→D 8	D14→D 9	D15→D10	D16→D11
D17→D12	D18→D13	D19→D14	D21→D15	D22→D16
D24→D17	D25→D18	D31→D19	P25→D21	

2．遺構と遺物

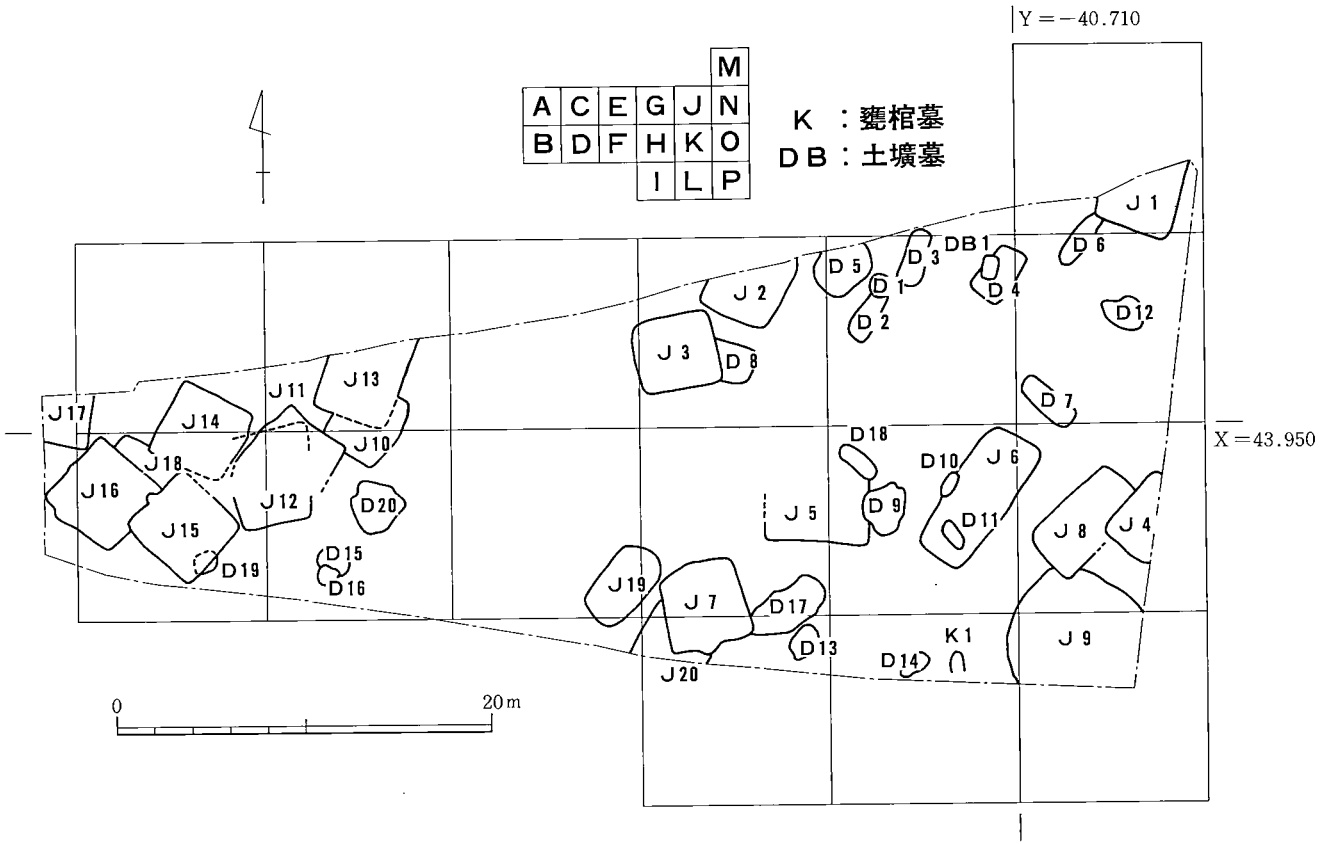
(1)　弥生時代の住居跡

１号住居跡（第２図・図版14）

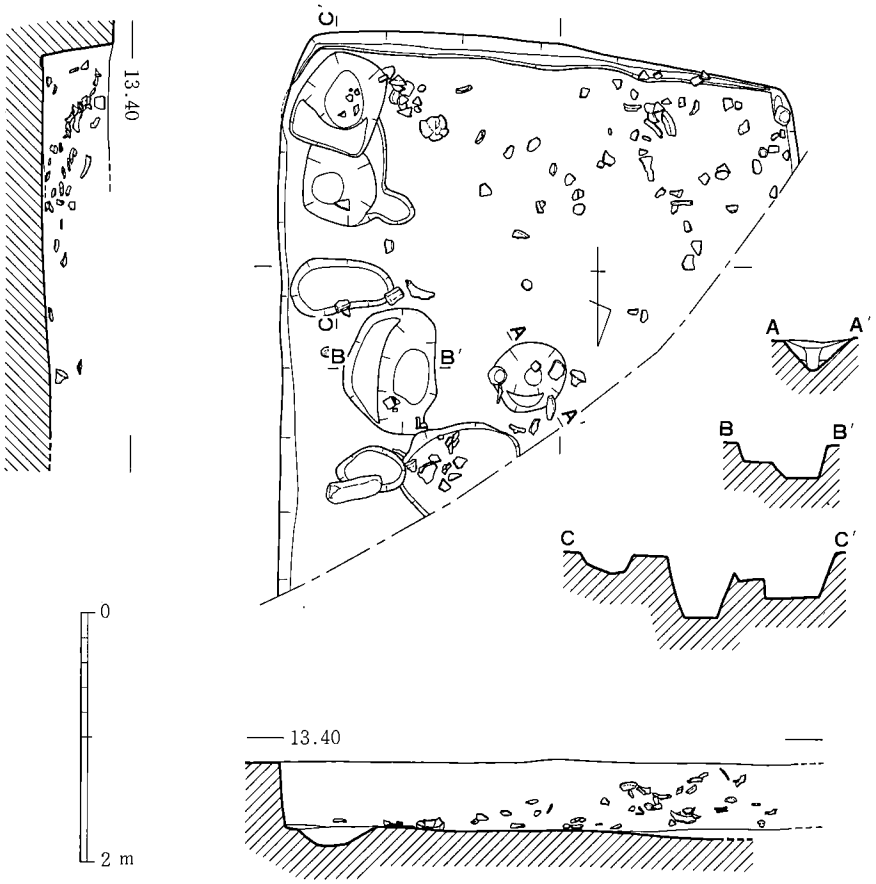
M区に位置する長方形と考えられる住居跡で、一部は調査区外にある。短軸は床面で408cmを測り、深さは50cm前後を測る。住居の中央と思われる部分には径60cm、深さ24cmを測るピットがあり、炭化物･焼土の存在からして炉と考えられる。ピットの中央には円柱状の炭化物の落ち込みが確認された。この炉の位置から住居を復元するならば、長軸は５m前後を測ることになろう。南壁には浅い溝がめぐる。東壁にそって大小のピットが存在するが、柱穴と考えられるものはない。土器は床面から上位のレベルで認められ、南西側の土器の出土状態から判断すれば住居廃棄後も土器廃棄が行われたことがわかる。

出土土器（第３・４図・図版38）

１～９は甕の部分片。１～６は逆Ｌ字形の口縁を有し、１～３は肥厚した形態である。５は口縁外端部が下に垂れ、内側への発達もみられる。口縁の長さは全体的にやや短い。口縁下の凸帯は４のみに貼付される。胴部は直線的なもの（１～４・６）とやや張ると思われるもの（５）がある。口縁周辺ヨコナデは共通で、外面のナデは３・４に認められる。他は内面ナデ、外面ハケメ。復元口径は29.5（１）～36.0（３）cmを測る。７は丹塗りの精製土器。口縁はわずか

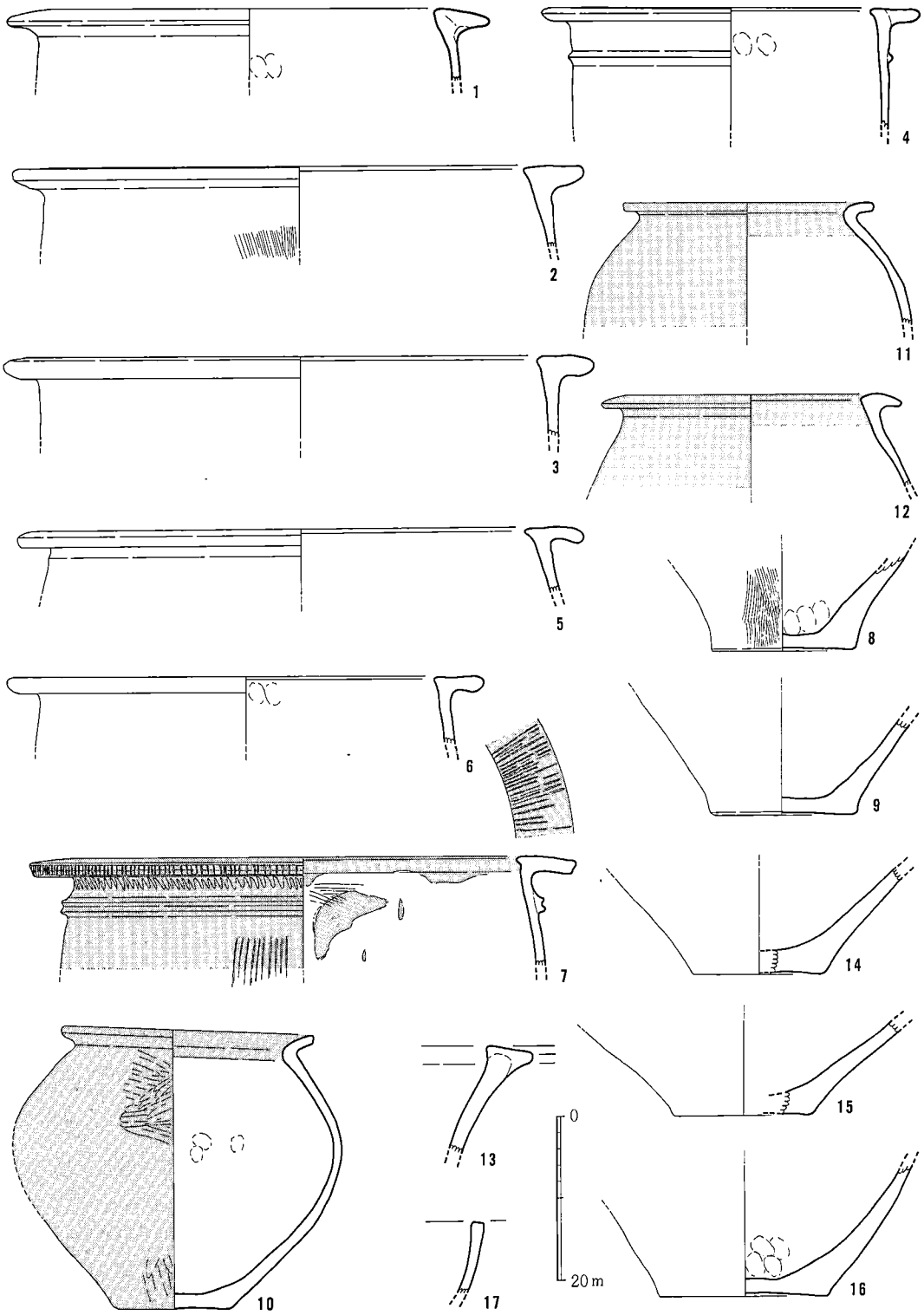


第１図　大板井遺跡Ⅶ区遺構配置区割図（1/400）

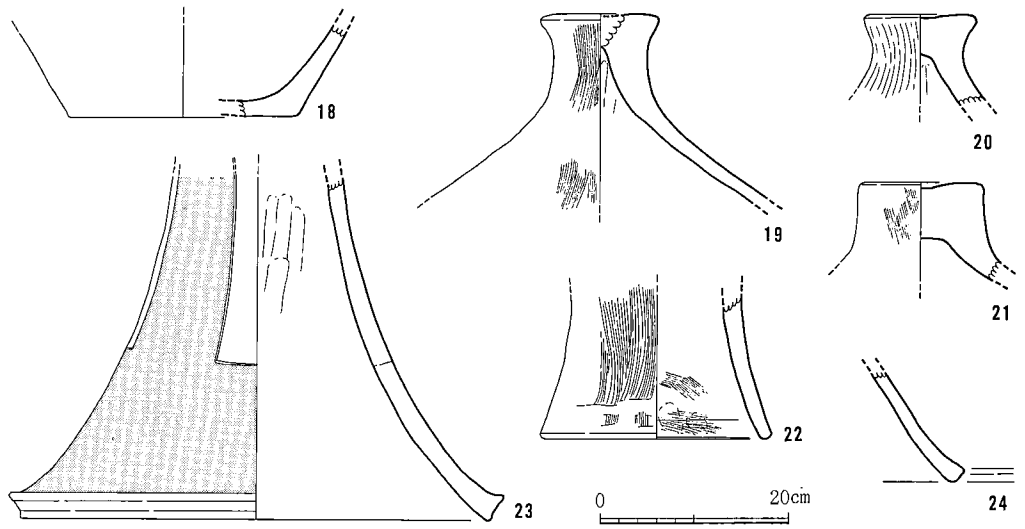


第2図　1号住居跡実測図(1/60)

に外傾した整った逆L字形をなす。内側への発達がわずかにみられ、口縁下には造り一条見かけ二条のM字凸帯が貼付される。口縁上面には全面に暗文が施され、凸帯下はヘラミガキが施される。復元口径33.4cm。8・9は小形の甕の底部で、いずれも底壁は薄く、内底面には平坦部がある。底径はそれぞれ8.9cm、8.6cmとやや太めになってきている。外面ハケメ、内面ナデ。10～15は壷とその部分片。10は2/3程度が残存する丹塗りの短頸壷。口縁は短く、L字状に外反する。胴部は球形を呈し、外面にはヘラミガキが施される。口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ。口径15.3cm、器高17.0cm、底径7.2cmを測る。11・12も丹塗りの短頸壷であるが、各々口縁の形態が異なっている。13は広口壷口縁部と考えられるが、口縁は鋤形に十分発達していない。14・15は底部片。やや太めの底部から広く横に広がる胴下半をもつ。器面は不明僚だが、ナデの痕



第3図　1号住居出土土器実測図①（1/4）



第4図　1号住居出土土器実測図②（1/4）

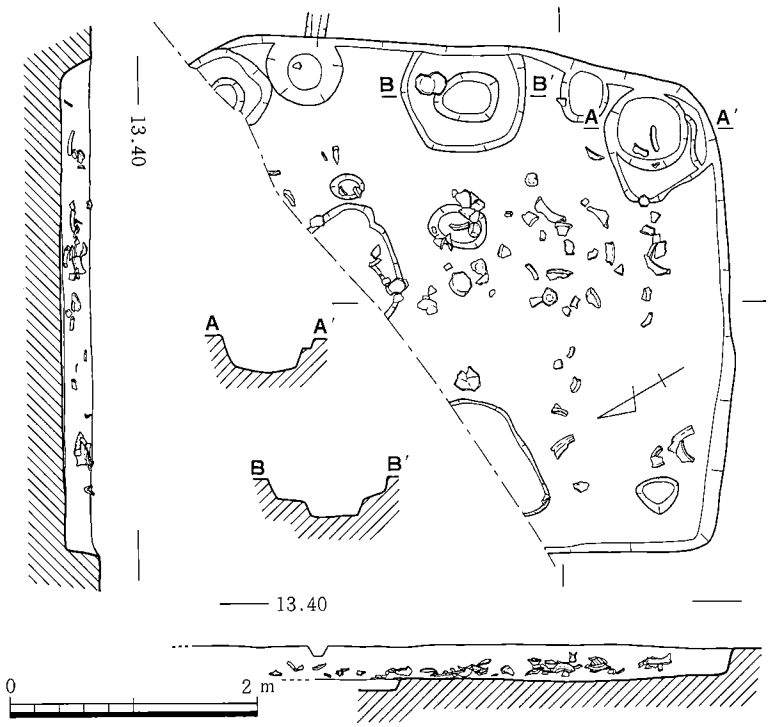
が認められる。17は埦もしくは鉢か。16・18は器高が低く、底部が大きいずん胴タイプの甕底部であろうか。19～21は蓋の把手。上面にはわずかなる凹部が認められ、19・20の把手部は大きく横に張りだしている。23は小形の筒形器台の破片。脚部中位に透しがあり、外面に丹が施される。復元脚径24.9cm。22は器台、23は高坏の脚部片であろう。

2号住居跡（第5図・図版14）

G区に位置する長方形と考えられる住居跡で、一部は調査区外にある。短軸の床面で392cmを測り、深さは29cm前後を測る。東壁の中央付近に楕円形の二段堀り土壙があり、その両側には2基のピットが配置される。また東側のコーナーにはそれぞれ小土壙が堀り込まれている。炉の堀り込みや焼土・炭化物の散布はない。土器は床面直上からやや上のレベルにかけて認められる。土器は住居の中央部がほぼ床面、中央から外ほど高いレベルで出土する状態から、この住居が廃棄されやや埋まりかけた時に土器が廃棄されたと考えられる。もちろん二次的な床面上とも考えられようが。

出土土器（第6・7図・図版38）

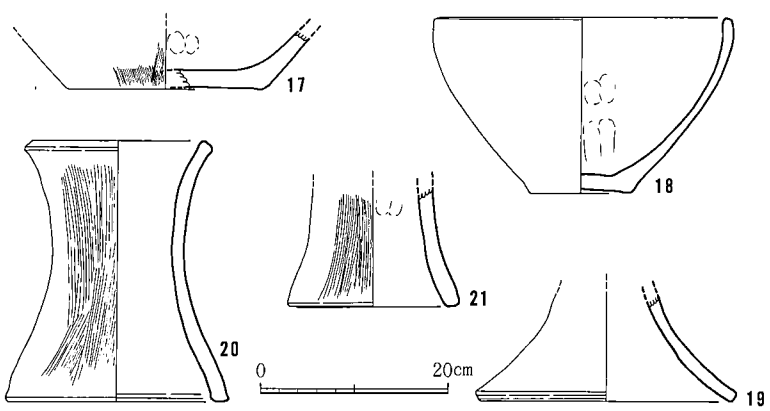
1～13は甕の部分片。1～6の口縁は逆L字形を呈すが1・3・5の口縁内面には突出部がなく、やや丸くなっている。4はやや内傾したもの。7・8は内側に大きく発達した、T字状の口縁をもち、いずれも外端部がやや下に垂れる。口縁下の凸帯は2・8に認められ、2・5を除き、いずれも胴部はやや張るものと考えられる。調整は口縁周辺ヨコデ、内面ナデ、外面ハケメが基本であるが、7・8はハケメの後これをナデ消している。口径は復元で、16.6（5）～36.6（8）cmを測るが、1・2・5を除きいずれも30cm以上のものである。9は丹塗りの精製



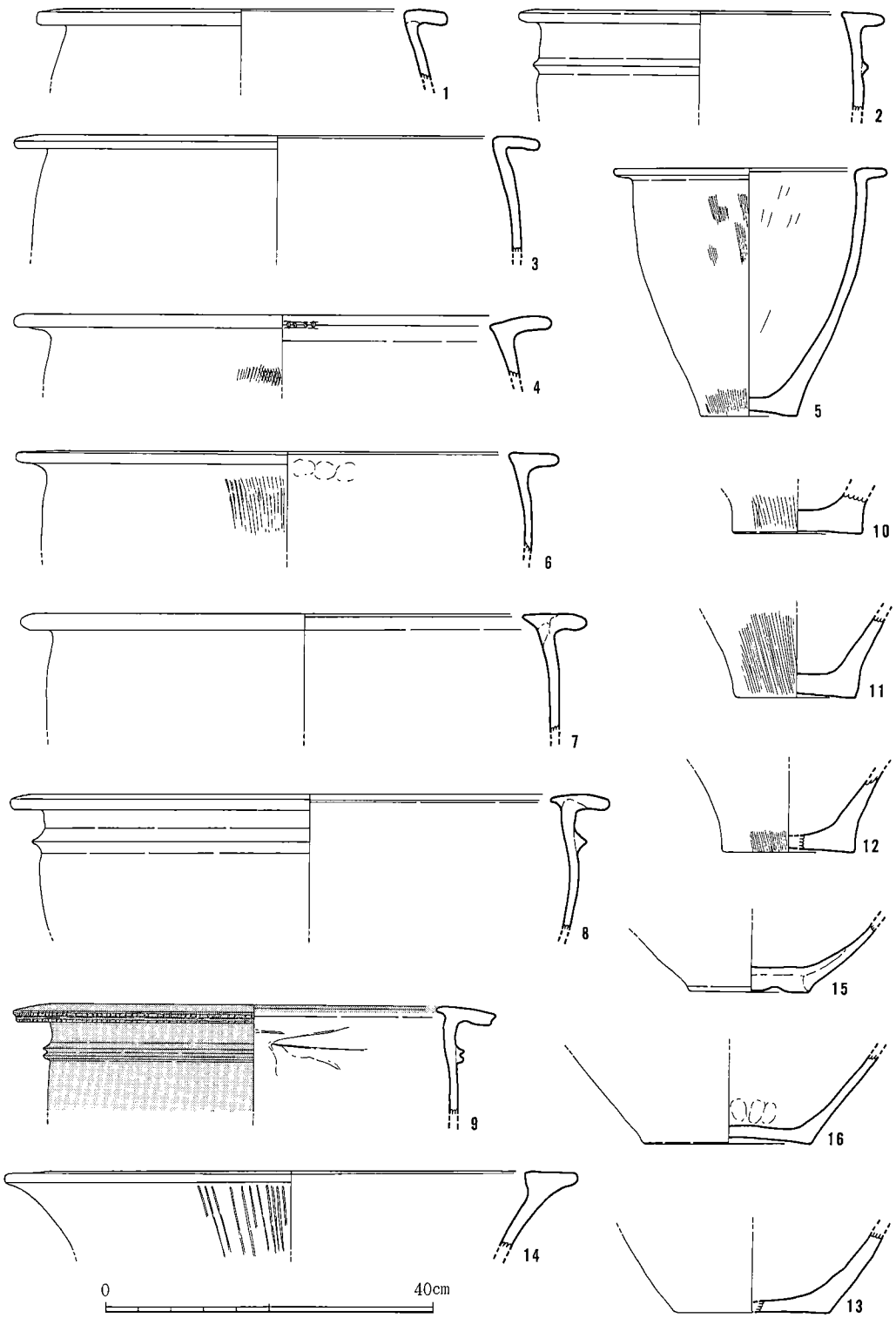
第5図　2号住居跡実測図（1/60）

土器で、外傾した整った逆L字形の口縁をもつ。内側への発達がややみられ、口縁外端部には全周にキザミが施されている。口縁下には造り一条見かけ二条の凸帯が貼付され、胴部は直線的。復元口径29.4cm。10～12は小形甕の底部。内底面には平坦部があり、底径は7.2(11)～8.0(12) cmを測り、やや小ぶり。13・17はずん胴タイプの甕底部とも考えられるが定かではない。

14～16は壷の部分片。14はあまり発達してない鋤形の口縁をもつ広口壷。頸部には間隔をおいて数条の暗文が施されるのであろう。復元口径34.8cm。18は丹塗り土器に近い色に発色する化粧土を使用



第6図　2号住居出土土器実測図②（1/4）

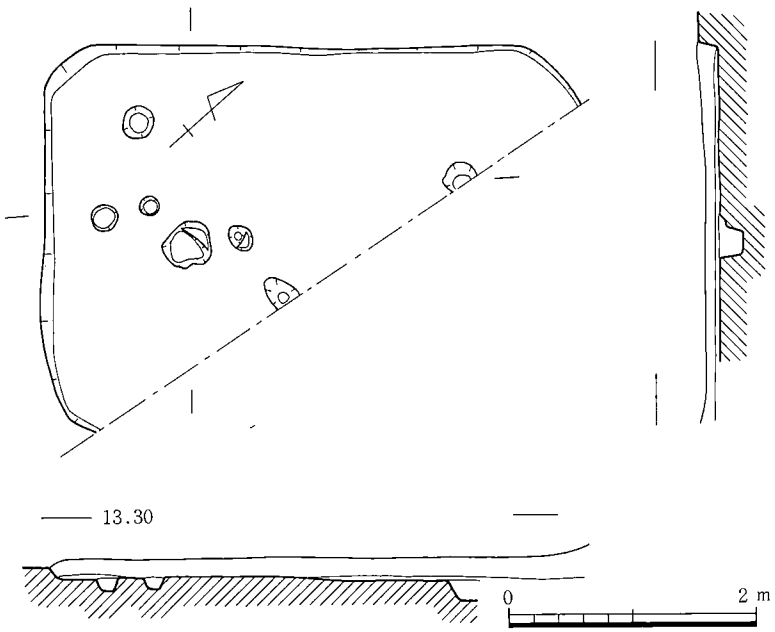


第7図　2号住居出土土器実測図①（1/4）

していると考えられる小形の鉢。内外ともナデで口径15.8cm、器高9.3cm、底径5.4cmを測る。19は高坏の脚部。20・21は器台。

4号住居跡（第8図）

O区に位置する隅丸長方形と考えられる住居跡で、一部は調査区外にある。現存で床面435cm×297cmを測り、深さは18cm。床面にはピットが散在するか、柱穴は定かでない。炉や焼土、炭化物は検出されていない。遺物の出土は無いが、弥生時代の住居跡と考えられる。



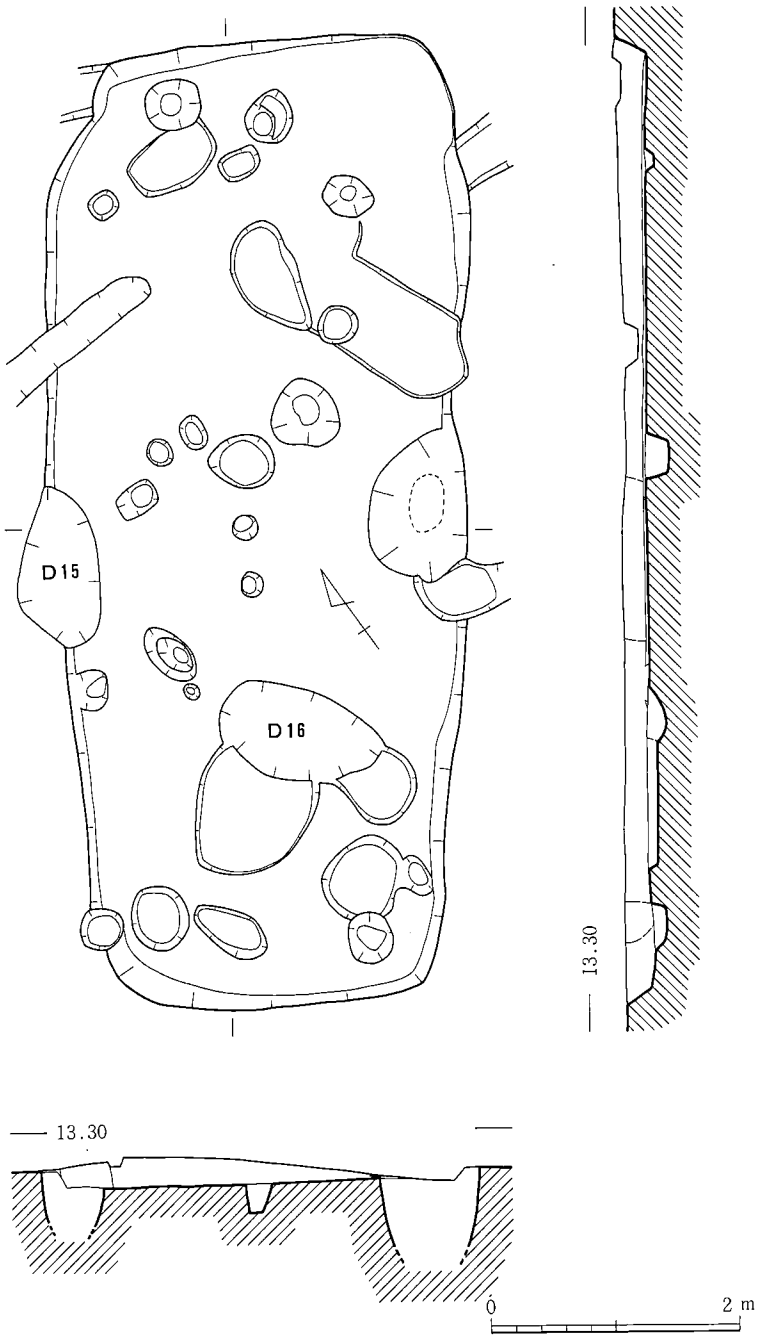
第8図　4号住居跡実測図（1/60）

6号住居跡（第9図）

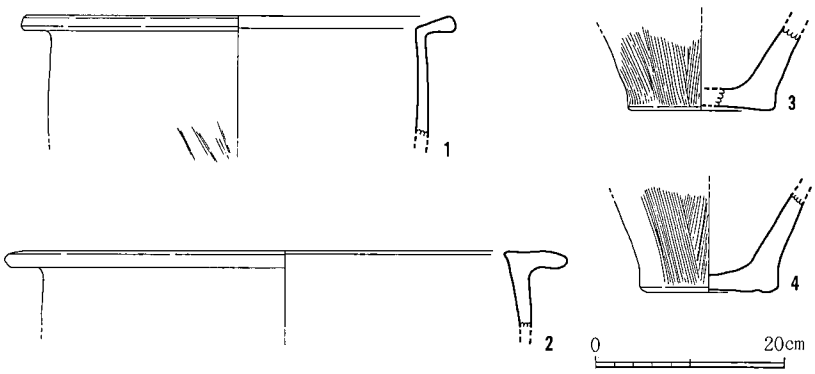
K区に位置する長方形住居跡で、溝状遺構・D15・D16・その他小土壙に切られている。床面で748cm×312cmを測り、深さは24cm。床面はほとんど起伏がなく、多数のピットが散在している。柱穴はいずれも対応するものがなく不明である。東壁中央部付近の床面には楕円形の小土壙が堀り込まれている。炭化物や焼土は検出されていない。

出土土器（第10図）

すべて甕の部分片。1は内面がゆるやかに外反する内傾した口縁をもつ。胴部は直線的で復元口径23.0cmを測る。2は逆L字形の口縁と直線的な胴部をもつ。3・4は底部片で、底径7.8cm、7.3cmを測る。



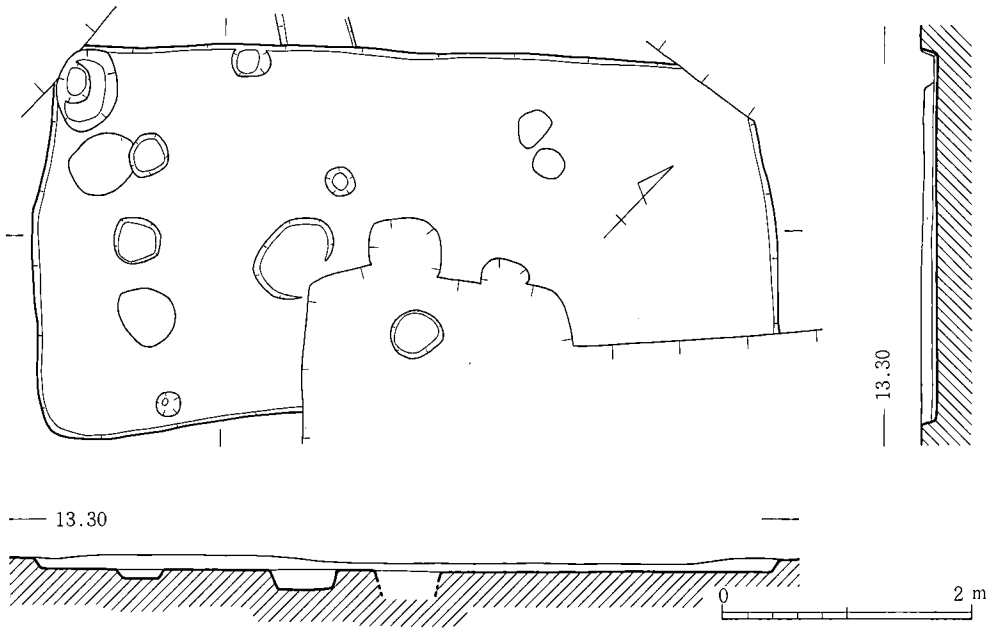
第9図　6号住居跡実測図（1/60）



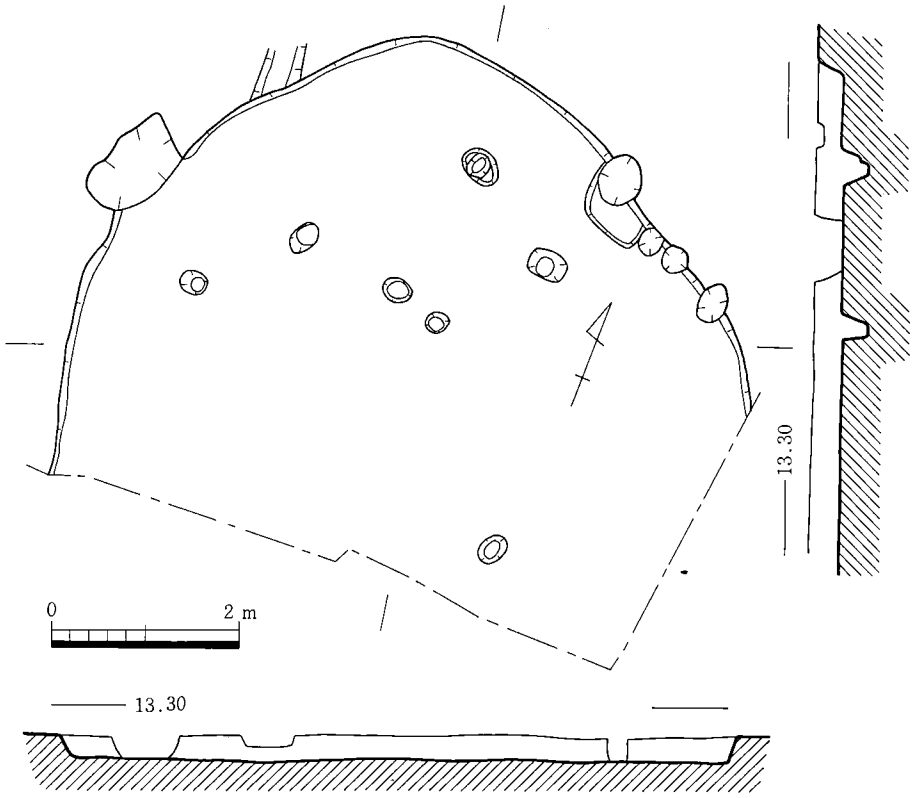
第10図　6号住居出土土器実測図（1/4）

8号住居跡（第11図）

O区に位置する長方形の住居跡でJ 4 に切られている。床面で587cm×294cm、深さ10cm弱を測る。床面には大小のピットが散在するが、柱穴の関係は不明である。焼土・炭化物は床面には検出されていない。出土遺物は無いが、弥生時代の住居跡と考えられる。



第11図　8号住居跡実測図（1/60）



第12図　9号住居跡実測図（1/80）

9号住居跡（第12図）

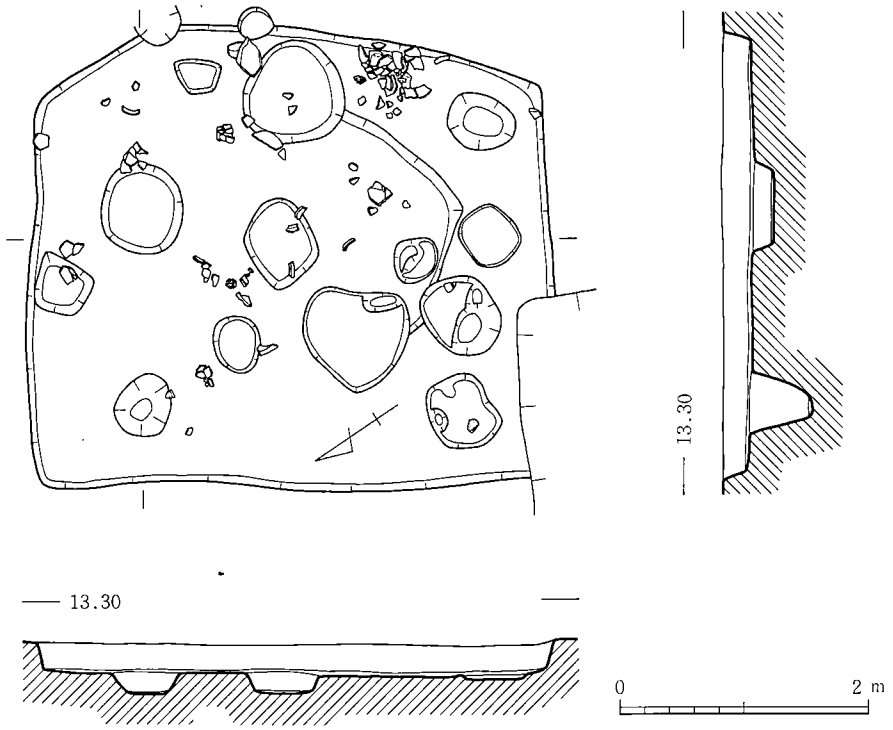
O・P区に位置する楕円形の住居跡と考えられる遺構で一部は調査区外にある。現状の床面で径736cmを測り、そこには小ピットが散在する。遺物の出土は無いが、弥生時代の住居跡と考えられる。

10号住居跡（第13図）

C・D区に位置する長方形気味の住居跡で、J11に切られている。床面で404cm×353cmを測り、深さは25cm前後を測る。床面にピットが散在するが、柱穴として応対するものは無い。中央のピットは炉と考えられ、その周囲には焼土・炭化物が広く認められる。南側の段落ち部はそれを除去した結果生じたものであるが、ほとんど高低差は無い。出土土器はほとんどが床面直上のものである。調査時にはJ13を切っていると確認したが、出土土器はJ13が明らかに新しく、よって図示の遺構図の一部は実際はJ13に切られていたのであろう。確認ミスである。

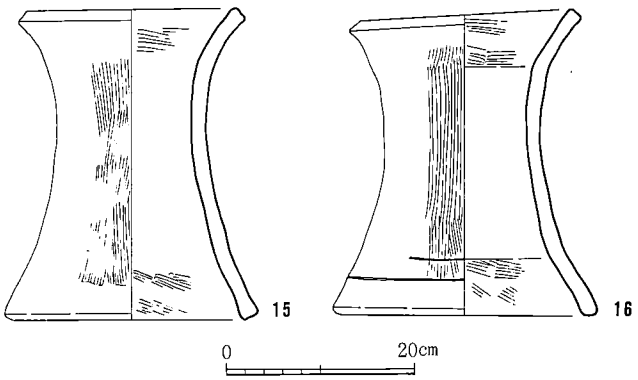
出土土器（第14・15図・図版38）

1～8は甕の部分片。1～5の口縁部は各々形態が異なり3・4は逆L字形を呈す。1・2

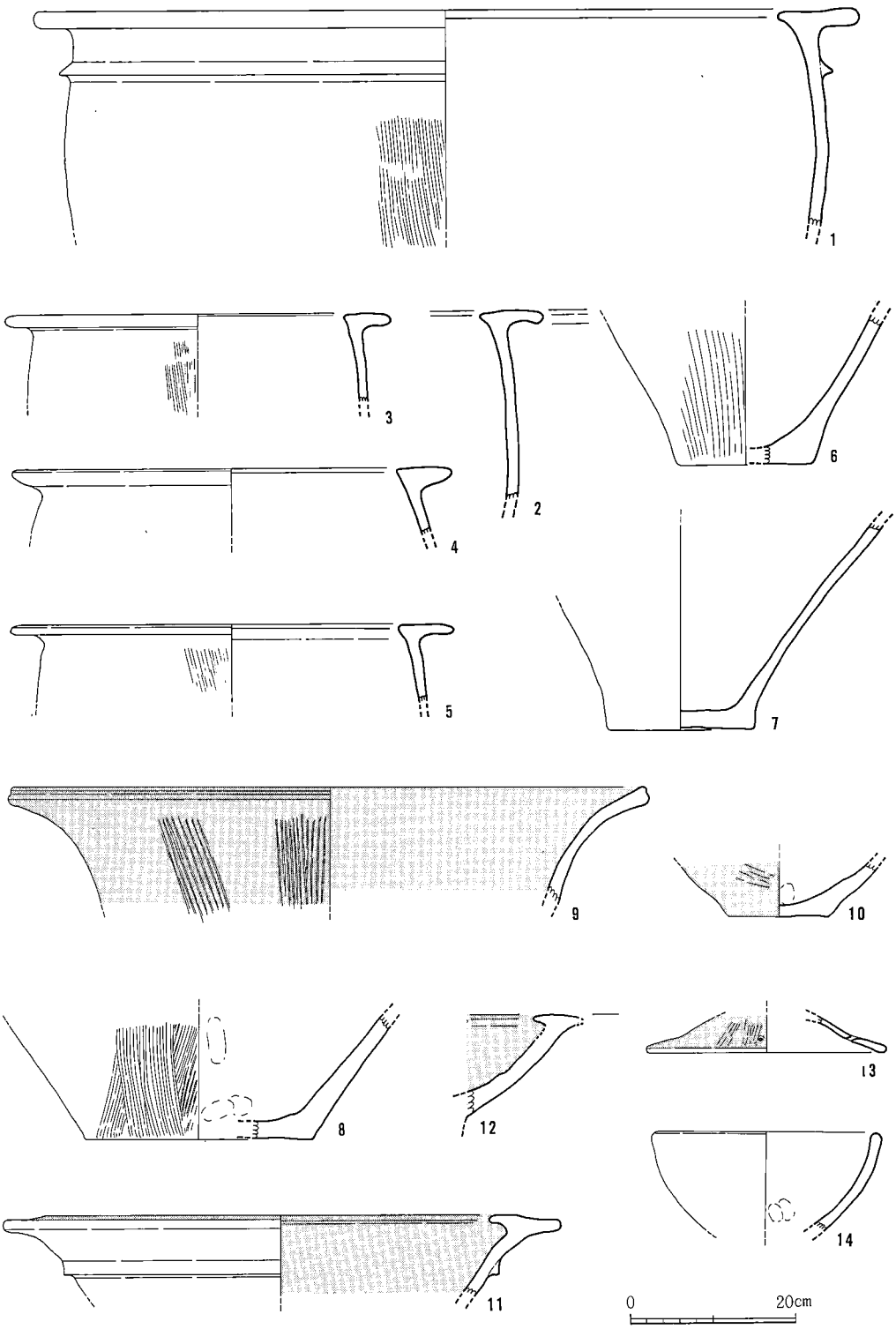


第13図　10号住居跡実測図（1/60）

・5は内側に発達する形態で、特に1は大きく発達しT字状をなしている。口縁下には、やや大きめ（復元口径49.6cm）の1のみに三角凸帯が貼付される。胴部はいずれもわずかに張る。3～5の復元口径は23.3（3）～26.6（5）cmを測る。6～8は底部片で、7・8中形の甕（器高50～70cm前後）の底部と思われる。9～10は壷部分片。9は口縁がゆるやかに外反する広口壷で丹塗りが施されている。頸部には間隔をおいて10条前後の暗文がある。復元口径28.0cm。10は丹塗り小形壷の底部。11・12は高坏の杯部片で、鋤形の口縁をもつ。11の口縁下には三角凸帯が貼付され、坏部は深めと考えられる。11は復元口径33.6cm。13は高坏脚部で、穿孔が認められる。10は小形の埦（鉢？）。15・16は器台で、いずれも底径が口径を上まわる。口径は11.0cm、12.2cm。外面



第14図　10号住居出土土器実測図②（1/4）



第15図　10号住居出土土器実測図①（1/4）

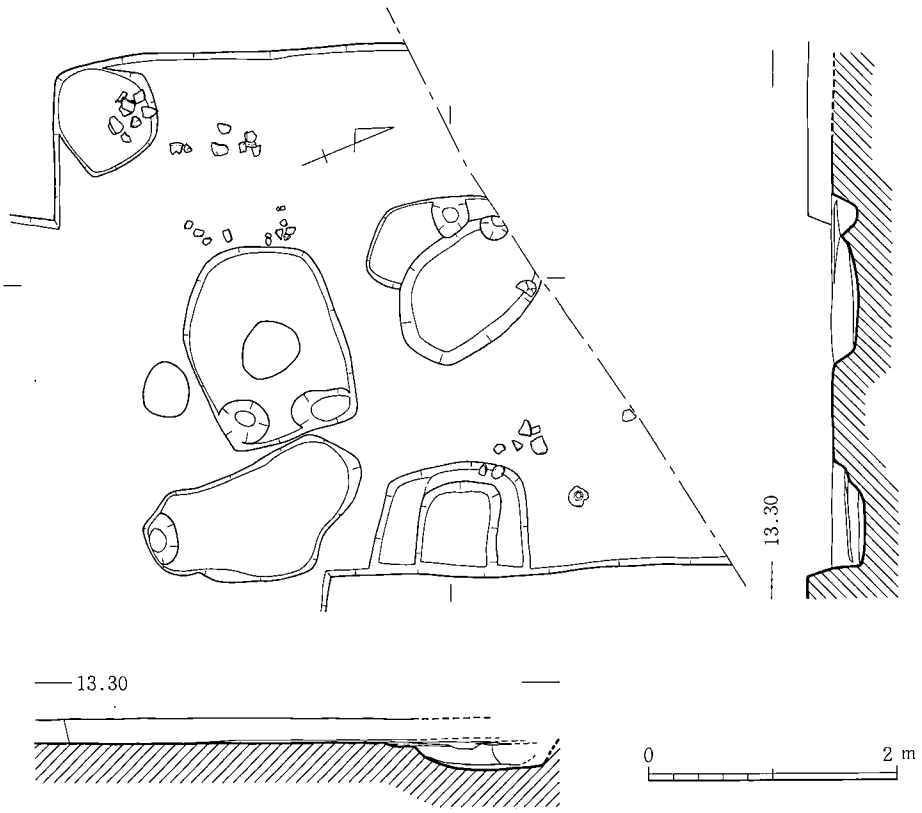
ハケメ、口縁内面と脚部内面はナナメハケメ後軽いヨコナデ。

13号住居跡（第16図）

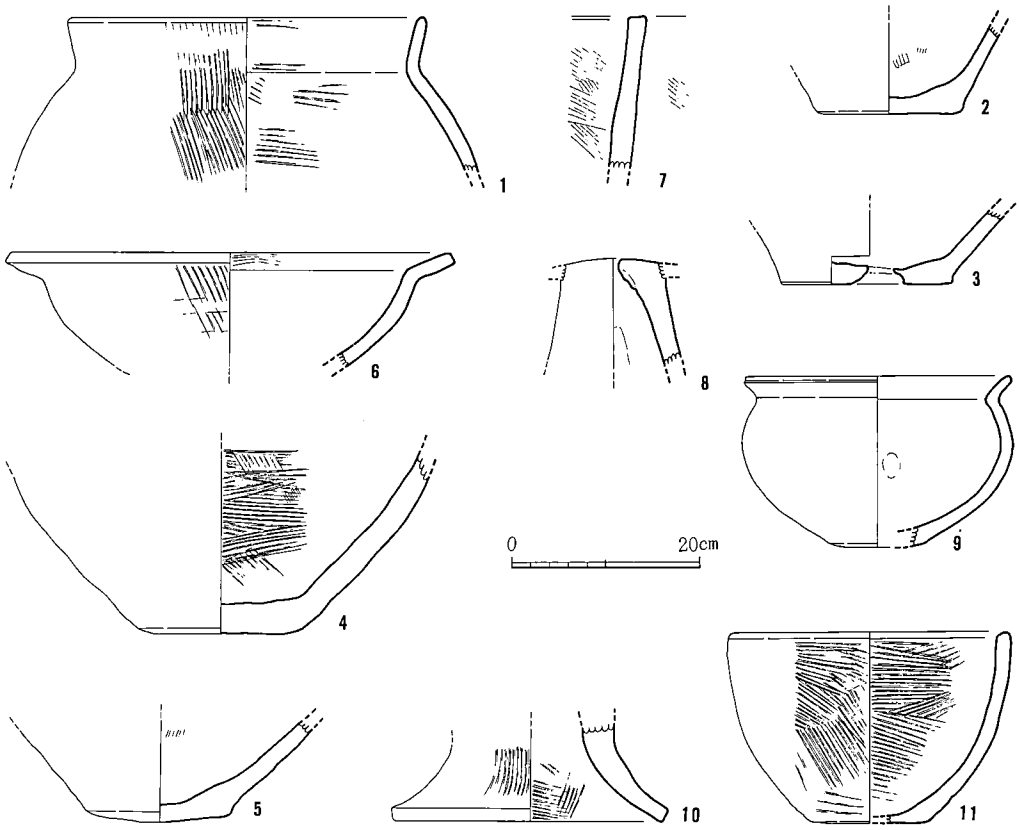
C区に位置する長方形と考えられる住居跡で、一部は調査区外にある。短軸は床面で415cmを測り、深さは18cmを測る。住居の中央と考えられる部分には焼土・炭化物を覆土とするピットが切り合って認められる。（東側が新しい）おそらく炉の堀り直しであろう。東壁中央付近には台形状の二段堀り土壙がある。南部にも不整形の土壙が3基あるがいずれも浅く、その性格は明らかではない。土器はいずれも床面付近が出土したものを図示している。調査時にJ10に切られていると誤認して壁の一部が欠なわれている。（J10参照）

出土土器（第17図）

1は口縁が直立に近い甕。胴部上半は球形で、外面タテハケメ、内面ヨコハケメ後ナデ。復元口径18.8cm。2・3は甕底部と考えられるが、平底である。3は穿孔が施され、底径9.1cmを測る。内外ともナデ。4・5は壷の底部と考えられ、外底面は凸レンズ状をなし始めている。4は内面に多くのハケメを残し、外面は逆にハケメの後丁寧なナデが施されている。底径はそ



第16図　13号住居跡実測図（1/60）

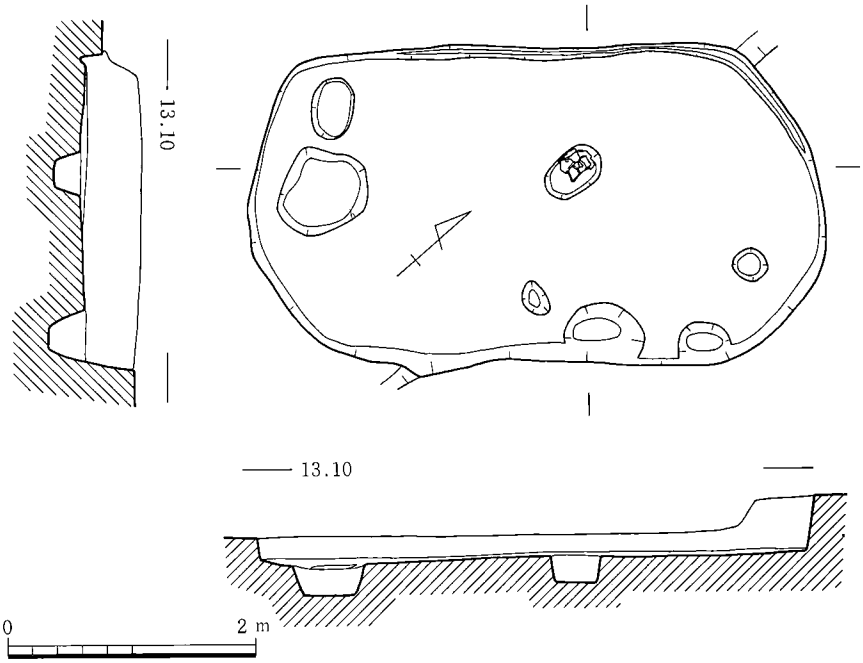


第17図　13号住居出土土器実測図（1/4）

れぞれ8.8cm、7.8cm。6は高坏坏部で、内傾する口縁をもつ。坏部はどちらかといえばやや浅めで、外面タテハケ後ナデ、口縁上面ヨコハケ後ヨコナデ、坏内面はナデ仕上げ。復元口径23.8cmを測る。8は高坏脚部だろうが、坏内面から脚内面への穿孔が施されている。10も高坏脚部でハケメを多く残すが、ナデは全面に及んでいる。9はく字状に屈曲する口縁をもつ鉢。胴部はしゃげた球形を呈し、底部はわずかに凸レンズ状をなしている。口縁周辺ヨコナデ、内外ともナデ。復元口径14.2cm、器高9.0cm、底径5.0cmを測る。11は全面にハケメを残す鉢で、底部は平底。

19号住居跡（第18図・図版15）

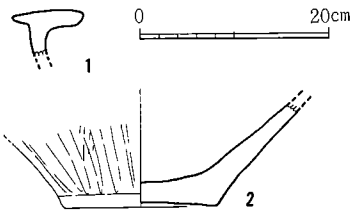
F区に位置する小判形の住居跡で、大溝に切られている。床面で453cm×227cmを測り、深さは44cmが最深。西壁から北壁の壁際には周溝がめぐる。中央にはピットが配置され土器が出土する。東壁に附随して2基のピットが堀り込まれている。床面にピットが散在するが柱穴の対応は定かではない。



第18図　19号住居跡実測図（1/60）

出土土器（第19図）

1は内側によく発達したT字状をなす口縁をもつ甕。2はやや大形の壷の底部と考えられ、外面ヘラミガキ、内面ナデで仕上げられている。底径8.1cmを測る。他にも中央ピット出土土器があったが現在所在不明。



第19図　19号住居出土土器実測図（1/4）

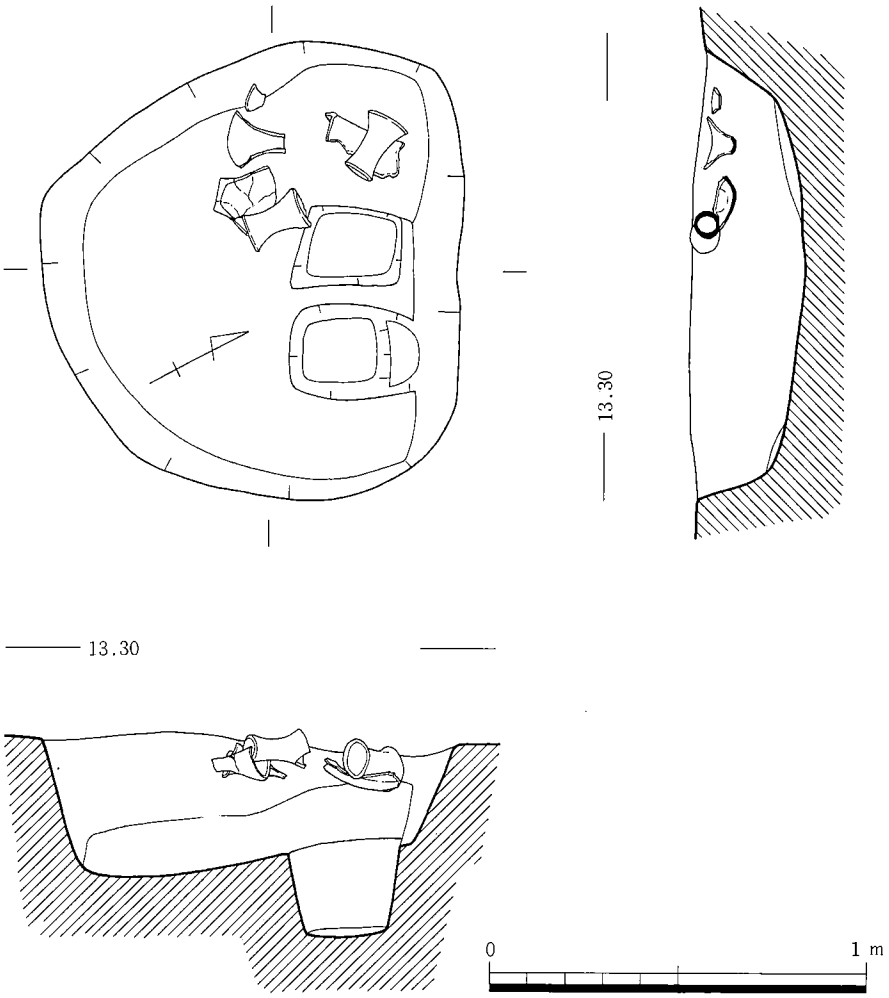
(2)　弥生時代の土壙

1号土壙（第20図・図版15）

J区に位置する不整形の土壙。底面で径88～109cmを測る。深さは31cmを測り、底面中央にかけてややくぼむ。底面には方形の2基のピットがあり、その深さは25cmを測る。土壙上位のレベルに土器が認められ、器種は器台と甕である。器台はほぼ完形、甕は部分片で出土している。2号土壙に近接し、これを切る。

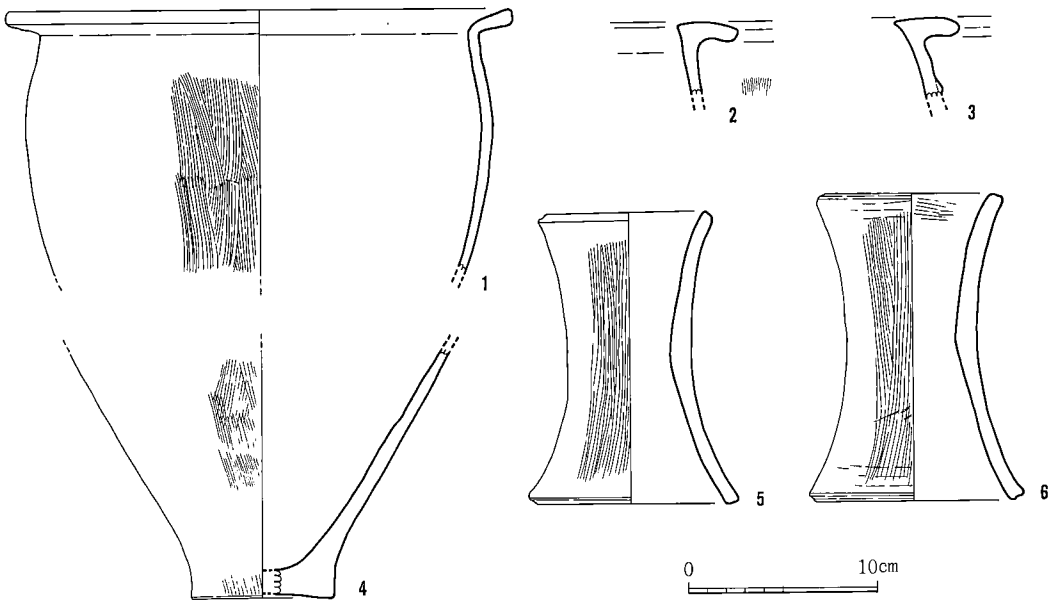
出土土器（第21図・図版38）

1～4は甕の部分片。1は外反する口縁を有す甕で、口縁内面はなだらかに湾曲し、所謂「鋤形の逆L字口縁」ではない。端部はつまみ上げ状の整形によりわずかに肥厚する。胴部はやや



第20図　1号壙実測図（1/20）

張る。2・3は逆L字形を呈す口縁で、2はわずかに外傾し、3は内側に発達し外端部は丸みを帯びる。4は底部で、やや小ぶりで直立状を呈し内面には平坦面がある。甕は内面ナデ、外面ハケメが共通。5・6は完形の器台。基部のほうが開く形態をとり、法量はそれぞれ口径（内径）8.4cm、8.5cm・器高15.3cm、16.1cm・底径（内径）10.1cm、10.4cm。



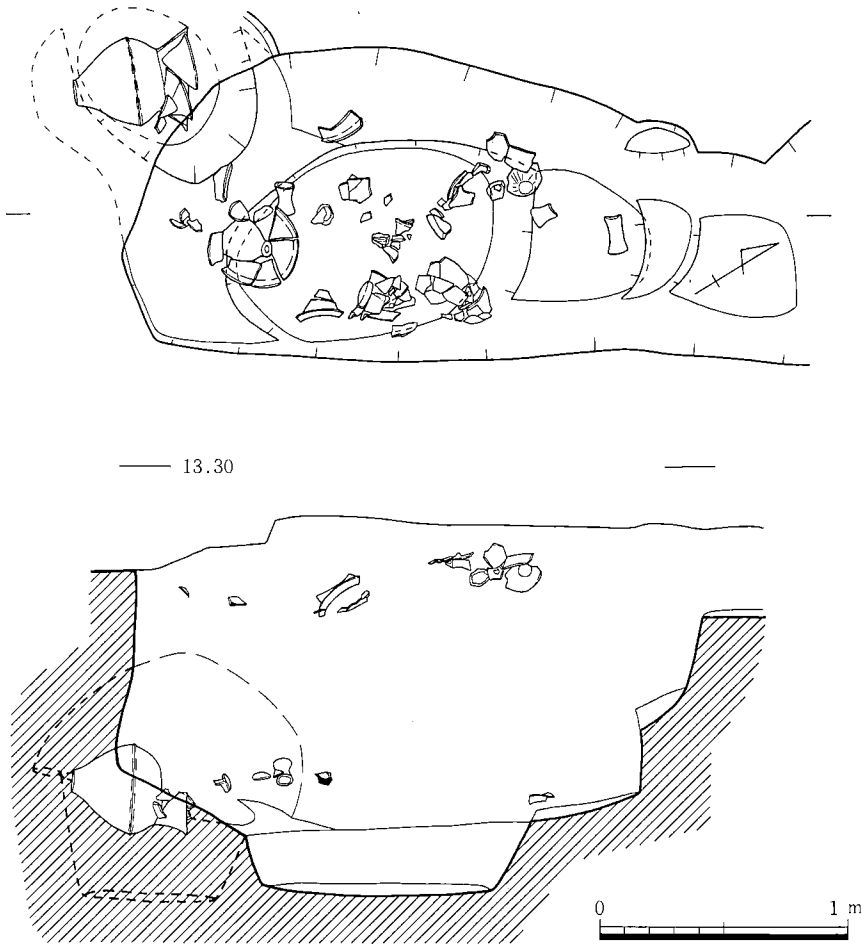
第21図　1号土壙出土土器実測図（1/4）

2号土壙（第22図・図版16）

J区に位置する不整形の土壙で、D1に切られる。規模は上端で260cm以上を測り、最大幅は124cm。北側には3段の階段状のテラスを有し、土壙底は径72～108cmを測る平坦な楕円形を呈す。底面までは深さ153cmを測る。底面の南側には一段の広いテラスがあり、そこからさらに南には側壁を横に掘り込み横穴状の施設を造り出している。奥に伸びるこのテラスの中央には、底面で径47～58cmを測る楕円形の土壙が掘り込まれ、その深さはテラスから32cmを測っている。この土壙の中央に、ほぼテラスと高さを同じくして広口壷が横に寝かせた状態で検出された。広口壷は口縁部をわずかに欠く以外は完形で、胴部下位には穿孔が施れている。楕円形の土壙底と広口壷の間は約25cmを測り、その間には土壙覆土と同じ黒色土が認められた。この空間は、人為的に埋められたと解釈するほうが妥当であろうか。

土器は土壙の下位と上位に散在的に認められる。断面図にかからなかった、蓋・甕等土壙東側の土器はいずれも土壙下位のレベルで検出され、そこでの一つのまとまりを指摘できる。出土した器種は上層（上位）が甕・壷・器台等、下層（下位）が甕・高坏・器台・蓋等であり、完形品は蓋、器台にそれぞれ1個体を認めることができる。他は部分片が多く、丹塗りは高坏にのみ認められる。

当土壙は2基の土壙（横穴部と長い不整形土壙）が切り合っている可能性が大きいが、調査時には残念ながらそれを確認することはできなかった。しかし、横穴部の広口壷の出土状態や穿孔の存在、オーバーハングした土壙の中への土器の埋納等を考慮するならば、この横穴部は

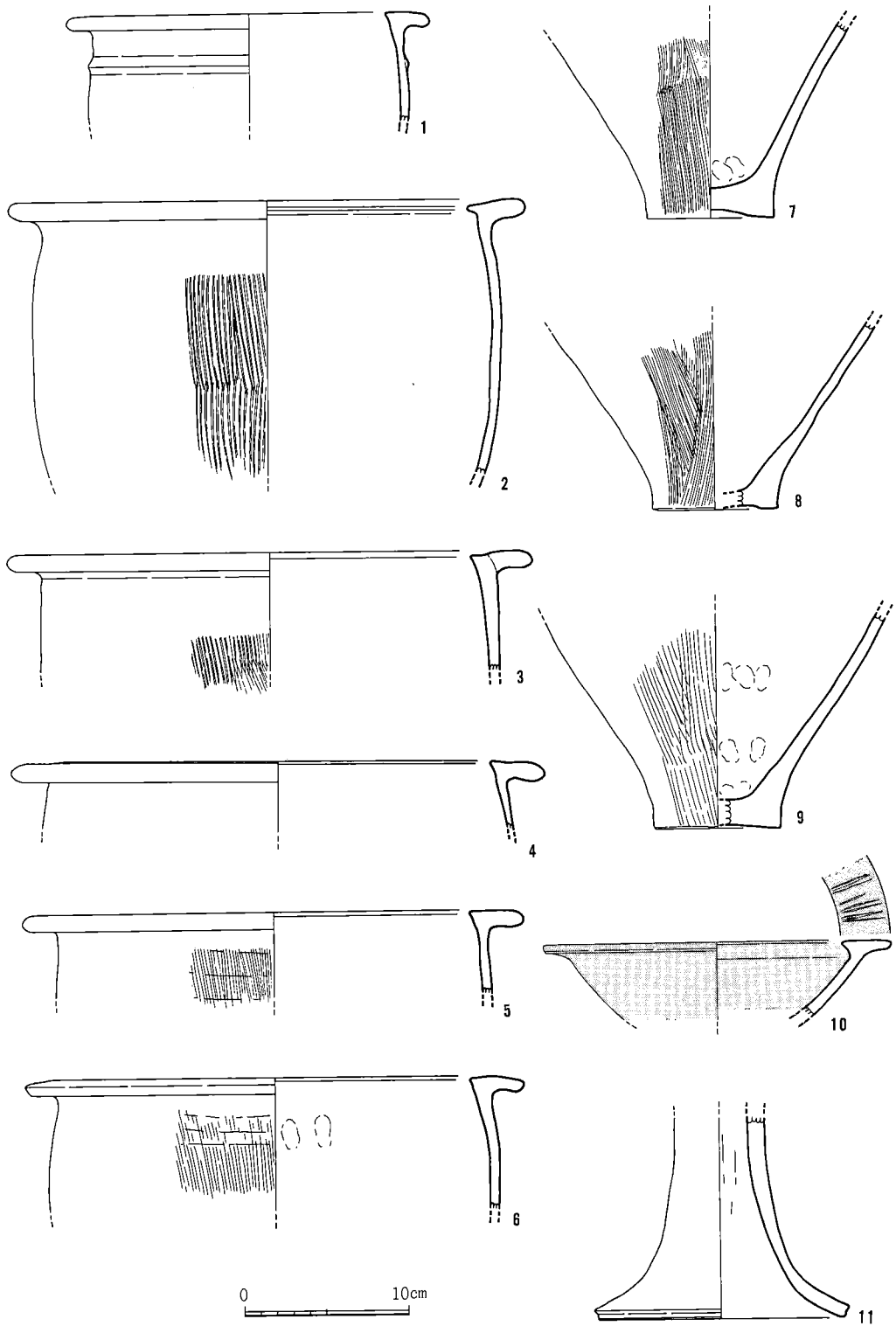


第22図　2号土壙実測図（1/30）

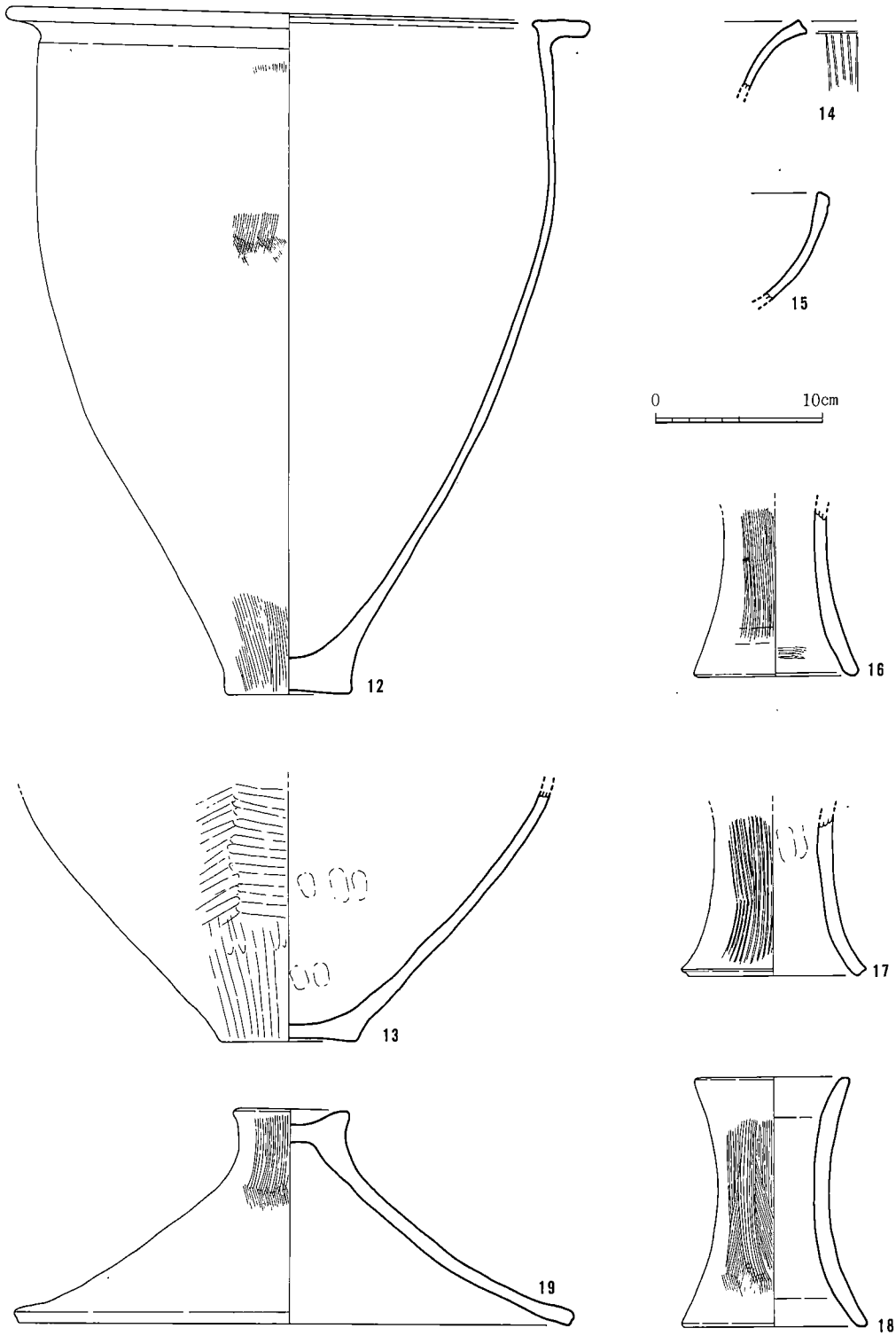
小児甕棺墓的色彩が非常に強い遺構であると考えられる。ひいては、この長い不整形の土壙自体も単なる祭祀遺構としての位置付けではなく、墓＝土壙墓としての可能性を検討すべき性格のものであろう。紡錘車出土。

出土土器（第23・24・25図・図版39）

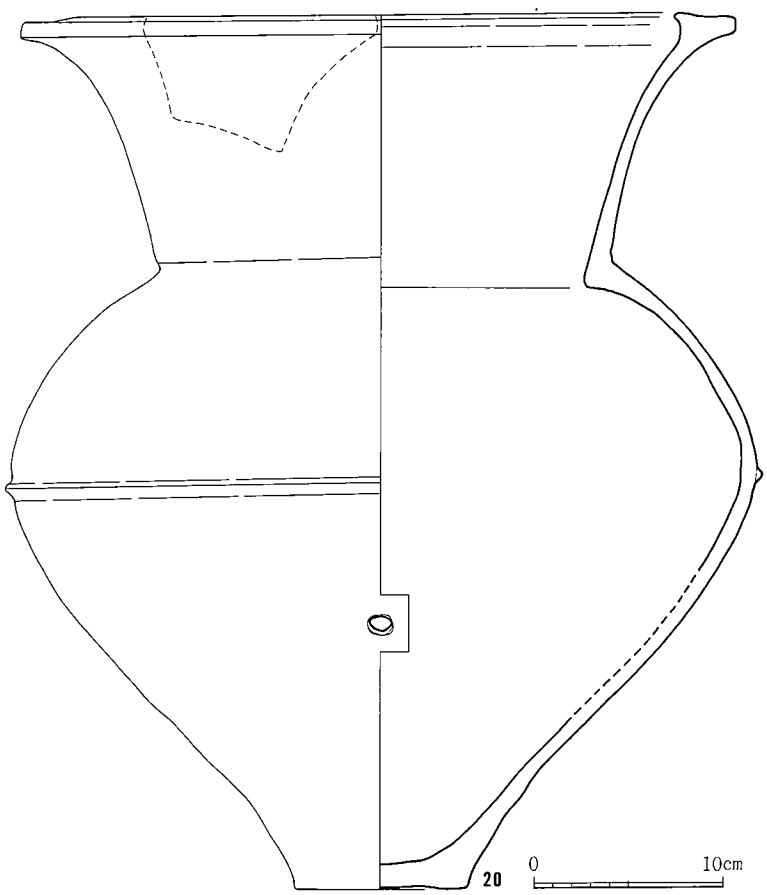
1～9は甕の部分片。1～6は口縁部片で内側に発達した逆L字形口縁をもつ。口縁の傾きは様々で、長さは全体的に短い。また、端部にかけて肥厚するものもある。突帯は1のみに施され、他は無い。胴部はいずれもわずかに張る傾向をみせる。外面ハケメ、内面ナデは共通。7～9は底部で、いずれもやや小さく内部の平坦面は狭い。しかし、底壁は比較的薄く。7に



第23図　2号土壙出土土器実測図①（1/4）



第24図　2号土壙出土土器実測図②（1/4）



第25図　2号土壙出土土器実測図③（1/4）

やや強めの上げ底がみらる。12はほぼ完形品。内側に発達した逆L字形口縁を有し、胴部はわずかに張る。底部は小さく、7～9に較べてやや厚い。口径35.0cm、器高40.5cm、底径7.4cmを測る。1を除き、甕の口径は30.2～31.8cmを測る。2・4・5は土壙上層出土。13・14は壷の部分片。14の口縁部は外面に暗文状のミガキが施される。13は土壙上位出土の胴下半部で、外面は丁寧なヘラミガキ。20は完形の壷で、一部口縁部を点線の範囲打欠かれている。このような打欠き方は6号土壙出土の壷にもいくつか見受けることができる。底部や胴部の穿孔と同じような意味をもつのであろうか。口縁は内側に発達した鋤形を呈し、内端部はやや上方に隆起する。頸部は外反して立ち上がり、丸みをもつ胴部には凸帯が施される。胴下半中央には穿孔が施され、ややすぼまって底部に経る。調整は内外ともナデで仕上げられ、暗橙褐色を呈す。口径38.0cm、器高46.3cm、底径9.1cmを測る。20は横穴状のテラスに横たえられていたものである。10・11は高坏で、10の坏部は内側によく発達した鋤形口縁をもつ。口縁上面には暗文状の

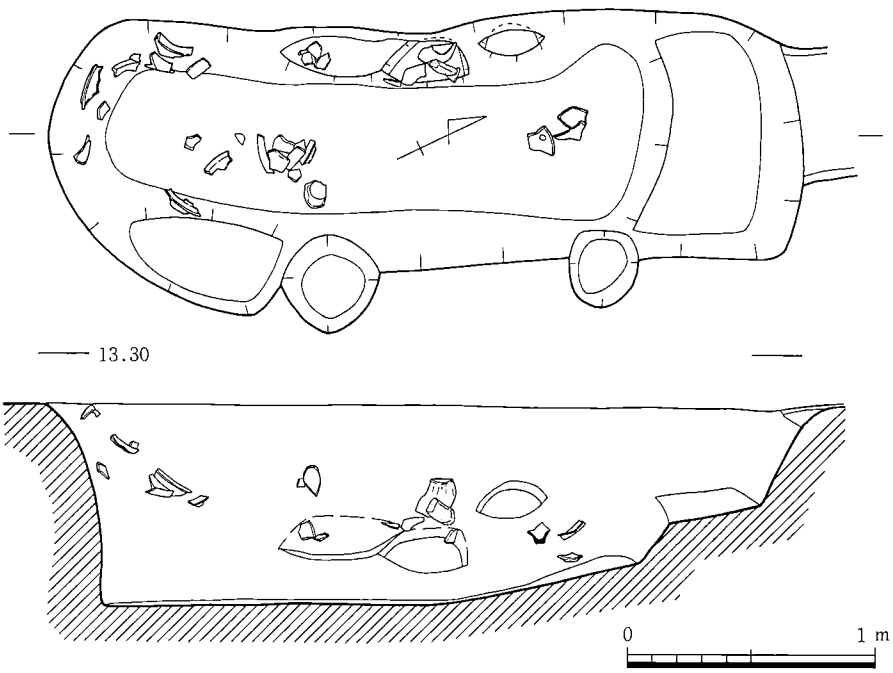
ミガキが施され、内外とも丹塗り。11の脚部の外面は器面が荒れているため、観察不可。15は埦の一部であろうか。16～18は器台で、18では基部が受部径を上まわっている。器高14.9cm、受け部内径8.3cmを測る。19は蓋で、口径32.8cmを測り、外天井部が上げ底状となる。以上、土壙下層から出土した土器が主体を占める。

3号土壙（第26図・図版15）

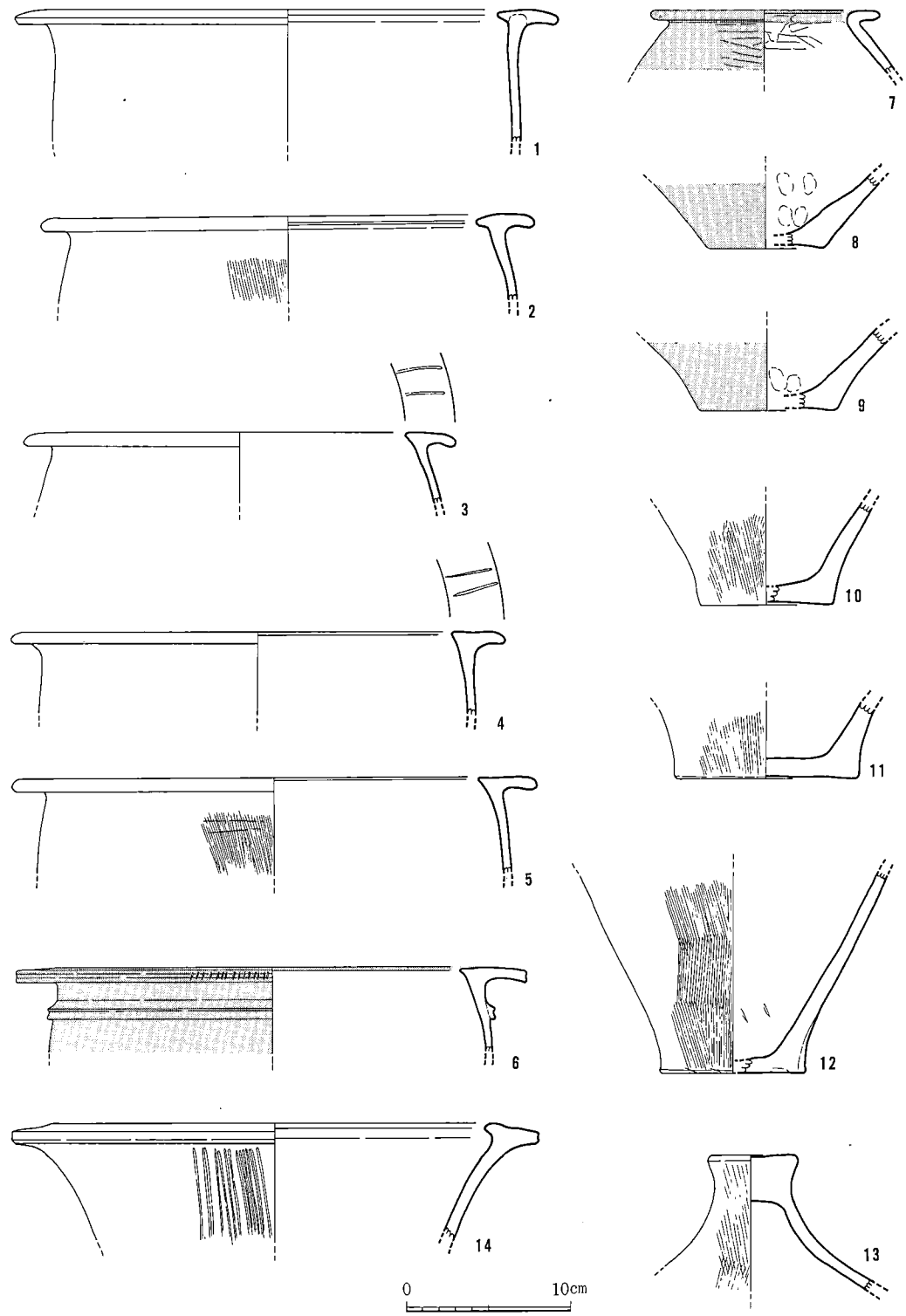
J区に位置する長方形気味の土壙。上端で304cm×94cmを測る。附随する2基のピットは後世のものである。土壙内の北側には一段の広いテラスをもち、他には不整形の小テラスがいくつか附随する。土壙底は216cm×47cmを測り、深さは62～80cmを測る。底面は北から南へかけて傾斜し、特に北半部ではその傾斜が強い。土器は土壙の下位から上位にかけて散在的に認められる。器種は甕・壷・高坏・器台・筒形器台・蓋が認められ、甕の部分片が多数を占める。丹塗りはこのうち甕・短頸壷・筒形器台・高坏の破片に認められる。また器台は2個体がほぼ完形で出土している。

出土土器（第27・28図）

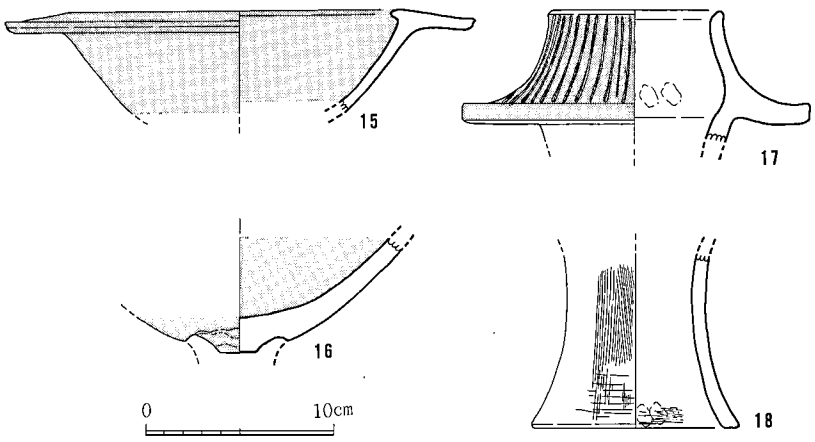
1～6・10～12は甕の部分片。1～6はT字状口縁と逆L字口縁で、1・2が前者、以下は後者。1・2は内側に口縁が発達し、1ではやや外傾する。3・4の口縁端部は下に垂れ、口縁上面中央を強くヨコナデしているため、波うつ形態となっている。ともに口縁上面には、へ



第26図　3号土壙実測図（1/30）



第27図　3号土壙出土土器実測図①（1/4）



第28図　3号土壙出土土器実測図②（1/4）

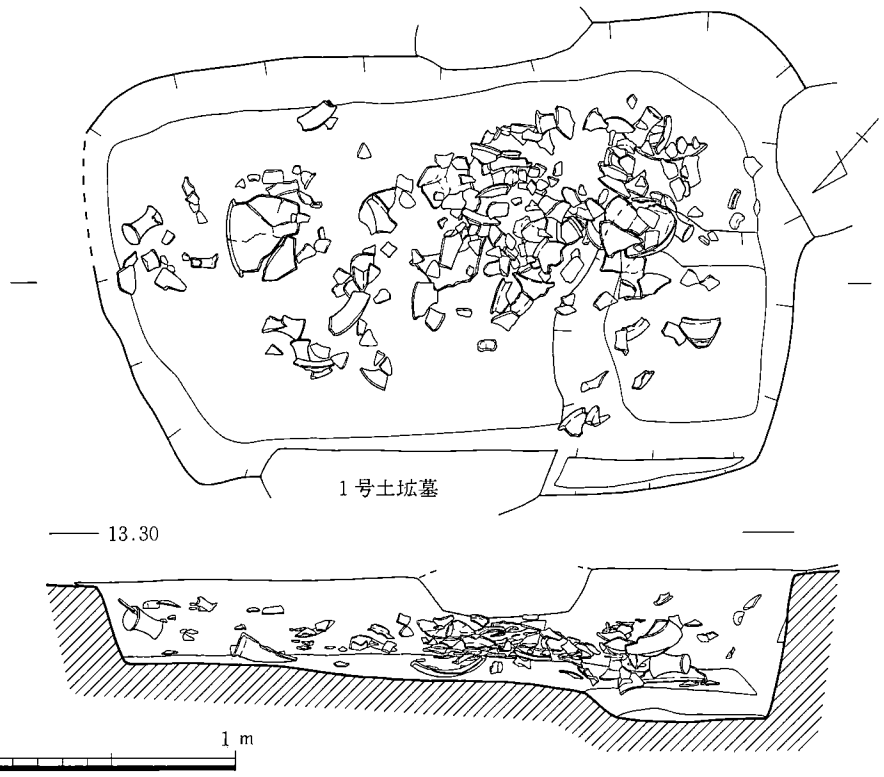
ラ描きと考えられる2条の併行線が施されている。4の外面はナデ仕上げで、3はハケメ有。5も口縁上面中央を強くヨコナデしているが、端部は3・4ほど下らない。1～5の口縁外径は26.2cm～33.0cmを測る。6は口縁上面から外面に丹塗りが施される。口縁端部には1条の細い凹線があり、キザミが施されている。口縁下には造り1条見かけ2条のM字凸帯が貼付される。胎土は精良の優品。10～12は平底で、底部内底面には平坦な部分がある。底壁は厚さ9㎜前後を測る。7～9・14は壷の部分片。7は丹塗りの短頸壷で、内面上半と外面はヘラミガキが施される。8・9も丹塗り壷の底部。14は口縁が鋤状をなす広口壷で、外面はナデの後暗文が施されている。暗文は間欠的ではなく全周する。15・16は高坏で15は外傾する鋤状の口縁をし、坏部はやや深い。16は坏部の下半で、脚部との接合のための凸部があらわれている。両者とも器面が荒れて、ミガキの有無は不明。17は筒形器台の上端部。口縁の立ち上がりは十分で、ナデの後暗文が施される。

4号土壙（第29図・図版17）

J区に位置する長方形の土壙で、1号土壙墓や小土壙に切られている。底面で253cm×138cmを測り、深さは32～49cmを測る。底面には方形の土壙がさらに堀り込まれている。土器は土壙底から中位にかけて認められ、土壙中央部では密な状態を呈している。器種は甕・壷・蓋・器台があるが、甕の口縁部・胴部片が多数を占めている。また、器台も多く認められ、うち4個体がほぼ完形で出土している。

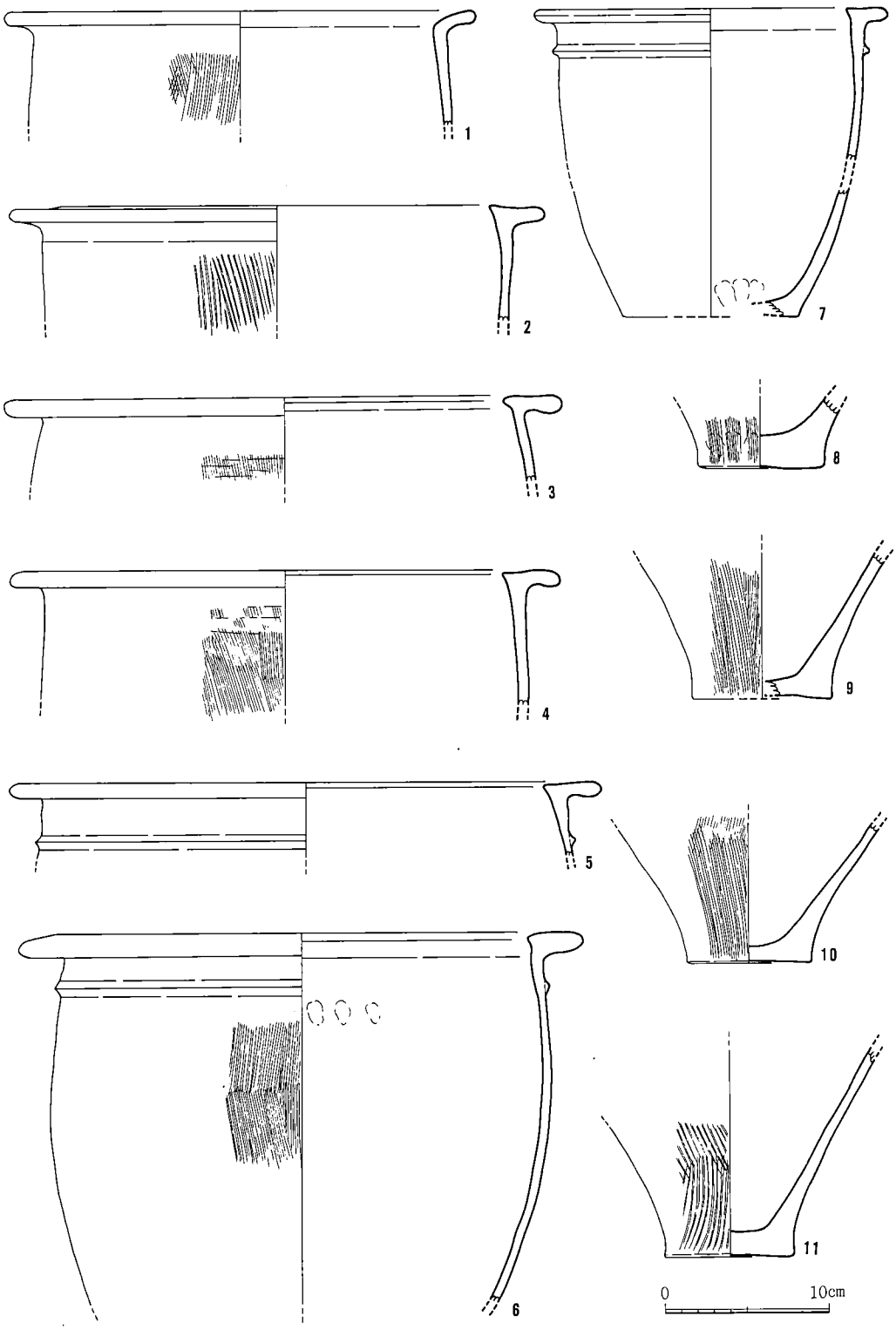
出土土器（第30～33図・図版39・40）

1～15はいずれも甕の部分片である。1はゆるやかにく字状に外反する口縁をもち、胴部はわずかに張る。2～6・12～14は逆L字形を呈する口縁で、それぞれ形態がわずかに異なる。3・6は内側に発達したT字状口縁をもち、3の外端部は肥厚する。ほかの口縁部は、内側に

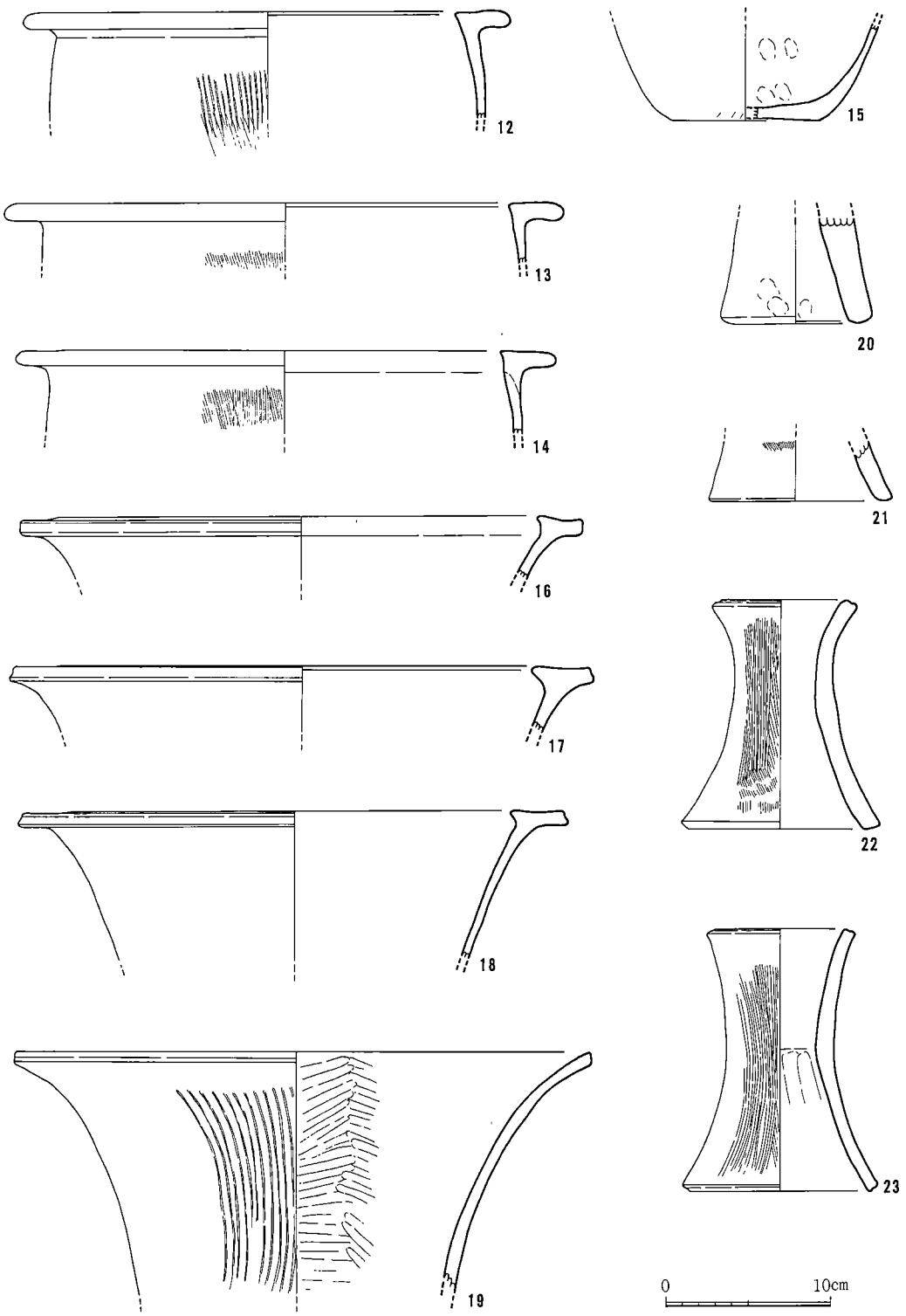


第29図　4号土壙実測図（1/30）

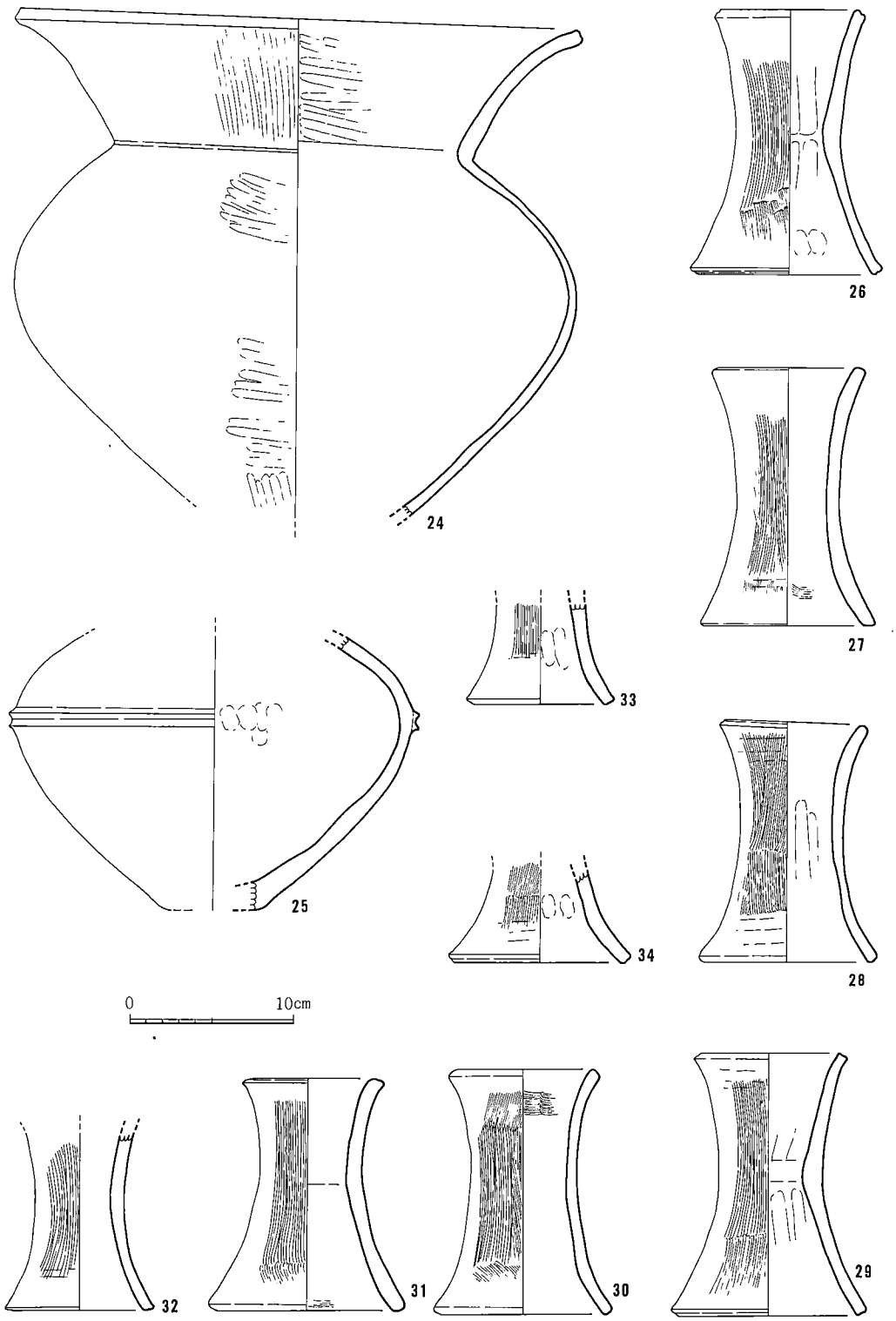
つまみ上げ気味に発達する形態を呈し、口縁上面中央はやや強いヨコナデのためわずかに凹部が生じている。また、端部はやや肥厚する。1～6・12～14の復元口径は28.8～35.0cmを測る。8～11は底部片。いずれも内底面に狭い平坦部をもち、底壁の厚さは0.9～1.8cmを測る。7は背の低い甕で、破片から復元している。口縁はやや短く、口縁下には凸帯が貼付される。底部は大きめで、安定感のある形となっている。口縁周辺はヨコナデ、外面は丁寧なナデで仕上げられる。15も同様の形態の甕底部と考える。16～19・24・25は壷。16～18は鋤形の口縁部を有す広口壷で、口縁内端部がやや上方に突出する。18の内外面は、口縁周辺を除きナデ仕上げ。19・24は外反する口縁をもつもので、両者とも口縁内面はヘラミガキ。外面はヘラ状工具による縦方向のナデで仕上げられ、一見してヘラミガキに見えるが、ミガキの光沢を出すに至っていない。24の胴部外面はヘラミガキ。25は胴部に造り1条見かけ2条の凸帯が貼付され、調整は不明。20～23・26～34は器台。20のみやや厚手で、外面はナデ。支脚か。他は外面ハケメのもので、いずれも底径が口径を上まわる。器高は13.9～16.1cmを測る。35は逆L字口縁をもつもので、凸帯下の形態から鉢であろう。36・37は蓋で、37の把手上面はくぼんでいる。



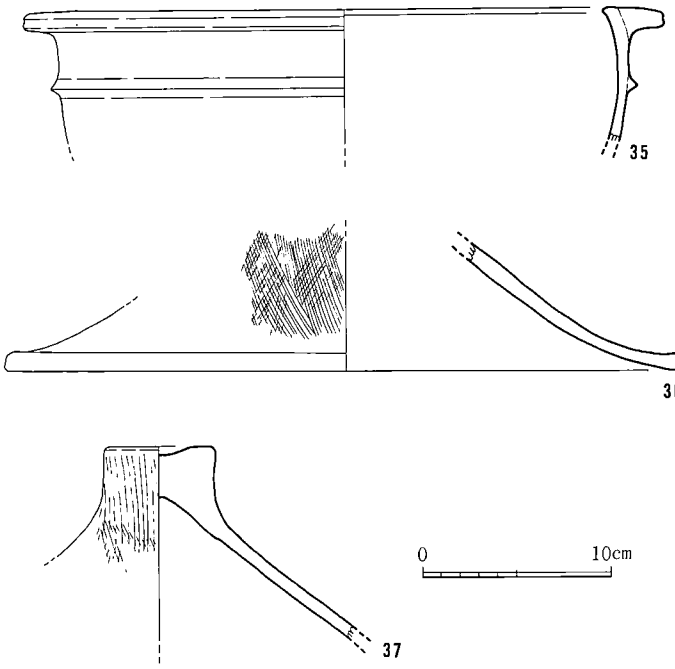
第30図　4号土壙出土土器実測図①（1/4）



第31図　4号土壙出土土器実測図②（1/4）



第32図　4号土壙出土土器実測図③（1/4）



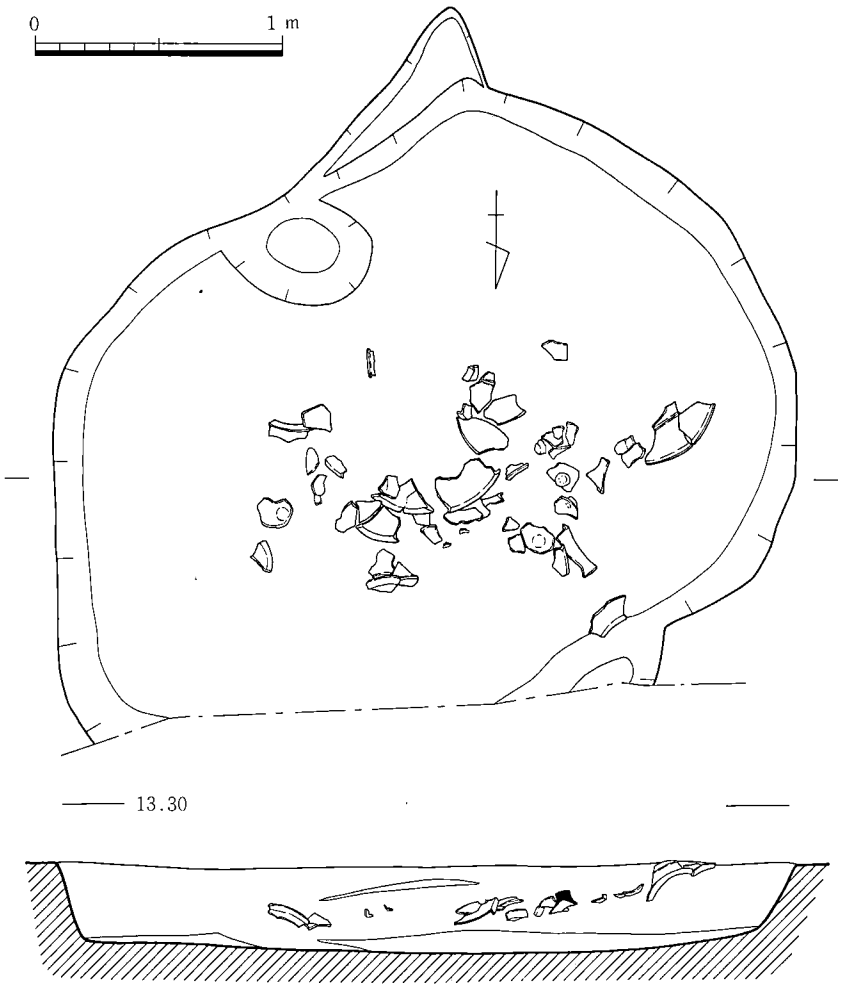
第33図　4号土壙出土土器実測図④（1/4）

5号土壙（第34図・図版17）

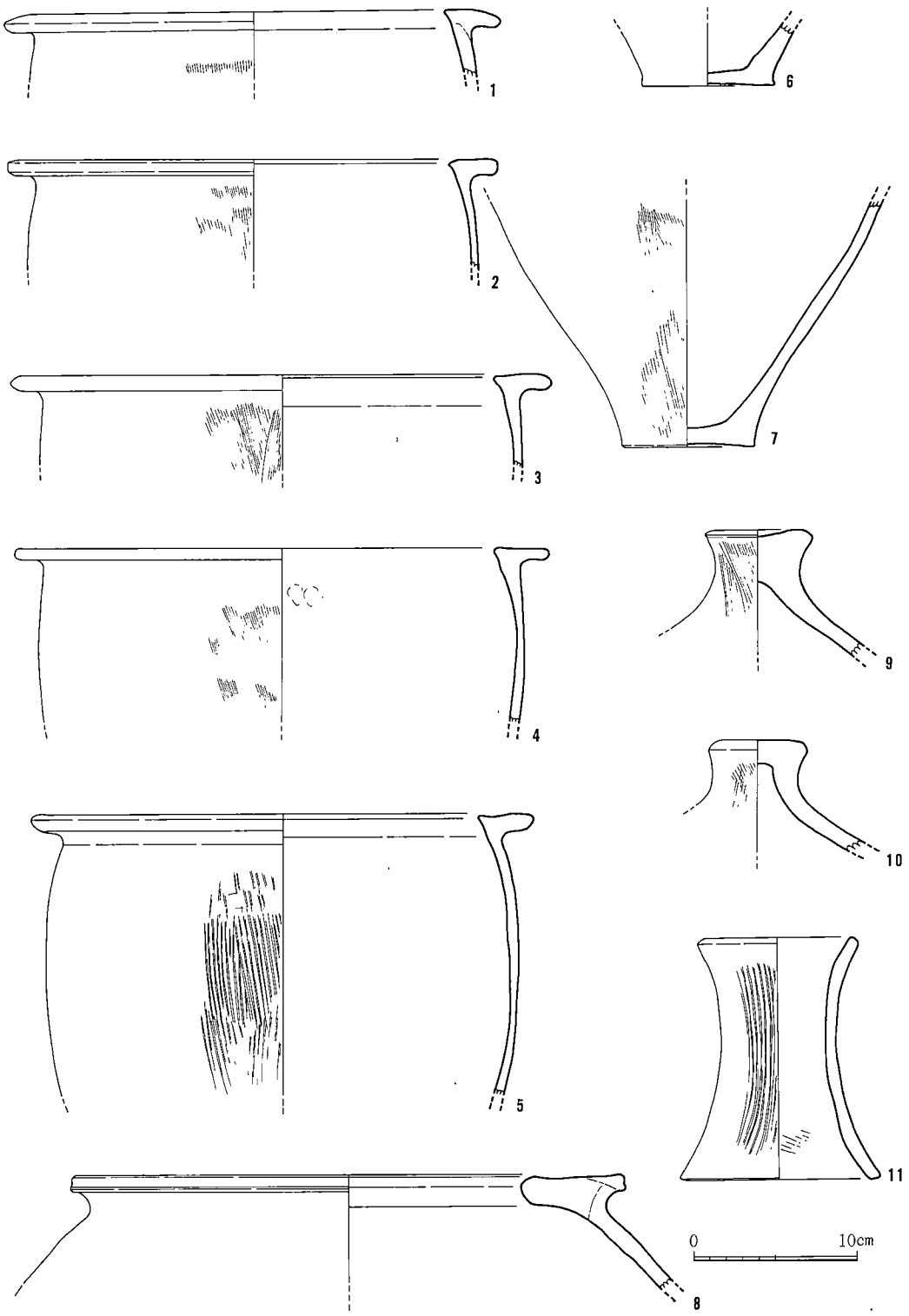
J区に位置する不整形の土壙で、一部は調査区外にある。底面で295cm×211cmを測る遺構で、その規模から住居跡と考えることも可能であろう。底面までは深さ34cmを測り、そこはほぼ平坦である。また、南側の外部に突出する部分はこの遺構に伴うものではない。土器は土壙上位から中位のレベルで検出され、断面図を見ると、土器の廃棄はこの土壙が半分以上埋まった時点で行われたことが看取できる。

出土土器（第35・36図）

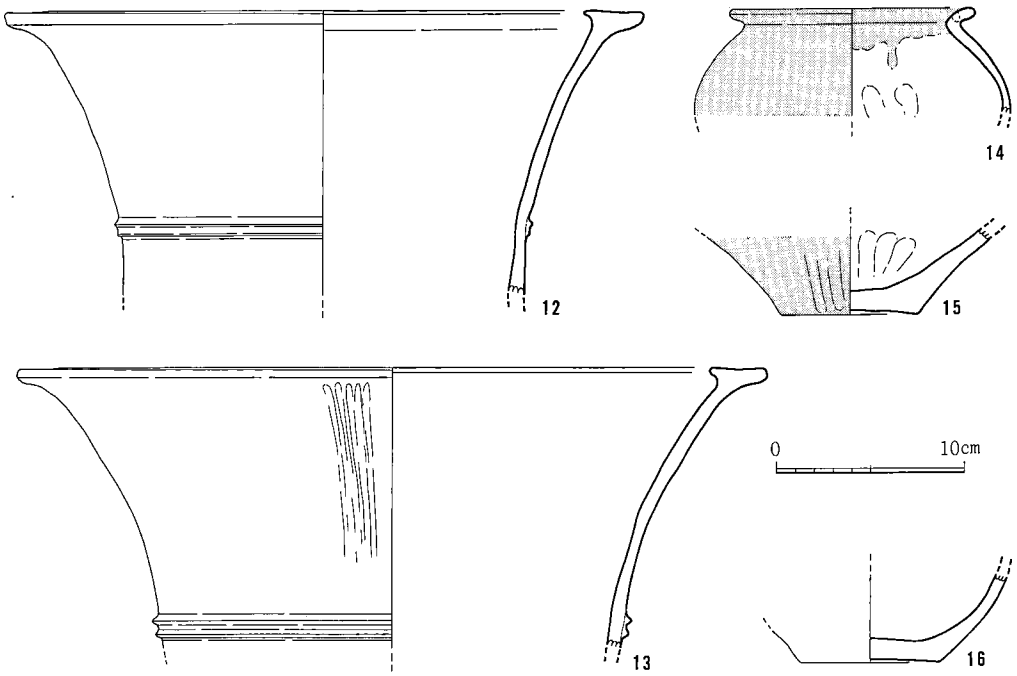
1～8は甕の部分片。1～5は逆L字形口縁をもつ。1は口縁外端部がやや下がり、外傾した形態を呈す。2は端部が角ばり、口縁の長さが短い。3～5は口縁上面中央がくぼみ、波打つような形態をみせる。いずれも外面ハケメ、内面ナデ仕上げ。6・7は底部で、内底面に平坦部がある。8は復原口径33.7cmを測る、中形の甕。口縁は内側によく発達したT字形をなし、胴部はやや縦長の球形を呈すと考えられる。12～16は壷の部分片。12・13は鋤形の口縁をもつ広口壷。いずれも頸部下半に造り1条見かけ2条の凸帯が貼付される。13の外面は表面がなめらかなヘラ状工具によると考えられるミガキ状のナデ。14は短頸壷で、外面と内面の一部は丹塗り。口縁には蓋装着のための穴が穿たれている。15は丹塗り壷の底部で、外面丹塗りで縦方向のヘラミガキが施される。



第34図　5号土壙実測図（1/30）



第35図　5号土壙出土土器実測図①（1/4）

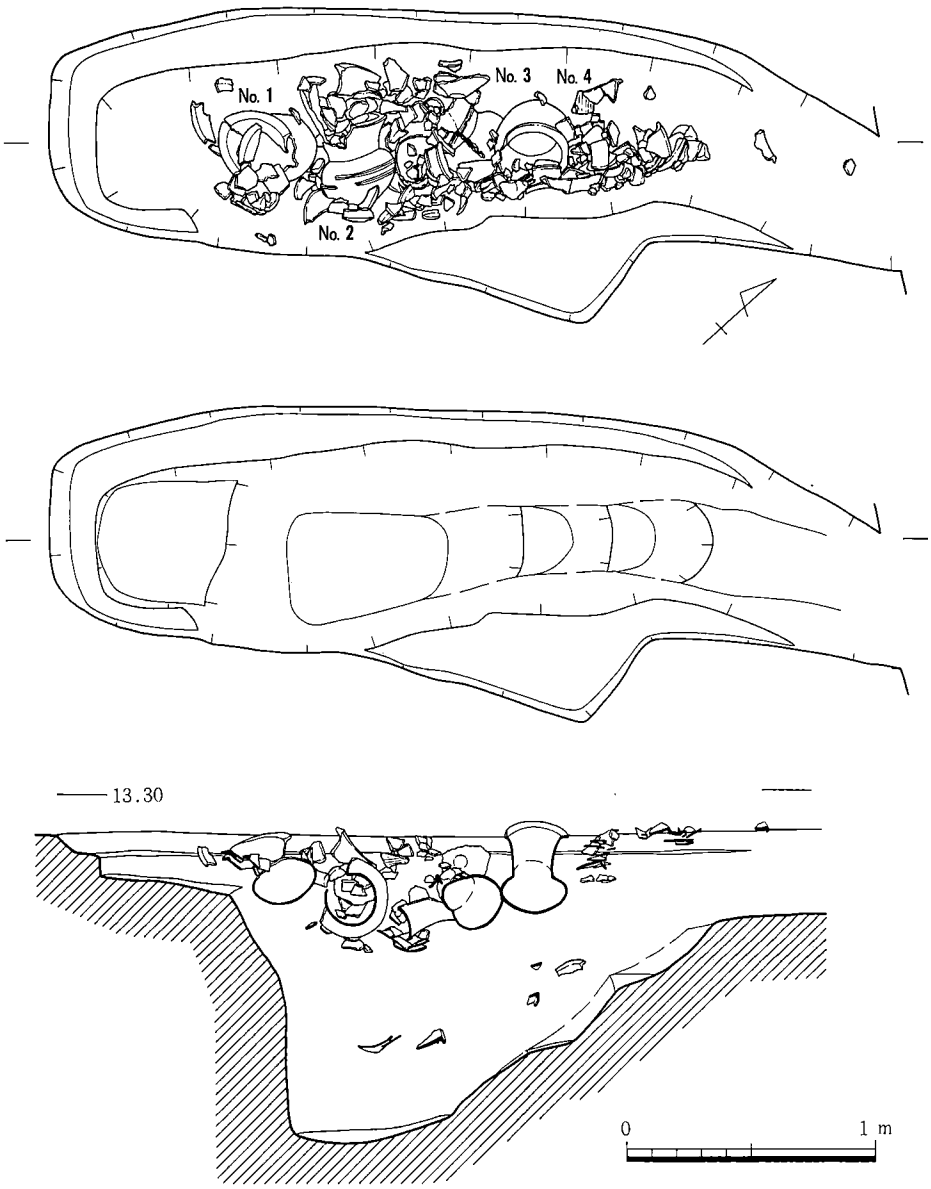


第36図　5号土壙出土土器実測図②（1/4）

6号土壙（第37図・図版17・18）

N区に位置する土壙で、北側を1号住居跡に切られている。縦長の形態を呈し、現存で長さ330cm以上を測っている。土壙内の深さ約10cm前後の部分には、土壙を囲むようにめぐる細長く平坦なテラスとそれに対面して三角状のテラスが存在している。南側には、さらに12～13cm下ったところにもう一段のテラスが存在する。北側は、深さ35cmを測る溝状の平坦部が南へ伸び、そこから2段の階段状のテラスを経て土壙底面へ経る。土壙底は65cm×45cmを測る隅丸台形状を呈し、深さは124cmを測る。このように、先述したテラスの間は徐々に深く溝状に堀り込まれている。

土壙上位には土器が密集して認められる。このうち中形の壷4個体（No.1～No.4）はその出土状態からみて、完形に近い状態でそこに置かれていたことが推定できる。他は破片であり、この壷の周囲に集中して検出される。断面図を観察すると、上層の土器は中央部ほど深い位置で出土し、土器出土の下端のラインが弧状をなしている。これは、土壙がほぼ埋まりかけて中央がくぼむ程度の状態になった時に土器がおかれたか、覆土の沈下により元来整然と置かれていた土器がこのような状態になったことを示すものであろう。いずれにしろ、この土壙の下半部の空間が何を意味するのか不明であるが、成人が中にはいって屈四肢の姿勢をとれば墓としても充分に機能するであろう。



第37図　6号土壙実測図（1/30）

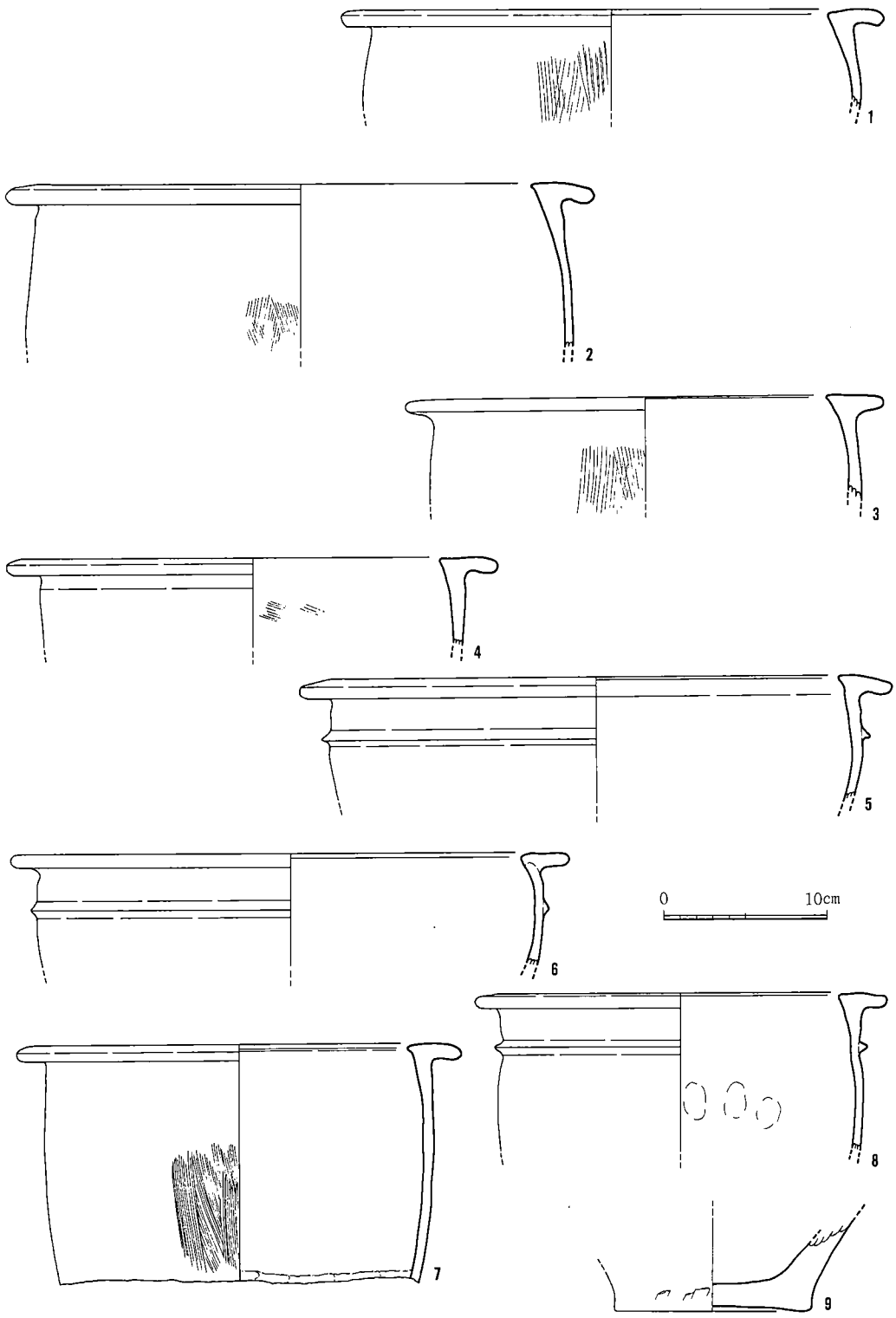
土器の器種は甕・壷・高坏・器台・蓋が認められ、壷、甕が主体を占めるが後者は部分片が多い。壷は9個体が半形もしくは完形に近く接合し甕とは極立った差をみせる。この壷群には、胴下半部に穿孔を施されたものやそのために胴部内を叩いた痕を残すものがいくつか認められる。また、3個体は同じように口縁をV字形に欠くもので人為的な打ち欠きの可能性をもつ。このように壷に関しては、何らかにたいする祭祀的色彩を強く認めることができる。丹塗り土器は高坏の脚に一点を数えるのみである。

土壙中位にも土器は小数認められるが、甕の部分片が主体をなす。Ⅵ・Ⅶ区で数多く確認された土器を出土する土壙の中でも本例は特異な例といえよう。

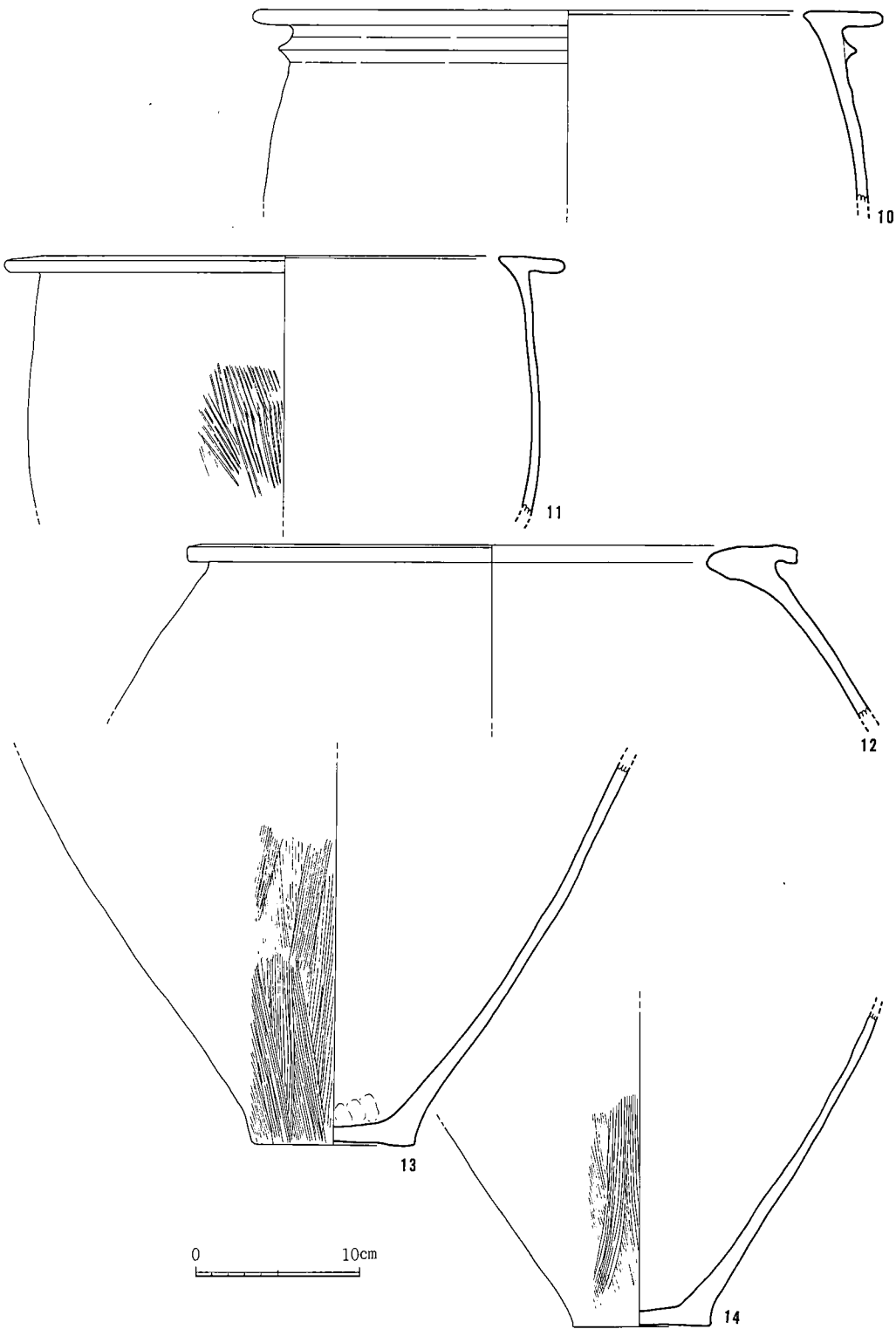
出土土器（第38～46図・図版41～43）

1～14は甕の部分片。1～8・11・12は口縁部で、5・11のみややT字状をなし、他は逆L字形を呈す。逆L字形口縁は、端部が肥厚し波うつ形態のもの（1・2・4・8）と直線的に横に伸びる形態のもの（3・6・10）があり、また7のようにわずかに外傾気味のものもある。内面端部は、つまみ上げ成形（もしくはナデ）のため、いずれも内側にやや突出する形態を呈すが、5・11のようなT字状のものとは形態的に一線を画すものであろう。逆L字口縁の一群のうち、口縁下凸帯が貼付されるのは6・8・10で、やや大ぶりな甕に凸帯が貼付されるとは限らない。調整は外面ハケメ、内面ナデが基本であるが、8のように外面のハケメをナデ消しているものもある。5はわずかにT字状をなす例であり、口縁は外傾している。凸帯下から急にすぼまることから、鉢である可能性がある。11は内側に大きく突出したT字状口縁を有し、やや外傾している。胴部はわずかに張る。以上は破片からの復元図で、口径は25.2～36.2cmを測る。9・13・14は底部片で、9は中形もしくは大形棺の底部。13・14は内底面に平坦部があり、底壁は8～9㎜を測る。12は復元口径34.6cmを測る中形甕。口縁は内側が肥厚したT字形をなし、胴部は縦長の球形を呈し、おそらく胴部中央には1条の凸帯が貼付されるもの。内外ともナデ仕上げ。色調は外面明赤褐色を呈す。

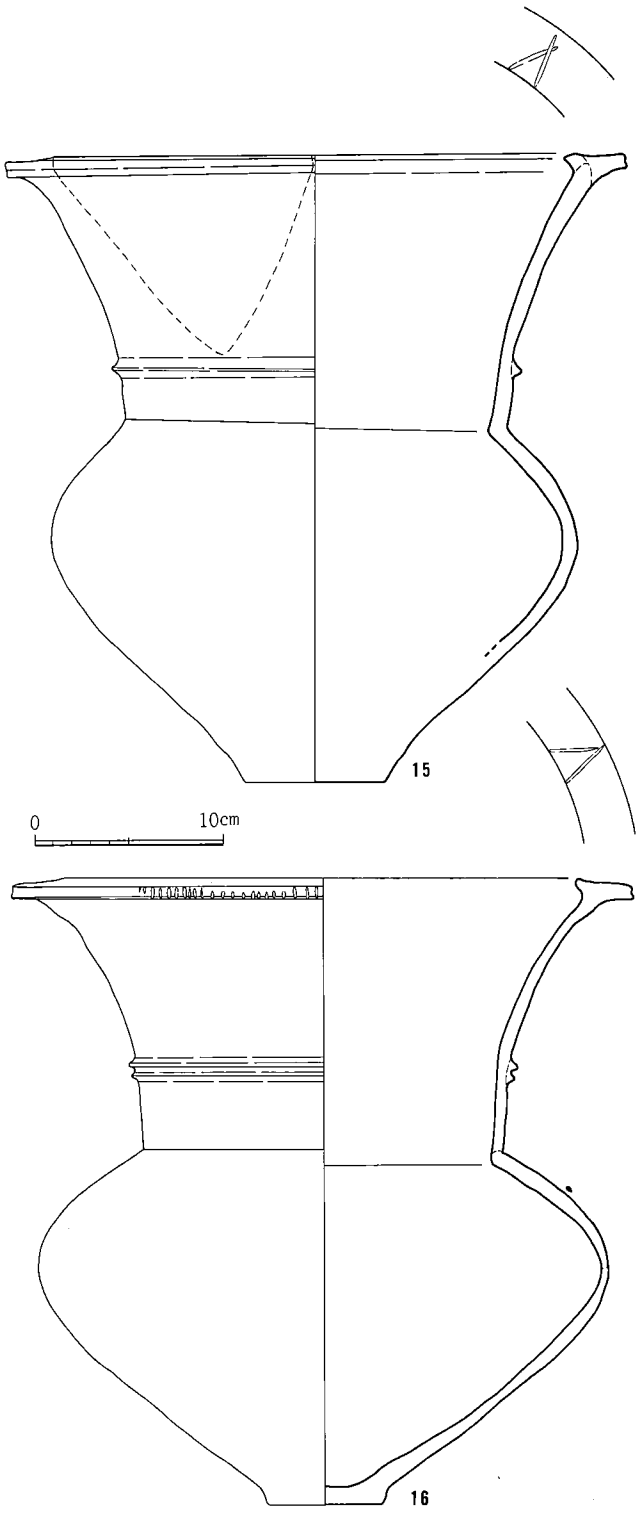
15～29は壷とその部分片。15～22は接合状態が良好な広口壷で鋤形の口縁を有す。15は口縁から頸部上半にかけてをV字形に打ち欠いている（点線の範囲）。頸部下半には三角凸帯が貼付される。また、口縁上面にはヘラ描きのV字文が施される。胴部最大径は胴上半にあり、内面下半部には穿孔を試みたと考えられる、棒状の工具でたたいた痕が5ケ所に認められる。そこはいずれも器面が剝離し、すりばち状のへこみが残存している。口径32.8cm、器高33.1cmを測り、打ち欠き部をのぞき完形に接合した。16は口縁端部にキザミが施され、口縁上面には15と同じV字文。頸部下半には造り1条見かけ2条のM字凸帯を貼付。胴部は張り、15より横広の形態を呈す。口径32.8cm、器高33.1cmを測り、胴部半分を欠く。17は口縁から頸部上半にかけてV字形に打ち欠かれている（点線の範囲）。頸部下半には三角凸帯貼付。胴下半には内から外へ穿孔が施され、内面にはその為と考えられる器面の剝離した痕が穿孔部以外に認められる。内



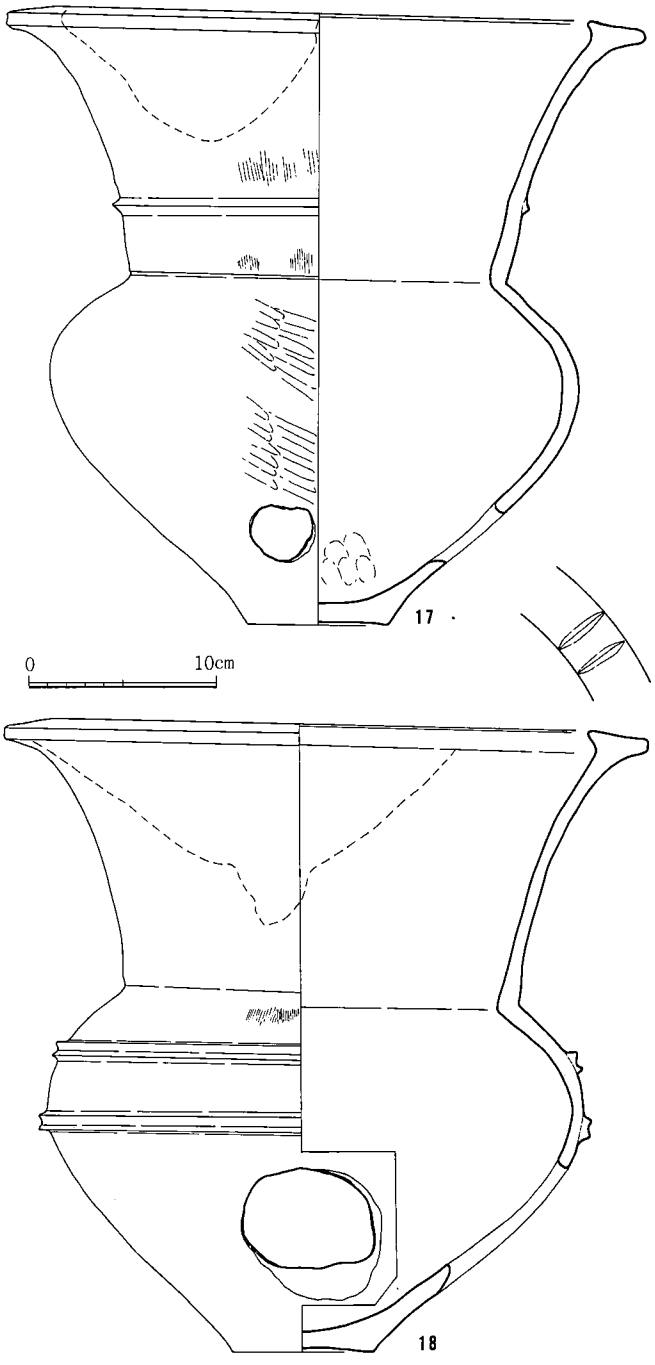
第38図　6号土壙出土土器実測図①（1/4）



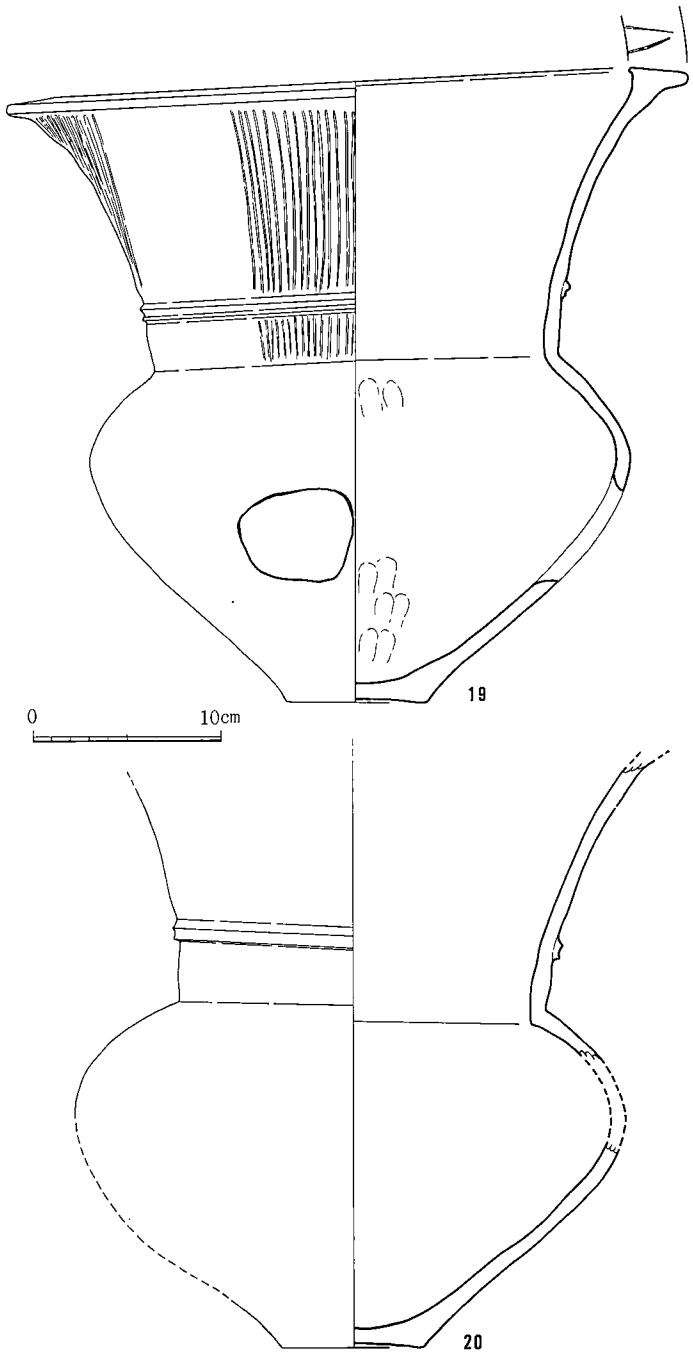
第39図　6号土壙出土土器実測図②（1/4）



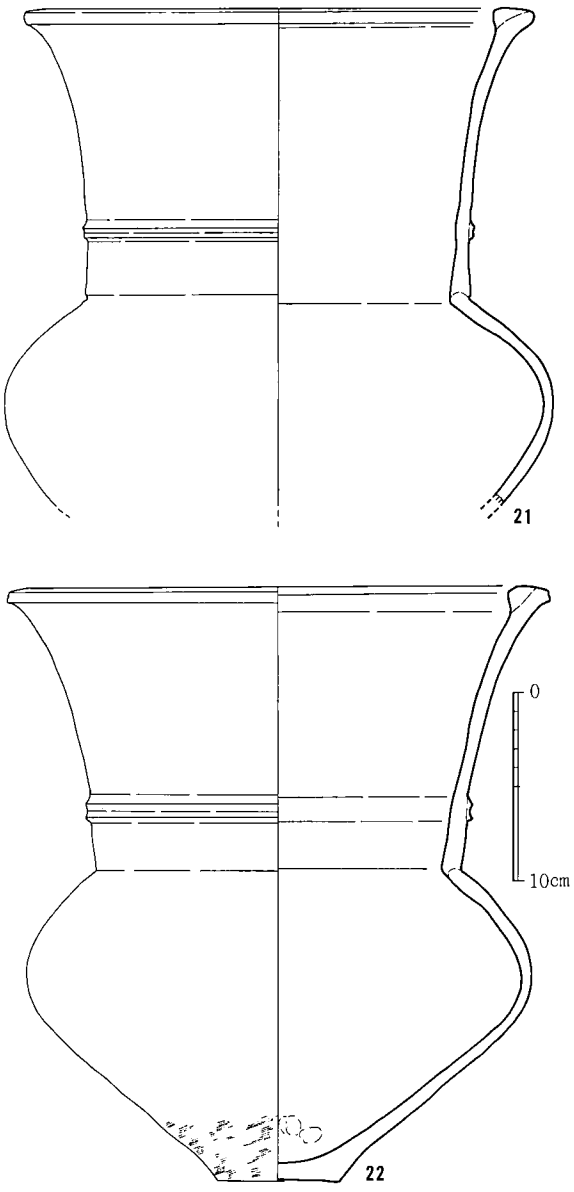
第40図　6号土壙出土土器実測図③（1/4）



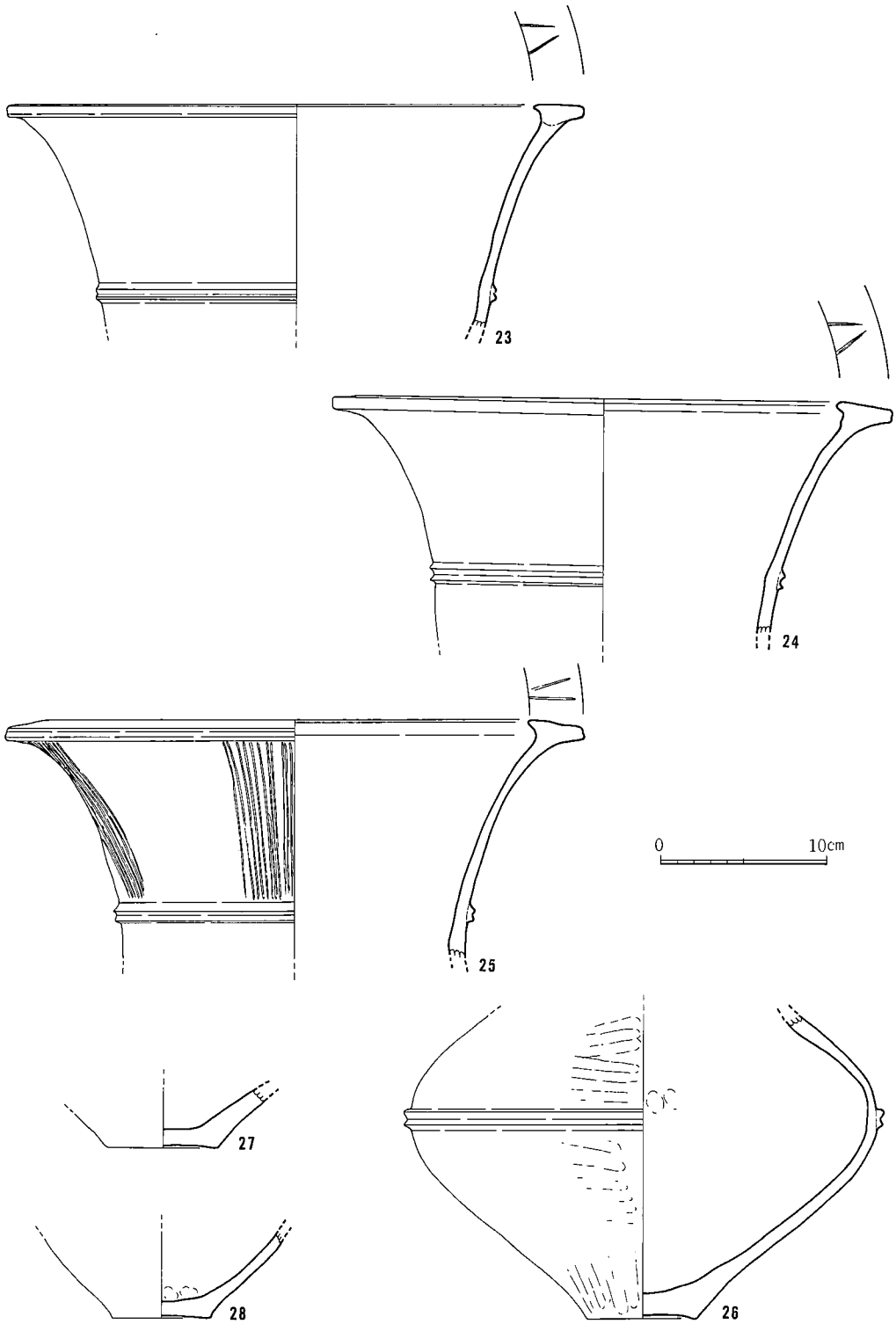
第41図　6号土壙出土土器実測図④（1/4）



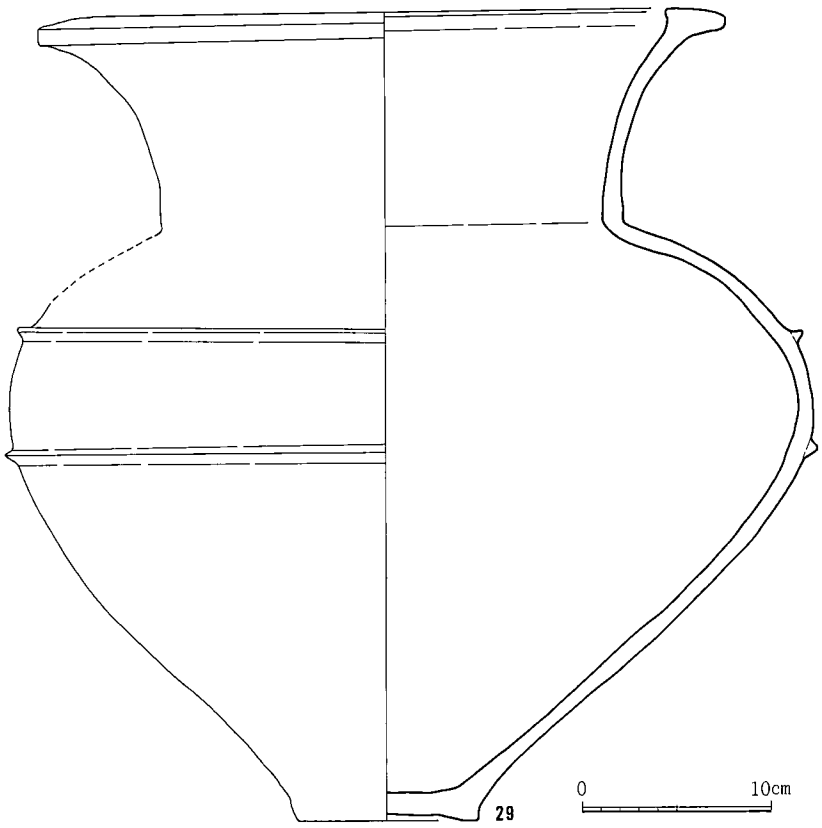
第42図　6号土壙出土土器実測図⑤（1/4）



第43図　6号土壙出土土器実測図⑥（1/4）

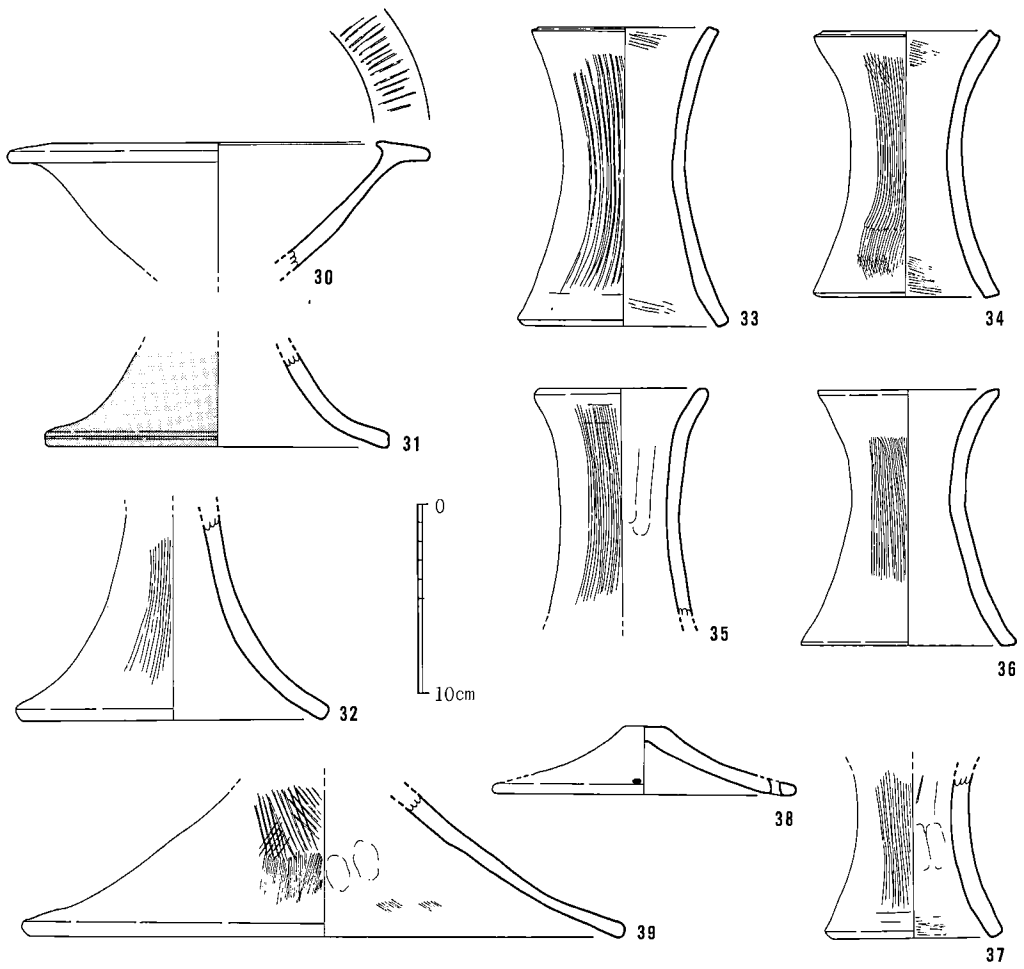


第44図　6号土壙出土土器実測図⑦（1/4）



第45図　6号土壙出土土器実測図⑧（1/4）

面はナデ、外面は頸部が縦方向のハケメの後ナデ消し、胴部は斜め方向のヘラミガキで仕上げられる。口径33.8cm、器高32.2cmを測り、完形に接合した。18は口縁上面に細い粘土紐を貼付した隆起線文が2条認められる。口縁から頸部下半にかけてはV字形に打ち欠かれている（点線の範囲）。胴上半と中央には2条の、造り1条見かけ2条のM字凸帯が貼付される。胴下半には大きな穿孔が施され、内面にはたたいた痕と考えられる器面の剝離面がわずかに認められる。口径34.2cm、器高33.4cmを測り、完形に接合した。17・18とも打ち欠き部、穿孔部の破片は存在しない。調整は内面ナデ、外面は頸部が縦ハケメの後ヨコナデ、胴上半がヨコナデ、以下はナデ仕上げ。19は口縁上面にV字形のヘラ描きが施される。口縁・頸部の3/4を欠くが、割れ方から判断するとV字形に打ち欠かれた可能性は大。頸部下半には造り1条見かけ2条のM字凸帯が貼付され、その上下には暗文が施される。胴部下半には穿孔がある。調整は内面ナデ、外面は口縁・頸部がヨコナデの後暗文、胴上半のみわずかにハケメが残存し最終的にナデ仕上げ、



第46図　6号土壙出土土器実測図⑨（1/4）

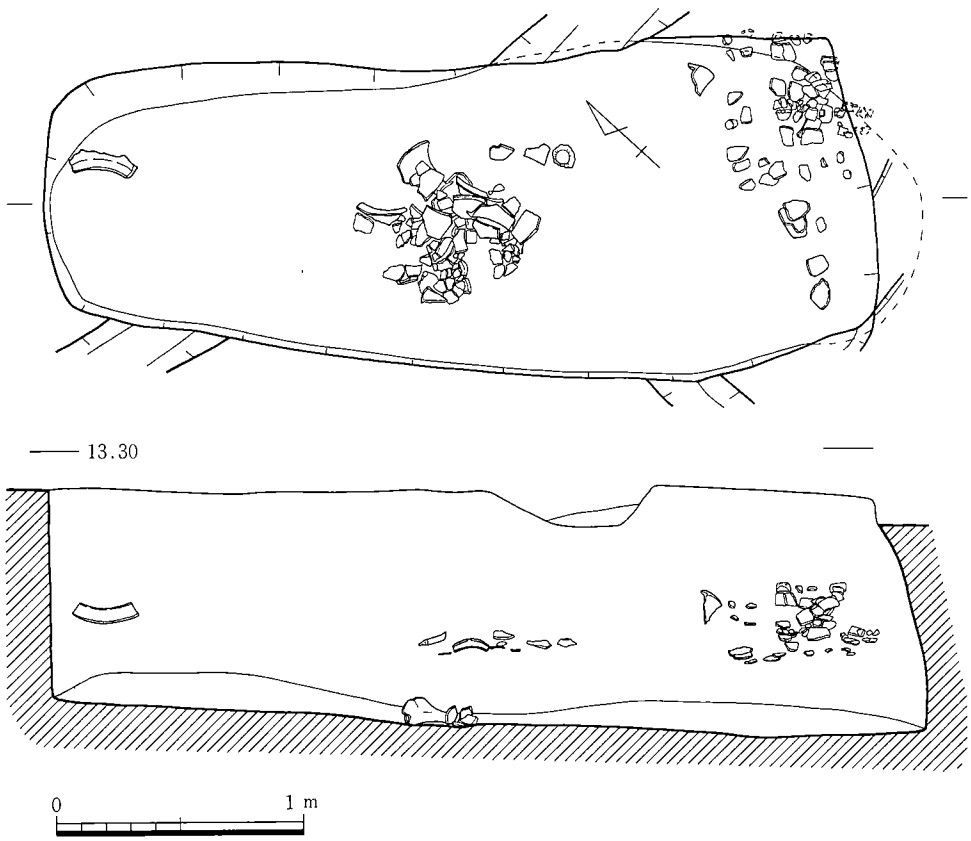
以下はナデのみ認められる。復元口径30.2cm、器高32.5cmを測り、胴部はほぼ完形に接合した。20は半分のみ残存する例で16・19と同様の形態を呈すのであろう。内面ナデ、外面の胴上半まではヨコナデ、以下はナデ。21は短い鋤形口縁をもち、22も同様の形状を呈す。頸部はやや直立し、頸部下半には造り1条見かけ2条のM字凸帯を貼付。内面の頸部下半のみヨコナデで、他はナデ。外面は頸部上半ナデ、同下半から胴上半にかけてヨコナデ、以下はナデというふうに複雑である。1/3しか残存せず、復元口径23.8cm。22も21と同様の特徴を備えるが、頸部はやや開き気味。内面ナデ、外面の胴上半までヨコナデ、以下はナデ。底部付近には斜め方向のハケメがわずかに残存している。口縁の5/6、胴の1/4を欠くが、復元口径33.7cm、同器高31.4cmを測る。29はやや大型の例で、頸部が短く15～22の例とタイプを異にする。頸部は外反して立ち上がり、胴部は大きく張り出し口径を上まわる。胴上半には2条の三角凸帯が貼付される。

内面ナデ、外面は凸帯周辺のみヨコナデで他はナデ。1/2程残存し、復元口径30.2cm、同器高42.7cmを測る。23～25は16・19・20と同じ形態の例と考えられる。いずれも鋤形口縁の上面にヘラ描きのV字文があり、頸部には造り1条見かけ2条のM字凸帯が貼付される。25のみ暗文が頸部に施される。調整は内面ナデ、外面ヨコナデ。復元口径は33.7～35.0cmを測る。26は胴部の例で、最大径に造り1条見かけ2条の凸帯が貼付される。底部は小さく、わずかに上げ底を呈す。外面に横・縦方向のヘラミガキが施される。27・28は壷の底部であろう。

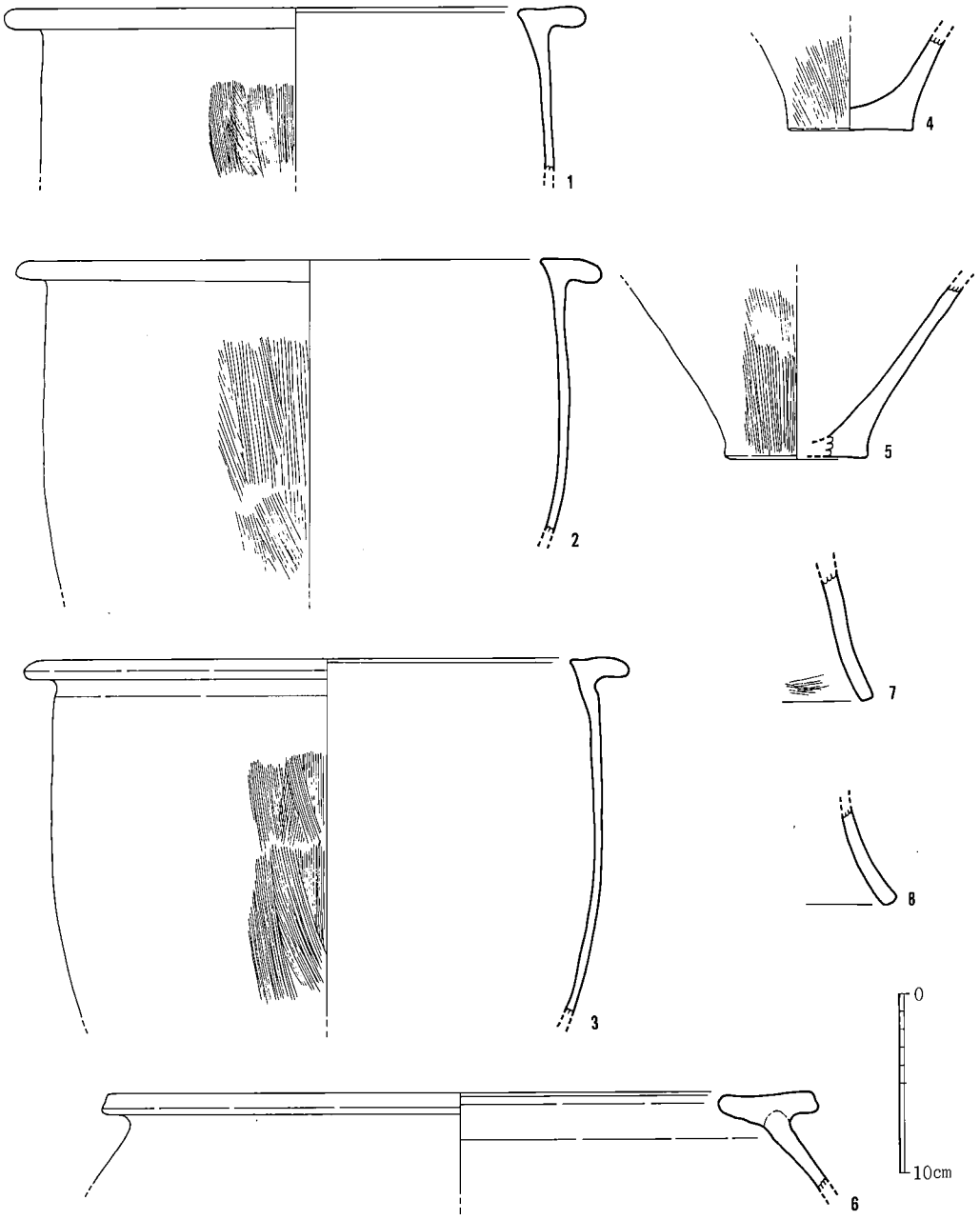
30～32は高坏の部分片。30は外傾した鋤形の口縁部をもち、坏部は深い。口縁上面には間隔の狭い暗文が施され、内外面ともナデ仕上げ。32は30の脚部とも考えられる。外面ハケメ。31は丹塗りの脚部で、外に広がる形態を呈す。33～37は器台で、いずれも底径が口径を上まわる。器高13.4～15.8cm。38・39は蓋で、38は復元口径16.2cmを測り、穿孔が1ケ所のみ認められる。39は復元口径31.0cmを測り、外面は細かさの異なる2種類のハケメにより仕上げられる。

7号土壙（第47図・図版18）

N区に位置する長方形の土壙で、一部を溝状の遺構に切られている。底面で352cm×133cmを

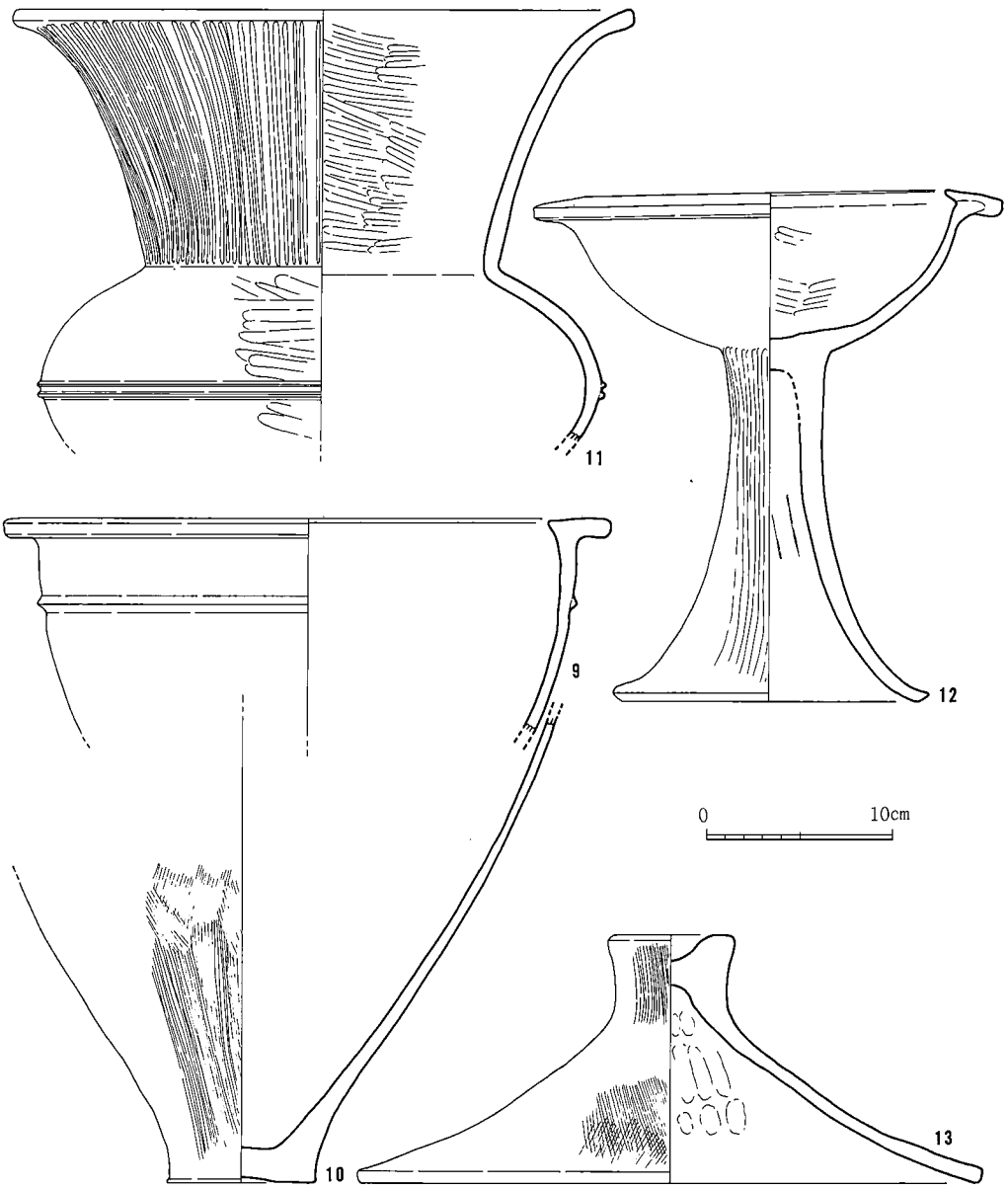


第47図　7号土壙実測図（1/30）



第48図　7号土壙出土土器実測図①（1/4）

測り、深さは84～95cmである。上端は長方形を呈すが、底面は長楕円形を呈す。壁は北西側が直立し、対面はオーバーハングする。土器は土壙中位と底面に認められ、中位では甕・壷・鉢・器台の部分片が出土し、やや離れて中形甕の口縁部片が出土している。中位では土壙の中



第49図　7号土壙出土土器実測図②（1/4）

央と南東側の2つの群が認められる。底面では高坏が出土し、復元するとほぼ完形に仕上った。丹塗りは施されていない。

出土土器（第48・49図・図版43）

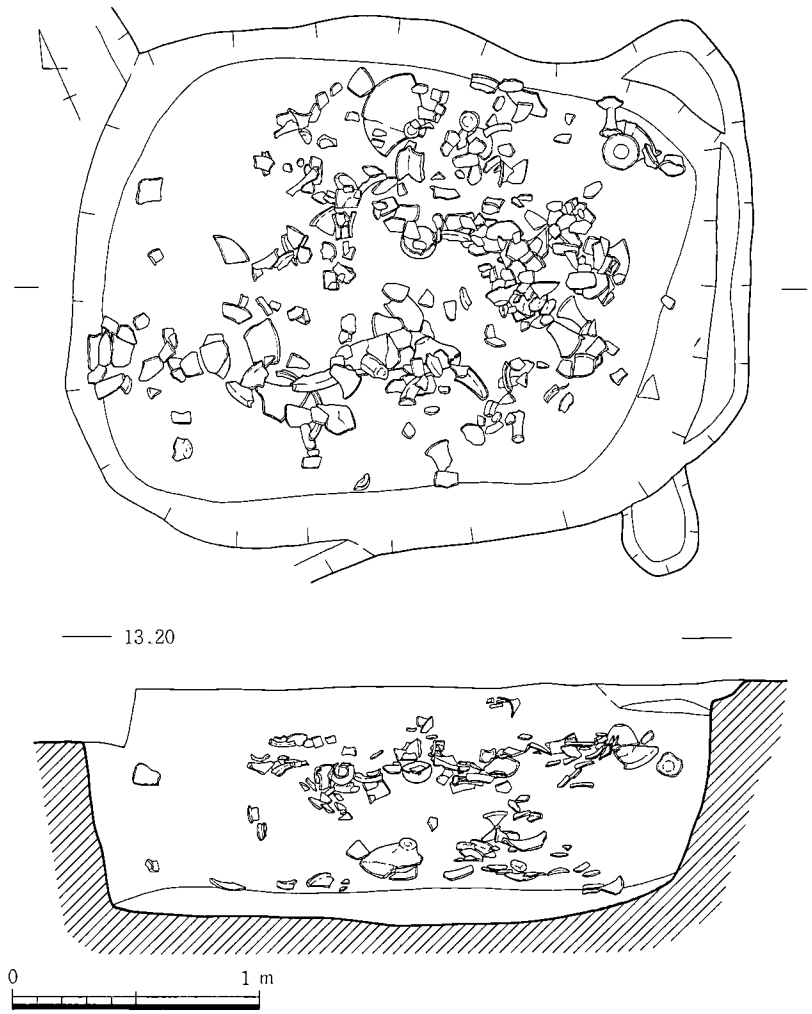
1～6・10は甕の部分片。1～3は逆L字形の口縁を有し、2・3の外端部は外傾する。内端部はいずれもやや突出する。内面ナデ、外面ハケメ。4・5・9は底部片で、底径6.9～8.0cmを測る。内底面には狭い平坦部を有し、10はやや上げ底を呈す。6は中形の甕で、復元口径29.2cmを測る。口縁は。T字状に内外に発達し、わずかに内傾する。胴部は球形を呈すと考えられ、胴中位には一条の凸帯が貼付されるタイプのものであろう。11は広口壷。胴部は張り、最大幅には造り1条見かけ2条の凸帯が貼付される。口縁・頸部外面には間隔の狭い暗文が施される。その内面は横方向のヘラミガキ。胴部外面も同じ。復元口径32.6cmを測る。12は高坏。口縁は外傾し、鋤形をなす。坏部はわずかに深く、内面のみヘラミガキ。脚部は縦方向のヘラミガキ。内面にはしぼり痕あり、口径19.2cm、器高27.2cm、脚径15.3cmを測る。13は蓋で、把手の上面は上げ底状を呈す。復元口径33.0cmで、内面ナデ、外面ハケメ。9は凸帯下の形態から鉢と考える。やや内側に発達した逆L字形口縁をもつ。7・8は器台の破片。

8号土壙（第8図・図版18）

G区に位置する隅丸長方形の土壙で、J3に切られる。底面で226cm×169cmを測る大きな土壙で、深さは93cmを測る。壁はやや斜めに立ち上がり、東側には2段のテラスをもつ。このテラスは後世の壁崩壊に伴うものとも考えられ、その場合はテラスの上端の線が土壙のアウトラインをなしていたと考えられる。土器は土壙の上位から下位にかけて多く認められるが、断面図を観察するならば土壙中位にやや集中する傾向をみせかつそれは平面的な広がりもみせている。土壙底にはわずかしか土器は検出されていない。

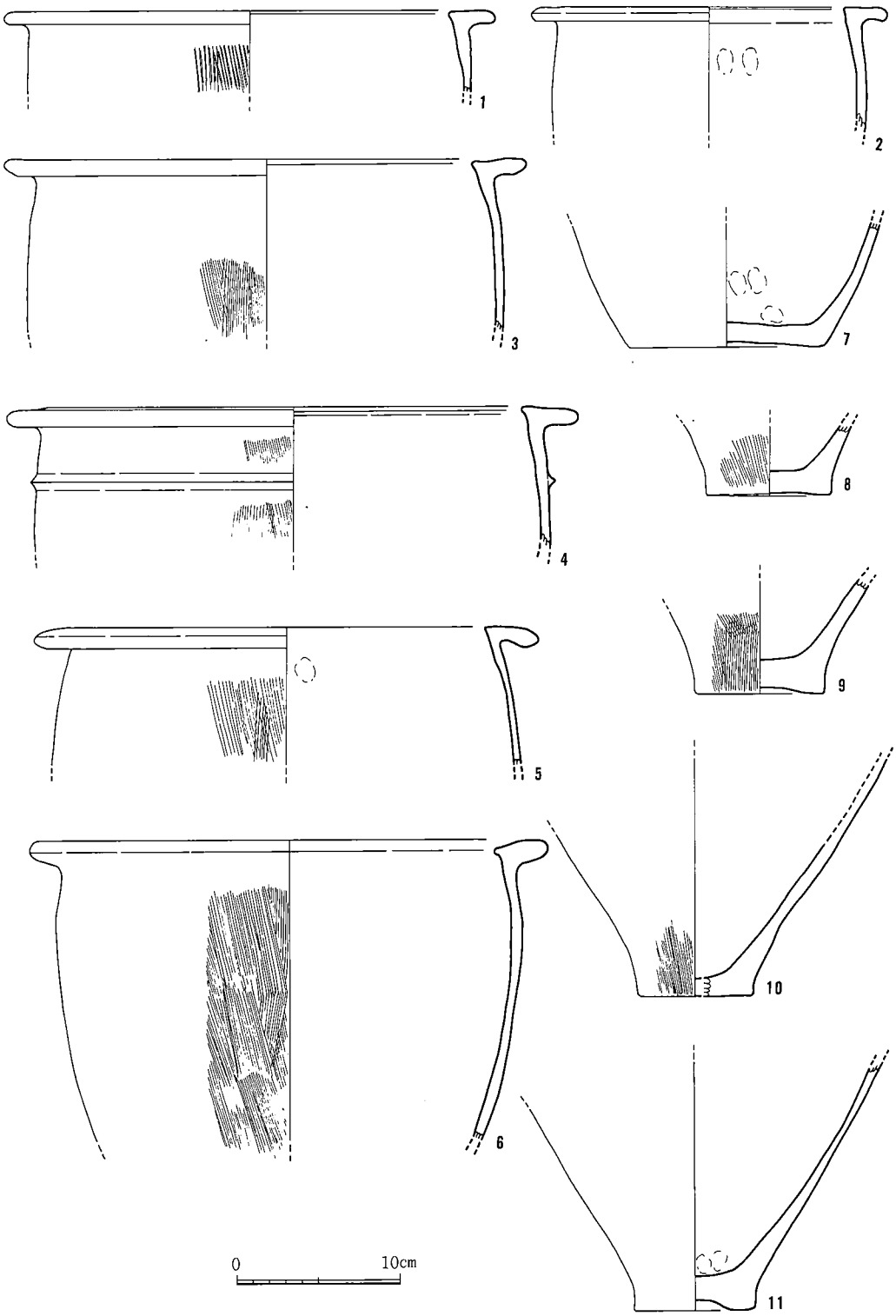
出土土器（第51～54図・図版44・45）

1～13は甕の部分片。1～6・12・13は逆L字形の口縁部。各々、細かい形態差はあるが、内側にやや発達し外端部が肥厚する例が多い。また、口縁上面に凹部があるため、口縁が波うつような形態をみせるものは1～4・12に認められる。その中でも、4は内側によく発達した形態で、口縁下には1条の凸帯が貼付されている。5の口縁は外傾し、逆に6は肥厚した口縁が内傾する。全体的に肥厚した例としては13も同様である。13は接合状態が良好で、ほとんど張らない胴部とやや上げ底の底部をもつ。口径27.9cm、器高31.2cm、底径6.9cmを測る。また、以上の口縁径は16.6～34.6cmを測る。調整は内面ナデ、外面ハケメが基本。特異な例としては、12の胴上半に円形と考えられる穿孔がみとめられる。7～11は甕の底部。7は底径11.6cmを測る、底部が大きく丈の低いタイプの甕底部。内外ともナデ仕上げ。8～11の内底面には平坦部が認められ、底径は7.1～7.9cmを測る。9・11には上げ底が認められる。14・18～23は壷の部分片。18・19は小型の例で、胴部に一条の凸帯を貼付。両者とも内外はヨコナデ・ナデ仕上げ。18の胴上半には板状工具（ハケメ原体？）の木口両端部と考えられる痕が認められる。従って、ハケメ後ナデ仕上げか。14・20～23は広口壷。20・21は口縁が鋤形をなし、やや外傾する。22

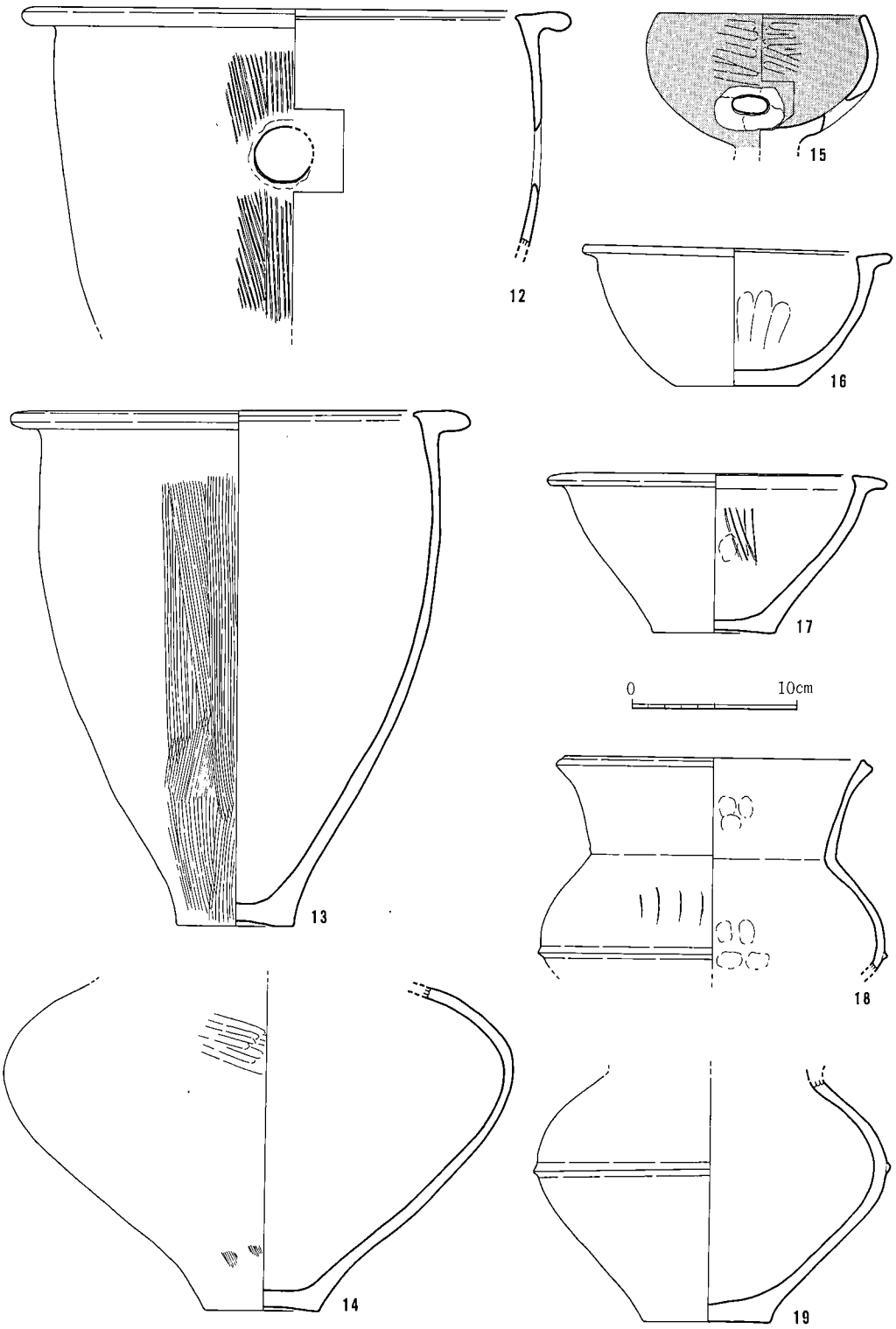


第50図　8号土壙実測図（1/30）

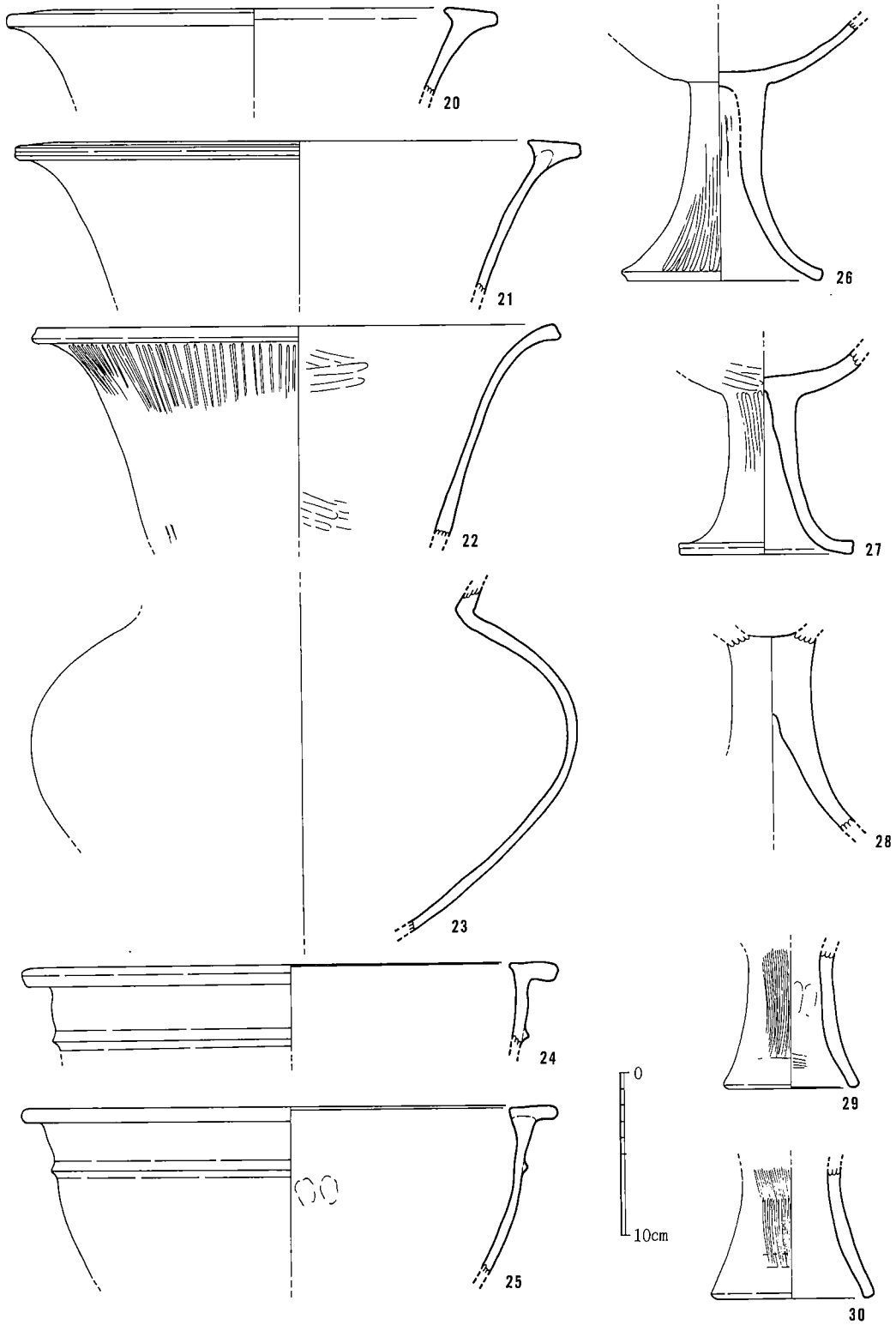
の口縁上半には暗文が認められる。胴部は14・23ともよく張り、14には斜め方向のヘラミガキ。14の底部周辺には、細かいハケメを施した後ナデ仕上げが認めらる。16・17・24・25は鉢。後二者はやや大きな例で、口縁下には凸帯が貼付。内外ともナデ・ヨコナデ仕上げ。15・26～28は高坏。15のみ丹塗りで、坏下半部には穿孔が施されている。口径は12.6cm。26～28は脚部で、脚部外面はヘラミガキ。27は坏部にも認められる。29～33は器台。31～33は器高14.3～16.0cmを測り、いずれも底径が口径を上まわる。34は支脚と考えられる長方形の土製品。加熱のため表面の剝落が著しい。



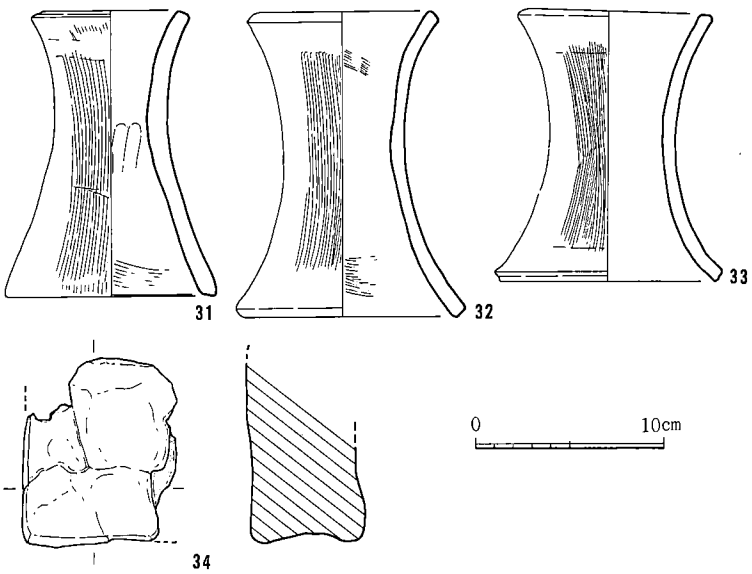
第51図　8号土壙出土土器実測図①（1/4）



第52図　8号土壙出土土器実測図②（1/4）



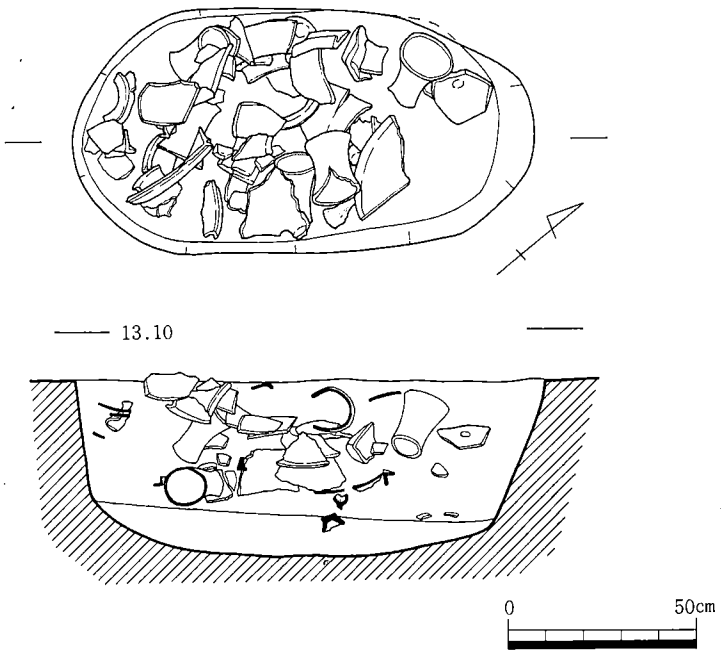
第53図　8号土壙出土土器実測図③（1/4）



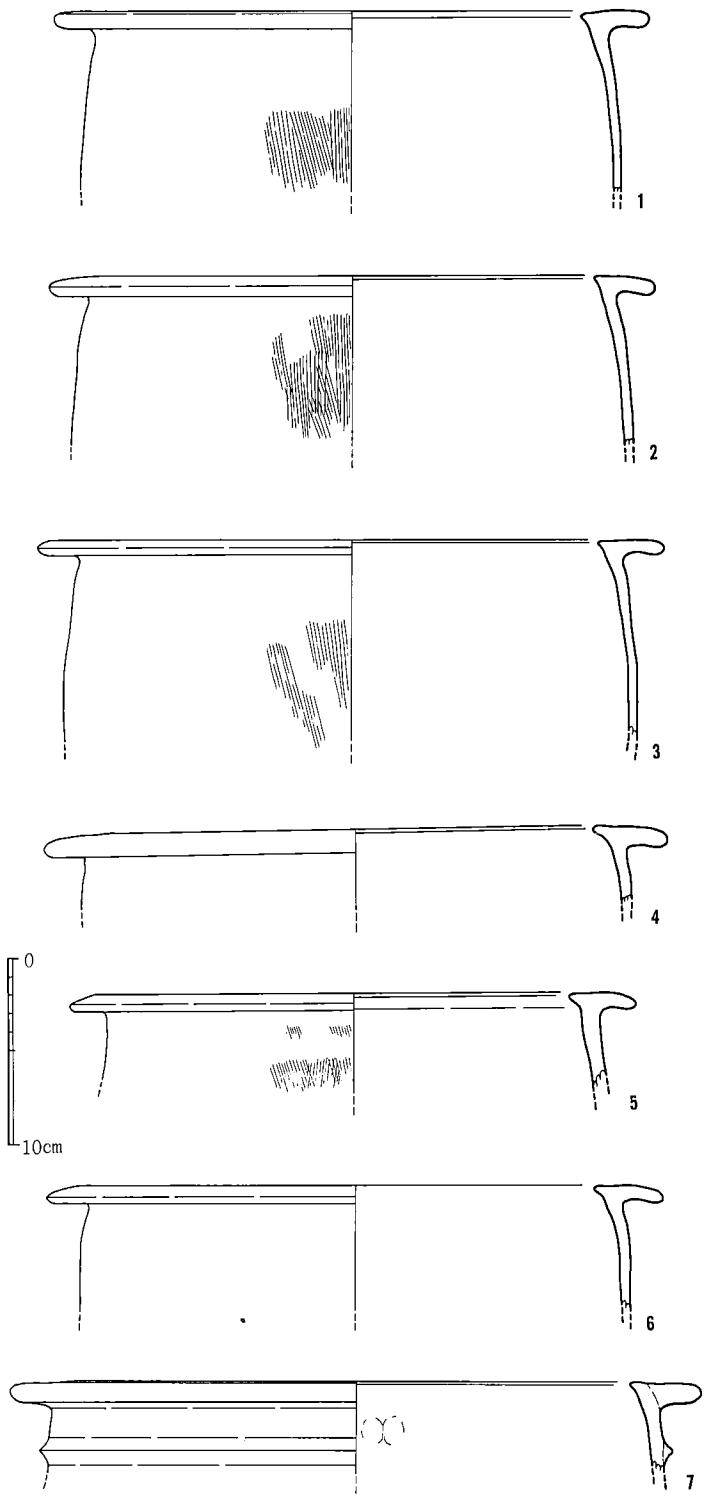
第54図　8号土壙出土土器実測図④（1/4）

10号土壙（第55図・図版18）

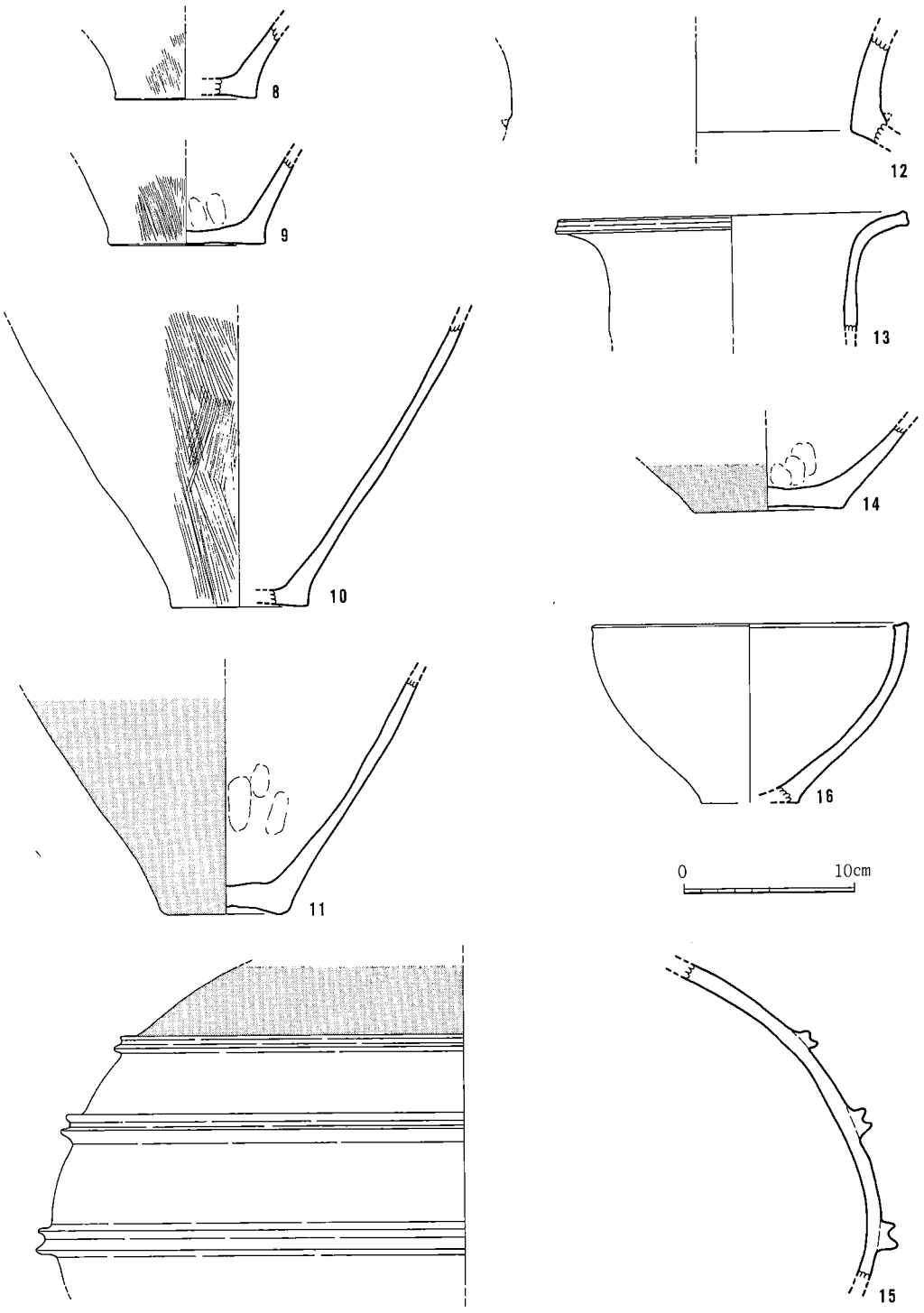
K区に位置する長楕円形の土壙で、J 6を切る。底面で109cm×59cm、深さは46cmを測る。底面は中央にかけてややくぼむ形態を呈す。土壙の上位から中位のレベルにかけて、土器がやや密集して出土している。



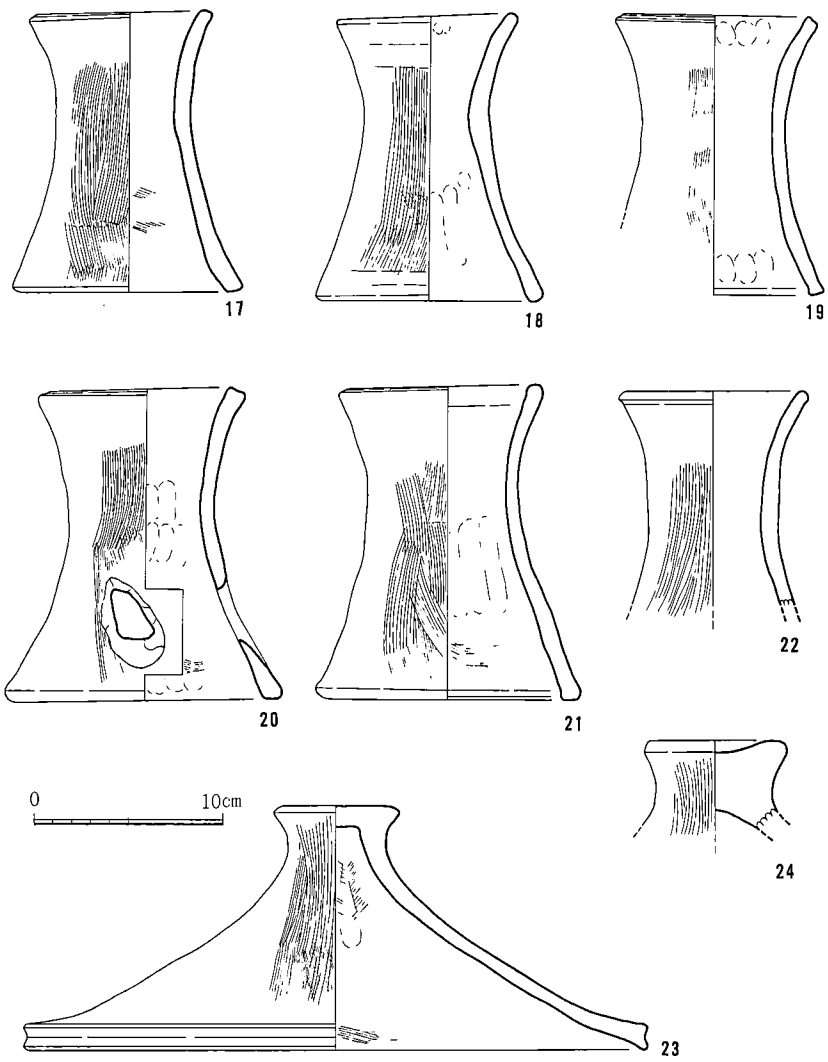
第55図　10号土壙実測図（1/20）



第56図 10号土壙出土土器実測図①（1/4）



第57図　10号土壙出土土器実測図②（1/4）



第58図 10号土壙出土土器実測図③（1/4）

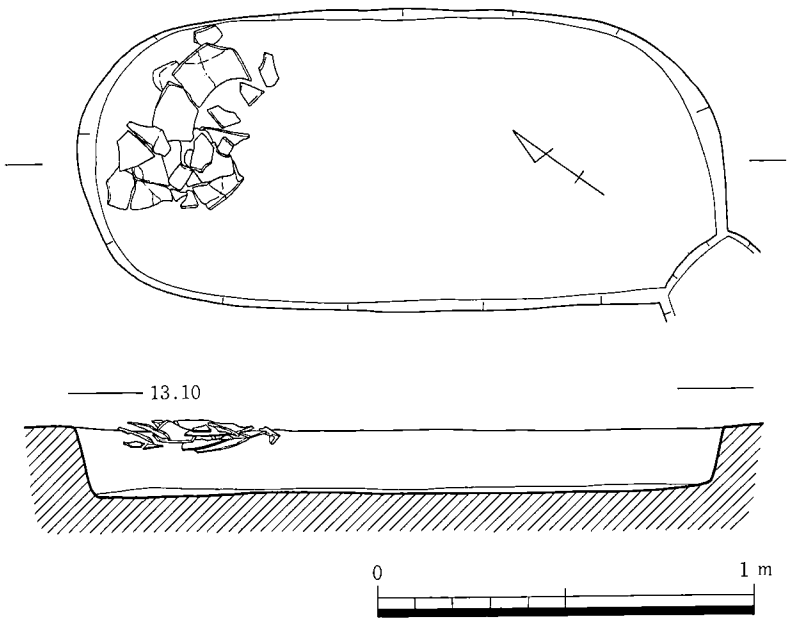
出土土器（第56～58図・図版46）

1～11は甕の部分片。1～7は口縁部片で、外側によく発達し、長さが長い。全体に水平、もしくはやや外傾の形状を呈し、波うつような断面をみせるものがかなり含まれる。口縁内面の発達は、4～6にみられT字状をなしている。しかし、他も口縁内面をつまみ上げ気味に整形するため、内面の発達がわずかにみられる。口縁下凸帯の貼付は7にみの認められ、復元口径36.6cmとこの中では最長の口縁径を測る。他は30.0～32.6cmを測る。口縁周辺ヨコナデ、外面ハケメ、内面ナデは共通。8～10は底部片。内底面は広い平坦面が認められ、底壁はやや薄くなっている。若干の上げ底が認められ、底径は8.0～9.2cmを測り、前代に較べてやや大きく

なっている。内面と外底面がナデ、外面ハケメ。11は丹塗り甕と底部と考えられる。底径は6.9cmとやや小さく。上げ底が認められる。12～15は壷の部分片。12は広口壷の頸部下半で、屈曲部に凸帯の貼付痕がある。外面には炭化物の付着が著しい。13は口縁周辺のみが外反するタイプ。口縁端部には細かな整形により凹部をつくり出している。14は丹塗り壷の底部片で、外面ナデのち丹塗り、内面は化粧土の塗布が認められる。15は部分的に丹塗りで、胴上半に3条のM字凸帯が貼付される特異な壷。胴部最大径は48.6cmを測る。16は鉢で、胴部上端がそのまま口縁となるもの。復元口径18.6cm、同器高10.4cmを測る。口縁周辺のみヨコナデ、内面ナデ、外面不明。17～22は器台で、ほとんどが完形に近い。いずれも口縁径より底径が優る。化粧土の塗布が20・21に認められ、20には穿孔と考えられる痕が認められる。器高は14.7～16.4cm、口縁内径は9～10cmの間を測り、底径は12.2～14.8cmを測る。23・24は蓋で、23はほぼ完形。把手部の断面形態は両者で大きく異なっている。23は口径33.2cm、器高13.0cmを測る。

11号土壙（第59図・図版19）

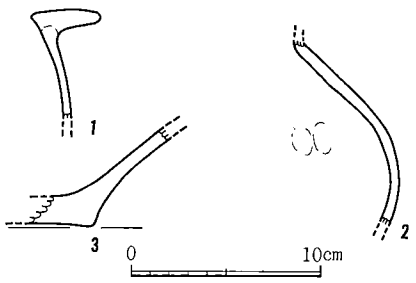
K区に位置する隅丸長方形の土壙。底面で162cm×73cm、深さ17cmを測る。底面は平坦である。北西隅に浮いた状態で土器を検出する。



第59図 11号土壙実測図（1/20）.

出土土器（第60図）

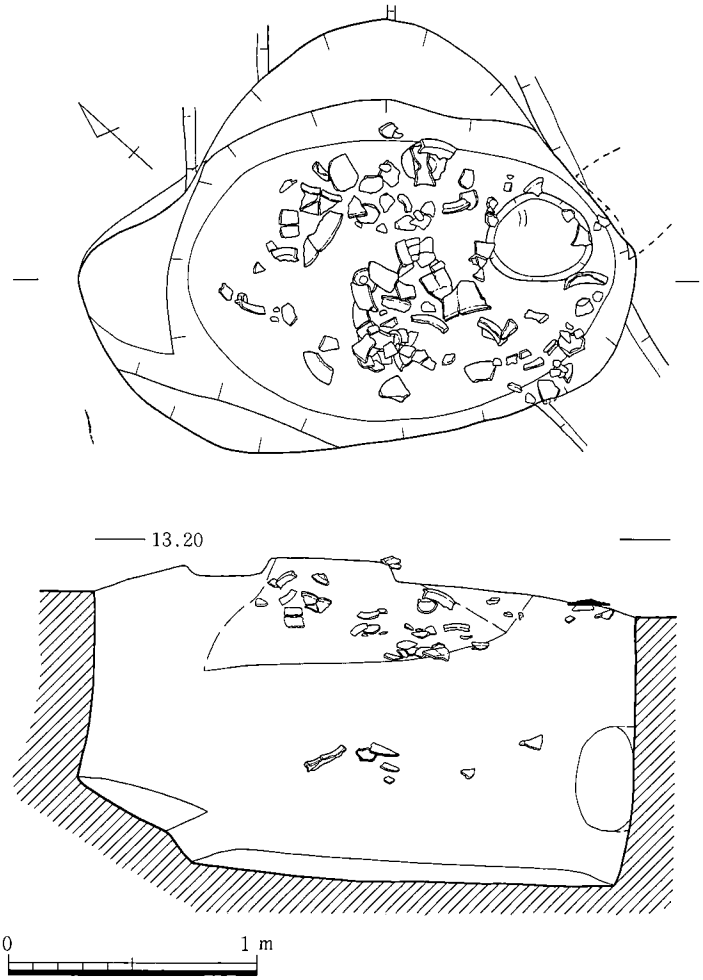
1は逆L字形口縁をもつ甕で、胴部がやや張る。2・3は壷部分片で、2は胴部片。外面ヘラミガキ。3は底部。



第60図　11号土壙出土土器実測図（1/4）

12号土壙（第61図・図版19）

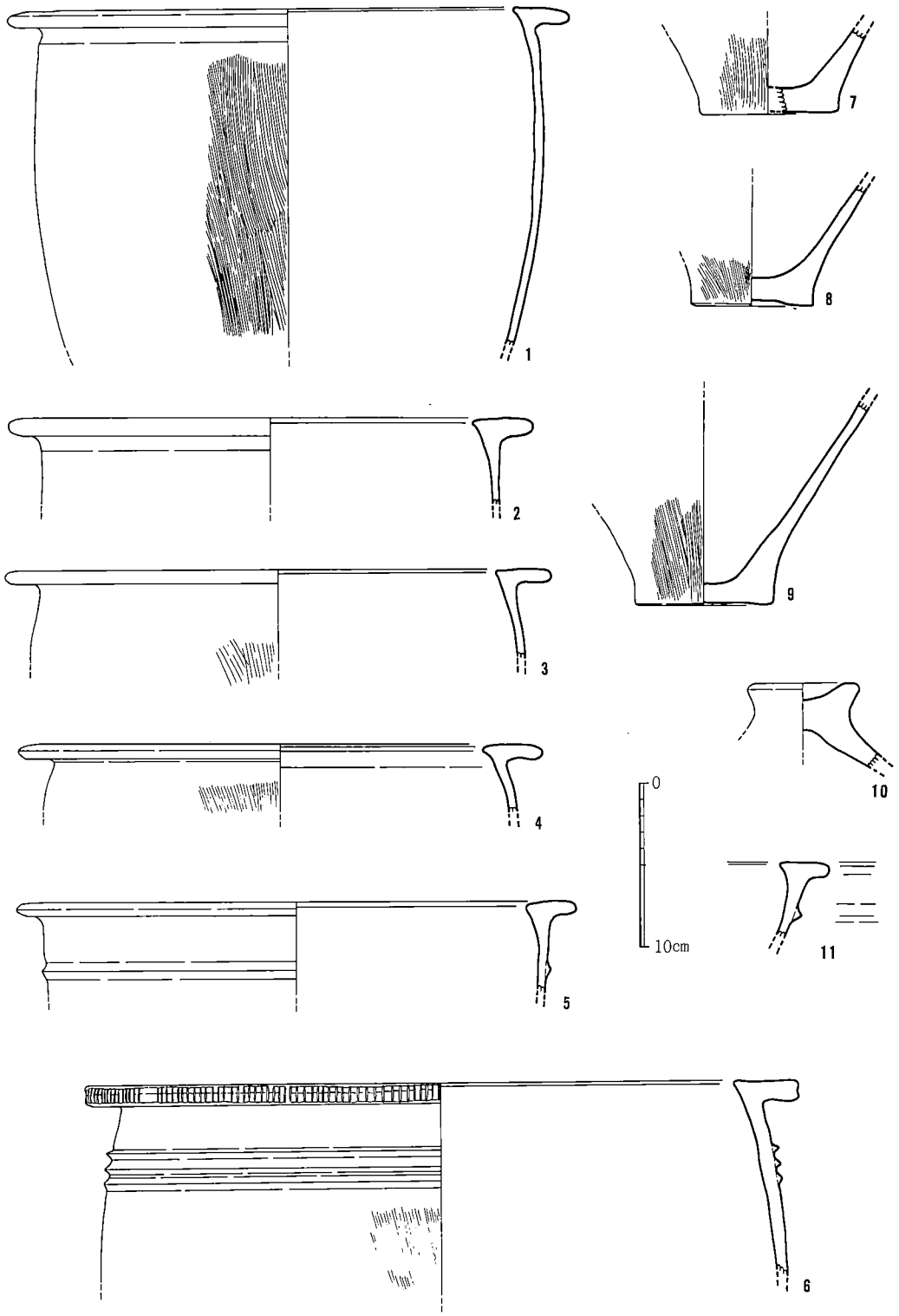
N区に位置する楕円形の土壙。溝状の遺構に切られている。上端223cm×165cmを測り、底面までの深さは128cm。底面は長楕円形を呈し172cm×111cmを測り平坦である。北西側には傾斜した一段のテラスを有す。南東側の壁には径43cmの横穴が穿たれているが、この性格は不明である。土器は土壙の上位と中位に認められ、上位の方がやや密な出土状態をみせる。石庖丁出土。



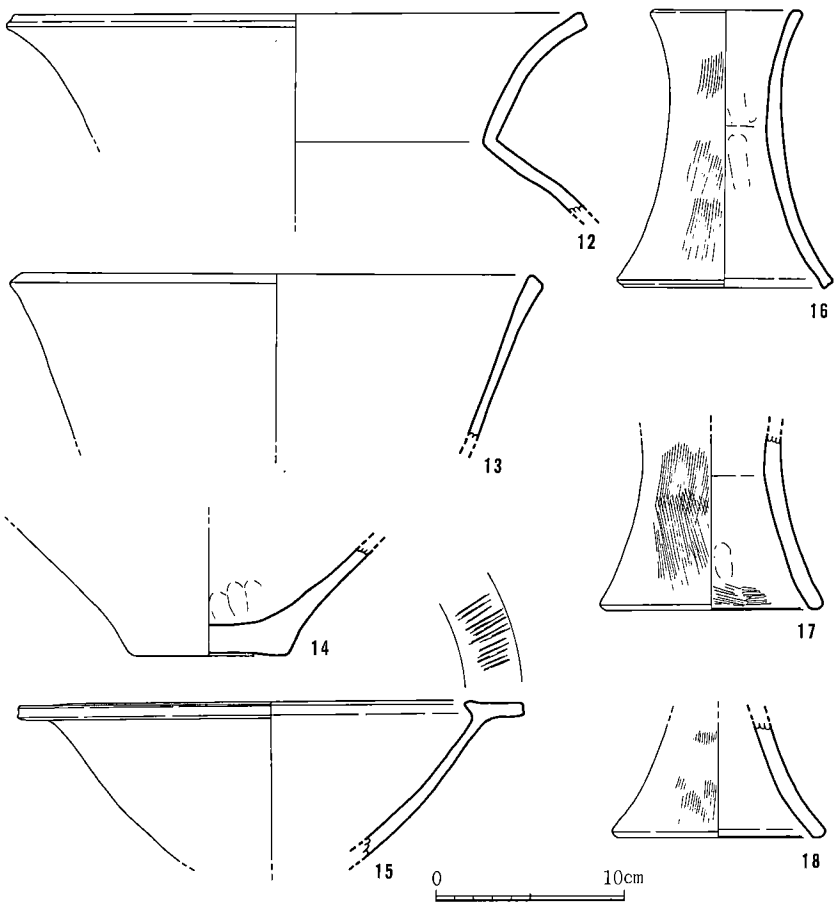
第61図　12号土壙実測図（1/30）

出土土器（第62・63図・図版47）

1～9は甕の部分片。1～5は逆L字状口縁をなし、内側への発達は1・4に認められる。口縁は2が肥厚する以外皆やや長め。口縁下凸帯の貼付は5のみ。胴部の張りは1・3・4に認められるが極端ではない。口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメは共通。6は口縁端部にキザミガ施され、口縁下には3条のM字状の凸帯が貼付



第62図　12号土壙出土土器実測図①（1/4）



第63図　12号壙出土土器実測図②（1/4）

される。胴部はやや張り、部分的に赤褐色の化粧土が残る。復元口径43.4cmを測り、口縁と凸帯周辺はヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメ。7～9は底部片。底径7.4～8.5cmを測り、内底面には平坦面が認められる。底壁は1.2～1.4cmを測る。11は鉢で、口縁は短いが内側への発達が認められる。12～14は壷の部分片。12の口縁は外反して立上がり、13は直線的に立上がる。調整は不明瞭だがナデが主体。14は底径8.1cmを測る。15は口縁上面に暗文が施された高坏坏部で、復元口径26.8cmを測り坏部は深い。口縁周辺のみヨコナデ、他は不明。16～18は器台で、16は脚部径が口縁径を上まわる。

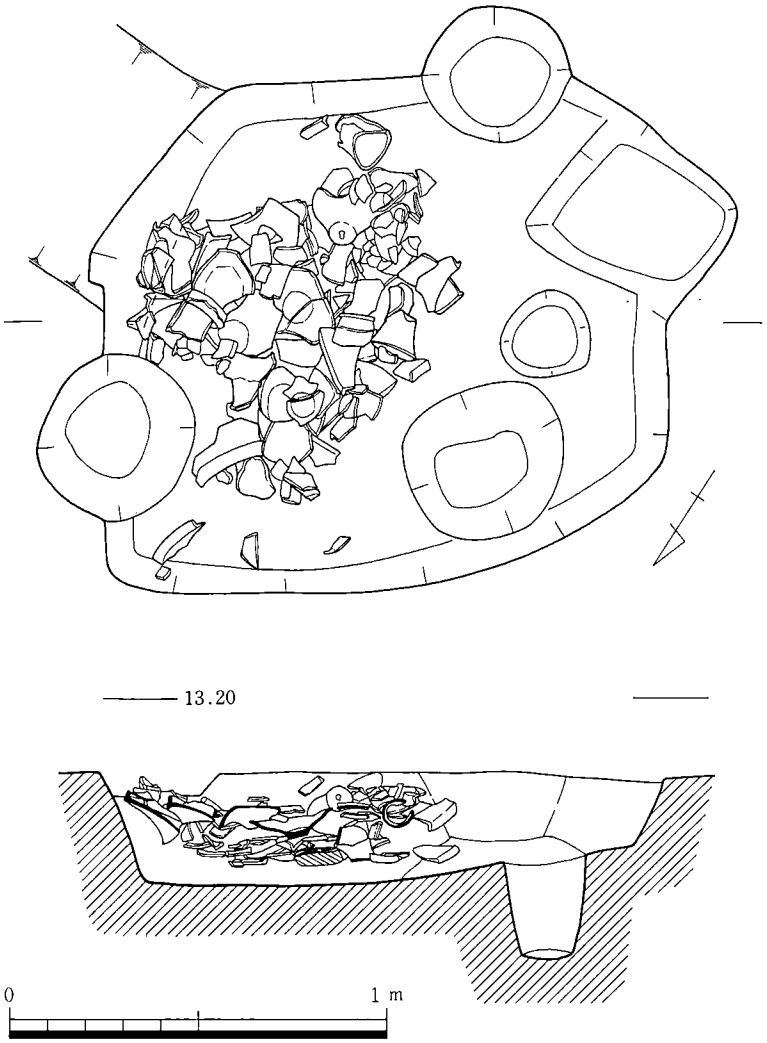
13号土壙（第64図・図版19）

Ⅰ区に位置する不整方形の土壙。外部に付随する3基のピットはすべて後世のものである。土壙底で132cm×115cm、深さ30cmを測る。土壙底には2基のピットが認められるが、この土壙に伴う性格のものかは定かでない。土壙内のほぼ中央には土器が集中して検出される。土壙底

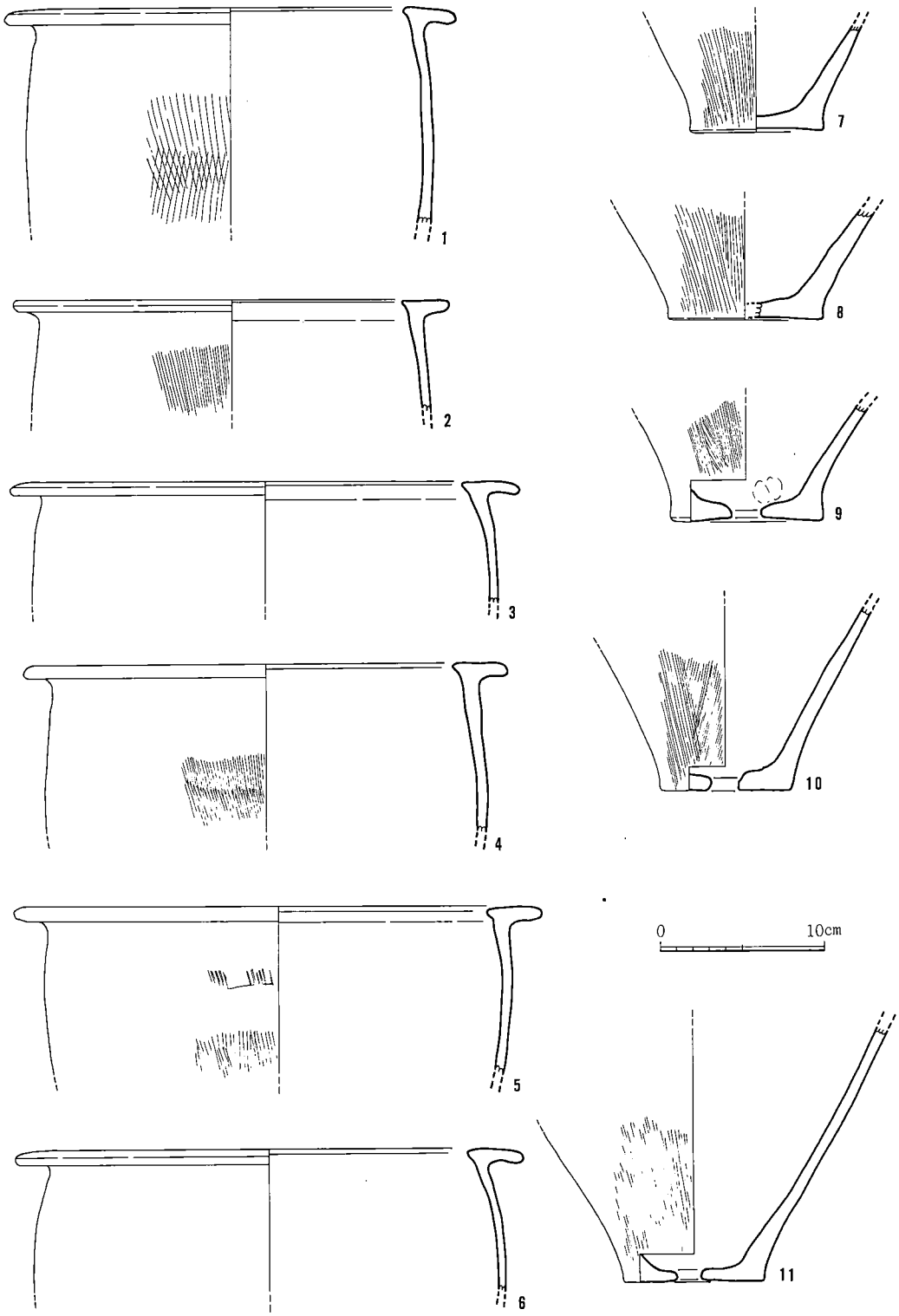
よりやや浮いた状態で、厚さ約20cmの範囲にそれは認められる。

出土土器（第65～68図・図版47）

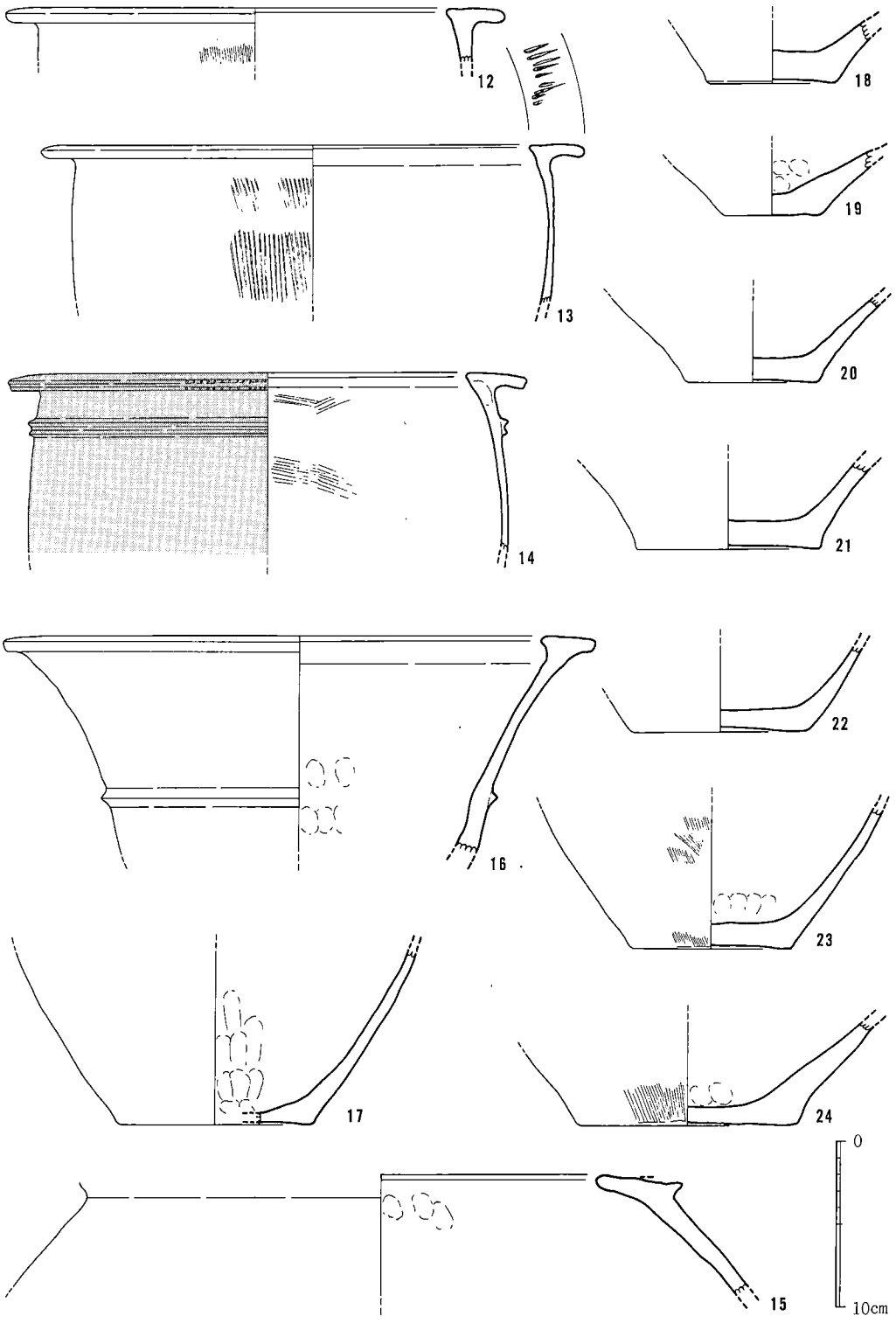
1～15・21・23・24は甕の部分片。1～6・12・13は逆L字状口縁をなし、いずれも内側への発達がわずかに認められる。口縁は、わずかに内外傾するものもあるが、ほぼ水平で極端に傾く例はない。13は口縁上面にヘラ描きによる沈線文がある。胴部はわずかに張る例が多い。口径26.2（2）～33.0（13）cmを測る。口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメは共通。14は丹塗りの精製土器。口縁下には見かけ2条造り1条の凸帯が貼付される。口縁端部にはキザ



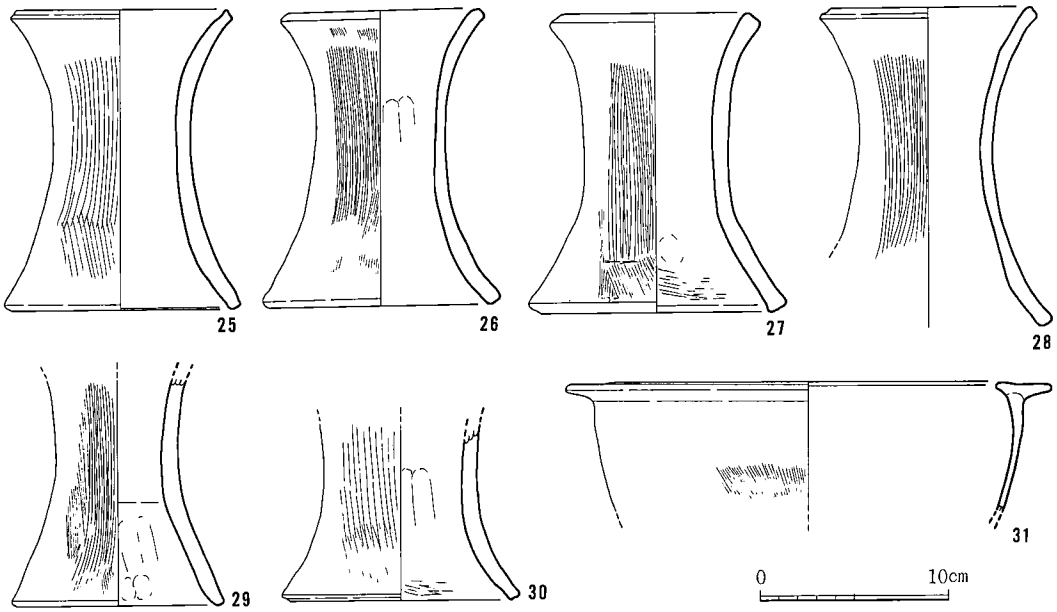
第64図　13号土壙実測図（1/20）



第65図　13号土壙出土土器実測図①（1/4）



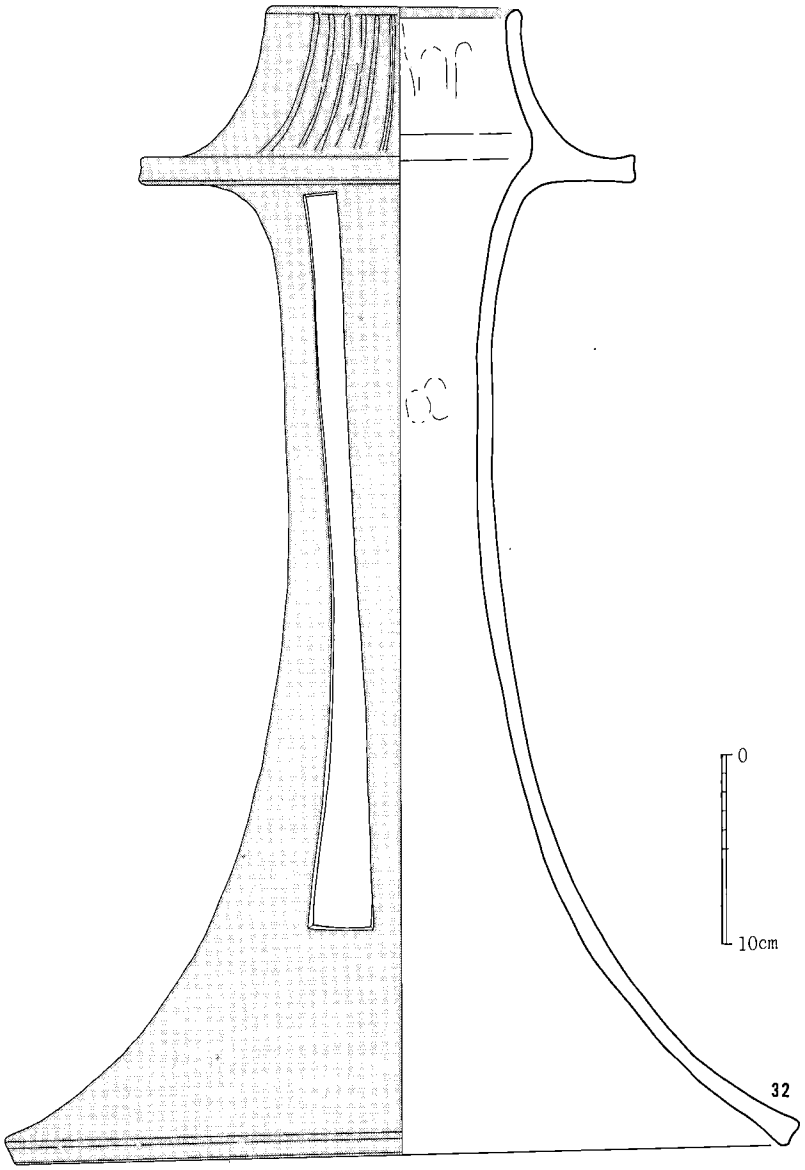
第66図　13号土壙出土土器実測図②（1/4）



第67図　13号土壙出土土器実測図③（1/4）

ミが施され、内面にはハケメの痕跡あり。復元口径31.6cmを測る。7～11は小形もしくは中形甕の底部。底径7.8（10）～9.4（8）cmを測り、底壁は0.7（11）～1.2（10）cm。9・10・11はこしきに転用のもので、穿孔は焼成後。21・24は中形もしくは大形甕の底部で、底径11.0cm、13.2cmを測る。17・22・23も甕底部と考えられ、器高の低いずん胴形の甕の下半部であろう。15は中形甕で、口縁は内側によく発達しT字状をなすと考えられる。胴部はおそらく球形で胴中位に凸帯を貼付するタイプのものであろう。復元口縁内径で32.0cmを測る。

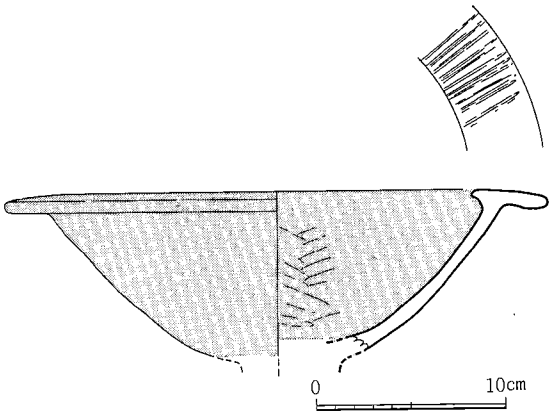
16・18～20は壷の部分片。16は口縁が鋤形をなす広口壷で、頸部中位には三角凸帯を貼付。18～20は底部片で、20の外面のみヘラミガキ。他は内外面ともナデ仕上げ。25～30は器台。器高15.5（26）～16.7（28）cmを測り、脚部径を口径が上まわる例が多い。31はT字状口縁をもつ鉢。32は器高61.1cmを測る筒形器台。受け部の立上がりは長くかつ直立気味で、暗文が施されている。脚部には長さ40cm弱、幅3cm前後の透しが4ケ所認められ、脚部中位からゆるやかに外反して接地面に至る。脚の径は40.9cm。受け部周辺ヨコナデ、他は丁寧なナデ。丹は受け部の内面の一部にまで施されている。



第68図　13号土壙出土土器実測図④（1/4）

14号土壙（第70図）

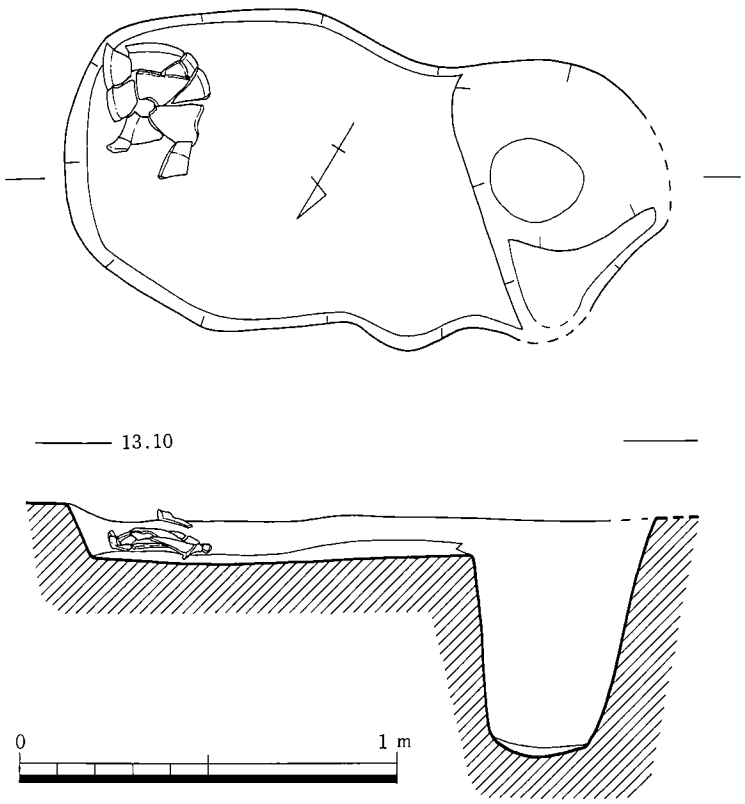
L区に位置する不整形の土壙。一部削平を受け性格な規模は不明だが、長軸で約160cmを測る。西側には底径25cmを測る深さ62cmの土壙が掘り込まれている。他は深さ11cmを測る平坦部が存在し、東隅には丹塗り高坏の坏部がまとまって出土した。



第69図　14号土壙出土土器実測図（1/4）

出土土器（第69図・図版47）

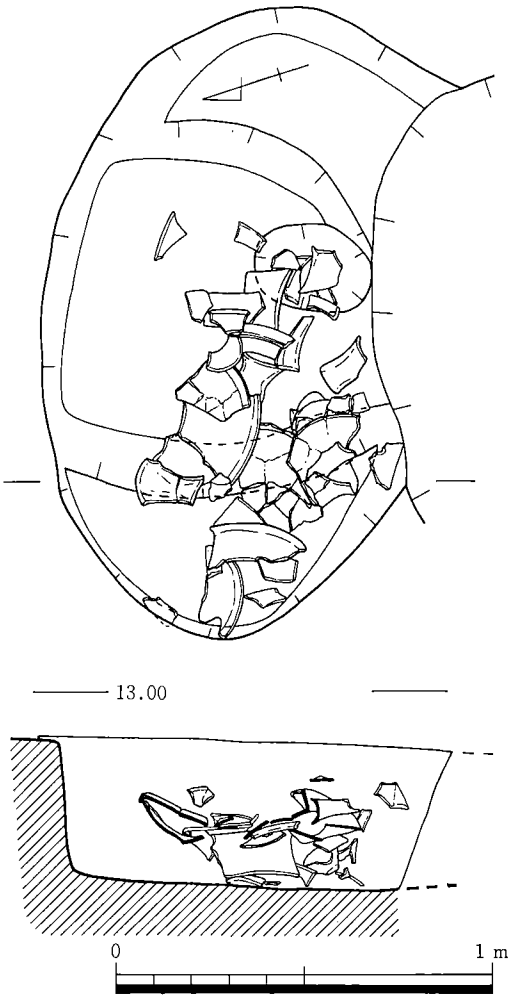
高坏坏部。外傾した鋤形の口縁をもち、坏部はやや深い。丹塗りは全面に及び、内面に丁寧なヘラミガキが施される。外面は観察不可。口径28.6cmを測る。



第70図　14号土壙実測図（1/20）

15号土壙（第71図）

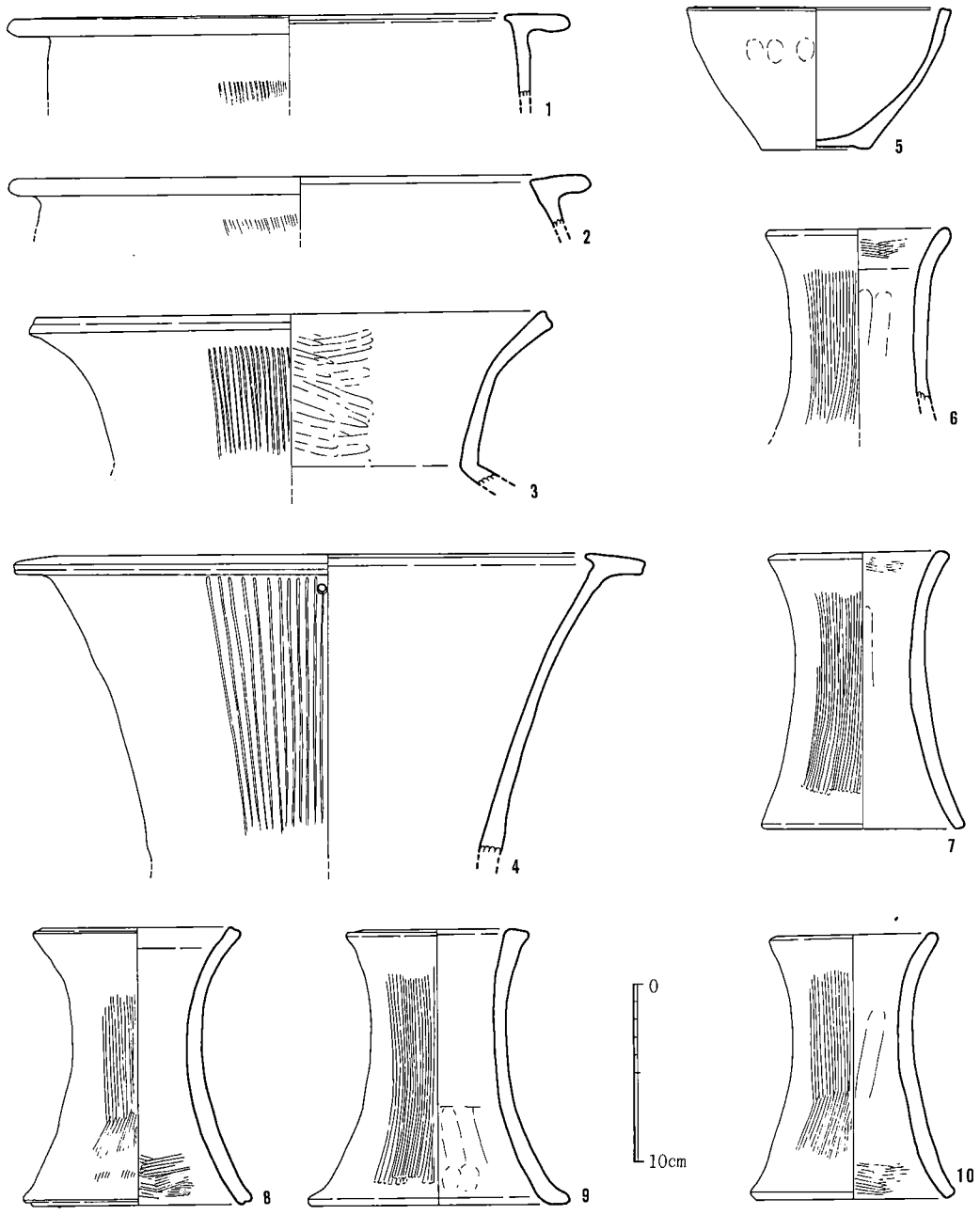
D区に位置する楕円形の土壙。接近する16号土壙を切るが、一部を同時に掘り下げたため、全容は不明である。現存で長軸168cmを測り、両端に2段のテラスを有す。テラスまでは深さ38cmを測り、土壙底はさらに10cmを測る。方形気味の土壙底には円形のピットが存在する。土器はテラスより上のレベルに多く認められる。器種は広口壷（口縁部）、器台、甕口縁片が主なものである。



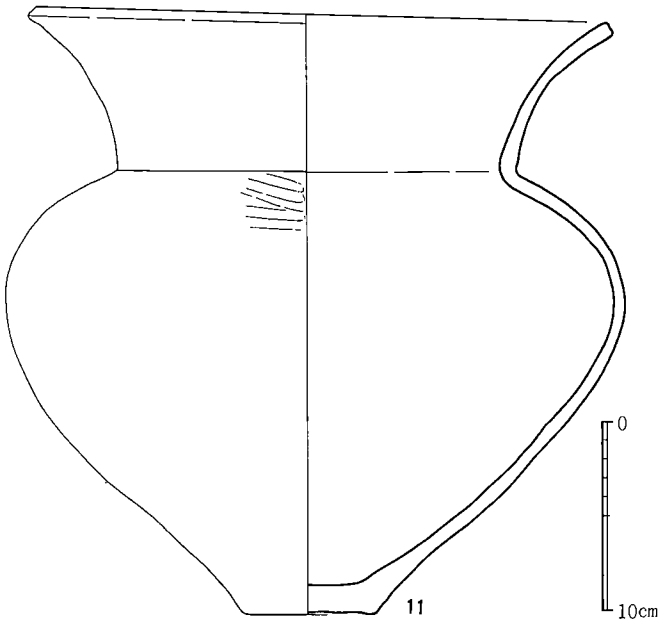
第71図　15号土壙実測図（1/20）

出土土器（第72・73図・図版48）

1・2は甕の口縁部片。1の口縁は肥厚し、内面にはわずかな発達がみられる。胴部はストレート。2はやや内傾した口縁で、胴部は張ると思われる。復元口径はそれぞれ31.6cm、32.8cm。3・4・11は壷。3は外反する口縁に暗文が施され、内面はヘラミガキ。4は鋤形口縁を有す広口壷で、頸部外面6ケ所に暗文が施される。口径35.6cmで、口縁下に小さな穿孔がある。11は口径30.2cm、器高31.6cm、底径7.0cmを測り、外反する口縁とやや肩が張る胴部を有す。器面は荒れているが、外面の一部に横方向のヘラミガキが施されている。5は口径14.9cmを測る小さな鉢で、内外ともナデ。6～10は器台で10のみで完形。器高14.8（10）～15.6（8）cmを測り、底径が口径を上まわる。口径は9.4（10）～13.8（8）cmを測る。8・9の口縁上面にはわずかな凹部が認められる。



第72図　15号土壙出土土器実測図①（1/4）



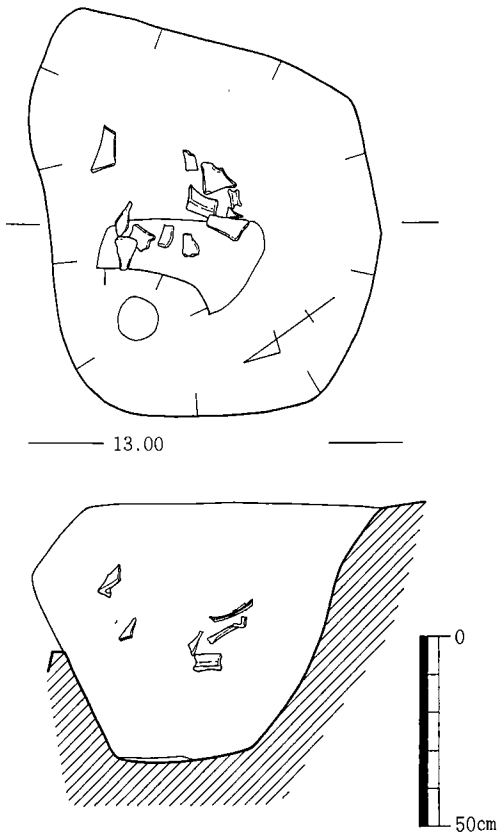
第73図　15号土壙出土土器実測図②（1/4）

16号土壙（第74図・図版19）

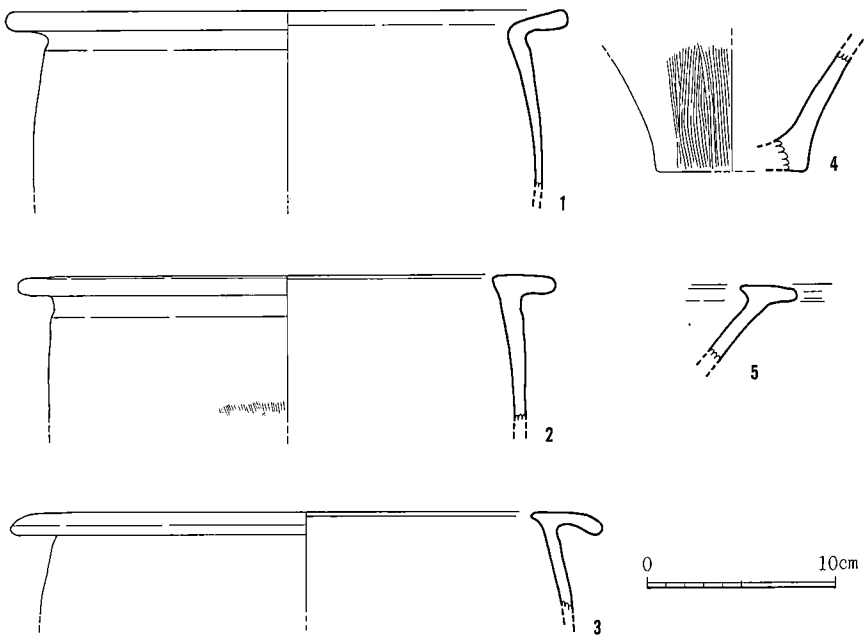
D区に位置する楕円形の土壙。断面は台形状を呈し、一段のテラスとピット状の掘り込みをもつ。径は87～121cmを測り、テラスまでの深さは67cm、ピットはそれよりさらに15cmを測る。15号土壙に切られている。土壙中位より浮いた状態で土器が出土する。

出土土器（第75図）

1～4は甕の部分片。1は内面がゆるやかに外反する口縁を有し、胴部はわずかに張る。2は逆L字形の短い口縁をもち、胴部はストレート。3は外端部が垂れる形状を呈し、内側に発達が認められる。甕口縁部の形態は多様で同時期のものではない。4の甕底部の底径は復元で8.0cmを測りやや大。5は高坏の口縁部片であろうが、器面が荒れ不明。



第74図　16号土壙実測図（1/20）



第75図　16号土壙出土土器実測図（1/4）

17号土壙（第76図・図版20）

H区に位置する長楕円形の土壙。長さ426cm幅219cmを測る。土壙の北側に広い二段のテラスがあり、中央西よりには東西を区切るようにもう一段のテラスが存在する。東側の土壙底は268cm×107cm、深さ73～83cmを測り、ほぼ平坦である。東側は径93～103cmを測る楕円形を呈し、やや起伏に富む。土壙中位から上位にかけて土器が集中して検出される。特に中位ではその密度は著しく。そこより下のレベルでの出土は皆無である。断面図では、この土壙が半分近く埋まった状態の時に土器の廃棄が行われたことをよく看取できる。出土土器の下端が水平にそろうことを考慮すれば、土器廃棄開始時の土壙底面は比較的平坦であったのだろう。

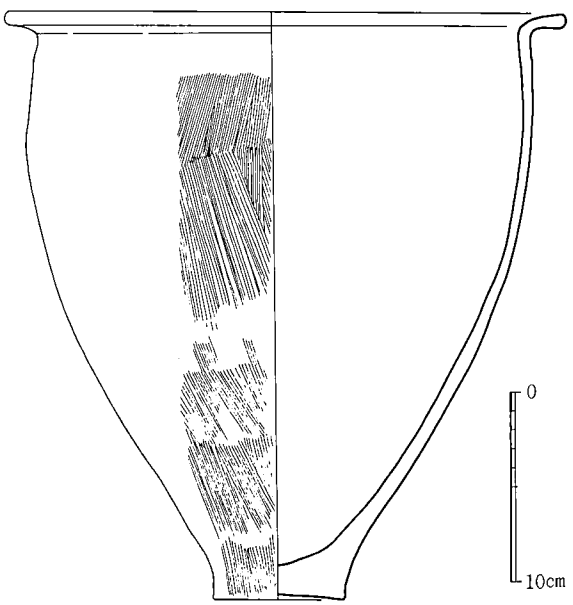
出土土器（第77～84図・図版49・50）

1～24は甕。1は内面がゆるやかに外反して屈曲する口縁をもつ。胴部はわずかに張り、底部内面は丸みを帯びている。口径29.4cm、器高31.1cm、底径6.9cmを測り、ほぼ完形。2は内傾する逆L字形口縁をもち、内側にわずかな発達がみられる。胴部はわずかに張り、外面ハケメ、内面ナデ。復元口径30.6cm。3は短い逆L字形口縁をもち、胴部はわずかに張る。内底面は丸みを帯び、平坦な部分はない。口径32.1cm、器高35.9cm、底径7.5cmを測り、外面に化粧土らしき痕跡がある。4は短い逆L字形口縁を有し、その外端部はやや肥厚する。口縁下には二条の三角凸帯が貼付され特異。復元口径46.0cmを測る。5はやや外傾し、内側がわずかに発達した口縁をもつ。口縁下には三角凸帯が貼付され、胴部の張りはほとんどない。口径41.2cm、器高

第76図　17号土壙実測図（1/30）

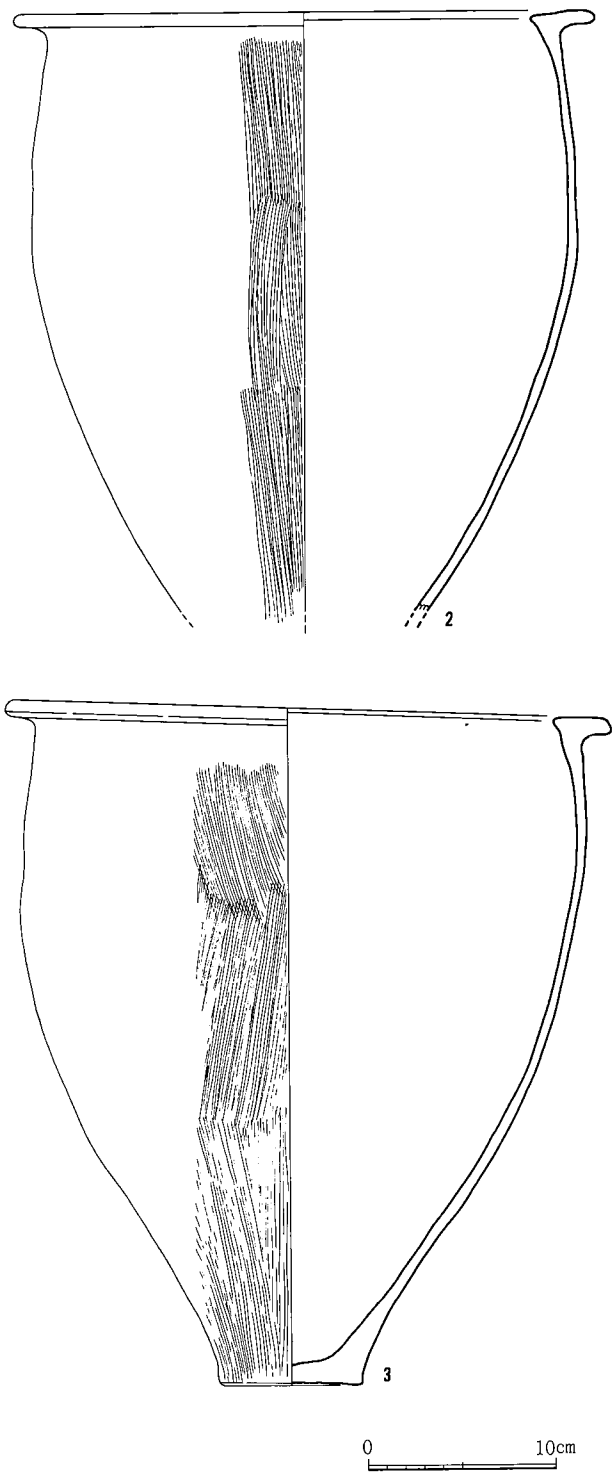
49.0cm、底径9.4cmを測る。口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメは1～5に共通。6～11・17～20は甕口縁部片で6のみ内面がゆるやかに外反し、他は内側にやや発達のみられる逆L字形の口縁をもつ。7～11の口縁上面には凹部があり、口縁外端部は肥厚する。胴部はいずれも直線的で、口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメは共通。口径は復元で30.6（7・8）～33.6（10）cmを測る。17は口縁下に凸帯が貼付されるもので、口縁は中央がやや肥厚し他のものと形態を異にする。復元口径35.2cm。18は内側に発達し外端部が垂れる形態の口縁をもつ。口縁上面には整形による凹部があるため、断面は波うった形状を呈す。胴部はやや張り他とは異なり、復元口径33.4cmを測る。19は内傾し端部がわずかに肥厚する口縁をもつ。20は復元口径26.4cmのやや小ぶりの甕で口縁は短い。以上、口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメは共通。24は胴部が短く、底部が大きいずん胴タイプのもので口縁下には三角凸帯を貼付。外面は丁寧なナデで仕上げられる。口径24.7cm、器高20.3cm、底径12.5cm。25は中形の甕で、内側によく発達したT字形の口縁をもつ。胴部は球形で胴中位に一条の凸帯をめぐらすタイプのものであろう。復元口径41.9cmで、口縁上面から外面にかけて二次焼成痕あり。12～16・21～23は小形の甕（1～11・17～20の類）に伴う底部片。いずれも内底面に狭い平坦部をもつ。底径は7.4（13）～8.0（14）cmを測り、底壁の厚さは0.8（13）～1.6（16）cmを測る。外面ハケメ、内面ナデは共通。36は内側によく発達し、内傾したT字形の口縁をもつ中形の甕。胴部は球形を呈し、中位に三角凸帯を貼付。口縁と凸帯周辺はヨコナデ、内面ナデ、外面上半縦方向のナデ、下半ナデ仕上げ。復元口径24.6cm、器高37.1cm、底径9.0cmを測る。

26～35・37・38は壷の部分片。26～29は鋤形の口縁を有す広口壷で、口縁形態が各々でわずかに異なる。29のみ口縁が外傾する。復元口径は32.0（26）～36.6（28）cm。29の頸部上半には暗文がかすかに残り、中位やや下には造り一条見かけ二条の凸帯が貼付される。口縁周辺ヨコナデ、内外ナデは共通。30は広口壷の肩部周辺。胴部は丸く、外面には横方向のヘラミガキがわずかに残る。内面ナデ。33の底部と同一個体。35も広口壷の同中位周辺。胴中位から上半に

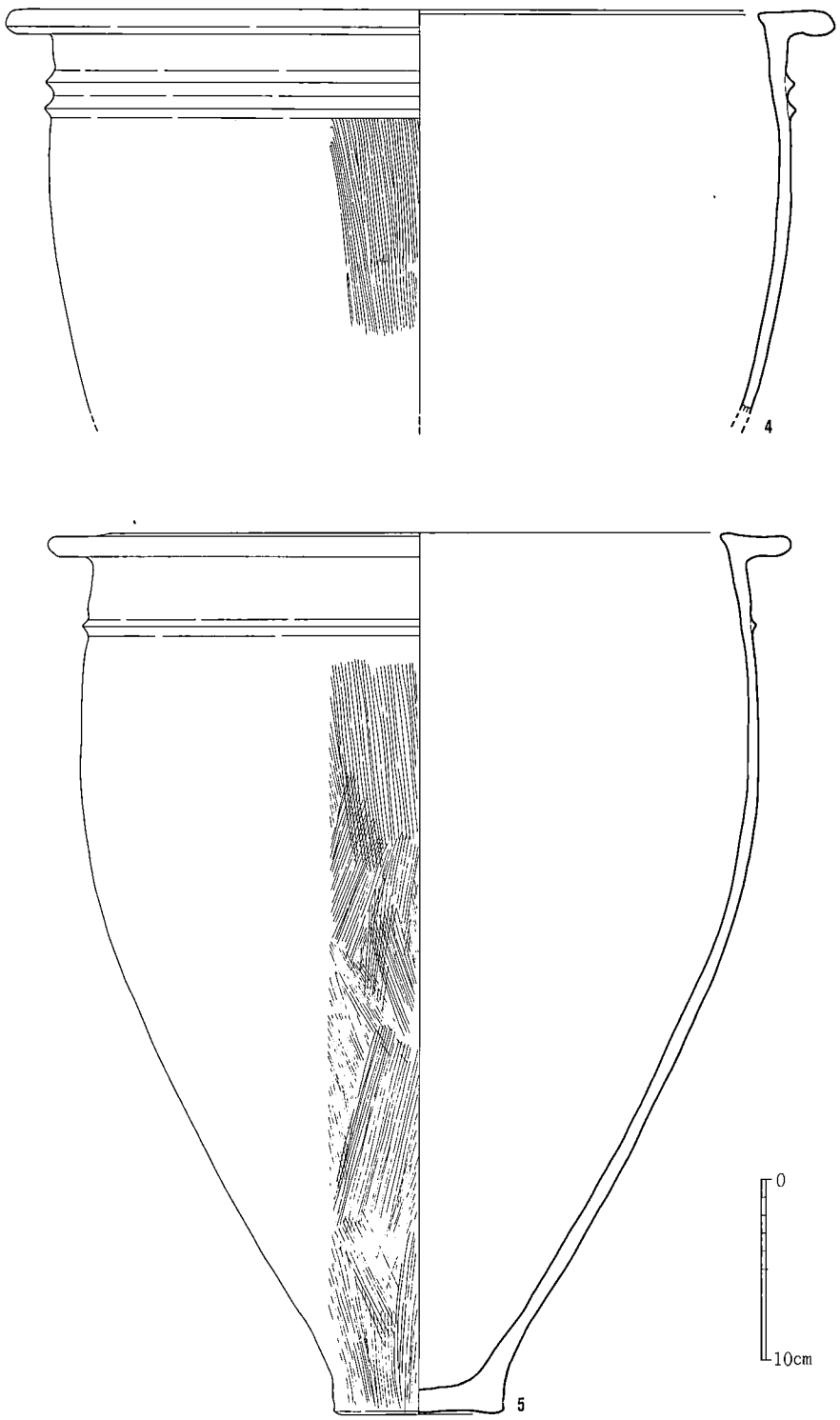


第77図　17号土壙出土土器実測図①（1/4）

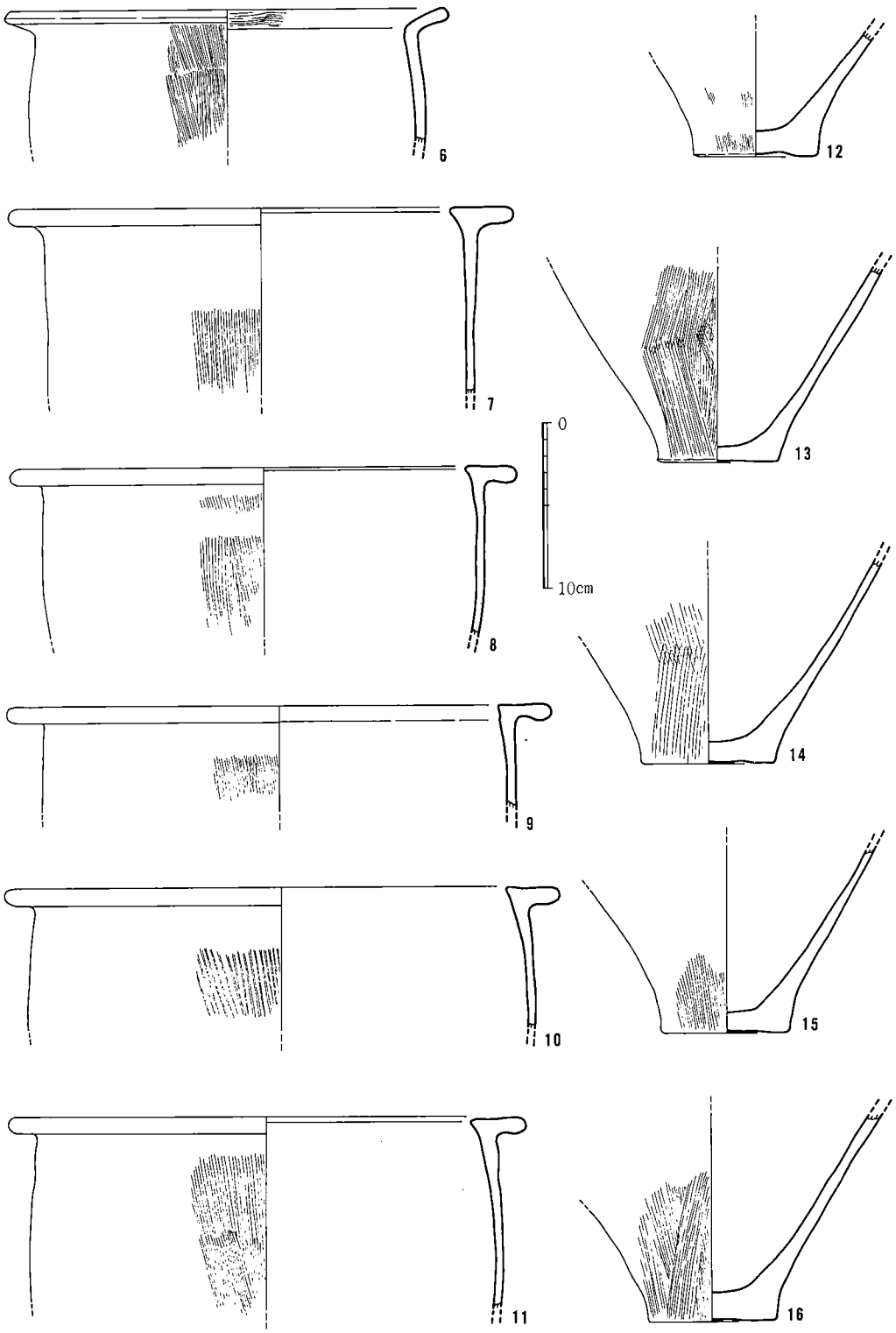
かけて、造り一条見かけ二条のM字凸帯が貼付される。外面ナデで、復元胴部最大径49.0cmを測る。37は胴中位に上記と同様の凸帯を貼付した小形の壷。胴部はややしゃげ、外面は丁寧な横方向のヘラミガキが施される。内面ナデ。38は口縁に二対、計四穴の穿孔がある短頸壷。口縁は短く、胴部はしゃげた球形を呈す。復元口径16.0cm。外面は丁寧なナデ。31～34は壷底部。32のみ丹塗りで、他は外面ヘラミガキ。底径6.2(31)～7.4(33)cmを測り、いずれも3㎜前後の上げ底が認められる。39・41・42は鉢とその部分片。39の口縁は外側にわずかしか突出しない。内外とも丁寧なナデで、口径20.0cm、器高8.9cm、底径8.9cmを測る。41は丹塗りの個体で内外ともヘラミガキ。40は蓋の把手部で、上面には深い凹部が認められる。45は蓋とも高坏脚部とも考えられるもの。43・44は高坏の坏部。43は内側に発達しない、外傾した口縁をもつ。内外ともナデ。44は外傾した、鋤形の口縁をもつ。坏部は43より深く、内外とも丹塗り。復元口径27.0cm。46～53は器台で、全容が知れるものはいずれも底径が口径を上まわる。口径は9.4(46



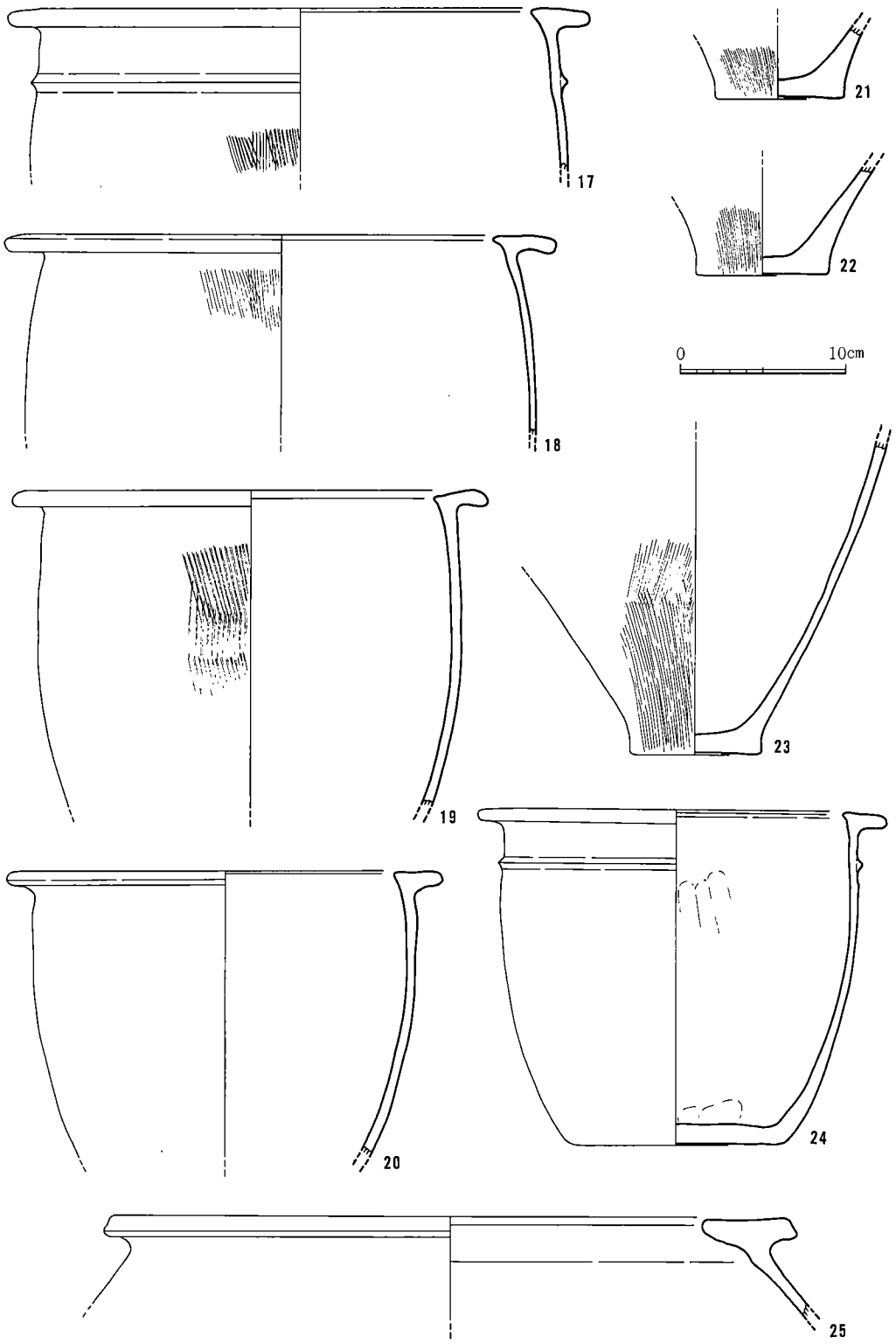
第78図 17号土壙出土土器実測図②(1/4)



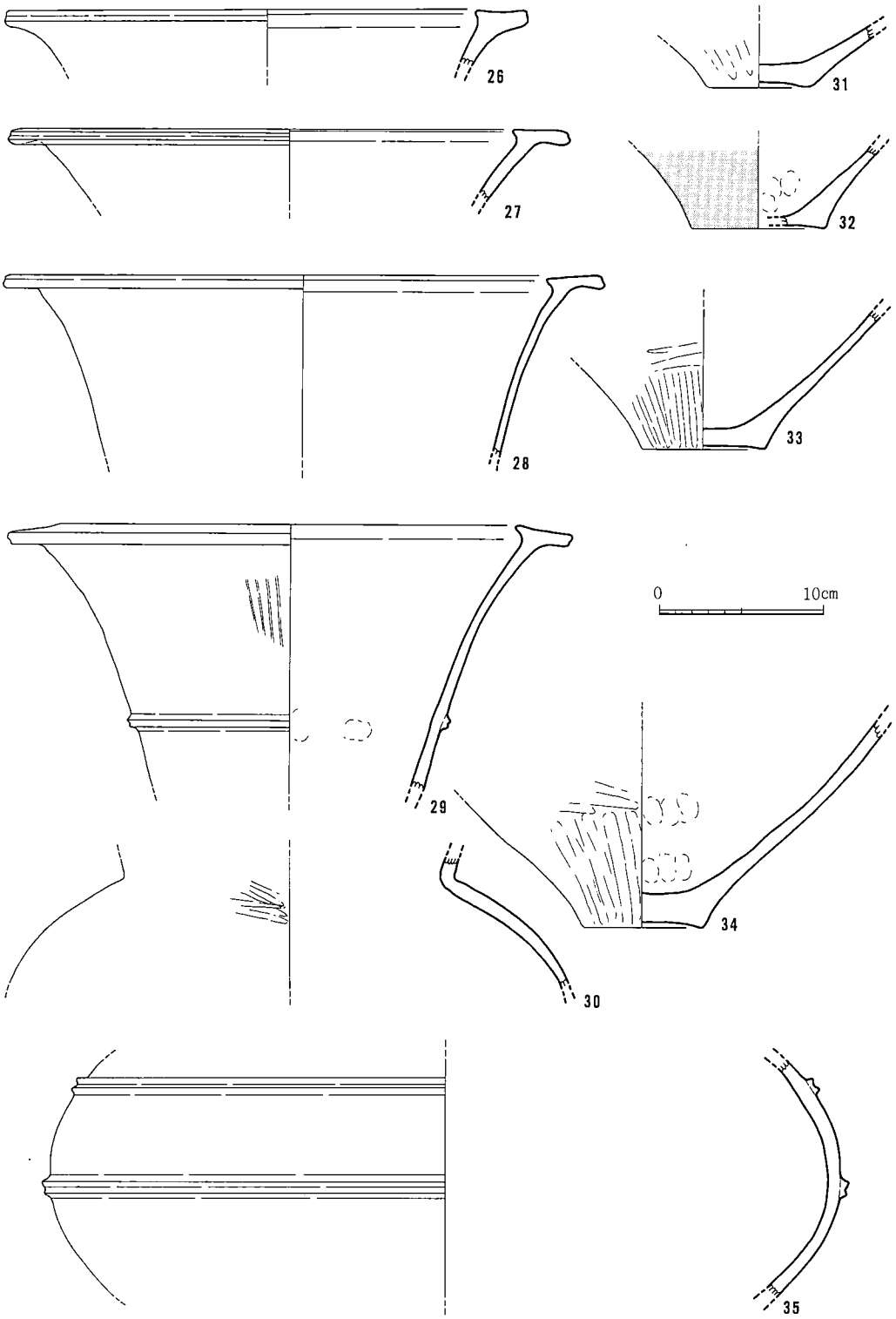
第79図　17号土壙出土土器実測図③（1/4）



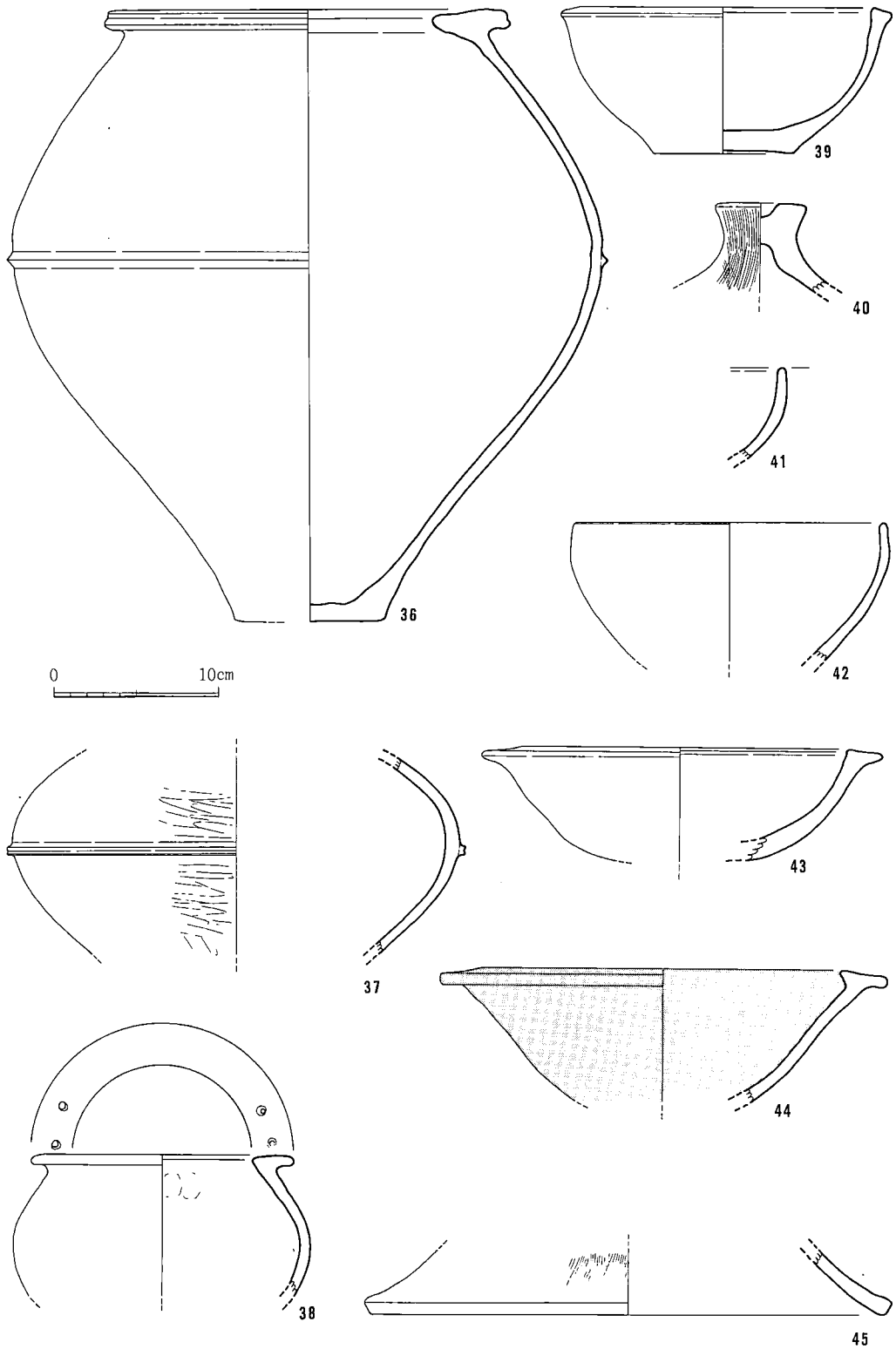
第80図　17号土壙出土土器実測図④（1/4）



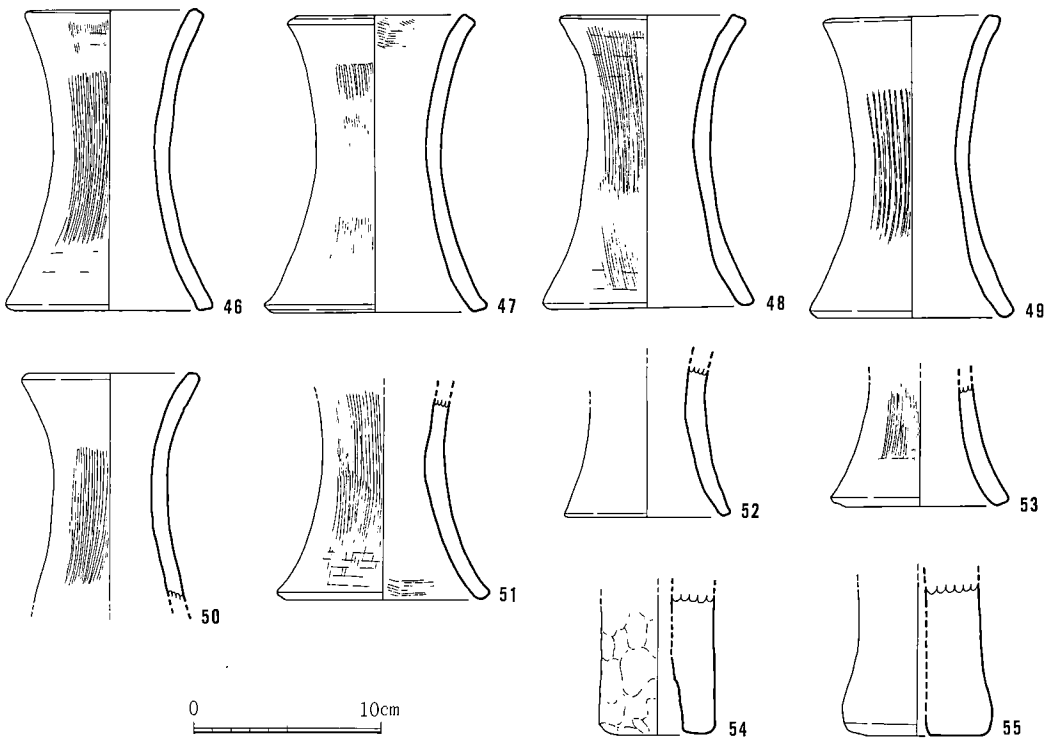
第81図　17号土壙出土土器実測図⑤（1/4）



第82図　17号土壙出土土器実測図⑥（1/4）



第83図　17号土壙出土土器実測図⑦（1/4）



第84図　17号土壙出土土器実測図⑧（1/4）

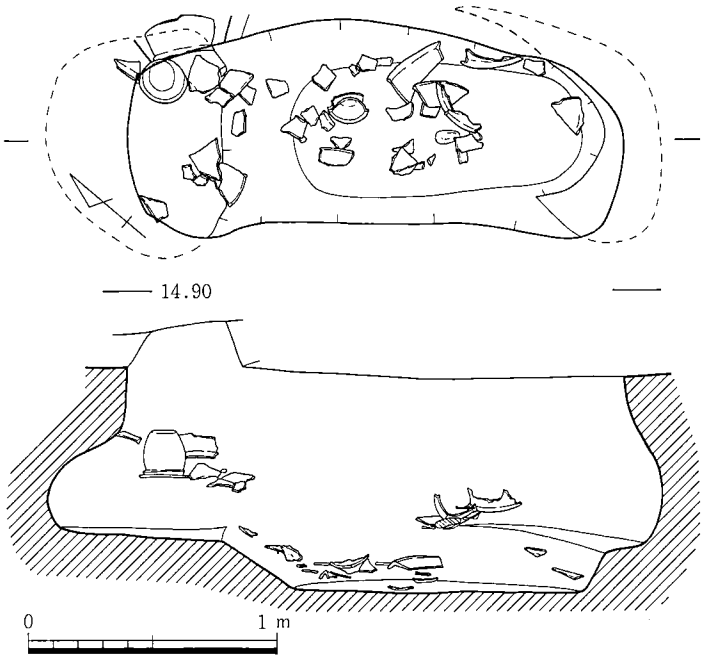
・49・50）～9.9（47）cmを測り、底径は8.8（52）～11.8（47）cmを測る。外面はハケメ、口縁周辺内面と脚部周辺内面はヨコハケメで、のちにヨコナデが施されたものもある。46・48・49が完形。54・55は土製の支脚で、器壁が厚い円筒状をなす。54は指頭によるナデツケ痕が残る。両者とも残存状況は良好。

18号土壙（第85図・図版20）

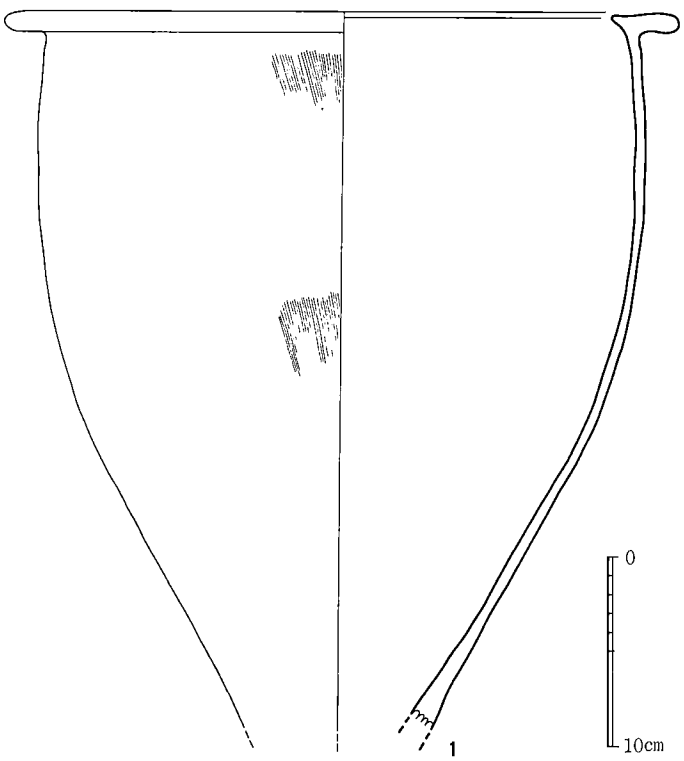
K区に位置する不整長方形の土壙。199cm×82cmを測り、深さは現状で108cmを測る。土壙底は116cm×54cmを測る長楕円形を呈し、平坦である。土壙底の両端にはそれぞれ一段のテラスがある。いずれも壁を横に堀り込んでおり、特に北西側ではそれが著しく、広い空間を造っている。土器は底面から土壙中位のレベルにかけて散在して認められ、北西側にある甕は倒立した状態で出土している。すり石が出土。

出土土器（第86・87図・図版51）

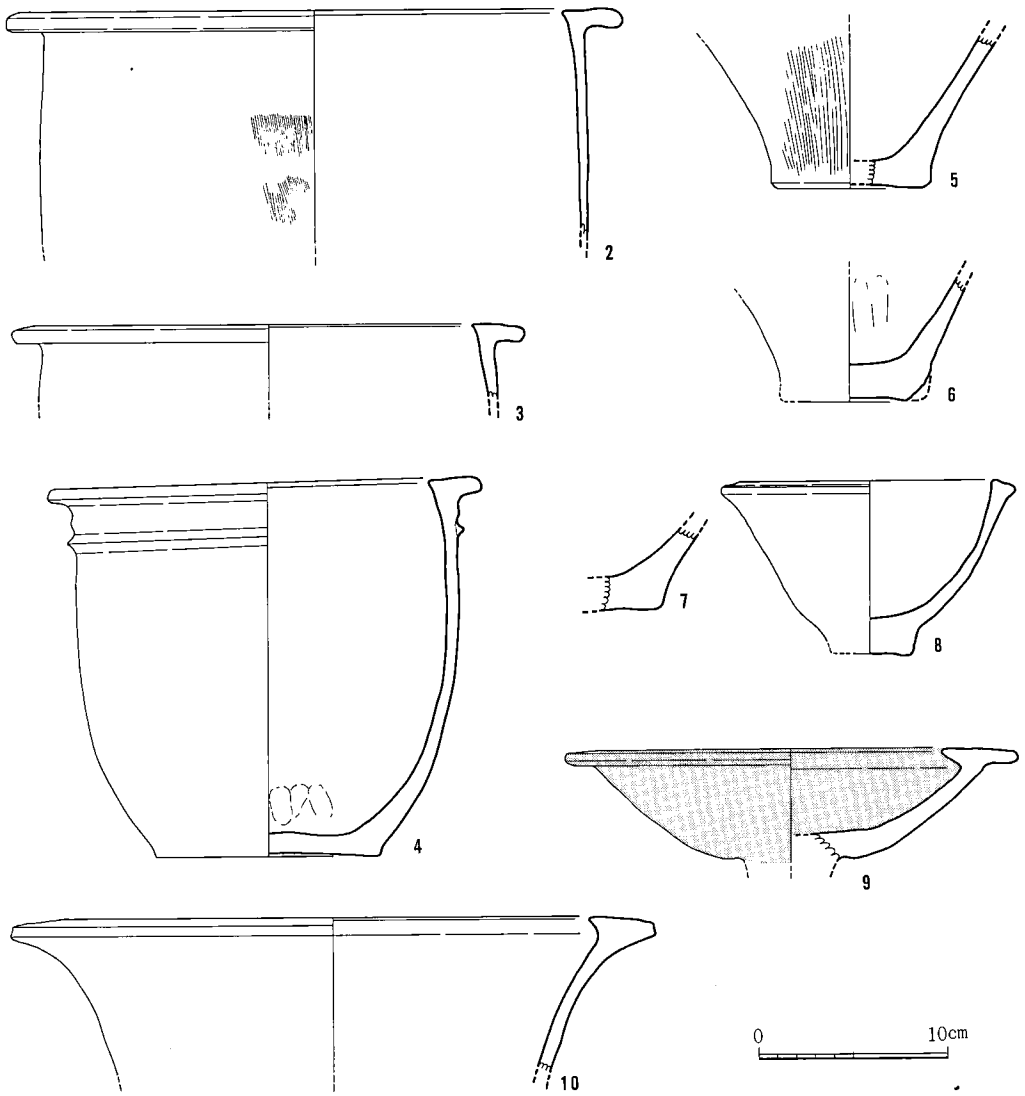
1～6は甕とその部分片。1は内側に発達した逆L字形の口縁をもち、口縁端部が肥厚する。口縁上面には整形の際生じる凹部が認められる。胴部は直線的で、内面ナデ、外面ハケメ。口径35.6cmを測る。2・3も逆L字形口縁の甕。復元口径は32.7cm、27.2cm。4は胴部が短く、



第85図　18号土壙実測図（1/30）



第86図　18号土壙出土土器実測図①（1/4）



第87図　18号土壙出土土器実測図②（1/4）

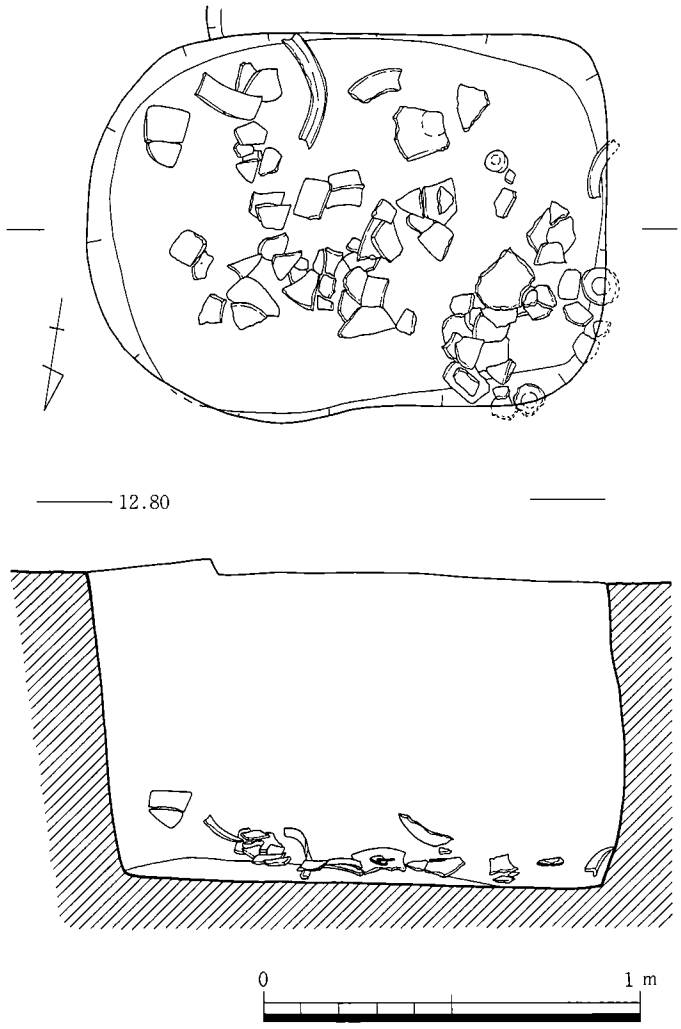
底部が大きいずん胴タイプのもの。口縁は短く、その下には三角凸帯が貼付される。口縁周辺ヨコナデ、内外とも丁寧なナデ。口径23.0cm、器高19.6cm、底径11.8cmを測り完形。5～6は1～3のような小形甕に伴う底部。内底面には平坦な部分が認められ、5の底径は8.5cmとやや大。6は底部のコーナーを欠く。7は壷底部か。内外ともナデ。8は外側にほとんど発達しない口縁を持つ鉢。形はゆがむが、ほぼ完形で口径15.6cm、器高9.2cmを測る。底部は厚い。9は高坏坏部片で、鋤形の口縁をもつ。全体に丹塗りが認められ、復元口径24.0cm。10は広口壷で、やや上方へ突出する鋤形の口縁をもつ。復元口径34.0cm。

19号土壙（第88図・図版20）

B区に位置する隅丸長方形の土壙。底面で129cm×94cm、深さは82cmを測る。壁は四面ともほぼ直に立ち上がる。土器は底面付近に多く認められ、それより上のレベルでは検出されていない。

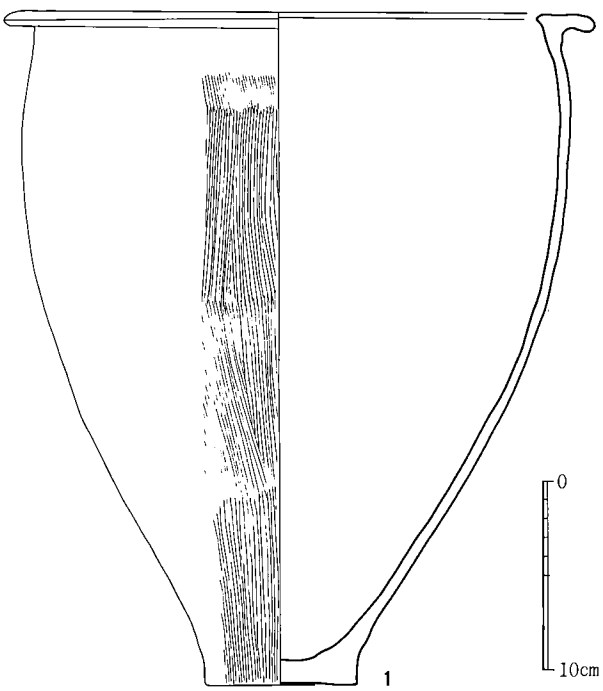
出土土器（第89・91図・図版51・52）

1～4は甕とその部分片。1は胴部を部分的に欠くがほぼ完形。波うつ逆L字形の口縁をもち、口縁外端は垂れている。口縁下はやや肥厚し、胴部にはわずかな張りが認められる。底部内底面には平坦な部分がある。口縁周辺ヨコナデ、内面ナデ、外面ハケメ。口径31.3cm、器高



第88図　19号土壙実測図（1/20）

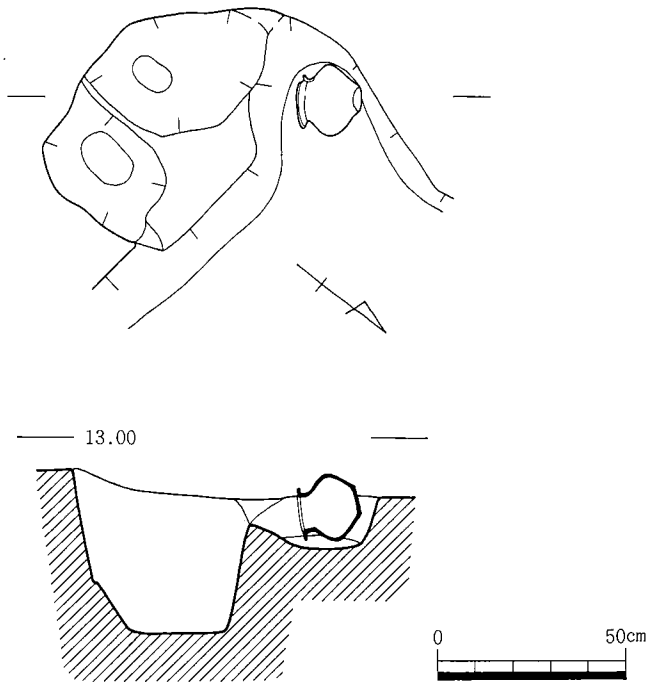
35.4cm、底径8.0cm。2・3も逆L字形の口縁をもち、3の口縁下には三角凸帯を貼付。2の胴部にわずかな張り。3は復元口径35.4cmを測る。4は1～3のような小形の甕の底部。底部はやや小さくすぼまるが、底径は7.3cmを測る。5～9は壷の部分片。5は上方に突出する鋤形の口縁をもつ広口壷で、口縁は短い。復元口径33.0cm。6・7はゆるやかに外反する口縁・頸部を有し、7の外面には暗文が施される。いずれも胴上半は半球状を呈する。6の外面はヘラミガキ、内面ナデ。7は胴部外面と口縁内面がヘラミガキ。復元口径は30.8cm、26.8cm。8は7の底部と思われるが接合部が無い。底径7.8cmで外面ヘラミガキ。9も壷底部で外面はナデ。10は蓋の把手で上面には凹部がある。11～13は器台。口径は8.2(12)～9.6(11)cmを測り、いずれも底径が上まわる。11・13はほぼ完形。



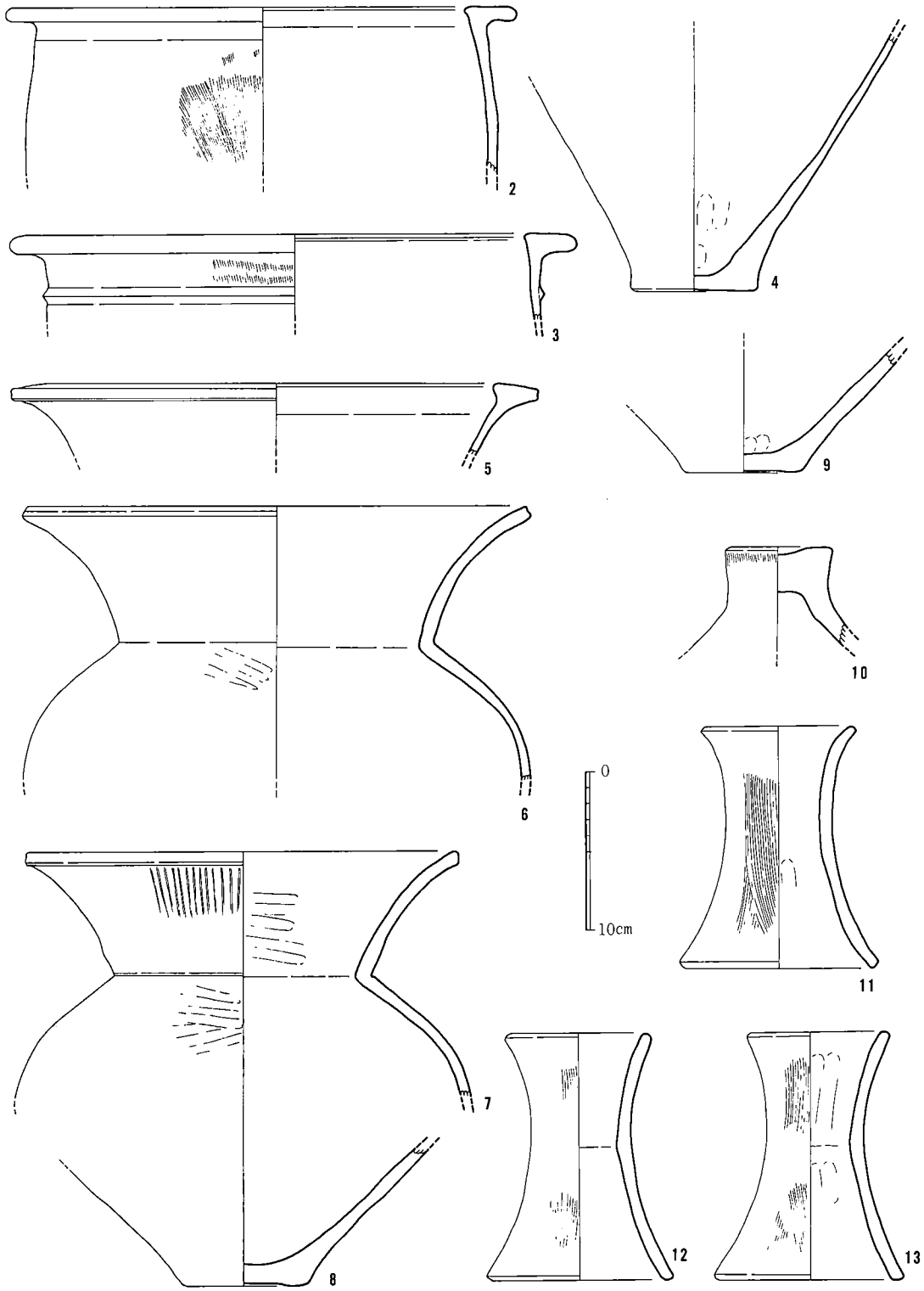
第89図 19号土壙出土土器実測図①（1/4）

21号土壙（第90図）

Ｊ3の西側に附随する遺構。Ｊ3堀り下げ時に同時に下げたため、遺構の全容は不明である。Ｊ

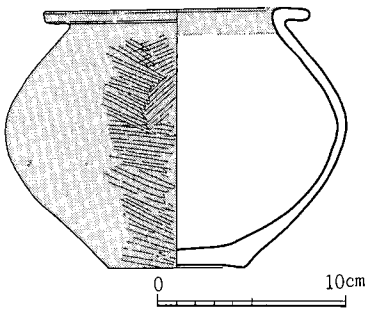


第90図 21号土壙実測図（1/20）



第91図　19号土壙出土土器実測図②（1/4）

3に先出し、2基のピットを有す土壙状の遺構と考えられる。ほぼ完形の丹塗り短頸壷が出土した。(第92図・図版52)



第92図　21号土壙出土土器実測図（1/4）

(3)　弥生時代の甕棺墓

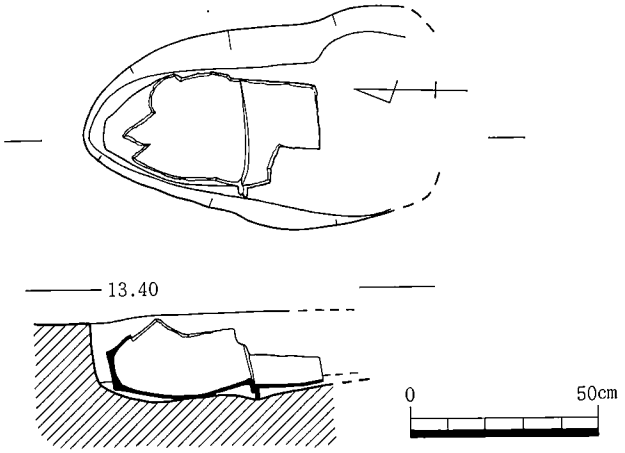
1号甕棺墓（第93図）

L区に位置する小形甕棺墓。南側を撹乱により削平され規模は不明。甕自体も削平を受けるが、接口の合口甕棺である。ほぼ平坦な墓壙にやや南側を上げて甕が埋置されている。南が上甕、北が下甕である。主軸をほぼ南北にとる。

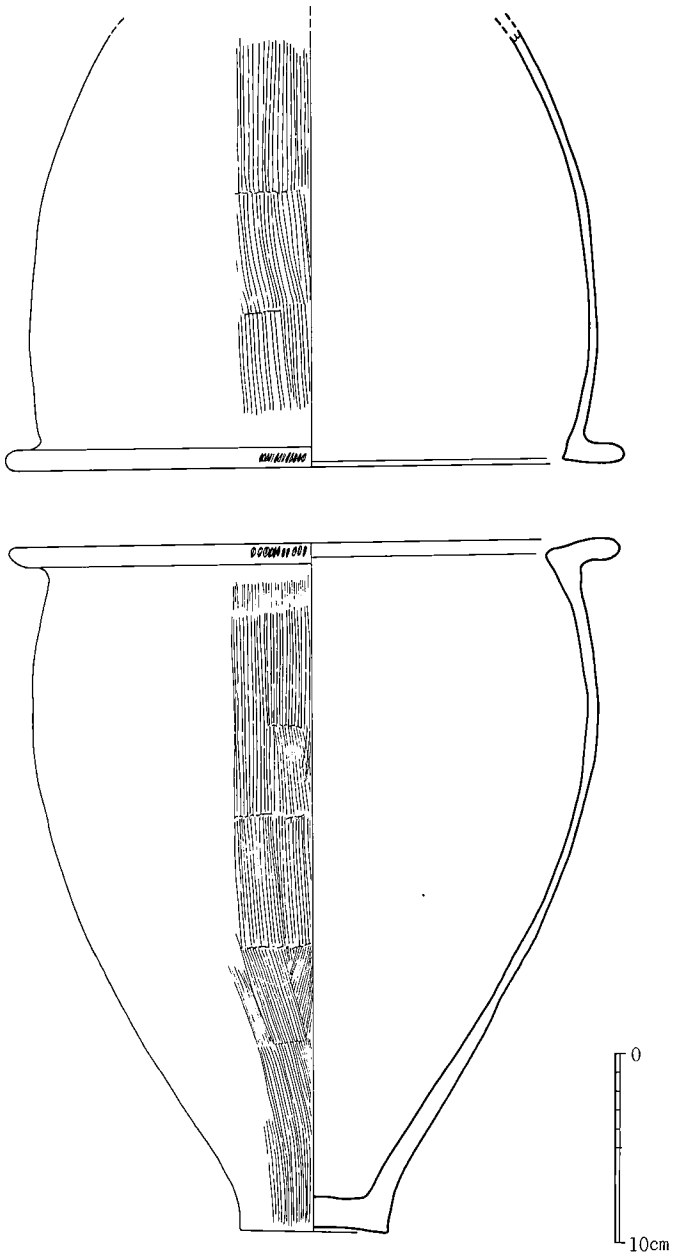
1号甕棺（第94図・図版52）

上・下とも逆L字形の口縁をもつ小形の甕。上甕の口縁はわずかに内傾し、口縁はやや短く、外端部には一ケ所のみ10数条のキザミが施されている。胴部はわずかに張り、外面ハケメ、内面ナデ。口縁外径32.7cm、同内径25.9cmを測り、外面に二次焼成痕は認められない。

下甕は内傾した口縁をもち、外端部には同じく約11条のキザミが一ケ所のみ施されている。胴部はわずかに張り、外面ハケメ、内面ナデ。底部はやや大きめで、内底面には中央が高い平坦面がある。口縁外径32.2cm、同内径24.6cm、器高37.0cm、底径7.9cmを測り、外面には二次焼成の痕は全く認められない。埋葬専用に使用されたものであろう。



第93図　1号甕棺墓実測図（1/20）



第94図　1号甕棺実測図（1/4）

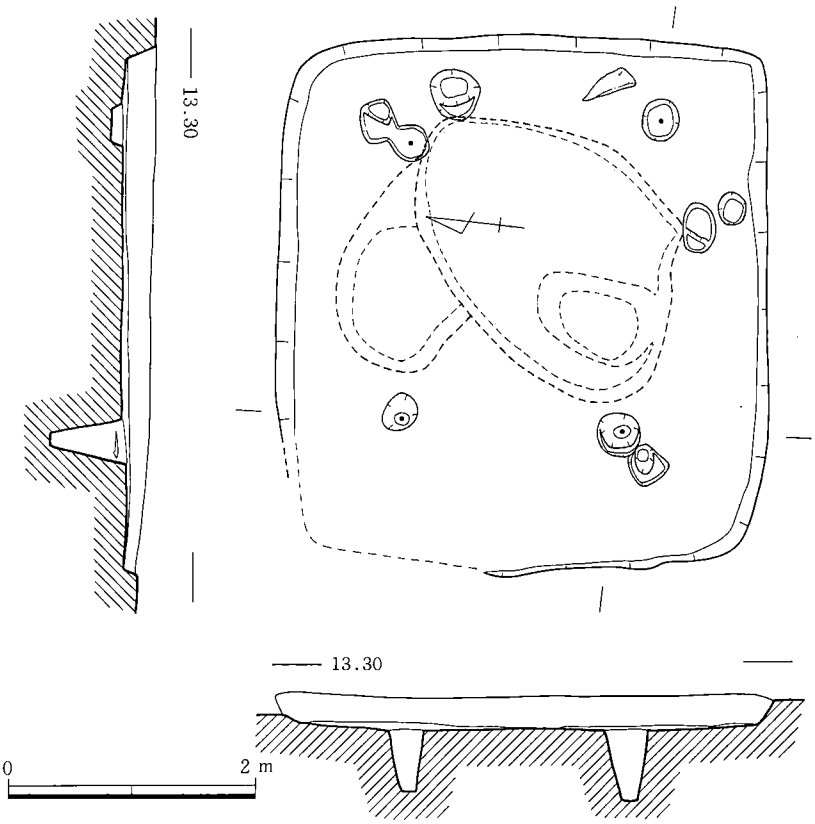
(4) 古墳時代・歴史時代の住居跡

3号住居跡（第95図）

G区に位置する方形の住居跡で一部を削平されている。床面で368cm×417cmを測り、深さは25cm。柱穴は方形の配置と考えられるが、南東の柱穴と考えられるピットはやや浅い。他は深さ49～57cmを測る。住居の床面下には不整形の土壙（点線部）があり、6世紀中頃～後半の須恵器が出土する。よって古墳時代後期の住居跡と考えられるが、カマドやその痕跡は屋内には検出されなかった。

出土土器

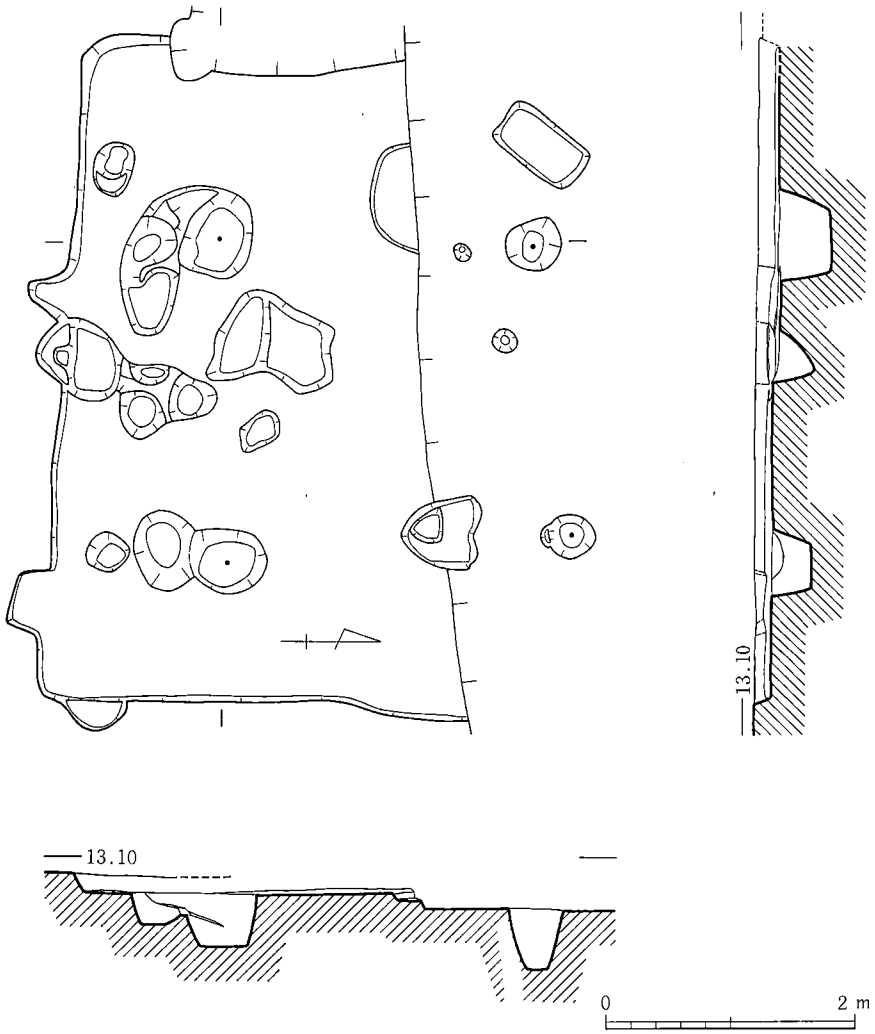
混り込みと考えられる弥生土器片が1点のみである。図示は行っていない。



第95図　3号住居跡実測図（1/60）

5号住居跡（第96図）

H・K区に位置する方形プランと考えられる住居跡で、D9に切られ試掘トレンチにより壁・床面の一部を失なっている。現存の床面で522cmを測り、深さは15cm前後を測る。柱穴は方形配置をとり、柱間は236～275cmを測る。深さは30～48cmを測る。北側の2基の柱穴の中央やや北よりにはわずかに焼土の痕跡が認められ、おそらくカマドが存在したと考えられる。カマトと対応するように南壁中央付近には深さ25cmを測るピットが認められる。

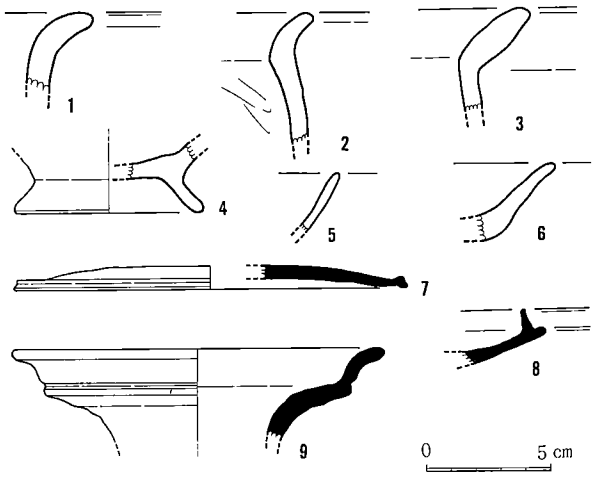


第96図　5号住居跡実測図（1/60）

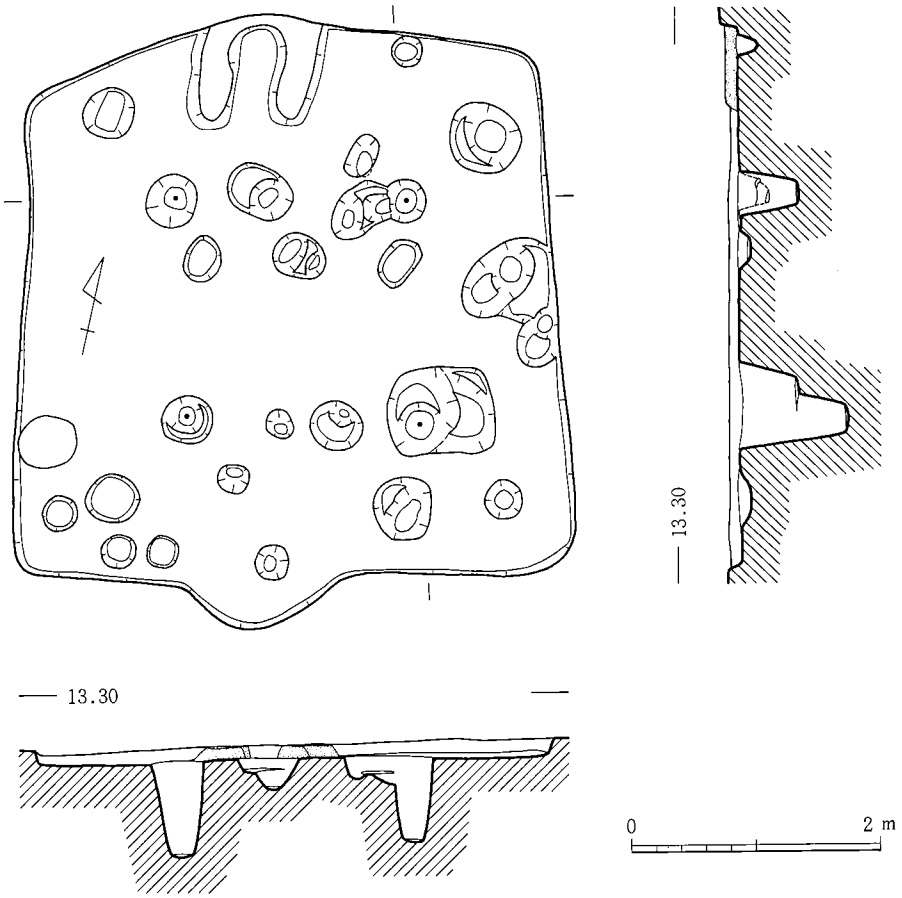
出土土器（第97図）

1～6は土師器。1～3は甕で、口縁はゆるやかに外反する。器壁は厚く、1・2の内面にはヘラケズリが施されている。4は高台付きの鉢と考えられる。高台は大きく横に張り出す。5は椀か坏。6は坏か皿であろう。

7～9は須恵器。7は坏蓋で、口径15.8cmを測る。高さは低く、かえりはやや外方向を向く。あるいは実測角度を誤ったためか。内

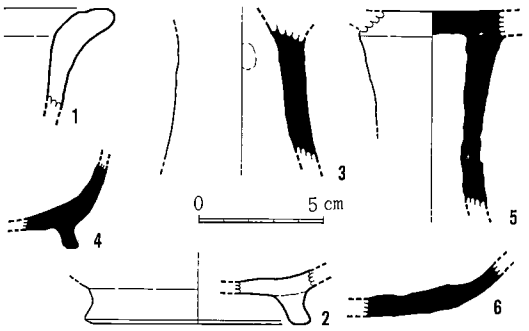


第97図　5号住居出土土器実測図（1/3）



第98図　7号住居跡実測図（1/60）

面中央付近のみ不定方向のナデ、他は回転ヨコナデ。8は坏身で、深さは浅く、立上がり・受部とも短い。9は甕の口縁周辺で、二重口縁様の形態をなす。口縁の立上がり部下半に一条の沈線が施される。復元口径15.0cm。



第99図　7号住居出土土器実測図（1/3）

7号住居跡（第98図・図版21）

H・I区に位置する正方形気味の住居跡で、J20を切っている。床面で431cm×409cmを測り、深さは15cmを測る。南北壁がやや張り気味で東西壁は直線の形態を呈す。南壁の張り出しは出入口と関係するのであろうか。北壁の中央には、地山と同様の土をもってカマドが築かれており、その袖のみ残存する。袖の間には焼土が厚く堆積する。支脚は存在しない。柱穴は方形に配置され、柱間は175～186cmを測る。また、深さは47～78cmとやや深浅の差がある。

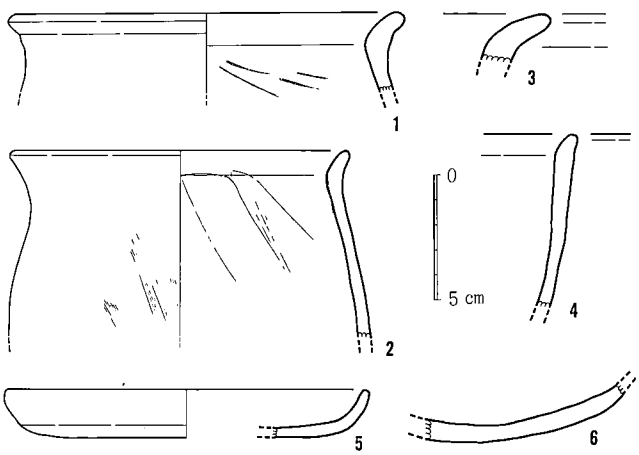
出土土器（第99図）

1・2は土師器。1は甕で、肥厚したゆるやかに外反する口縁をもつ。内面にヘラケズリが施される。2は色調が黄褐色を呈する高台付きの坏？。高台は横に広がり、復元高台径9.0cmを測る。内面は黒色で、研磨の痕がある。

3～6は須恵器で、3・5は高坏の脚部。4は高台付きの坏。6は甕の底部周辺であろう。

11号住居跡（第101図・図版21）

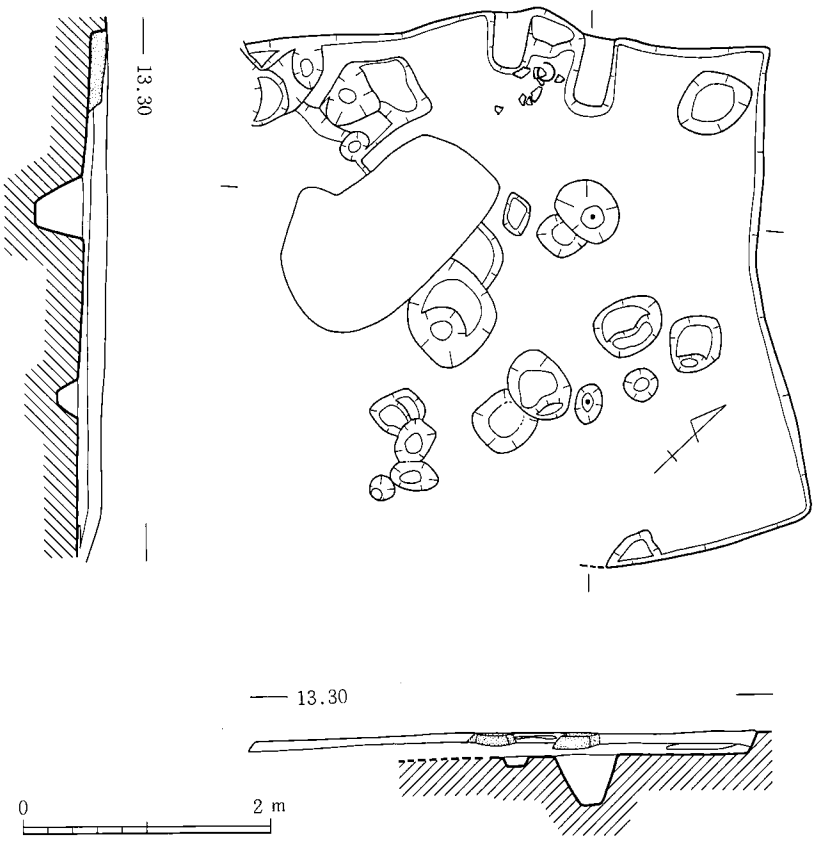
B・D区に位置する正方形と考えられる住居跡で、試掘トレンチにより壁の一部を失っている。床面で408cmを測り、深さは16cm。西壁には地山土によってカマドが築かれ、袖の間には一段のテラスが存在する。テラスの東側には甕が倒立した状態で検出される。床面からは8cm程浮いているが、間には焼土の堆積が認められることからある時期の支脚と考えていよかろう。柱穴は方形の配置をとると思われるが、土壙によりその一部を切られ判然としない。



第100図　11号住居出土土器実測図（1/3）

出土土器（第100図・図版52）

1～5は土師器。1～3は甕

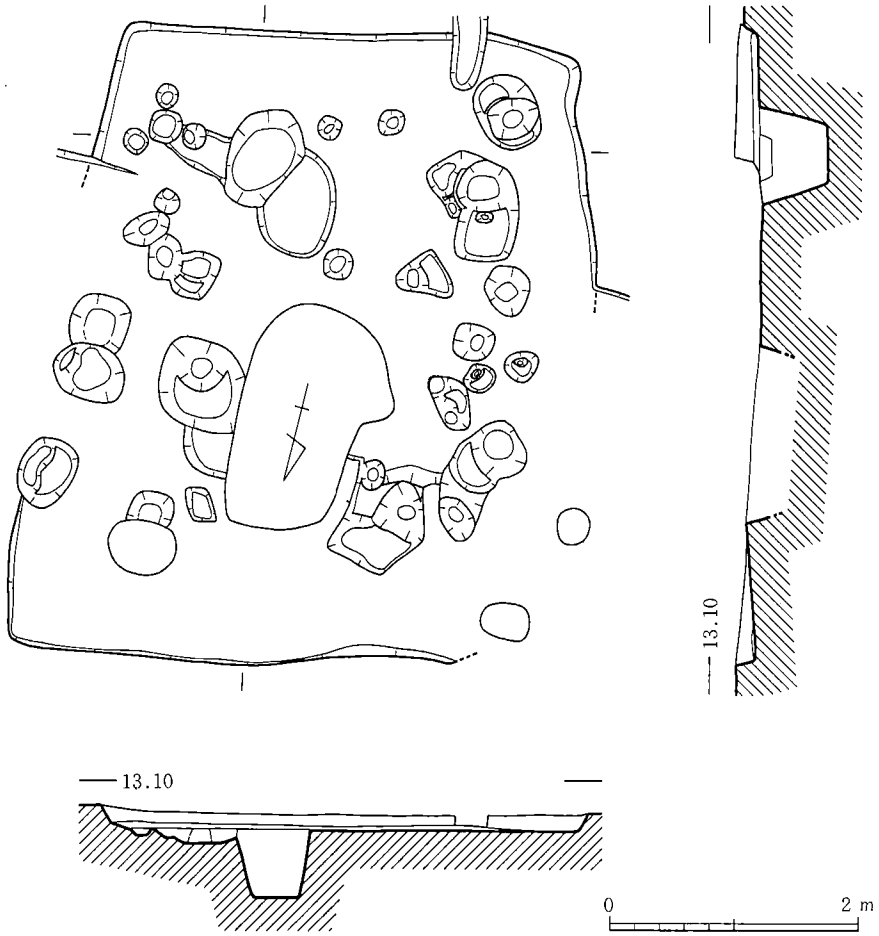


第101号 11号住居跡実測図（1/60）

で、口縁部はゆるやかに外反する。胴部は張ると思われ、外面ハケメ、内面斜め方向のヘラケズリが施される。2はカマド内出土のもので、外面上半のハケメを丁寧にナデ消している。復元口径15.2cm（1）、13.7cm（2）。4は甕もしくはこしきの口縁部と考えられ、外面ハケメ、内面ヘラケズリの後ナデ。5は復元口径14.8cmを測る皿。深さは1.9cm。内面は黒褐色を呈すが、ミガキ痕はない。6は淡黄褐色を呈する、焼成不良の須恵器の甕の底部周辺。外面は回転ヘラケズリが施される。

12号住居跡（第102図）

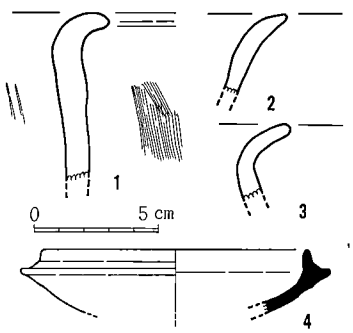
B・D区に位置する不整長方形の住居跡で、J11・土壙、に切られる。また、試掘時のトレンチにて壁の一部を失っている。床面で498cm×376cmを測り、深さは20cm弱を測る。床面にピットが散在し、おそらく4本柱と考えられるが柱穴は判然としない。床面に焼土・炭化物は検出されていない。



第102図　12号住居跡実測図（1/60）

出土土器（第103図）

1～3は土師器の甕で、ゆるやかに外反する口縁をもつ。器壁は1が特に厚く、内面はヘラケズリ、外面ハケメ。4は須恵器の坏で、復元口径10.6cmを測る。立上がりは中位から直に立ち、受部は短い。残存する部分にヘラケズリは認められず、すべて回転ヨコナデ。



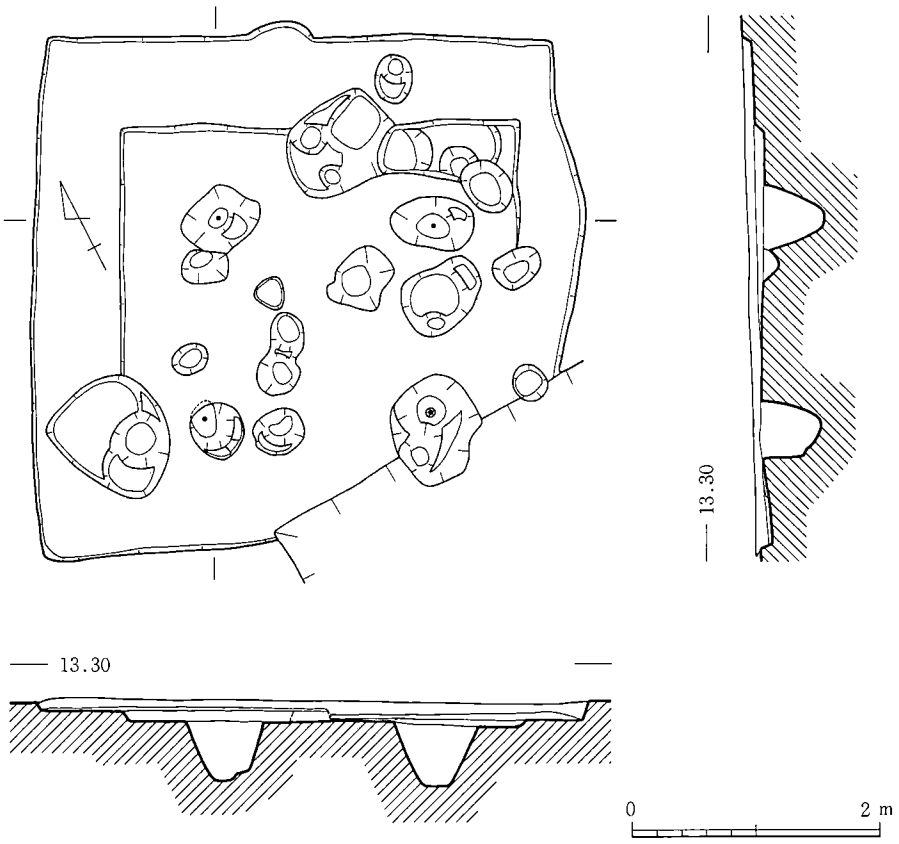
第103図　12号住居出土土器実測図（1/3）

14号住居跡（第104図）

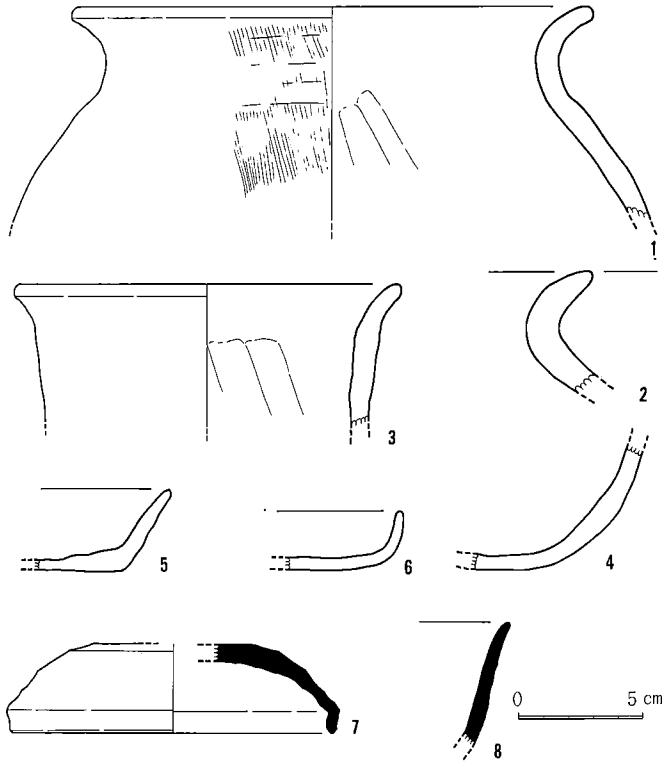
A・B区に位置する正方形の住居跡で、11号住居跡に切られる。床面で405cm×435cmを測り、コ字形に幅47～67cmを測るベッド状の高まりが認められる。これより5～7cm下がってさらに床面があり、主柱穴4本はすべてこのレベルから掘り込まれている。主柱穴は方形に配置され、柱間は160～181cmを測り、深さは48cm前後を測っている。床面のいずれにもカマドが存在した痕跡は無く、焼土・炭化物も確認されていない。

出土土器（第105図）

1～6は土師器。1・2はゆるやかに外反する、器壁の厚い口縁をもつ甕。胴上半は球形をなし、外面ハケメ、内面にはヘラケズリ後ナデが施される。1の復元口径は21.0cm。3は口縁がわずかに外反する甕もしくはこしき。胴部は下へすぼまり、外面ハケ、内面ヘラケズリ後ナデ。復元口径15.2cm。4は甕の底部周辺で調整は1・3と同じ。底面のみナデられている。5は坏で、6は皿であろう。7・8は須恵器。7は坏蓋で、口縁は直をなす。天井部は平坦で、



第104図　14号住居跡実測図（1/60）



第105図　14号住居出土土器実測図（1/3）

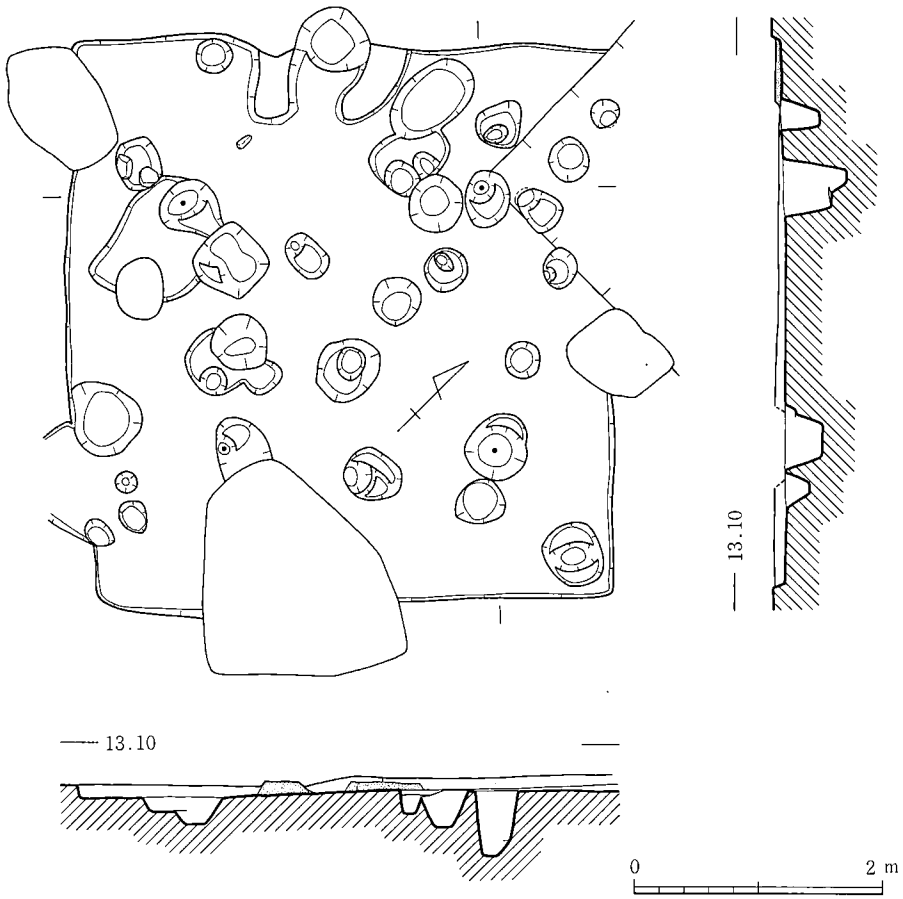
そこのみ回転ヘラケズリ。内面中央周辺が不定方向のナデ、他は回転ヨコナデ。復元口径12.8cm。8はやや大きめの埦で、回転ヨコナデ仕上げ。

15号住居跡（第106図・図版21）

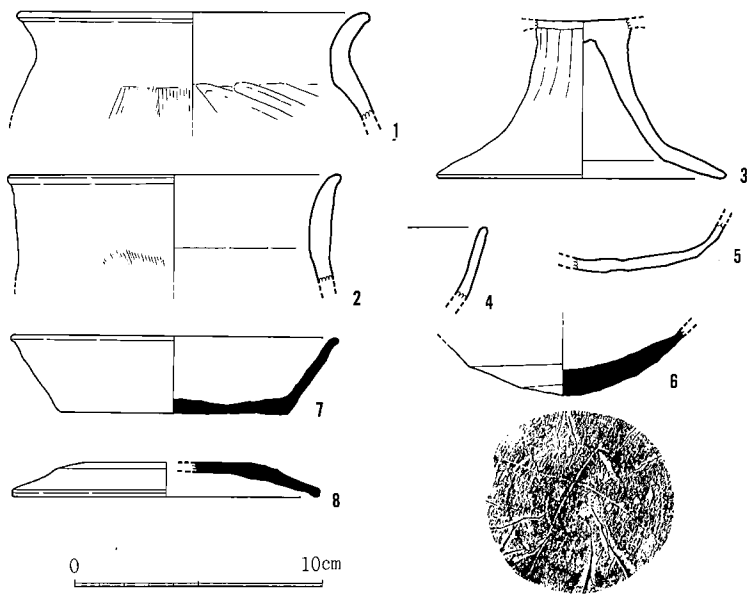
B区に位置する方形の住居跡で、J16・18を切り、試堀トレンチに一部を削平されている。床面で455cm×414cmを測り、深さは10cm前後を測る。北西壁の中央に地山土でカマドを築き、袖の間には壁を張り出して円形のピットが堀り込まれており煙道に伴う施設かと考えられる。柱穴は方形の配置をとり、柱間は200～237cmを測る。柱穴の深さは21～51cmとやや差がある。

出土土器（第107図）

1～4は土師器。1はゆるやかに外反する口縁をもつ甕。器壁は厚く、内面はヘラケズリが施される。外面ハケメ。復元口径14.2cm。2は直立する口縁をもつ甕もしくはこしき。3は高坏脚部。中位より脚は横に広がり、脚径は11.7cmを測る。外面は面取り状にヘラケズリが施され、後ナデられている。内面には坏部接合のための凸部が認められる。4は埦か。5～8は須恵器。5は底部周辺を回転ヘラケズリした甕。6も同様であるが、壷の底部とも考えられる。底面に×印のヘラ記号あり。7は立上がりが直な坏。内面中心付近のみ不定方向のナデ、他は



第106図　15号住居跡実測図（1/60）

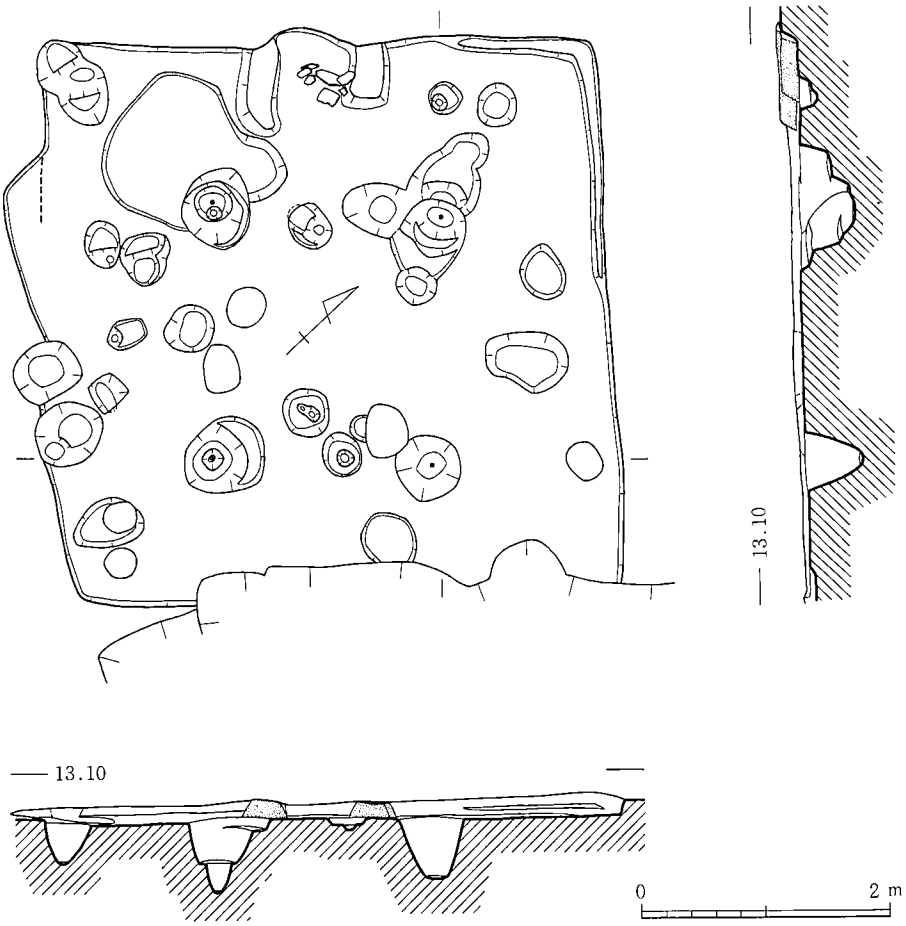


第107図　15号住居出土土器実測図（1/3）

回転ヨコナデ。復元口径13.2cm。8は坏蓋で高さは1.4cmを測る。宝珠つまみは欠落。口縁端部がわずかに突出する傾向をみせている。内面中心付近を除いて、全面が回転ヨコナデ。復元口径12.4cm。

16号住居跡（第108図・図版22）

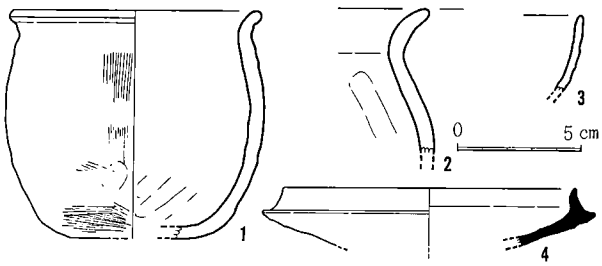
B区に位置する正方形の住居跡で、J15に切られJ18を切る。床面で455cm×446cmを測り、深さは17cm。西壁中央には、地山土によってカマドが築かれている。袖の間には広く焼土が認められるが平坦であり、支脚は検出されなかった。柱穴は方形の配置をとり、柱間は176～205cmを測る。深さは45～55cmを測る。壁の北隅にはL字形の細長い高まりが認められる。



第108図　16号住居跡実測図（1/60）

出土土器（第109図）

1～3は土師器。1はわずかに外反するみじかい口縁をもつ小形の甕。胴部はやや張り、底部は大きめ。外面ハケメ、内面はヘラケズリ後ナデ。復元口径9.8cm、器高9.1cmを測る。カマド内出土のもので、炭化物が付着している。2はゆるやかに外反する口縁をもつ甕。内面ヘラケズリ後ナデ、外面ハケメ。3は埦。4は須恵器の坏身。立上がりは外反し、深さはやや浅い。



第109図　16号住居出土土器実測図（1/3）

(5)　歴史時代の土壙

9号土壙（第112図・図版22）

K区に位置する不整形の土壙で、西側をJ5に切られている。土壙内にはテラス2段と2基のピットが認められ、底面までの深さは46cmを測る。土器は土壙の上位から中位にかけて認められ、散在している。底面では確認されていない。

出土土器（第111図）

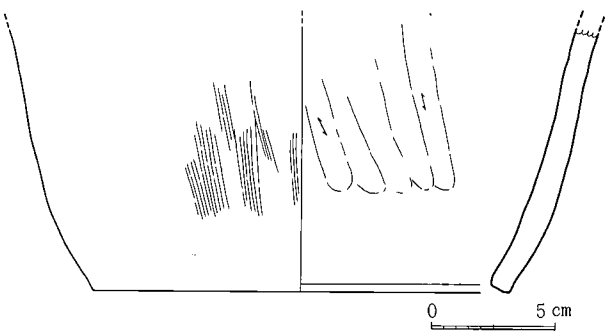
5・6・7・9のみ須恵器で、他は土師器。1は坏で、屈曲して立上がる。屈曲部から口縁端までヨコナデ、他はナデ。復元口径12.6cm。2・3は浅めの埦で、口縁周辺ヨコナデ、他はナデ。4～7は高台付きの坏。口径は13.0～18.2cmを測る。高台は7のみがやや横に張りだす形状をみせ、他は高さの低い断面逆台形を呈す。いずれも破片で、立上がり部と高台周辺ヨコナデ、他はナデ。9は復元口径18.4cmを測る皿。8は高台付きの鉢で、復元口径15.3cm、器高8.5cmを測る。高台は横方向に張り出す。10～14は甕で、12～14が胴部が張るタイプ。いずれも口縁は肥厚し外反する。調整は、口縁周辺ヨコナデ、外面ハケメ、内面ヘラケズリ。

20号土壙（付図2）

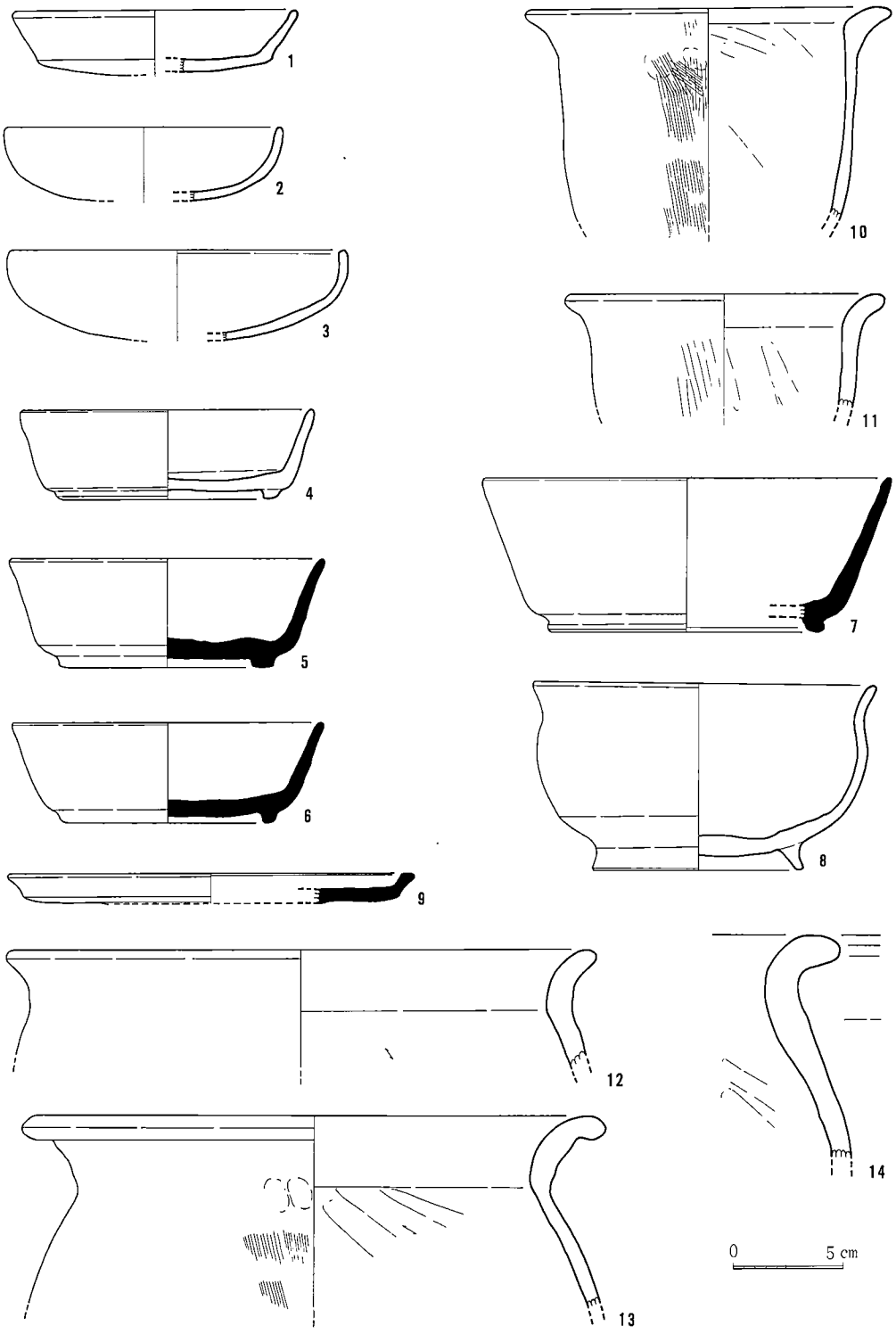
D区に位置する。不整形の浅い皿状の土壙。土器が散在して出土した。

出土土器（第110図）

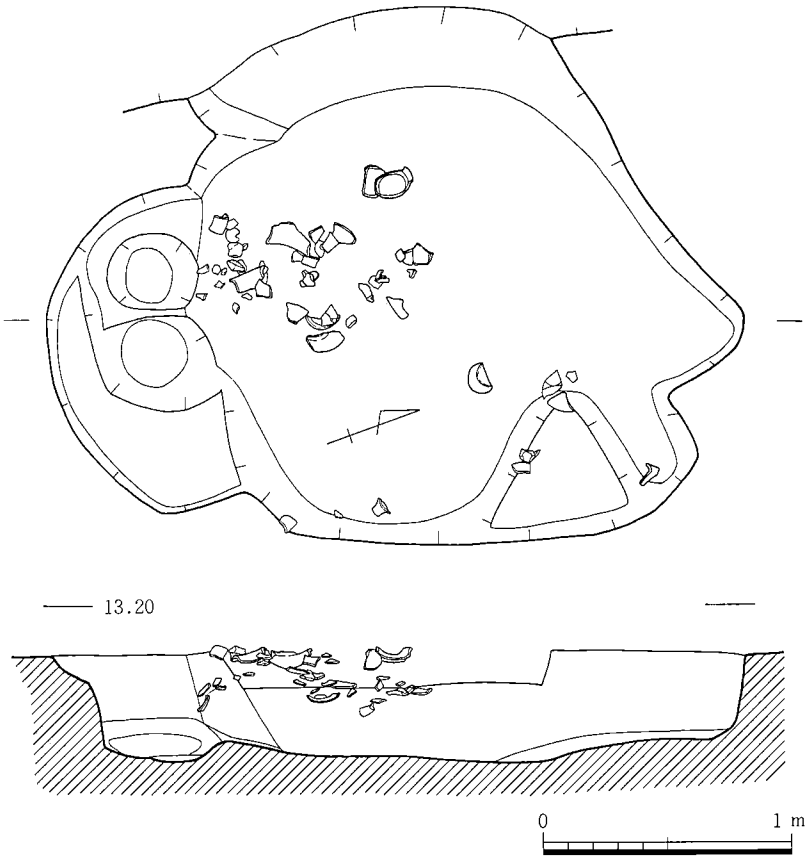
こしきの底部片。復元径16.8cmを測る。外面は荒いハケメで、底部周辺は内外ともヨコナデ。内面は下端までヘラケズリが施



第110図　20号土壙出土土器実測図（1/3）



第111図　9号土壙出土土器実測図（1/3）



第112図　9号土壙実測図（1/30）

されている。

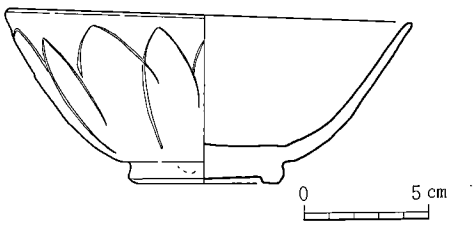
⑹　その他の遺構

1号土壙墓（第114図・図版20）

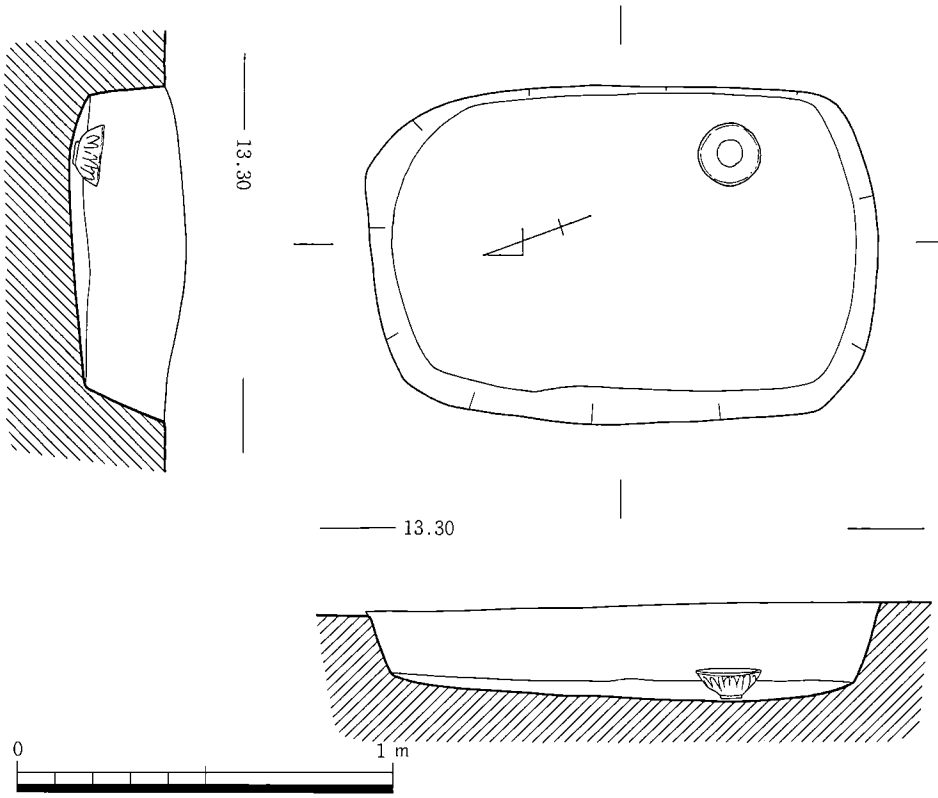
J区に位置する土壙墓でD4を切る。隅丸長方形を呈し、墓壙底で122cm×76cm、深さ26cmを測る。底面の南東隅で青磁碗1個が置かれている。土層観察を行ったが、木棺の痕跡は認められなかった。

出土遺物（第113図・図版52）

釉調が淡緑色の青磁碗。口径16.3cm、器



第113図　1号土壙墓出土遺物（1/3）



第114図　1号土壙墓実測図（1/20）

高6.8cm、高台径6.2cmを測る。体部はやや深く、外面にはヘラ描きによる蓮弁が重ね気味に施されている。高台内面は削っているものの浅い。施釉は高台内面と高台底面の一部を除き、全面に施されている。体部外面には焼成時に生じたと考えられる気泡状の小穴が数多く認められる。胎土は茶褐色を呈し、全面に貫入がある。

18号住居跡（付図２）

Ｂ区に位置する住居跡と考えられる遺構で、Ｊ14～16に切られ全容は不明。床面に長方形の堀込みをもつ。出土遺物は無い。

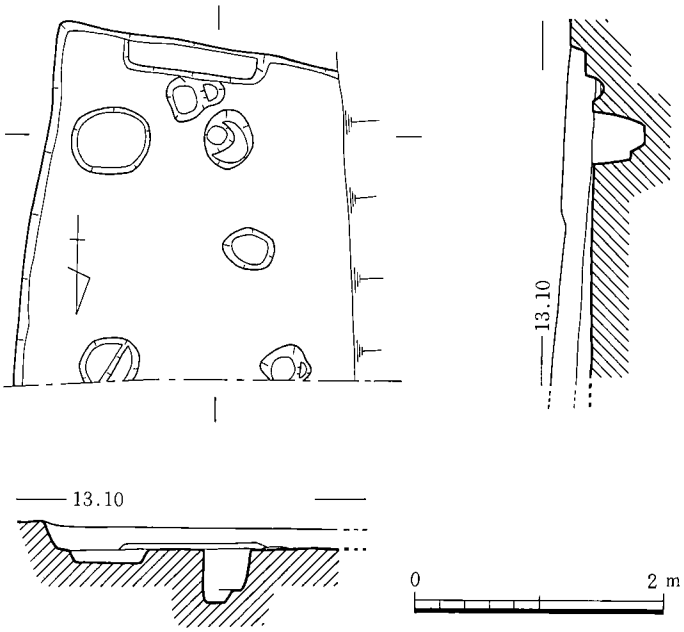
17号住居跡（第115図）

Ａ区に位置する住居跡と考えられる遺構で、一部は削平され他は調査区外にある。南壁には一段の高まりがあり、床面にはピットが散在する。出土遺物は無い。

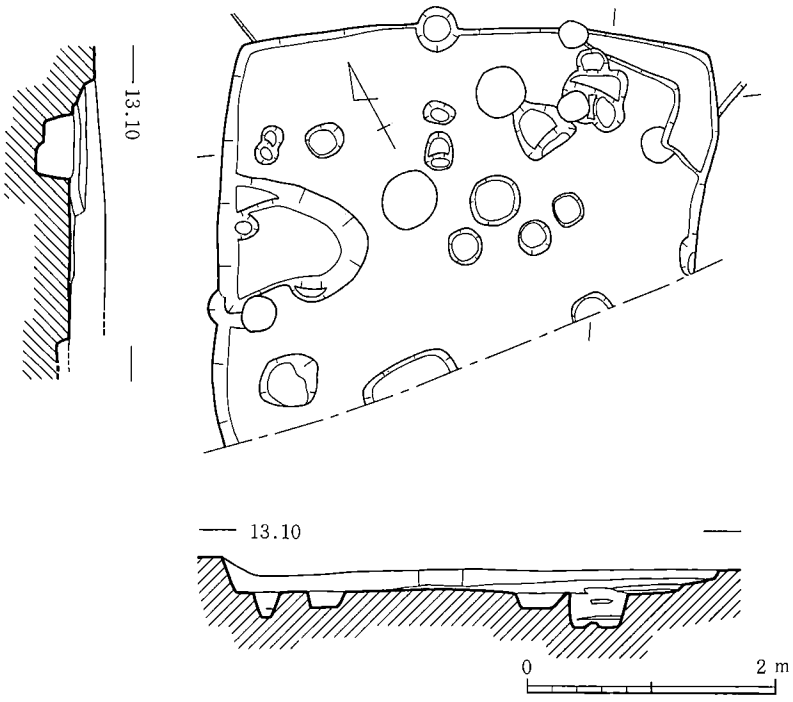
20号住居跡（第116図・図版21）

Ｉ区に位置する住居跡で、Ｊ７に切られ一部は調査区外にある。西壁の形態から正方形のプ

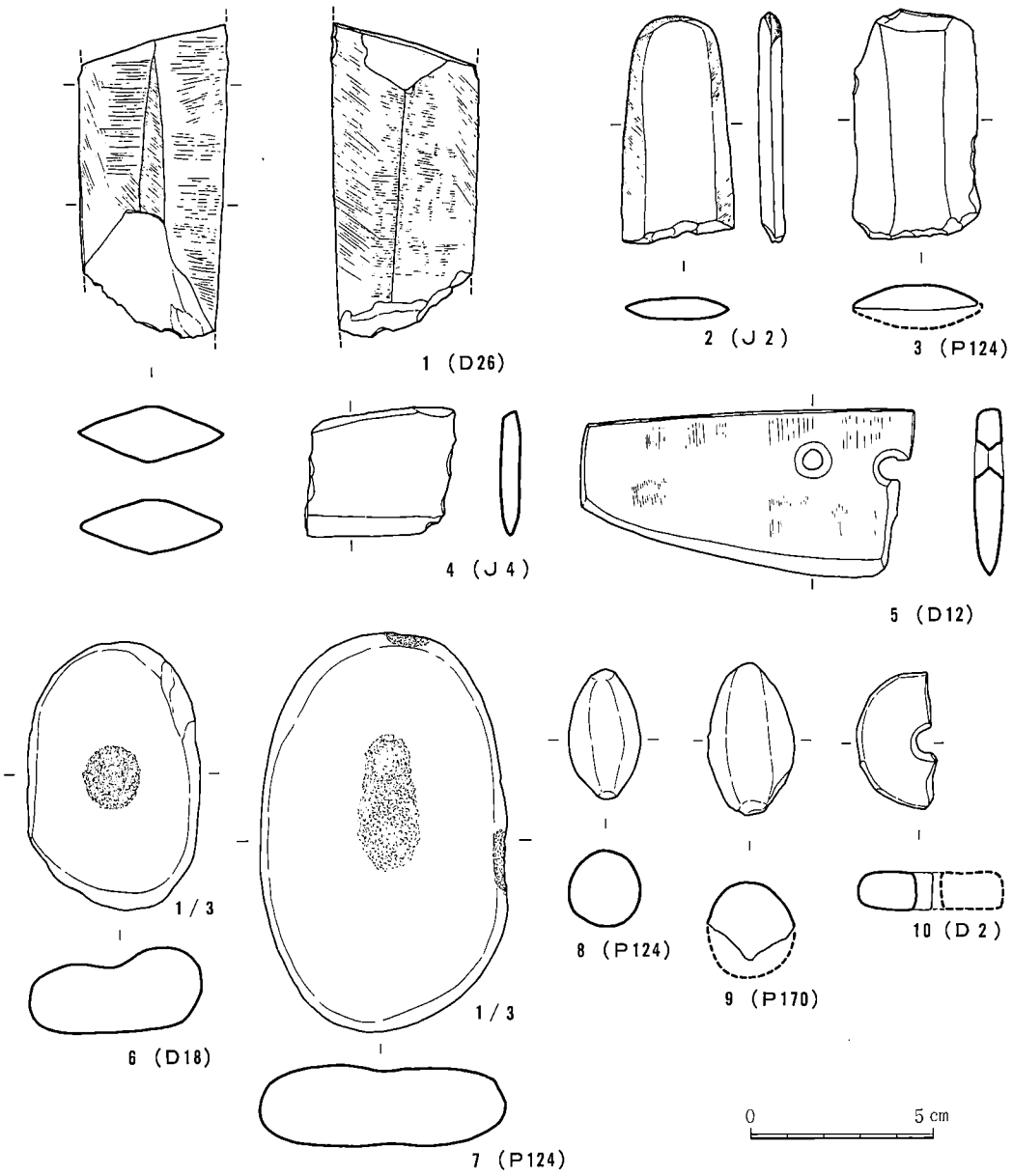
ランと考えられるが定かではない。床面で371cmを測り、深さは29cm。東側の隅には一段の高まりがある。西壁には不整形の小土壙が掘り込まれ、深さは25～30cmを測っている。床面にはピントが散在するが、柱穴の対応関係は定かでない。出土遺物は無い。



第115図　17号住居跡実測図（1/60）



第116図　20号住居跡実測図（1/60）



第117図　Ⅶ区出土石器及び土製品

(7) 石器・土製品（第117図・図版61）

磨製石剣（1～3）

1は茎部付近破片である。基部から徐々に幅をひろげ、身への転換部で最も幅が広くなるタイプと考えられる。茎部側辺は小さく面をつくりだし、それより上方では鋭く研磨され断面菱形を呈す。最大幅4.1cm、厚さ1.5cm、を測る。2は先端部破片である。先端は欠損しその後研磨を施し、丸くなっている。断面はレンズ状を呈し稜を持たない。現存最大幅3.1cm、厚さ6㎜を測る。3は中間部の破片である。風化が著しく剝落も進んでいる。断面は稜を持たないレンズ状を呈す。幅3.4cmを測る。

石庖丁（4・5）

4は刃部破片で、両刃を呈す。粘板岩製。5は立岩産石包丁で一部欠損している。直線的な背部をもち、刃部は外彎する両刃をもつ。表裏ともに入念に研磨されている。

凹石・叩石（6・7）

6・7ともに扁平で楕円形をなす砂岩を使用している。6は中央部に敲打痕を残す。7は縁辺部と表裏の中央部に敲打痕が残る。

土製投弾（8・9）

8・9共に手づくねにより形成、調整を行っている。8は赤褐色をを呈し、胎土は細砂粒を含み極めて精良である。焼成良好。9は黄褐色を呈する。胎土は細砂粒を含み精良である。焼成は良好。

紡錘車（10）

1/2欠損している。黄褐色を呈し、胎土は砂粒を含み精良である。焼成も良好である。

表1　Ⅶ区出土石器・土製品重量石材一覧　　（　）は現存値

出土遺構	器種	重量(g)	石材	出土遺構	器種	重量(g)	石材
J2	石剣	18.9		D18	凹石	420	
D26	〃	55.8		P124	〃	931	
P124	〃	20.6	粘板岩	P124	投弾	12.2	土製
J4	石庖丁	12.0		P170	〃	16.4	〃
D12	〃	44		D2	紡錘車	8.0	〃

表2　Ⅶ区出土石器・土製品器種別数量一覧

出土遺構＼器種	刃斧 蛤石 玄武岩	刃斧 その他	方柱状石斧	扁平片刃石斧	扁平磨製石斧	石庖丁 頁岩質	石庖丁 凝灰岩	石庖丁 その他	石鎌	石剣	石鏃 磨製	石鏃 打製	掻器	石錐		磨石	敲石	砥石	凹石		紡錘車	投弾子	その他		旧石器 台形	旧石器 ナイフ
J－2										1																
J－4								1																		
D－2																					1					
D－12							1																			
D－18																			1							
D－26										1																
P－124										1									1			1				
P－170																						1				
計							1	1		3									2		1	2				

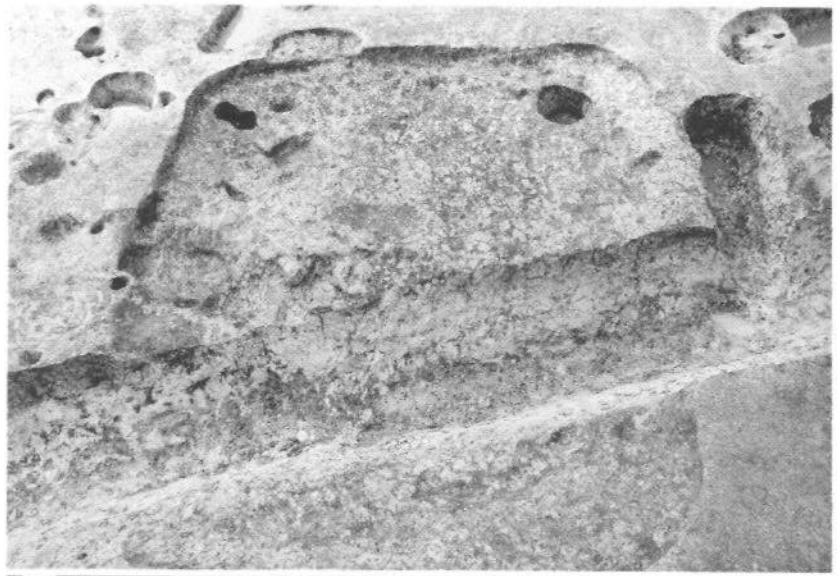
図　　版

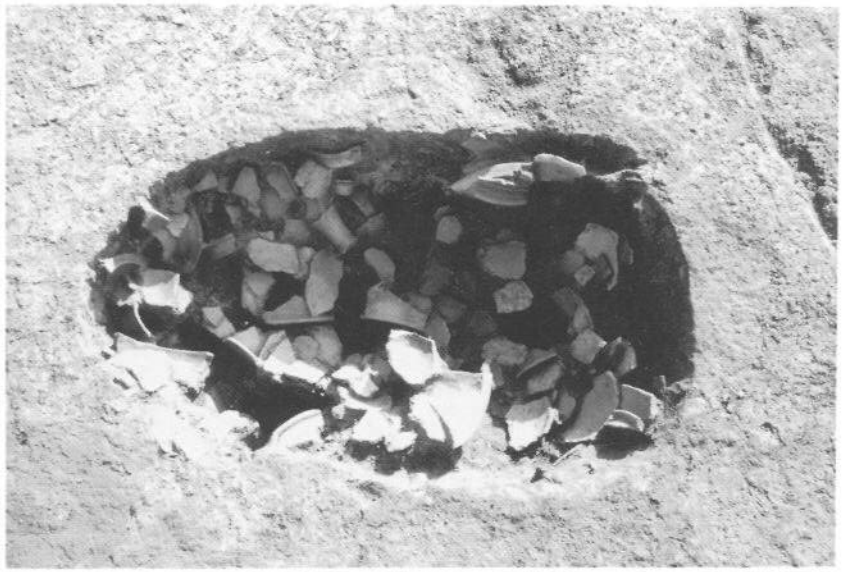
図版1　大板井遺跡Ⅵ区西全景（直上）

図版 2

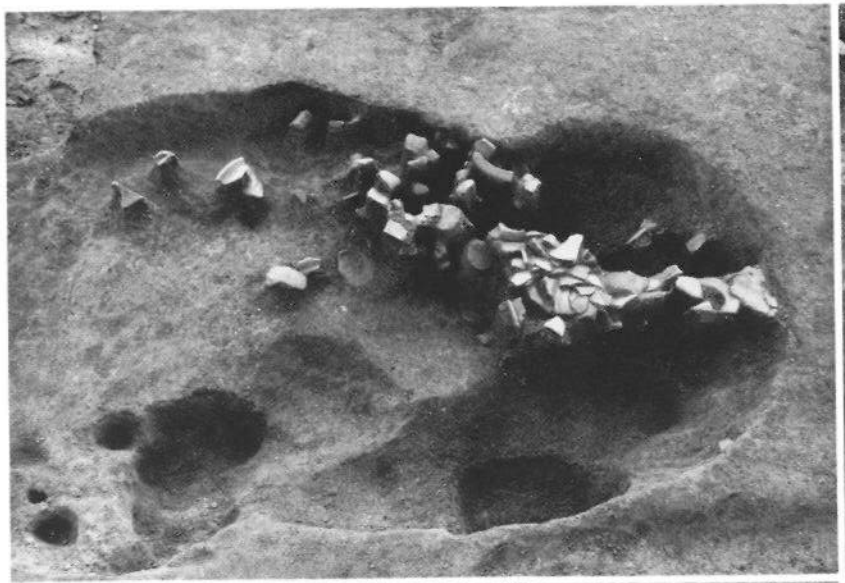
(1)　大板井遺跡Ⅵ区西全景（西から）

(2)　大板井遺跡Ⅵ区西全景（東から）

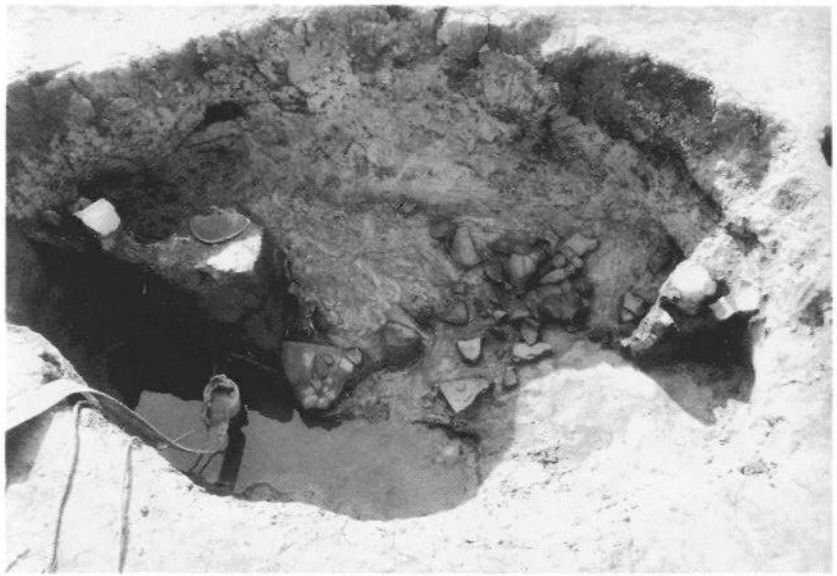


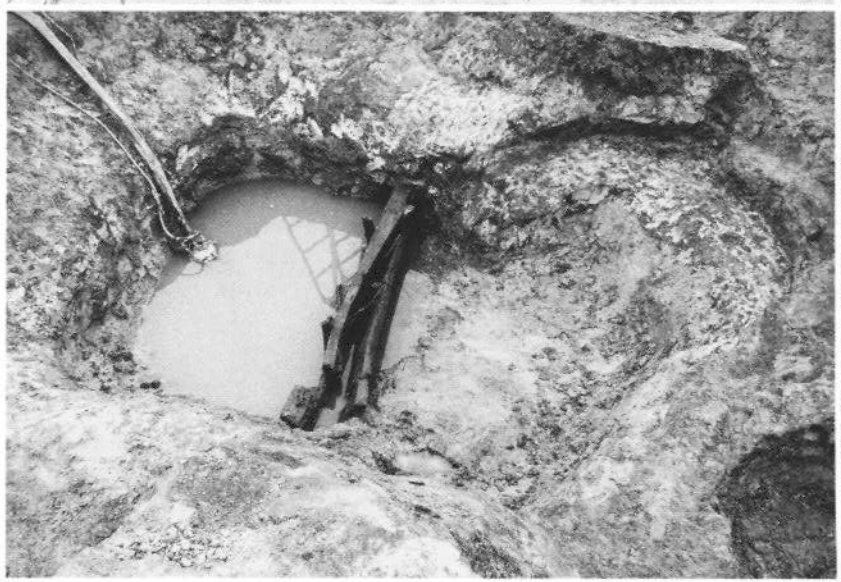


(1)　1号住居跡
(2)　2号土壙
(3)　1号土壙土器出土状態
(4)　1号土壙完掘後

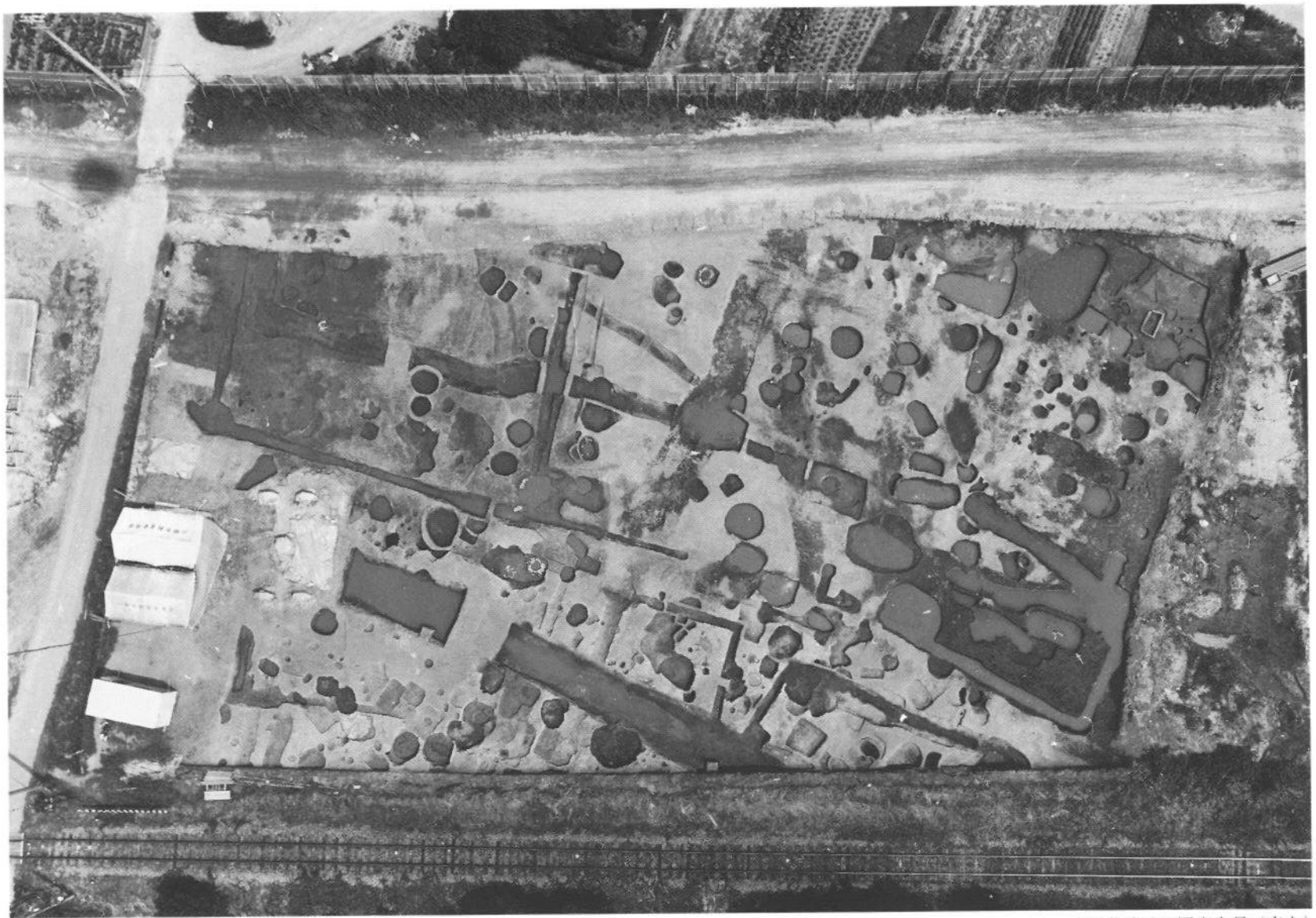


(1)　3号土壙
(2)　5号土壙
(3)　6号土壙
(4)　7号土壙土層

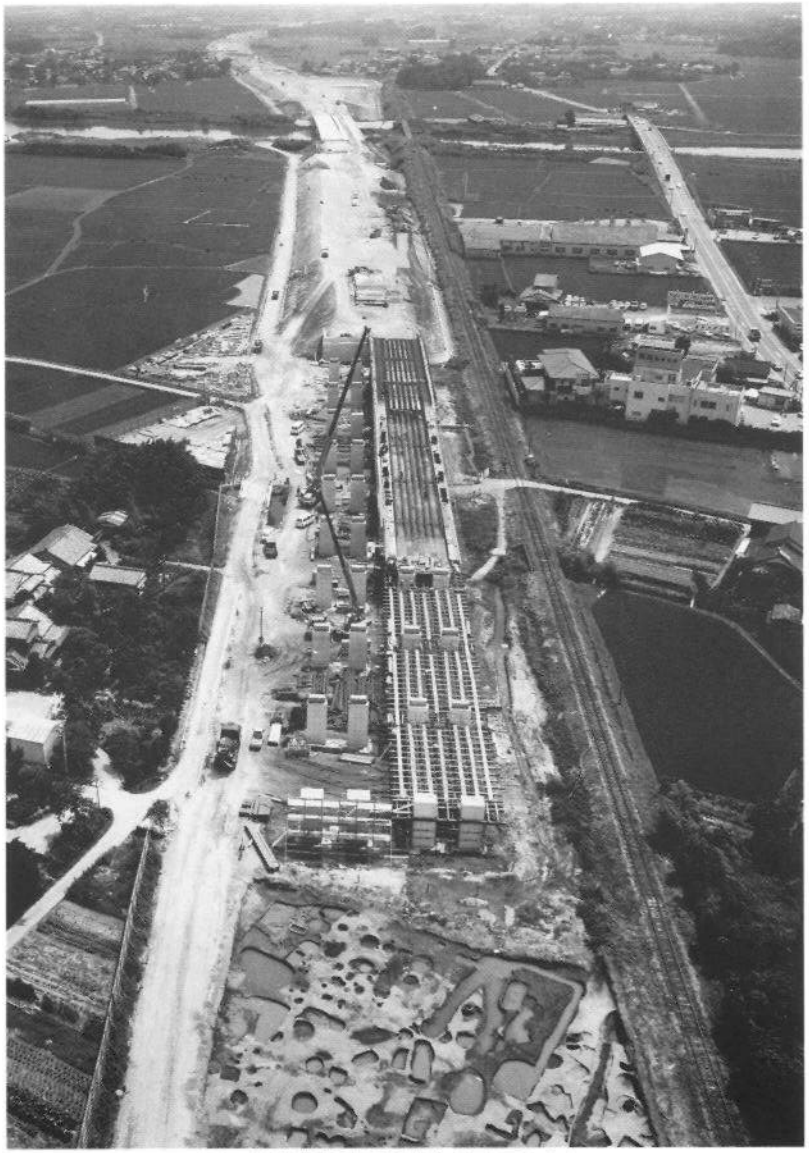




(1)　7号土壙下層土器出土状態
(2)　27号土壙（井戸）
(3)　27号土壙
(4)　27号土壙



大板井遺跡Ⅵ区東全景（直上）

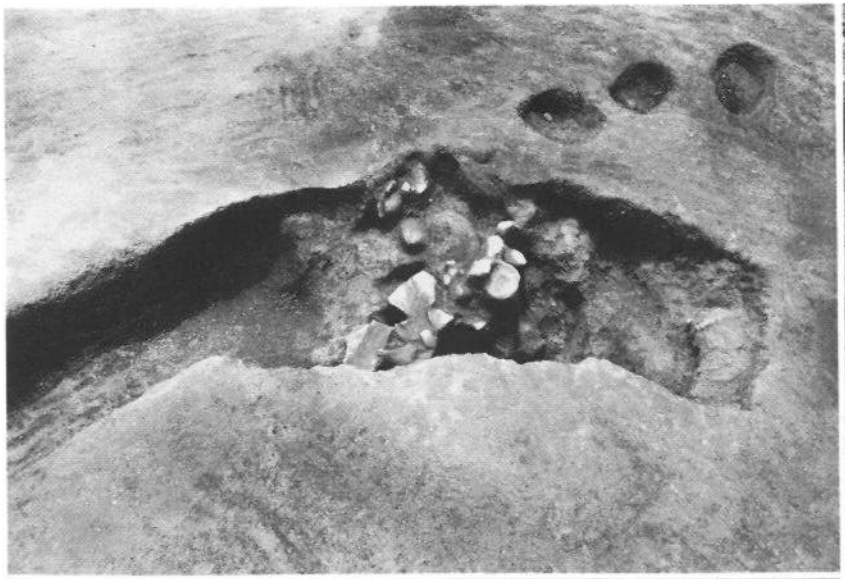


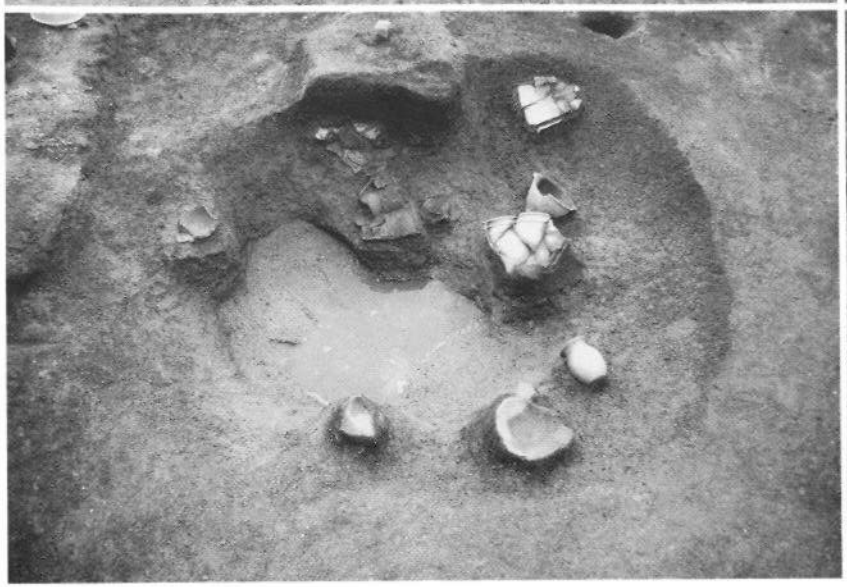
(2)　大板井遺跡VI区東全景（西から）

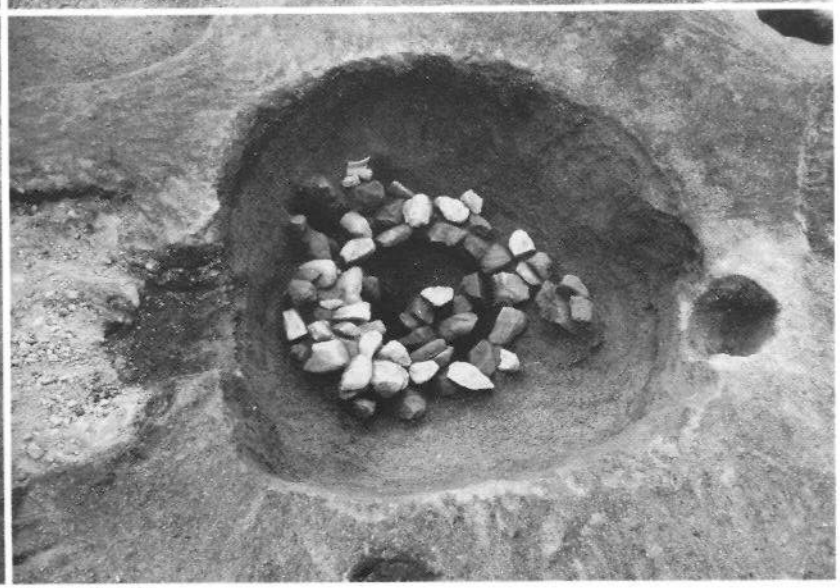
(1)　大板井遺跡VI区東全景（直上）

(1)　大板井遺跡Ⅵ区東全景（東から）

(2)　大板井遺跡Ⅵ区東全景（東から）







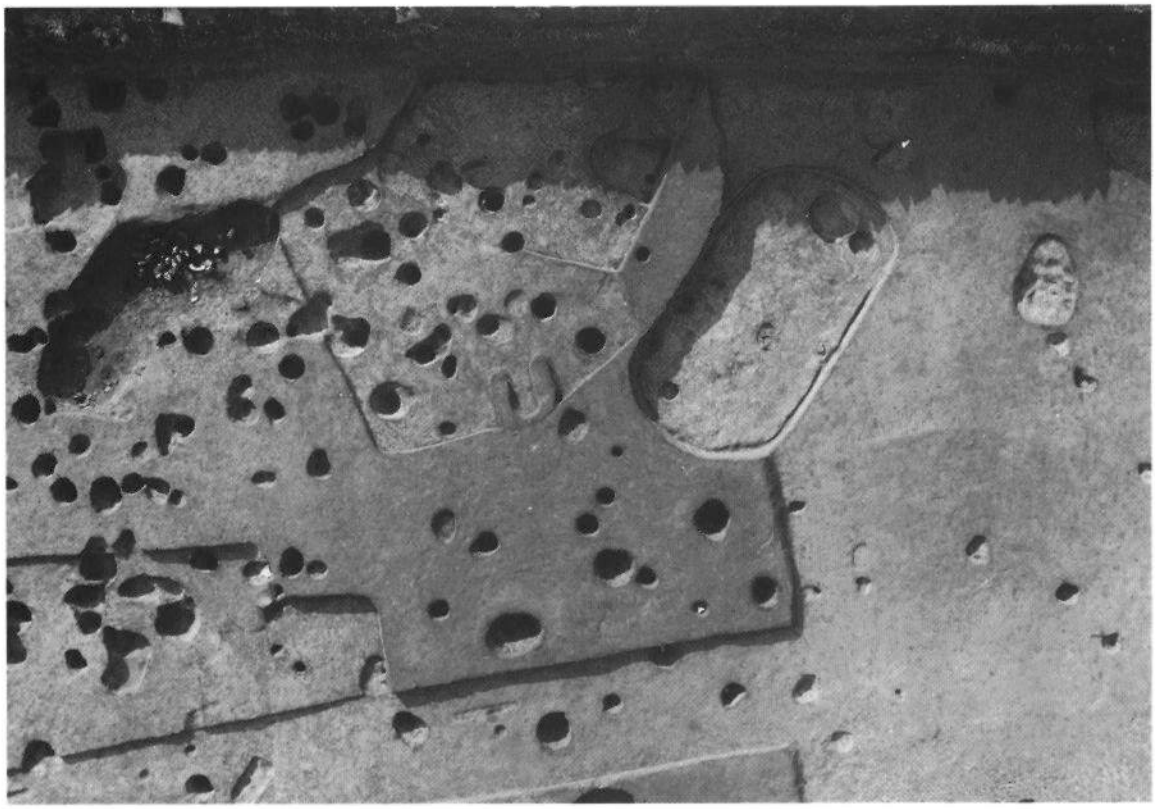
(1) 24号土壙
(2) 25号土壙
(3) 27号土壙
(4) 30号土壙（井戸）

大板井遺跡Ⅶ区全景（直上）

(1)　大板井遺跡Ⅶ区全景（東より）

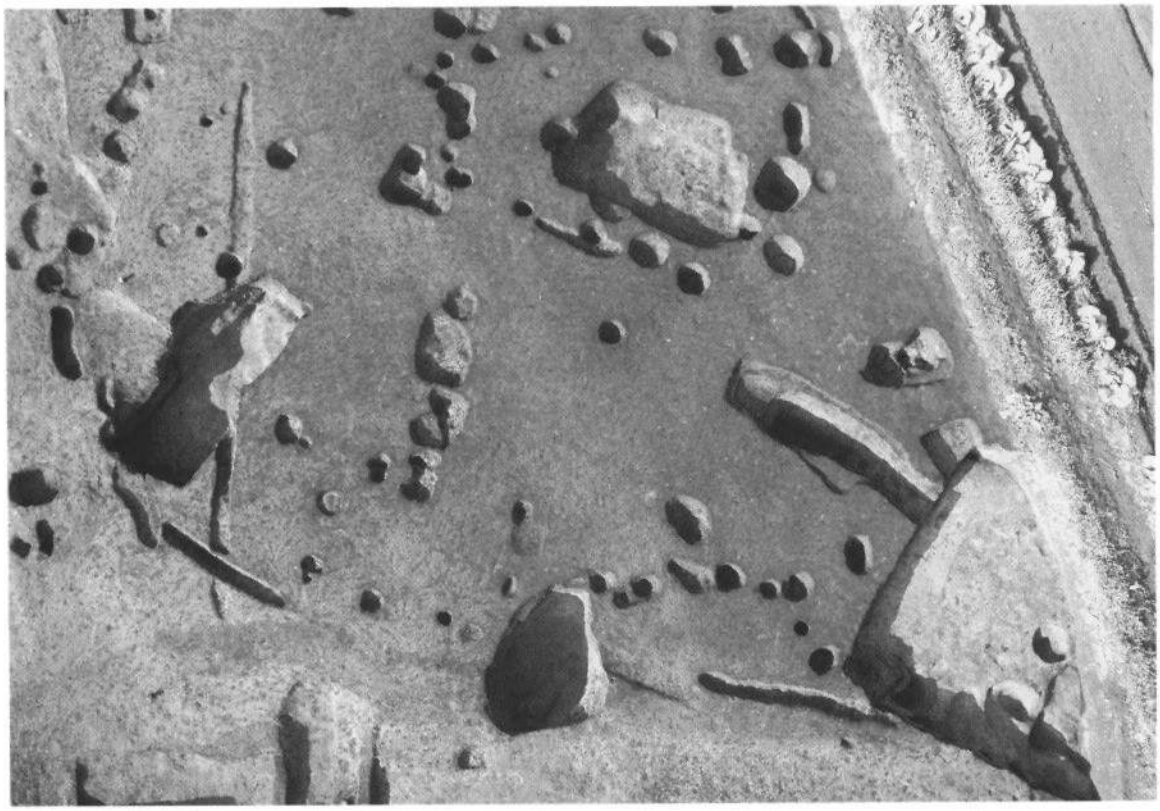
(2)　大板井遺跡Ⅶ区全景（西より）

図版12

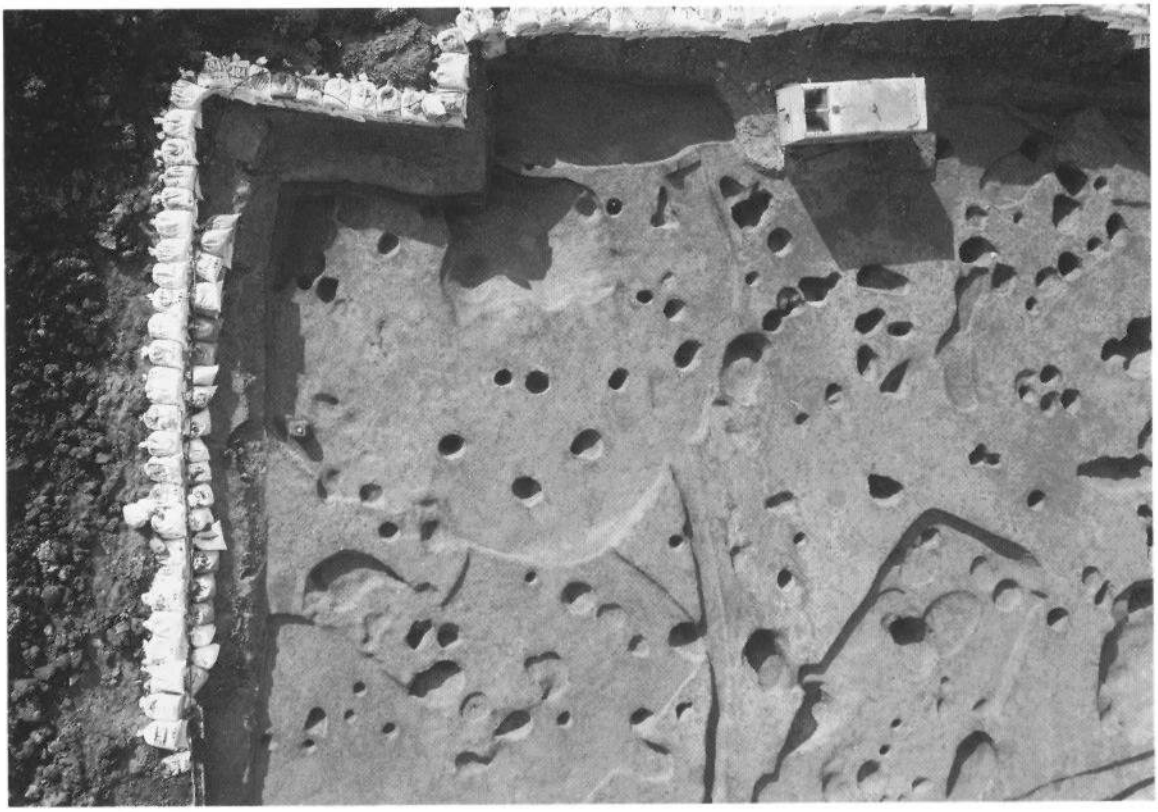


(1)　7号住居跡周辺

(2)　調査区西部



(1)　1号住居跡周辺

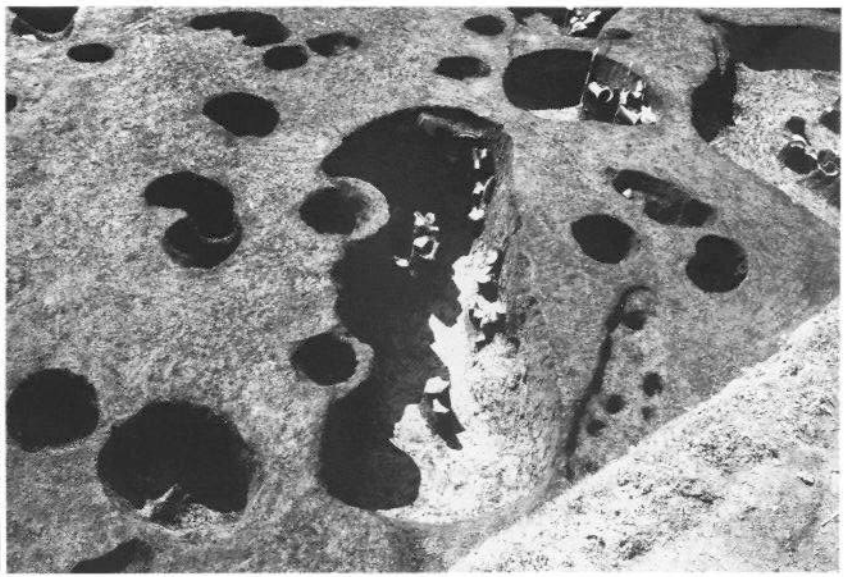


(2)　9号住居跡周辺

(1)　6 号住居跡周辺

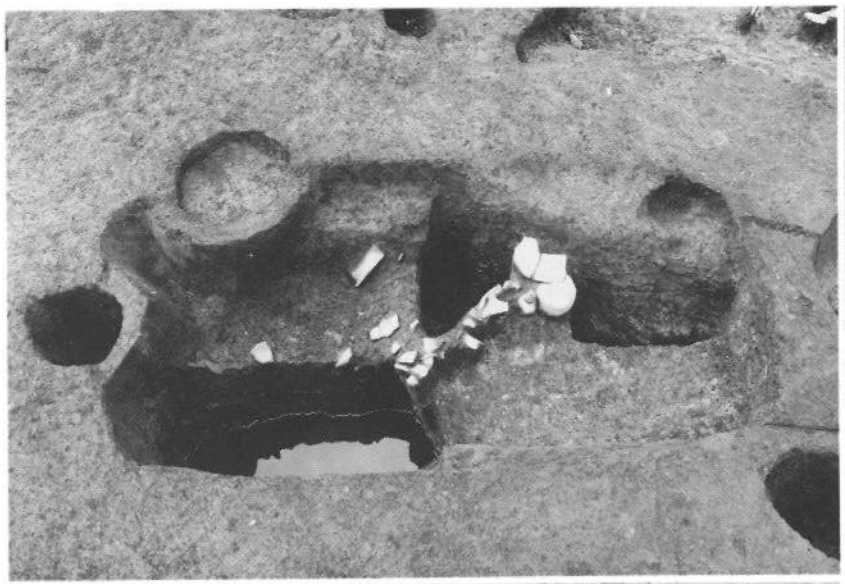
(2)　1 号住居跡

(3)　2 号住居跡

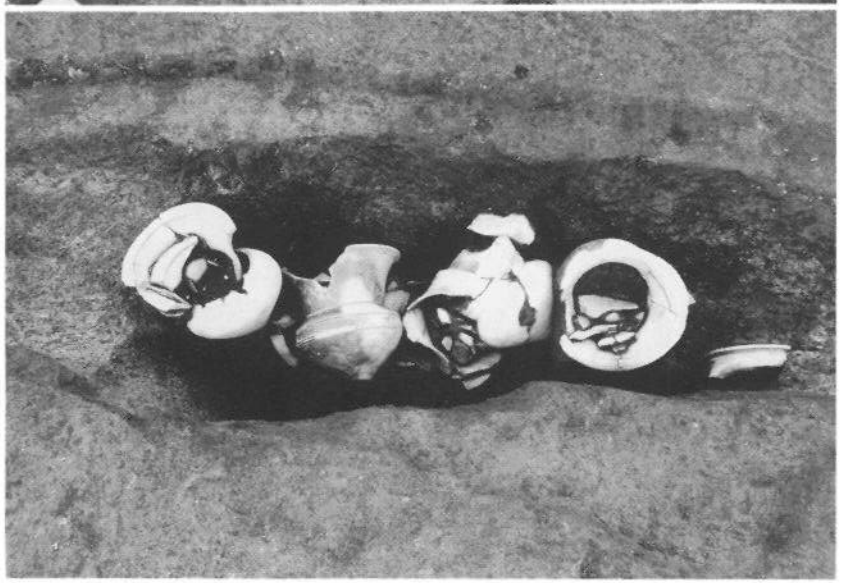


(1)　19号住居跡
(2)　1号土壙

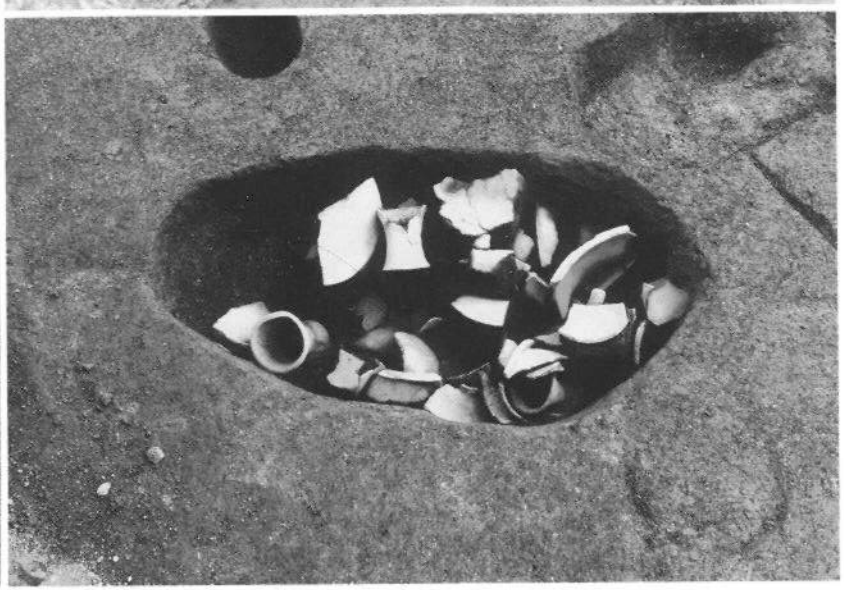
(3)　3号土壙土器出土状態
(4)　3号土壙完掘後



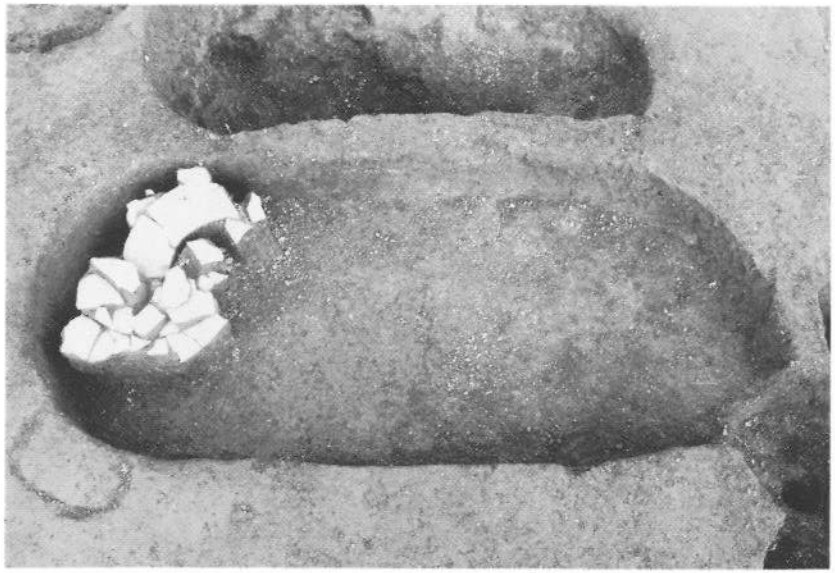
(1)　2号土壙
(2)　2号土壙
(3)　2号土壙
(4)　2号土壙

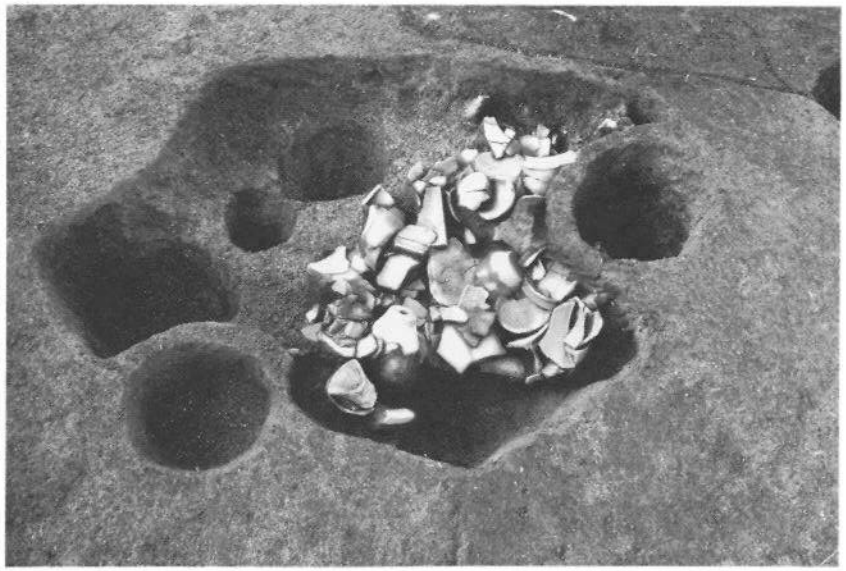


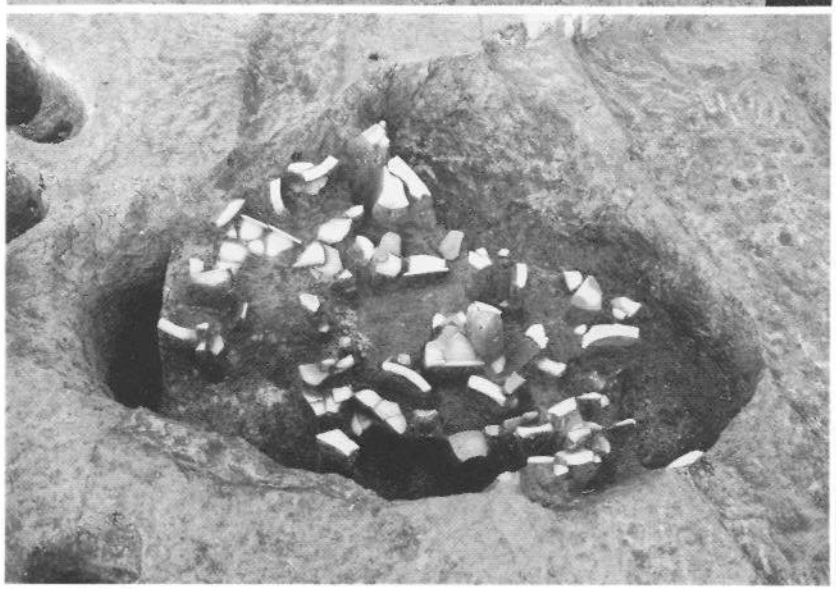
(1)　4 号土壙完掘後
(2)　5 号土壙
(3)　6 号土壙土器出土状態（一部除去）
(4)　6 号土壙土器出土状態（一部除去）



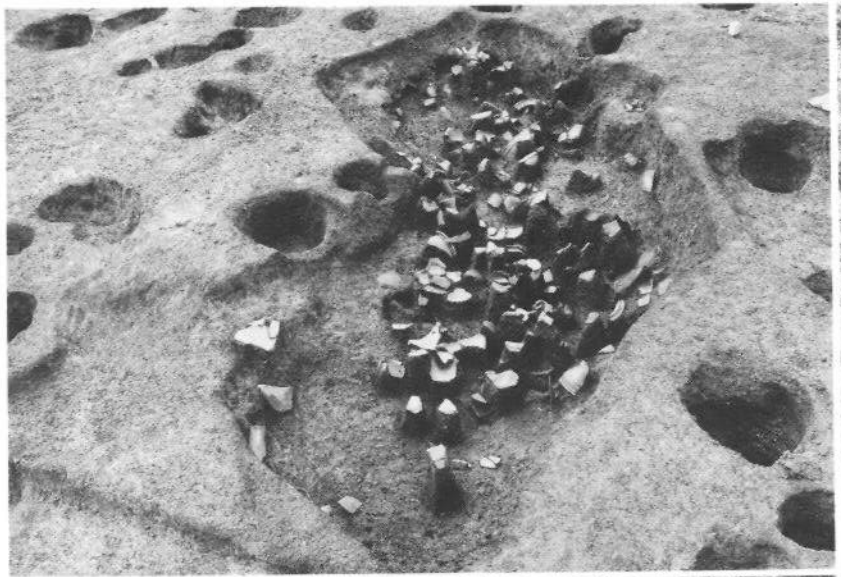
(1)　6号土壙完掘後
(2)　7号土壙
(3)　8号土壙
(4)　10号土壙



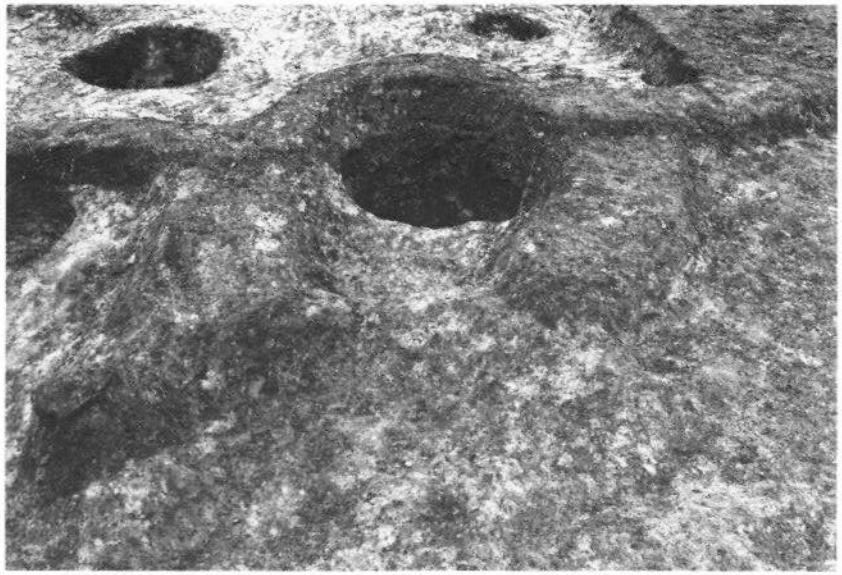


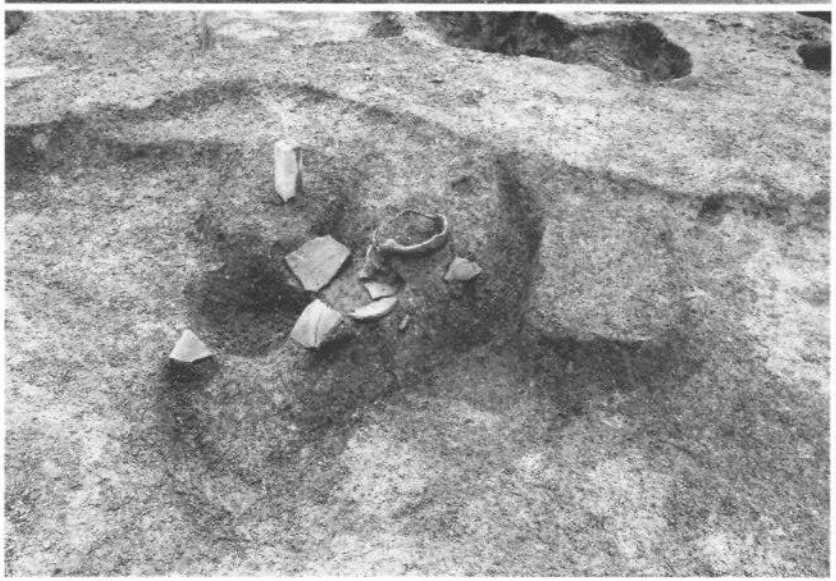


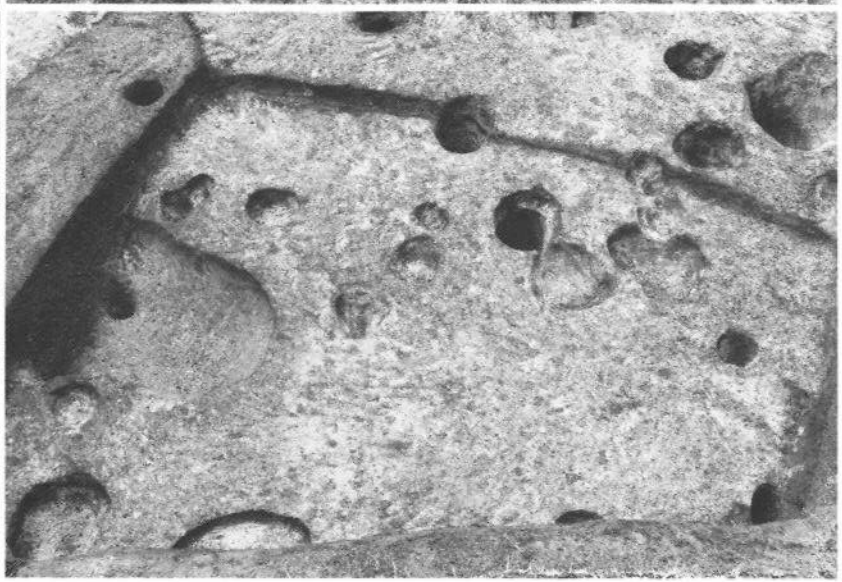
(1) 11号土壙
(2) 12号土壙
(3) 13号土壙
(4) 16号土壙



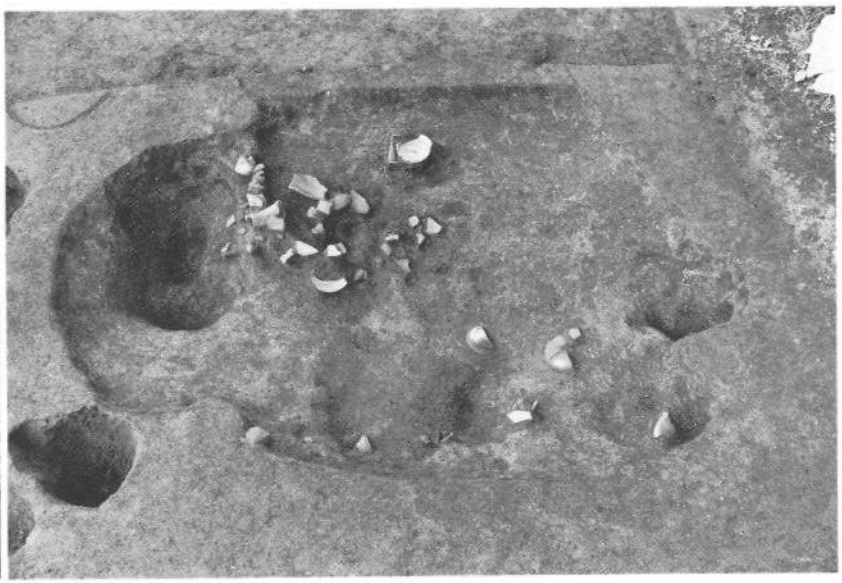
(1)　17号土壙
(2)　18号土壙
(3)　19号土壙
(4)　1号土壙墓



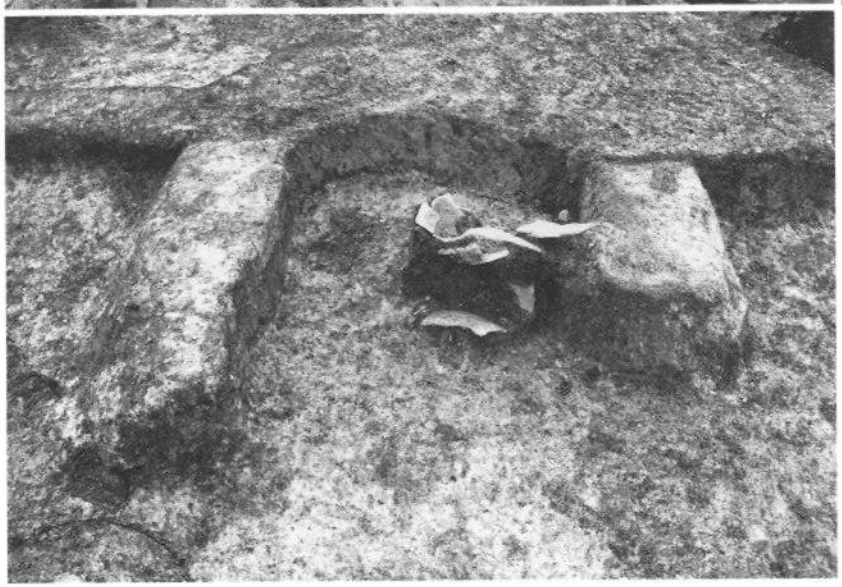




(1) 7号住居跡
(2) 11号住居跡カマド
(3) 15号住居跡カマド
(4) 20号住居跡



(3)　9号土壙



(1)　16号住居跡
(2)　16号住居跡カマド

D 2 (6)

D 3 (6)

D 2 (8)

D 5 (1)

D 3 (7)

D 5 (6)

VI区西出土土器①

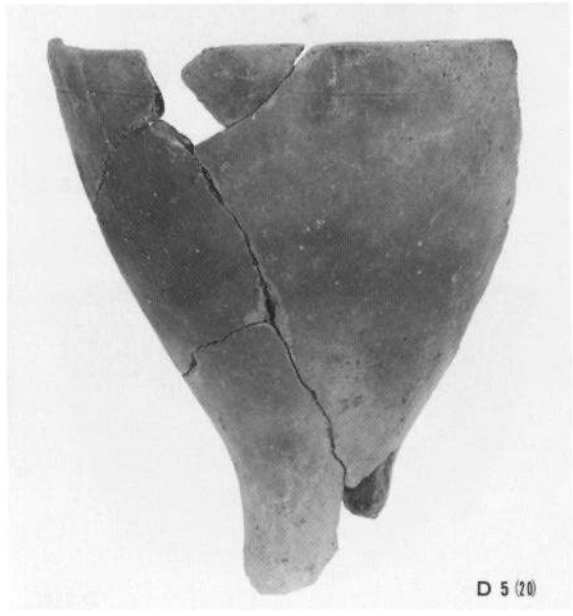
（ ）は挿図内の土器番号

D 5 (12)

D 7 上(2)

D 5 (27)

D 7 上(16)


D 5 (20)

D 7 上(41)

VI区西出土土器②

D 7 上(1)

D 7 上(8)

D 7 上(12)

D 7 上(9)

D 7 中(46)

VI区西出土土器③

D 7 上(11)

D 7 上(21)

D 7 上(15)

D 7 上(22)

VI区西出土土器④

D 7 上(29)

D 7 下(67)

D 7 下(57)

D 8 (2)

D 8 (6)

VI区西出土土器⑤

D 8 (1)

D11

D 8 (3)

D15(1)

Ⅵ区西出土土器⑥

D18

D21(3)

D19(3)

D22

Ⅵ区西出土土器⑦

図版30

D 3 (17)

D 4 (2)

D 4 (1)

D 4 (6)

D 4 (10)

D 4 (8)

VI区東出土土器①

D 4 (11)

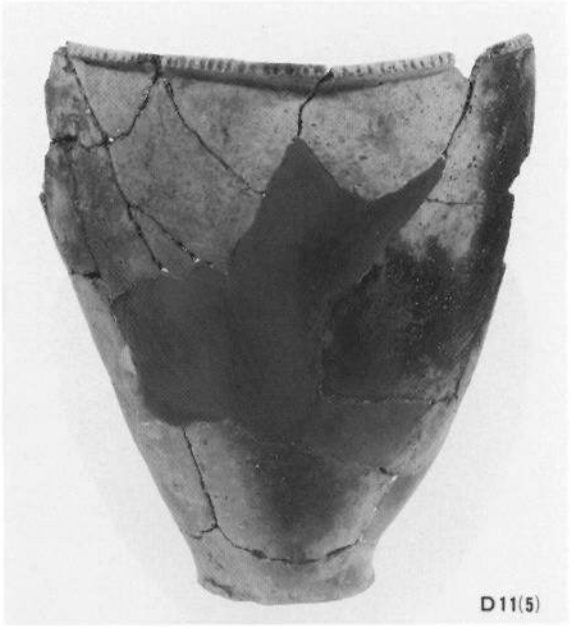
D 5 (1)

D 4 (12)

D 9 (1)

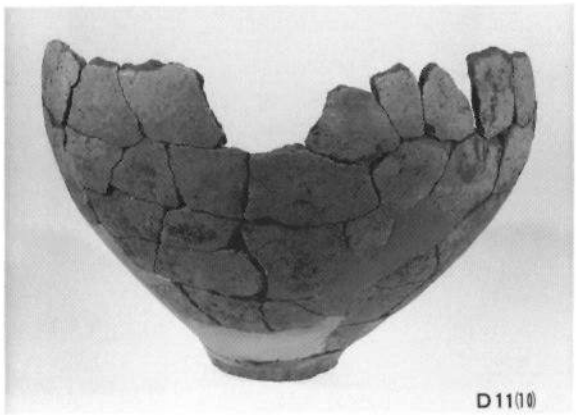
VI区東出土土器②

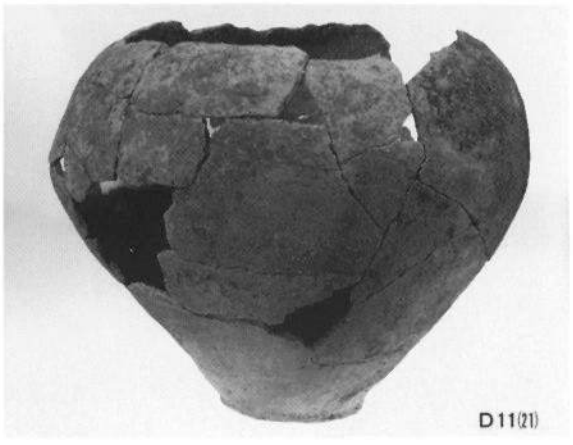
D10


D11(5)

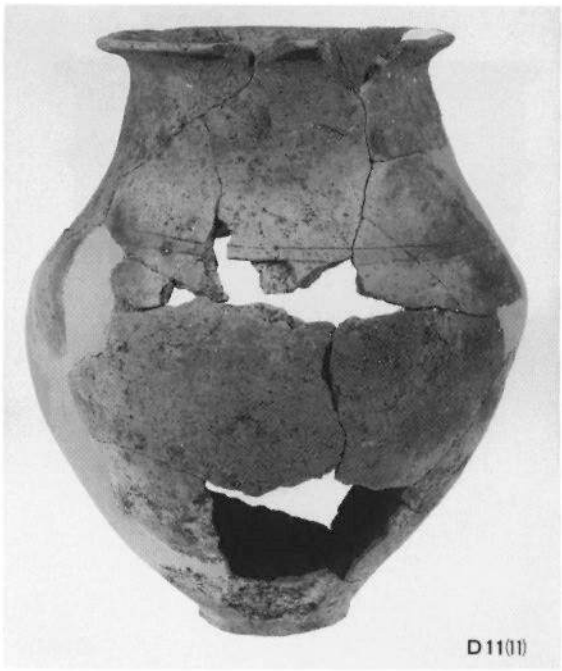
D11(4)

D11(9)


D11(10)

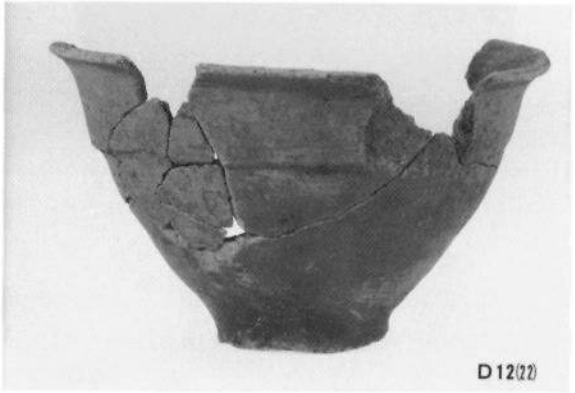

D11(21)

VI区東出土土器③


D11(11)

D12(10)

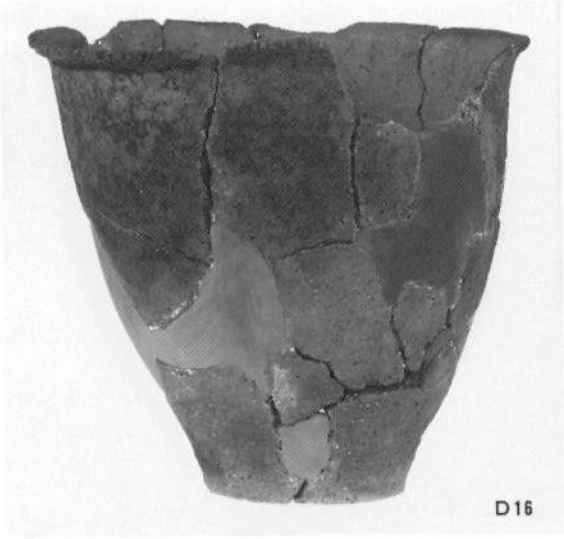
D12(21)


D12(22)

D13(1)

D13(6)

VI区東出土土器④



D16

D20(1)

D17(1)

D20(3)

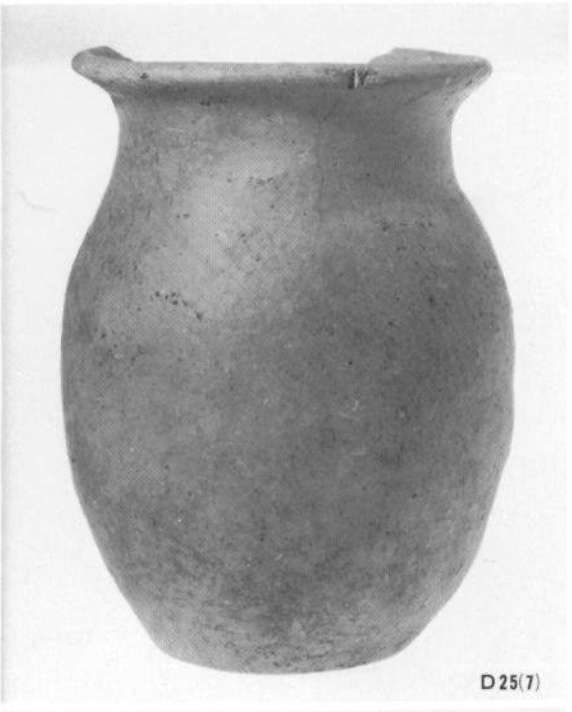
D18(1)

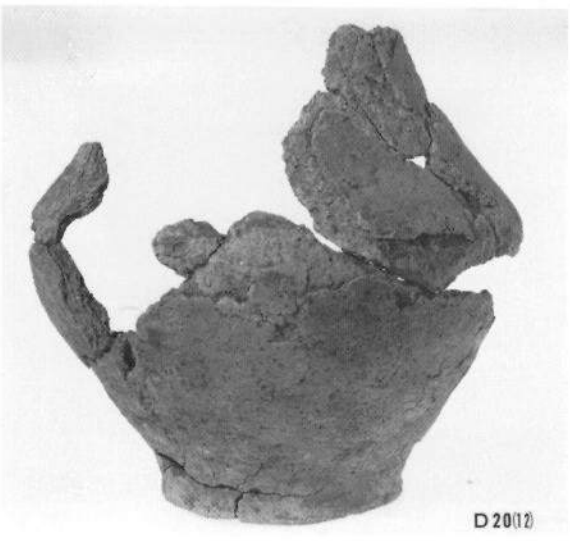
VI区東出土土器⑤

D20(8)

D21(16)

D20(10)


D25(7)


D20(12)

D27(1)

VI区東出土土器⑥

D27(2)

D27(7)

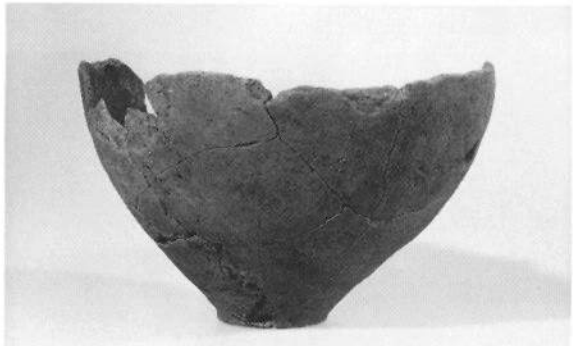
D27(3)

D27(8)

D27(4)

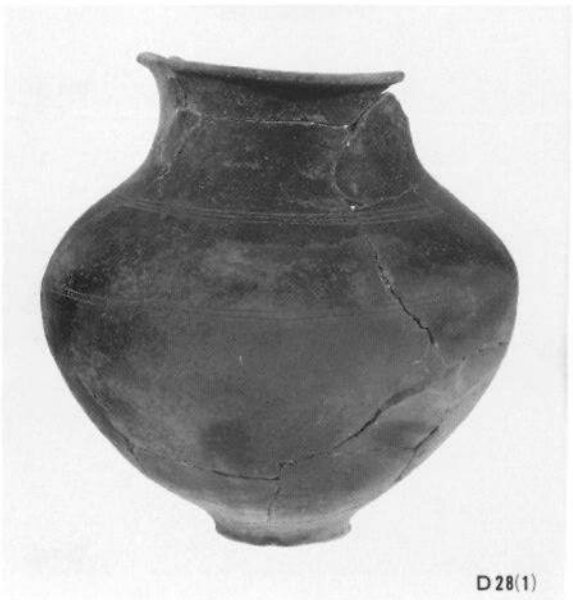
D27(16)

VI区東出土土器⑦



D27(17)

D27(18)



D28(1)

D29(1)

D29(2)

VI区東出土土器⑧

J 1 (10)

J 10(16)

J 2 (5)

D 1 (5)

J 10(15)

D 1 (6)

Ⅶ区出土土器①

D 2 (12)

D 2 (19)

D 2 (20)

D 4 (19)

D 4 (22)

VII区出土土器②

図版40

D 4 (24)

D 4 (29)

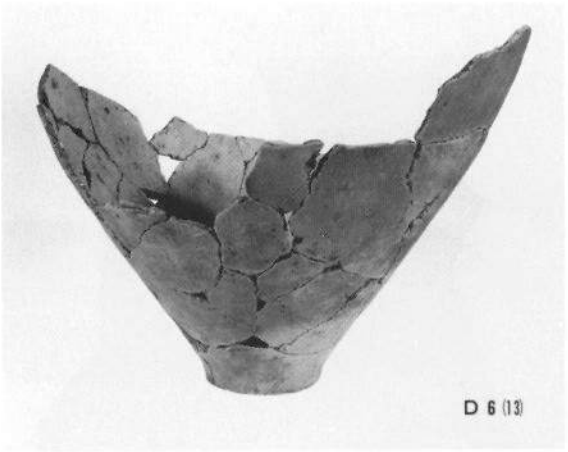
D 4 (25)

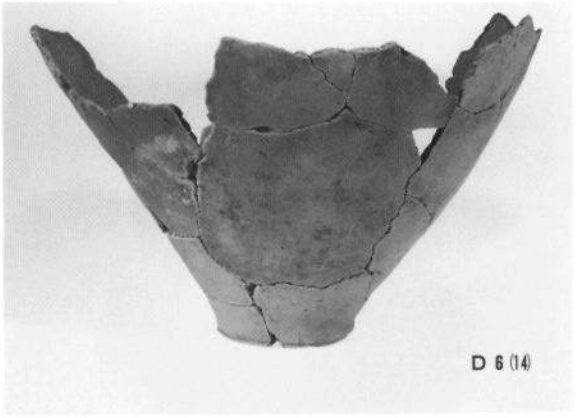
D 4 (30)

D 4 (28)

D 4 (31)

Ⅶ区出土土器③


D 6 (13)


D 6 (14)

D 6 (15)

D 6 (17)

D 6 (16)

D 6 (18)

Ⅶ区出土土器④

図版42

D 6 (19)

D 6 (22)

D 6 (20)

D 6 (25)

D 6 (24)

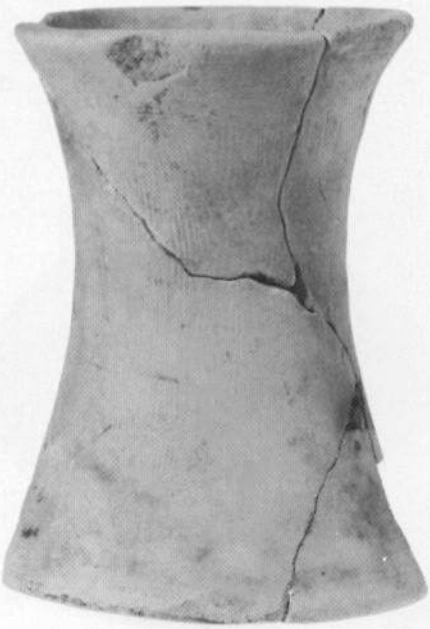
D 6 (29)

Ⅶ区出土土器⑤

D 6 (35)

D 7 (2)

D 7 (11)



D 6 (36)

D 7 (12)

VII区出土土器⑥

図版44

D 8 (12)

D 8 (15)

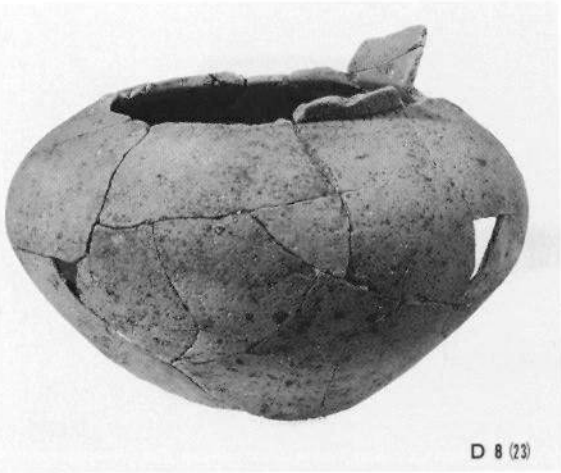
D 8 (13)

D 8 (16)

D 8 (14)

D 8 (19)

Ⅶ区出土土器⑦



D 8 (23)

D 8 (28)

D 8 (26)

D 8 (32)

D 8 (27)

D 8 (33)

VII区出土土器⑧

D10(16)

D10(19)

D10(17)

D10(20)

D10(18)

D10(21)

D12(1)

D13(25)

D12(12)

D13(26)

D13(32)

D14

D15(4)

D15(7)

D15(5)

D15(10)

D15(6)

D15(11)

Ⅶ区出土土器⑪

D17(1)

D17(5)

D17(2)

D17(24)

D17(3)

D17(36)

Ⅶ区出土土器⑫

D17(39)

D17(43)

D17(46)

D17(47)

D17(48)

D17(49)

D18(4)

D19(6)

D18(8)

D19(11)

D19(1)

D19(12)

Ⅶ区出土土器⑭

D19(13)

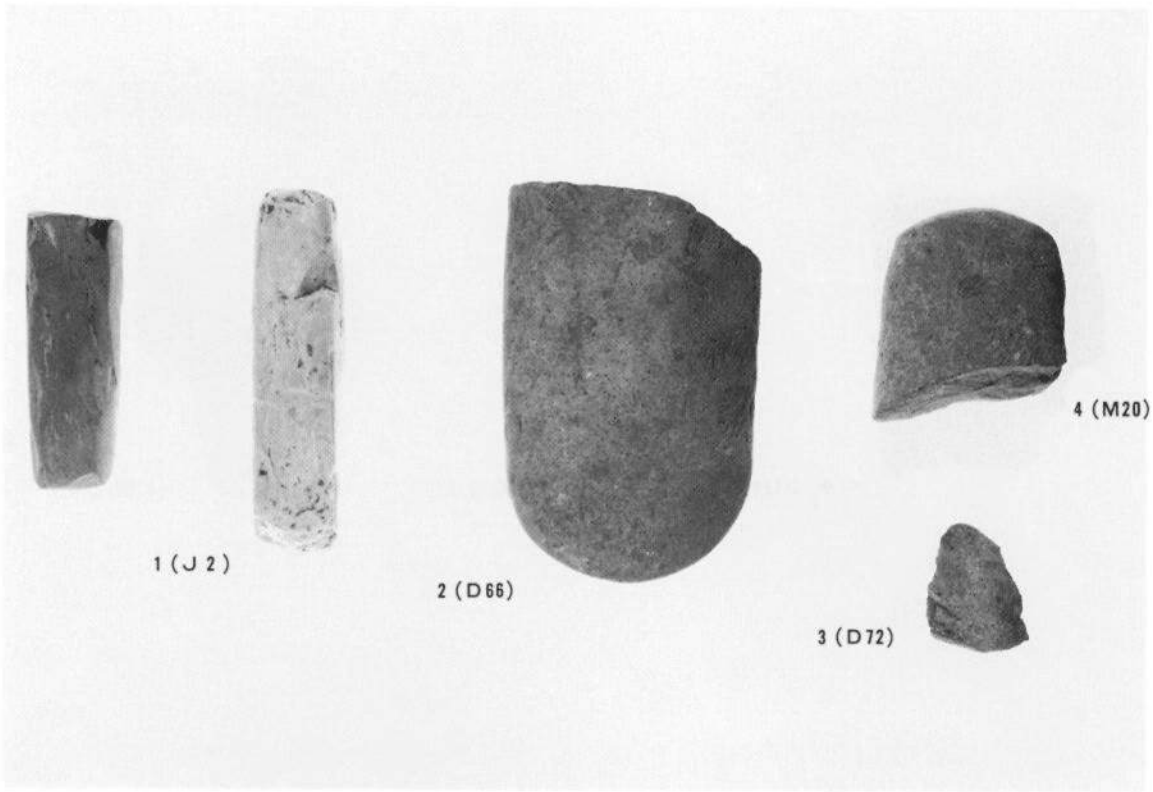
K1(下)

D21

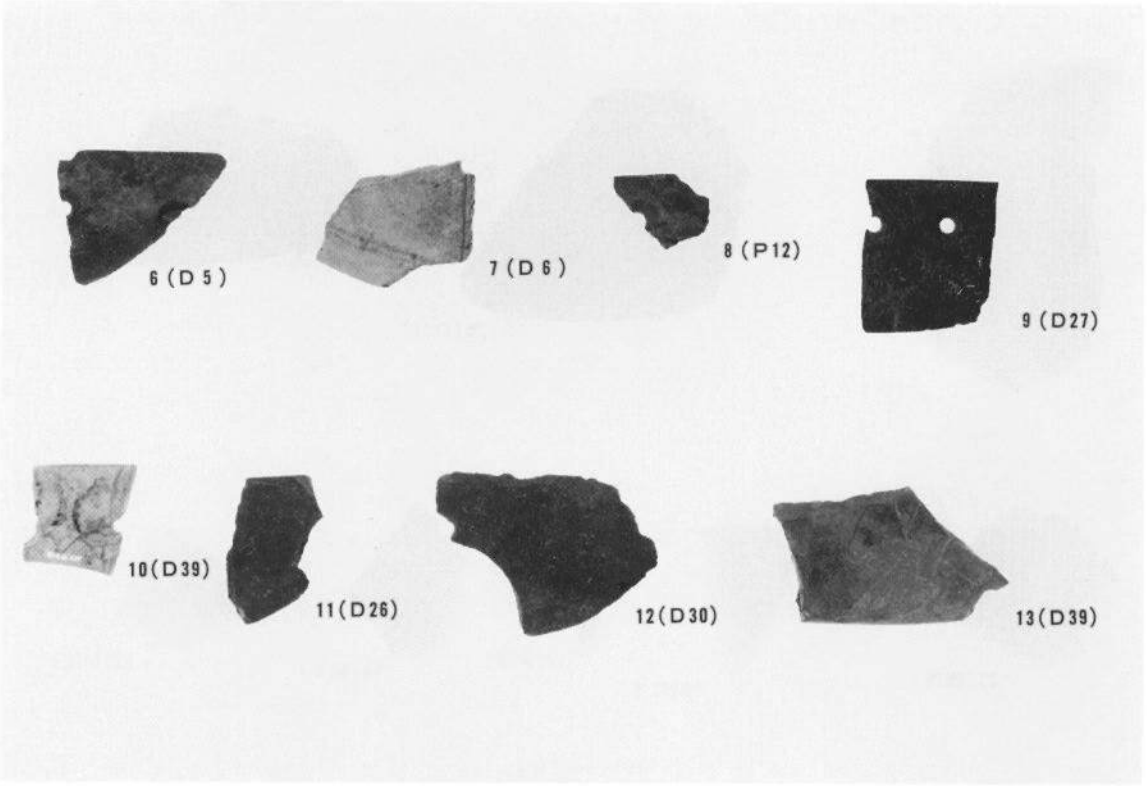
DB1

J11

VI区出土土器・甕棺・青磁

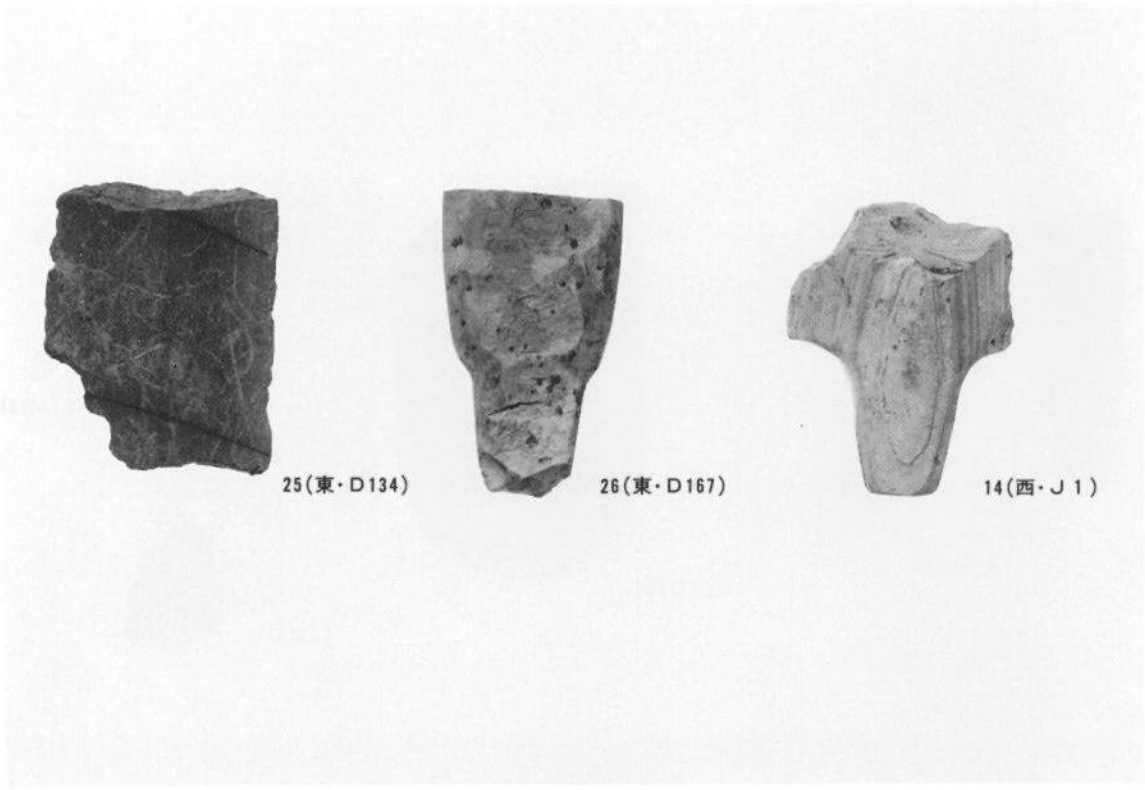


(1)　VI区西出土石斧

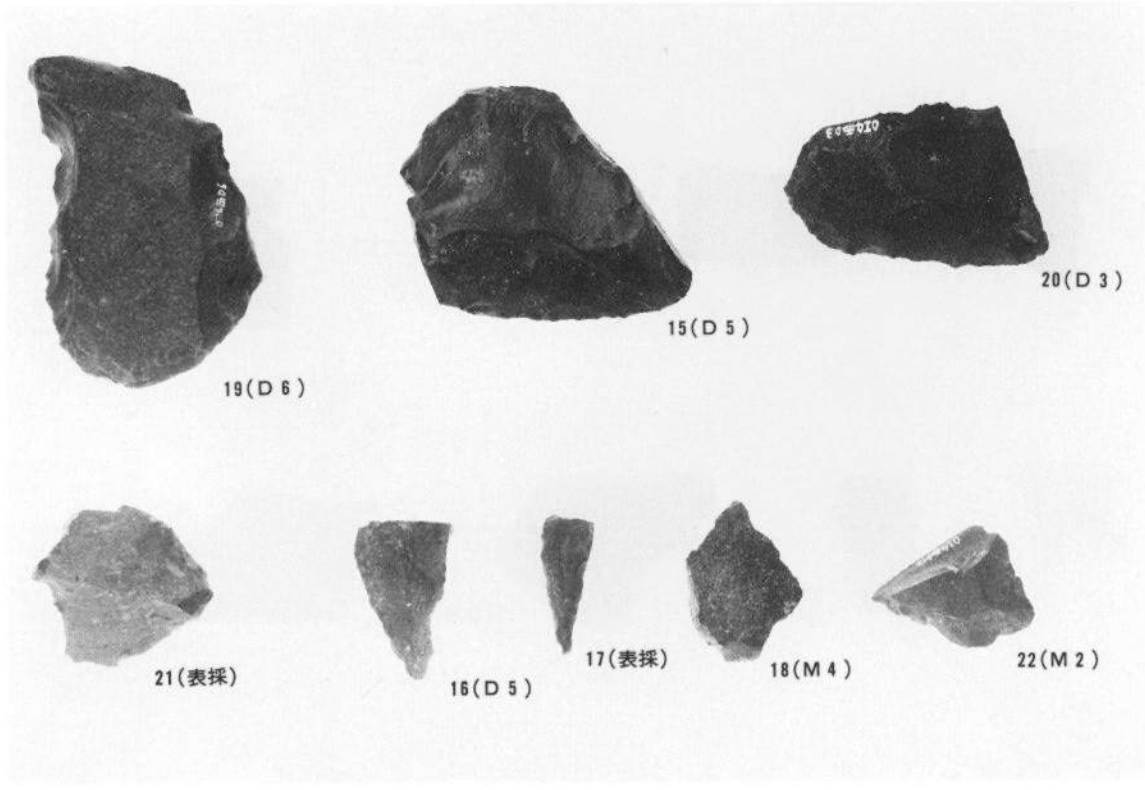


(2)　VI区西出土石庖丁・石鎌　　番号は挿図の番号と同じ

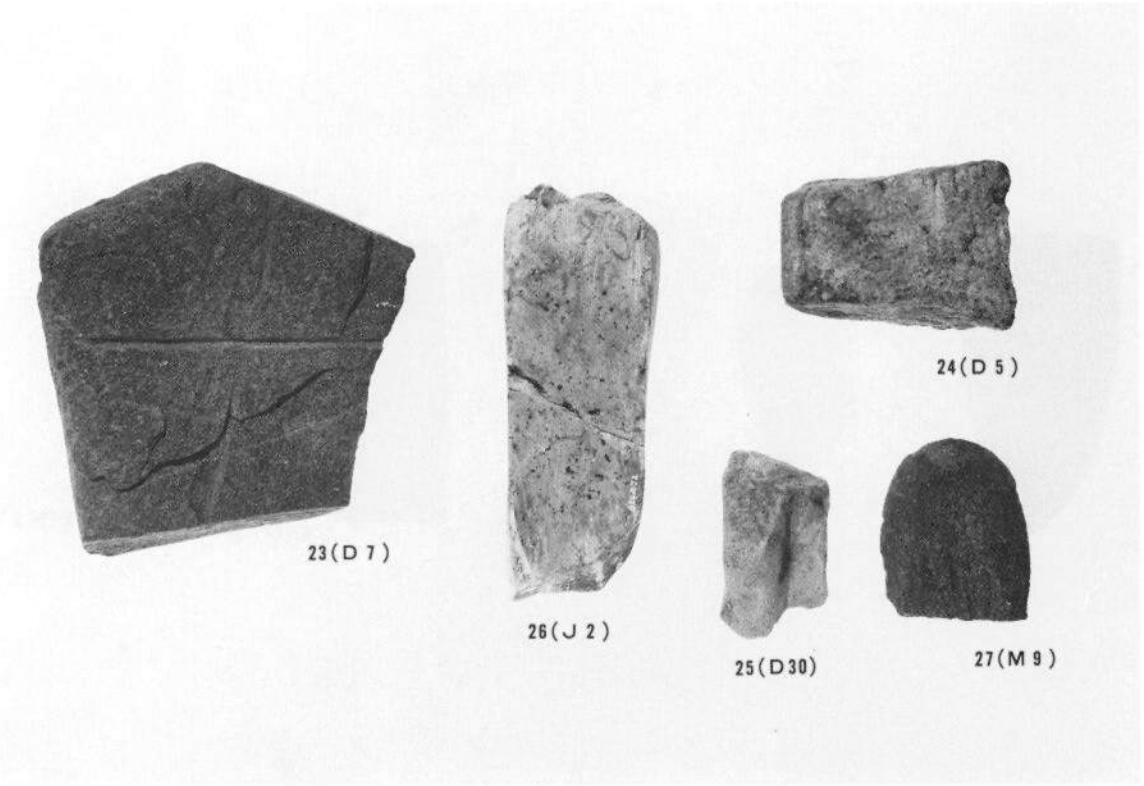
図版54



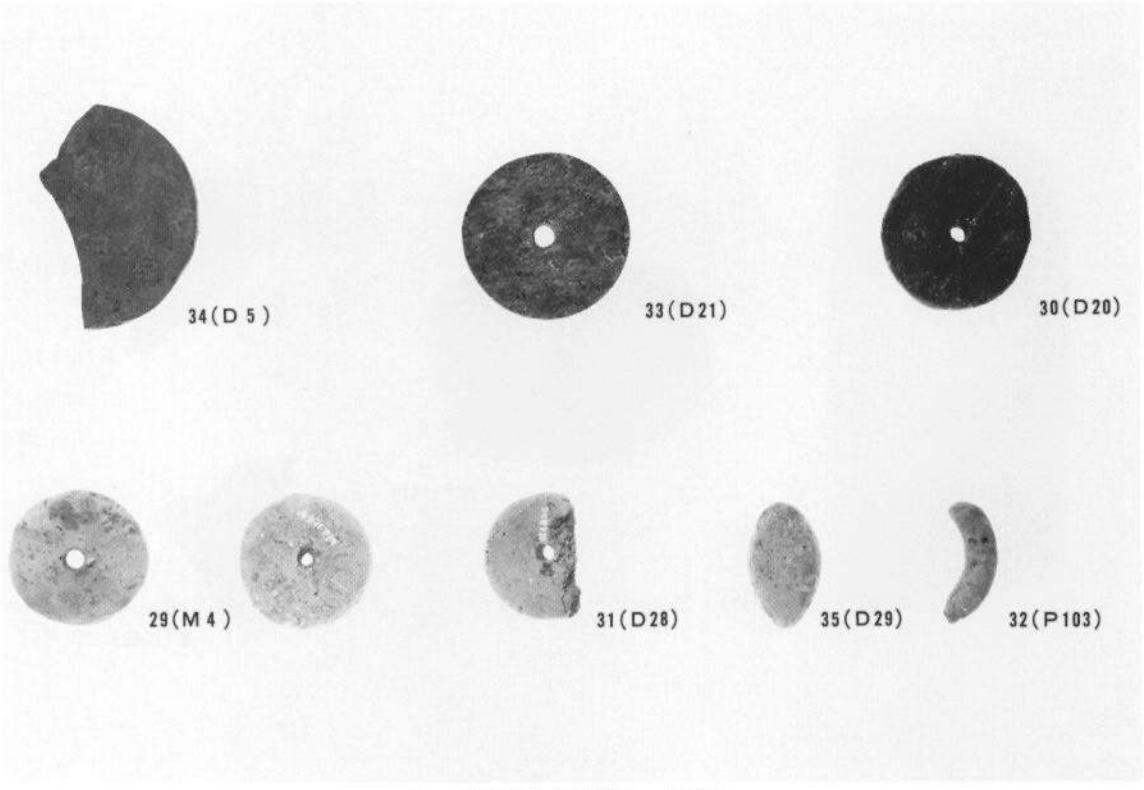
(1) Ⅵ区西・東出土石剣



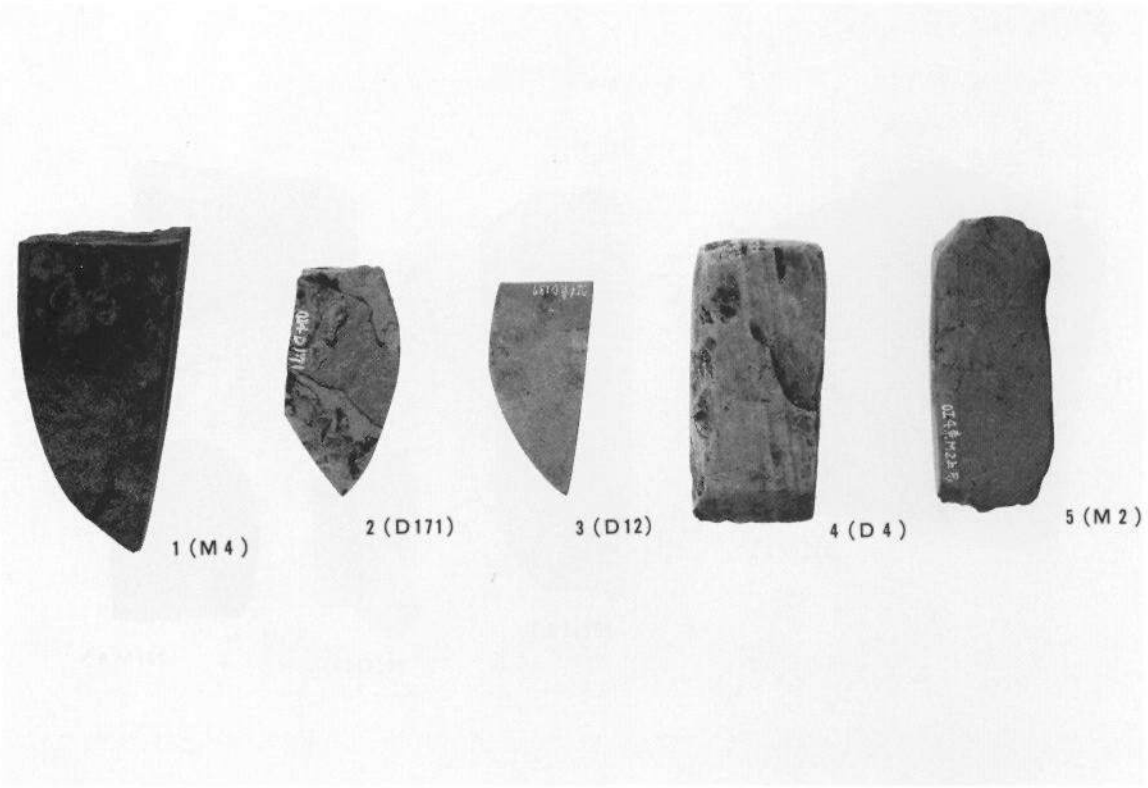
(2) Ⅵ区西出土スクレイパー・錐



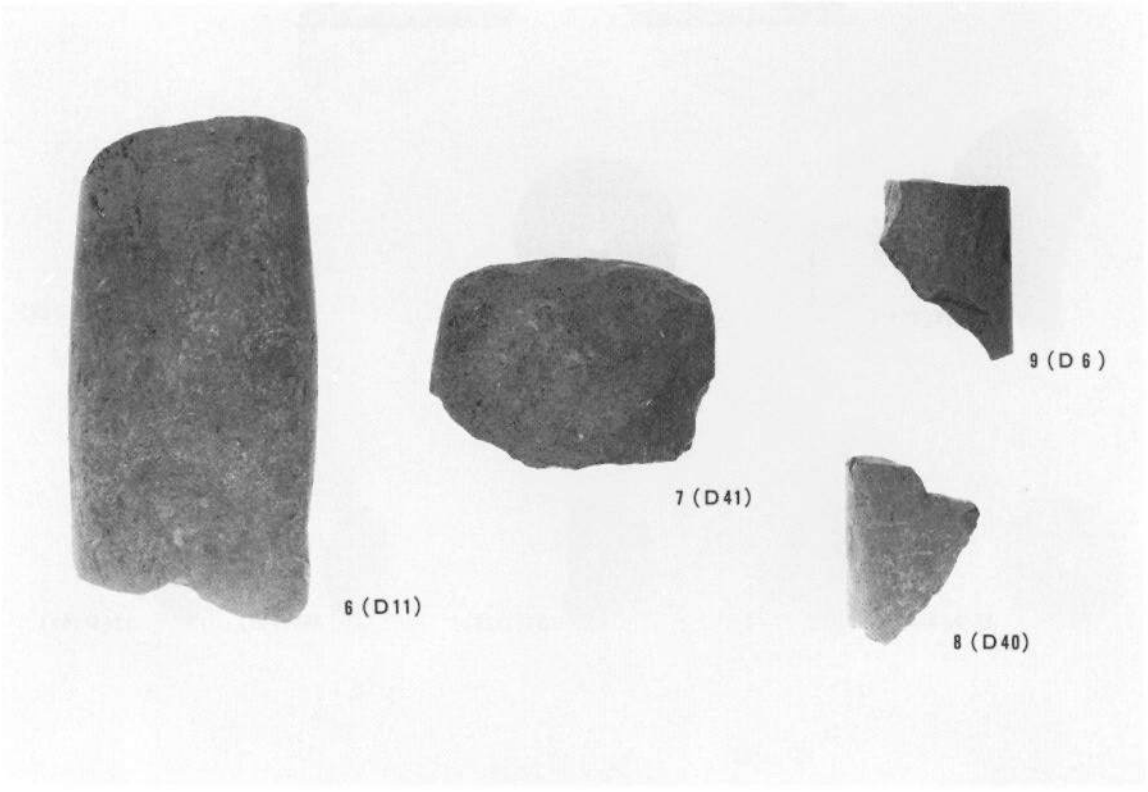
(1) VI区西出土砥石



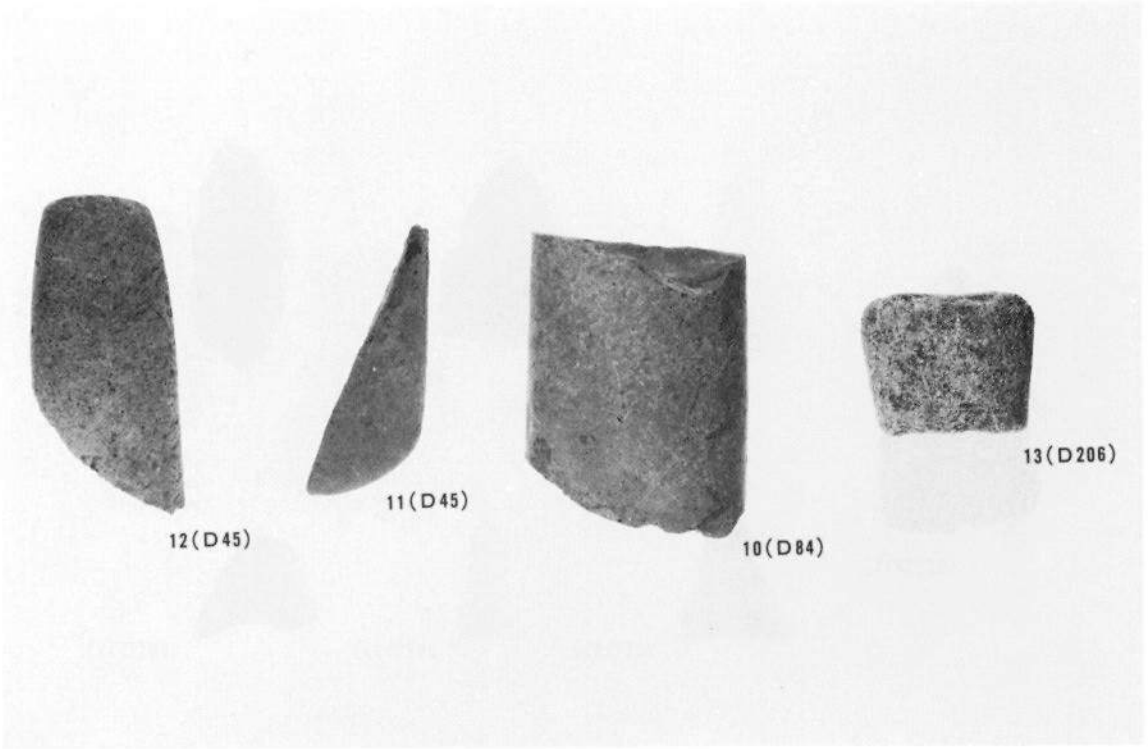
(2) VI区西出土石製品・土製品



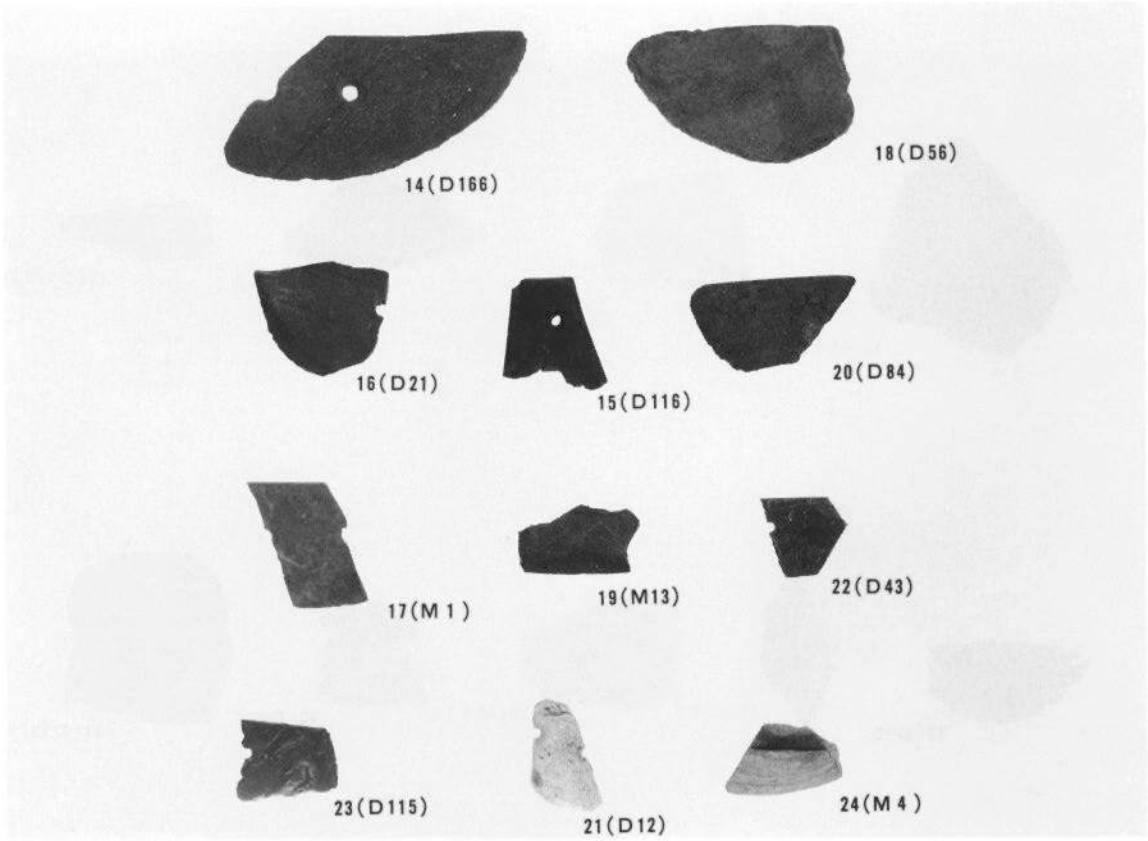
(1)　VI区東出土石斧①



(2)　VI区東出土石斧②

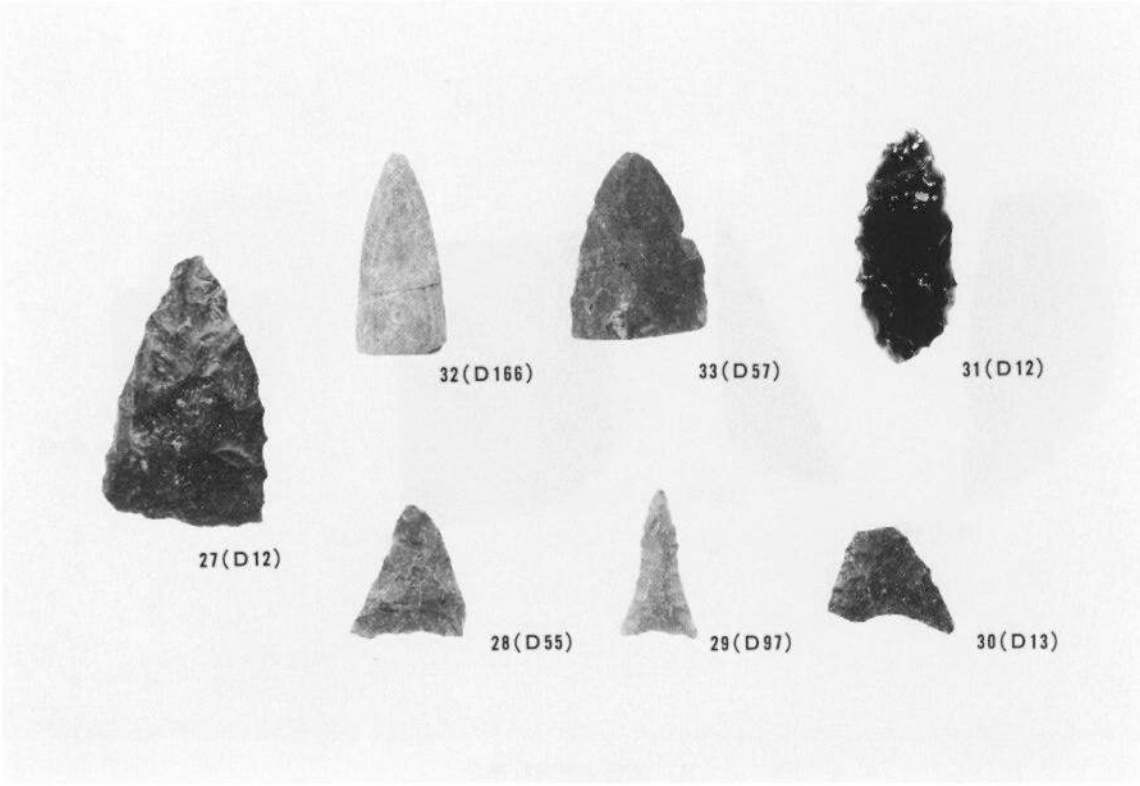


(1)　Ⅵ区東出土石斧③

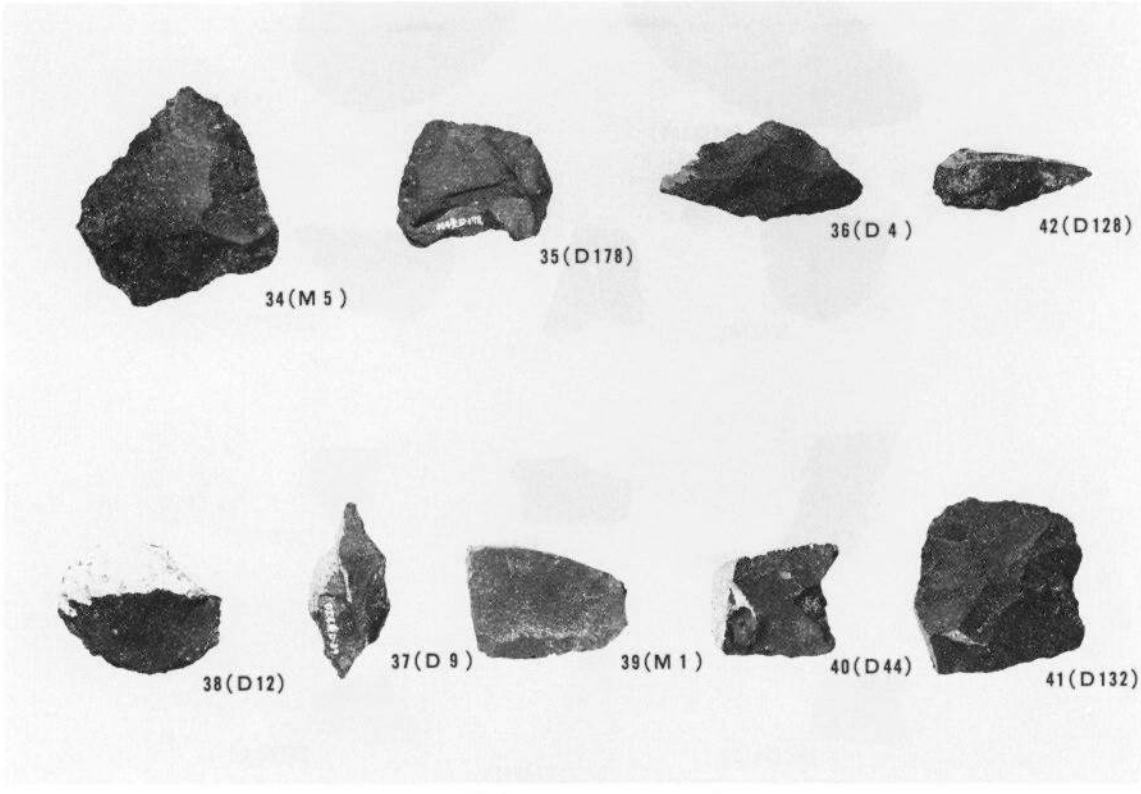


(2)　Ⅵ区東出土石庖丁

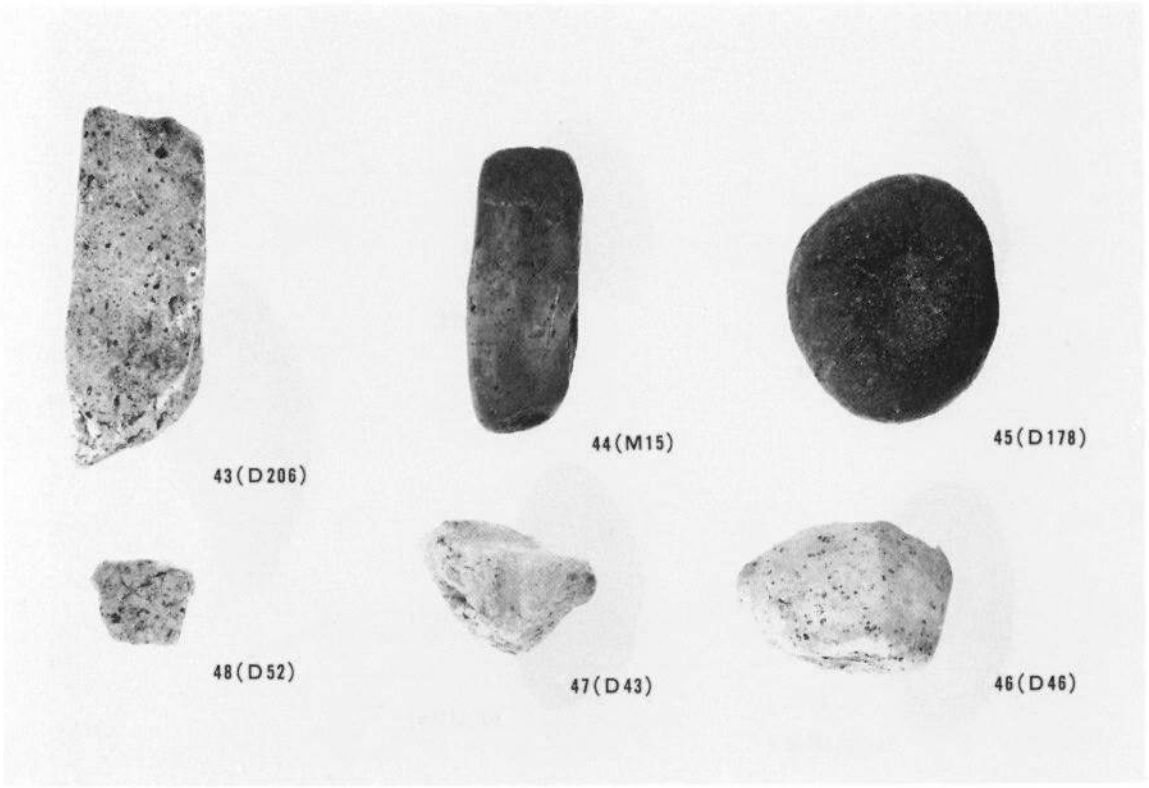
図版58



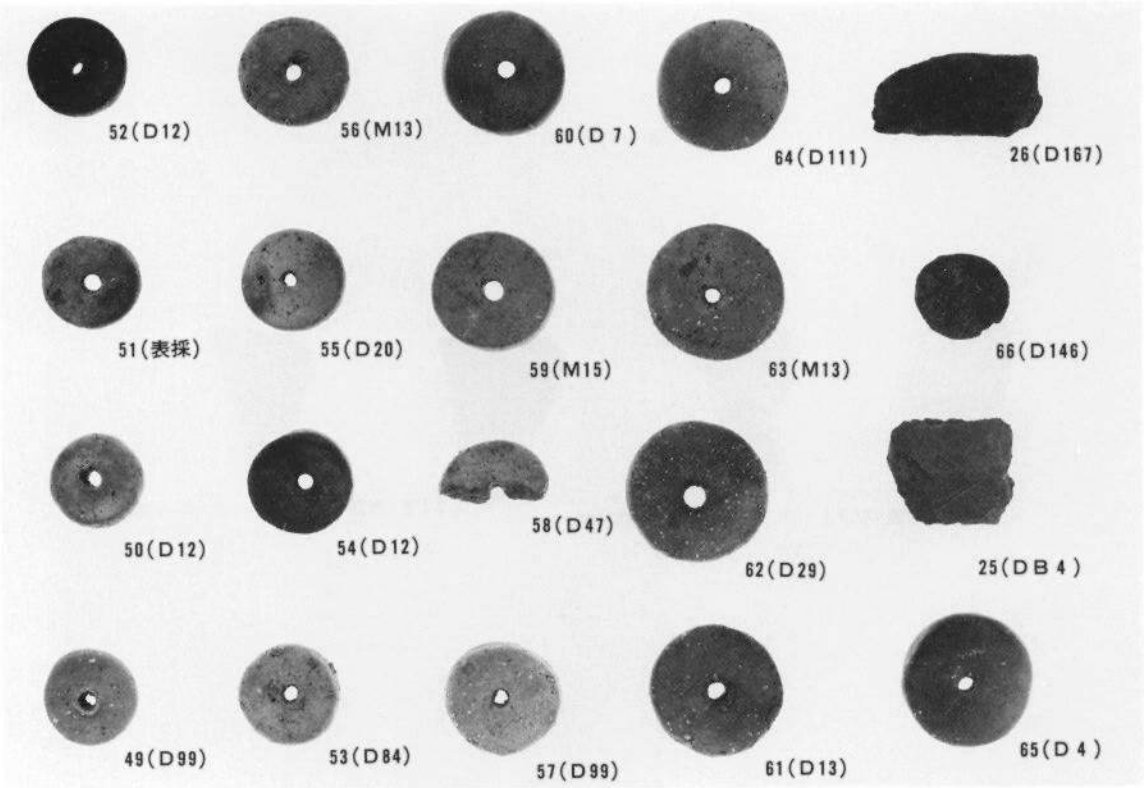
(1) Ⅵ区東出土石鏃



(2) Ⅵ区東出土スクレイパー・錐

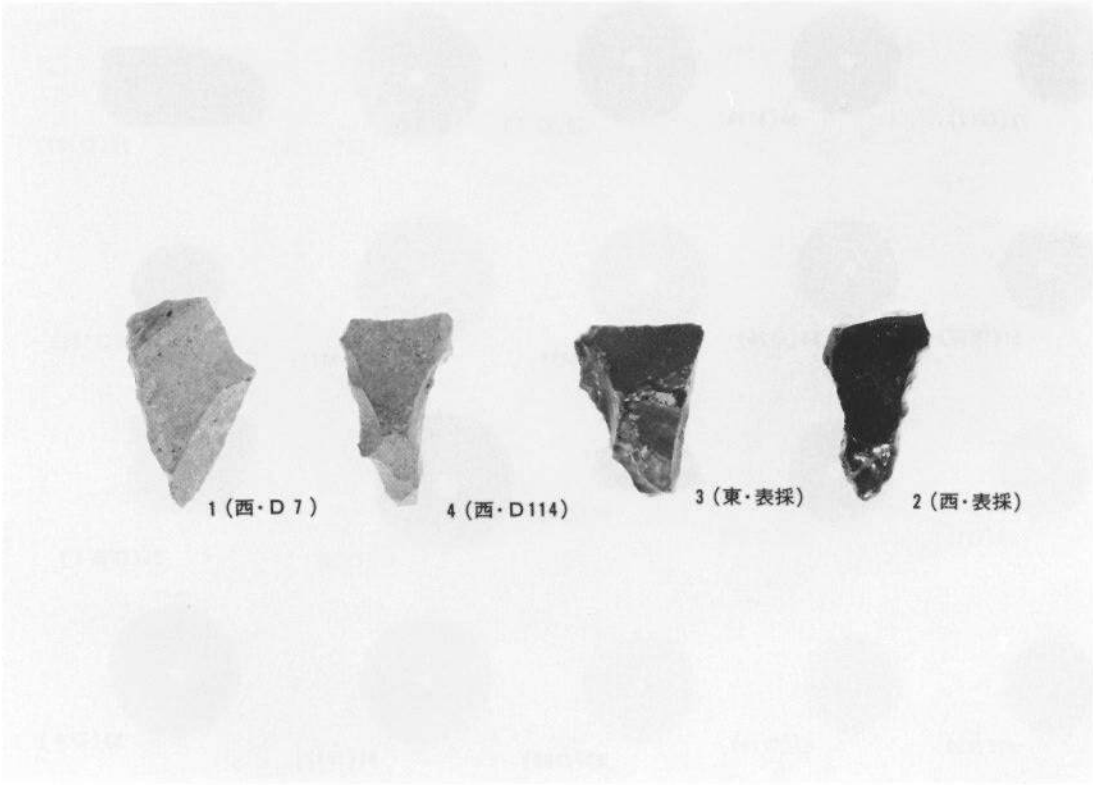


(1) Ⅵ区東出土砥石

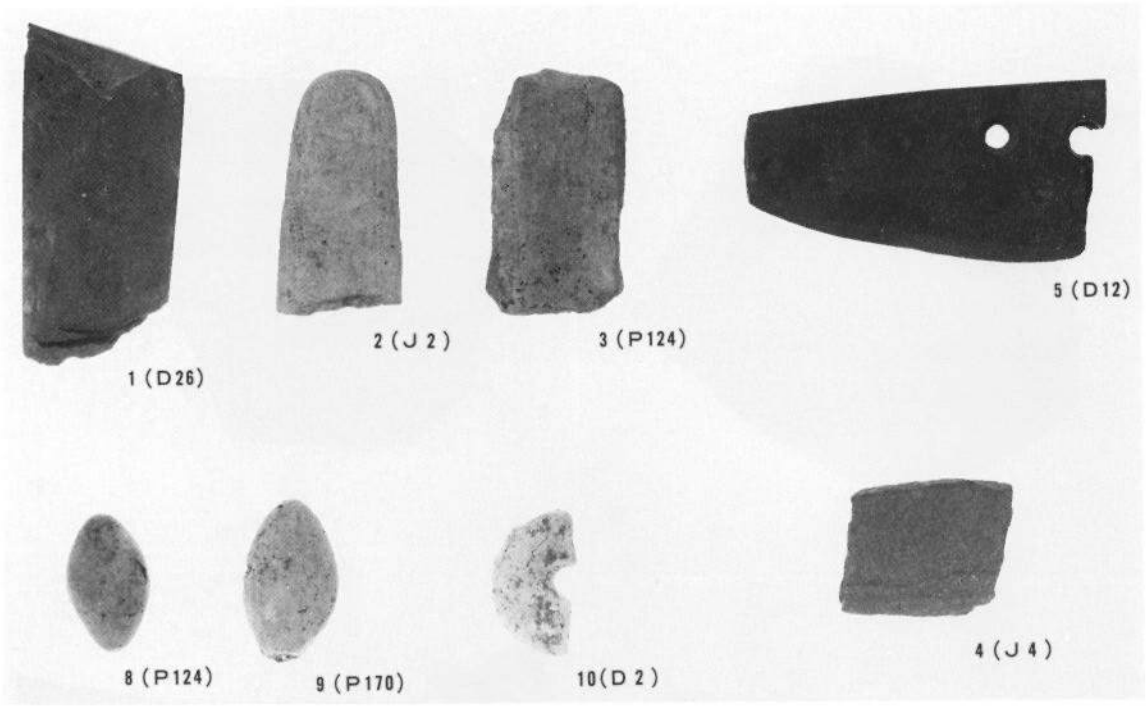


(2) Ⅵ区東出土紡錘車・石剣

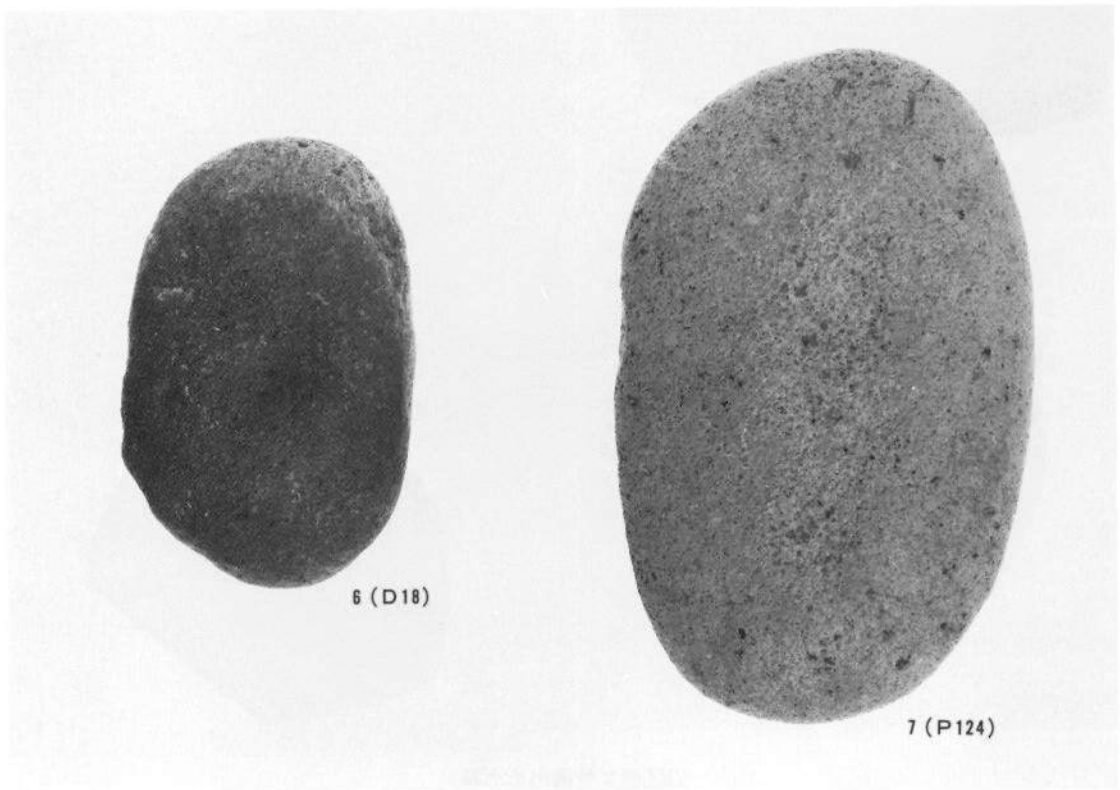
(1) Ⅵ区東出土土製品



(2) Ⅵ区西・東出土旧石器

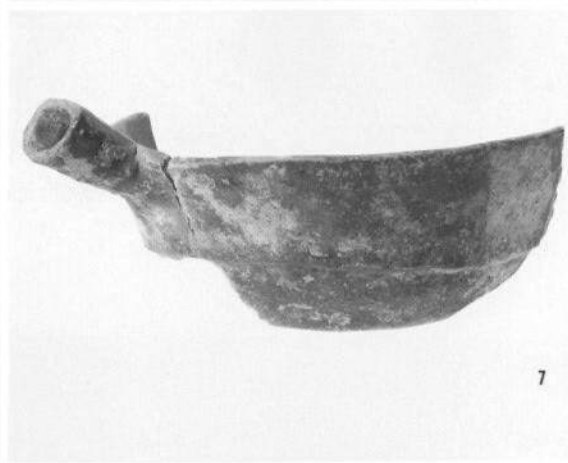


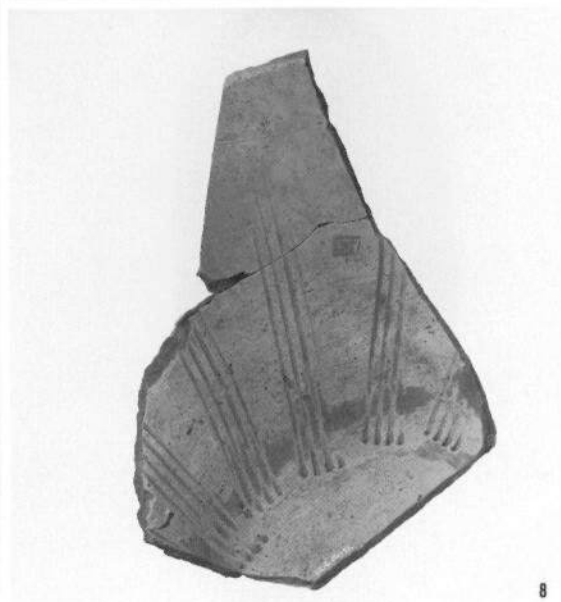
(1) Ⅶ区出土石器及び土製品



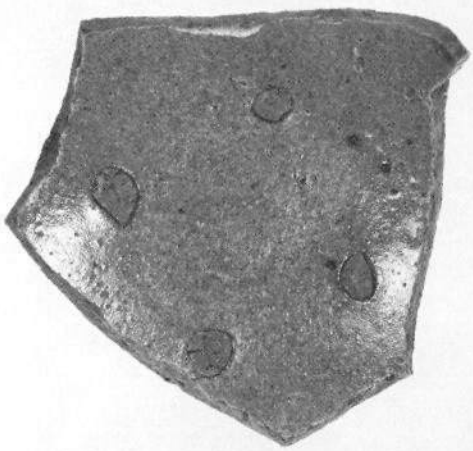
(2) Ⅶ区出土石器

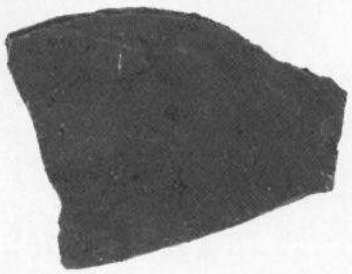
図版62



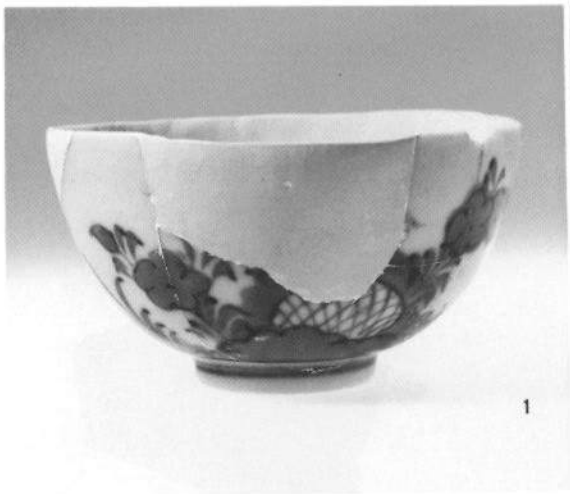


VI区西２号溝出土土器



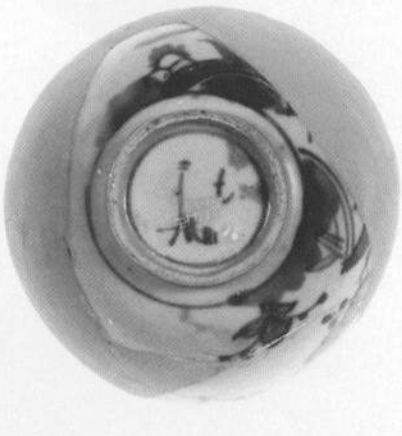


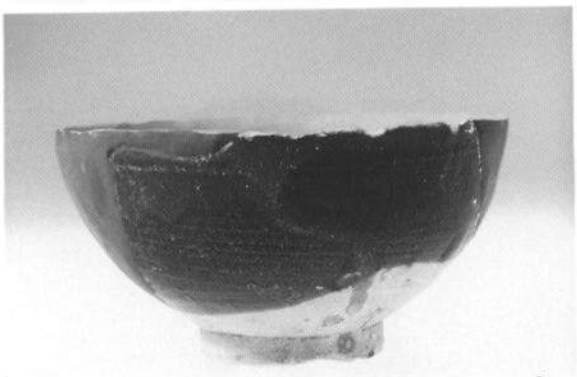
VI区西3号溝出土陶磁器


1

2

1

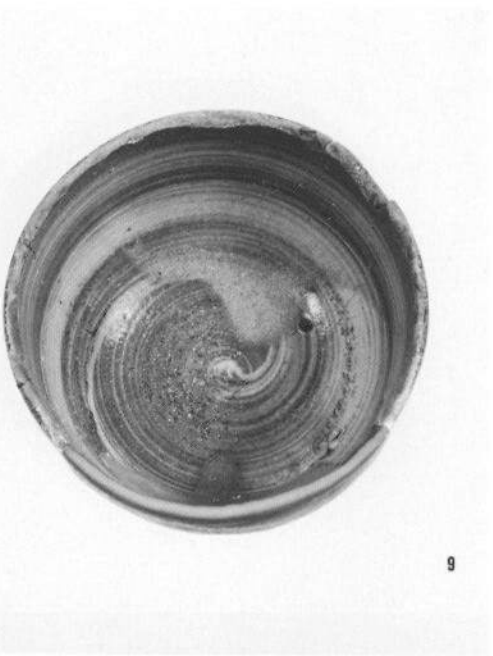

2

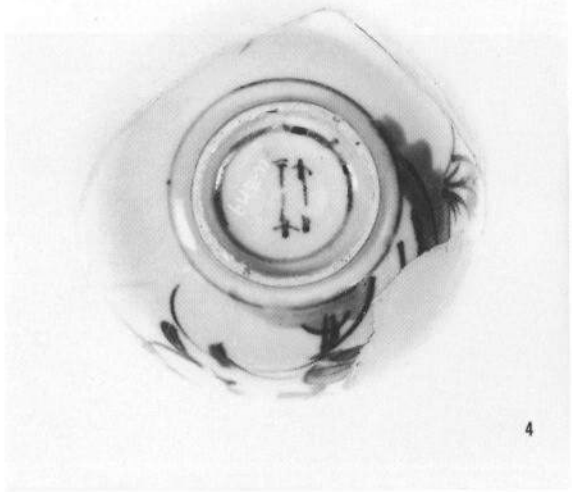

3

6

VI区西9号溝出土陶磁器①

4


9

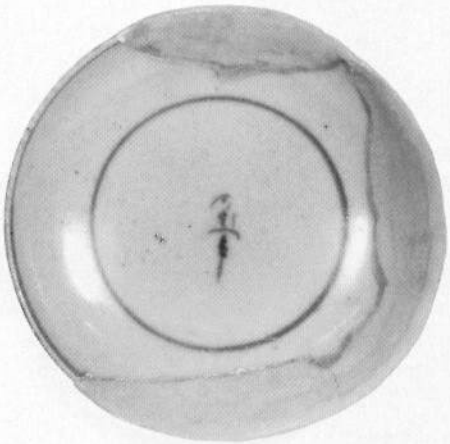

4

9

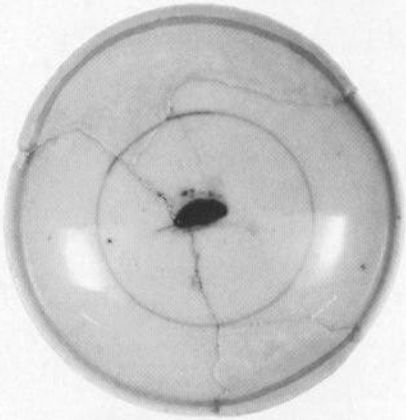
7

15

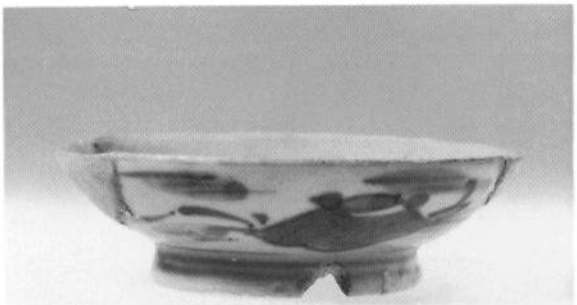
VI区西9号溝出土陶磁器②



12

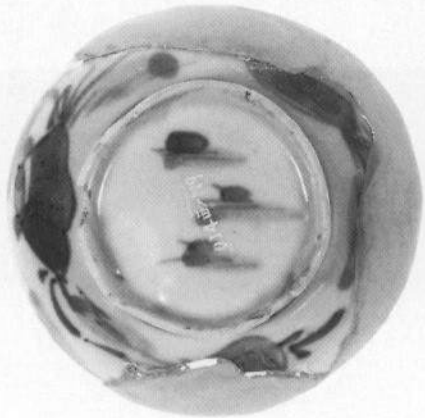


13



12

13

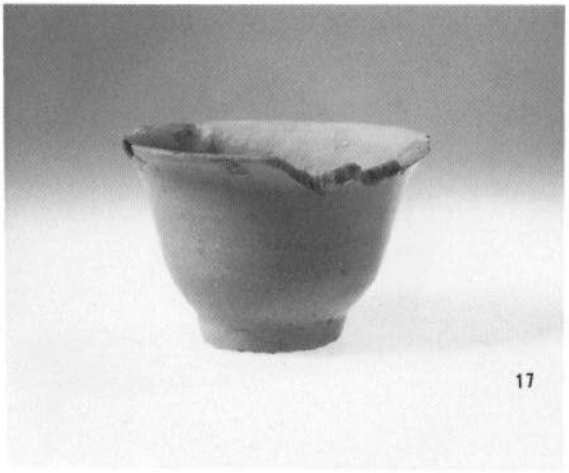


12

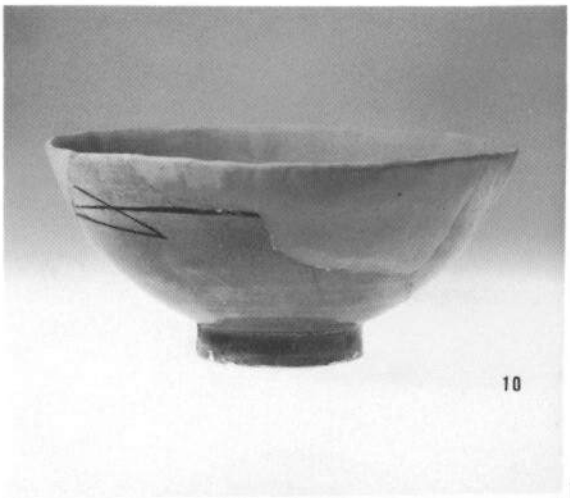
13

Ⅳ区西９号溝出土陶磁器③

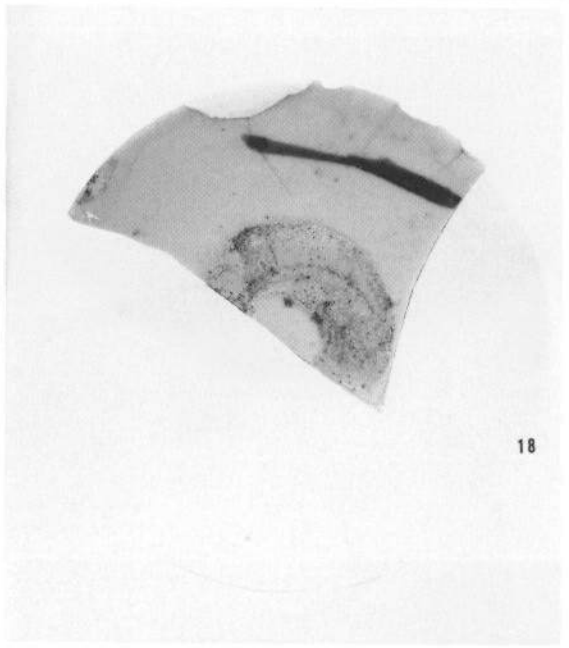
10



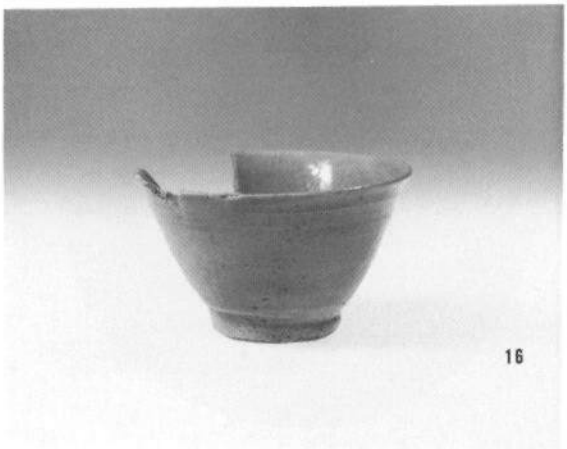
17



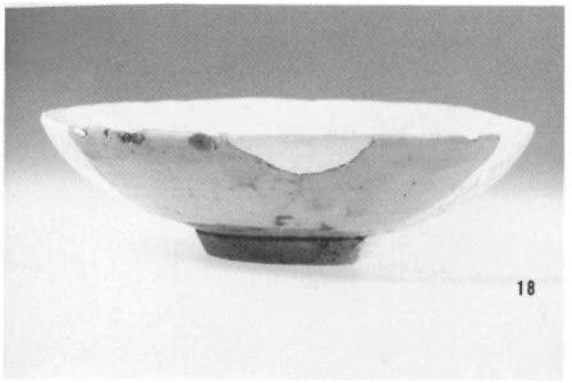
10



18



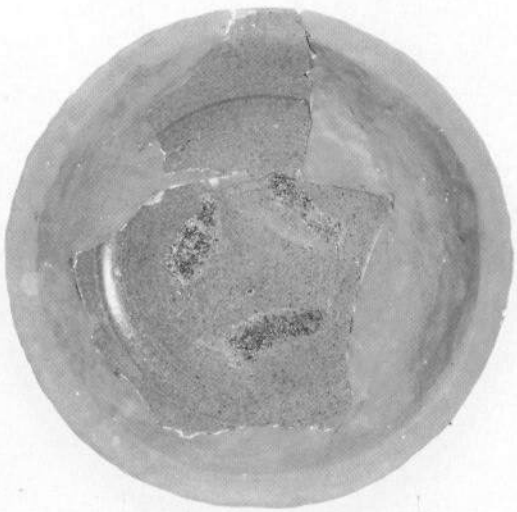
16



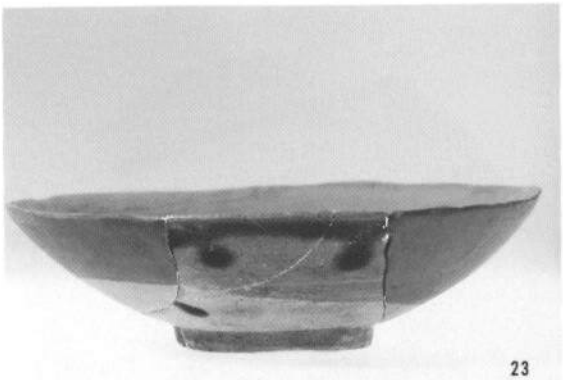
18

VI区西9号溝出土陶磁器④

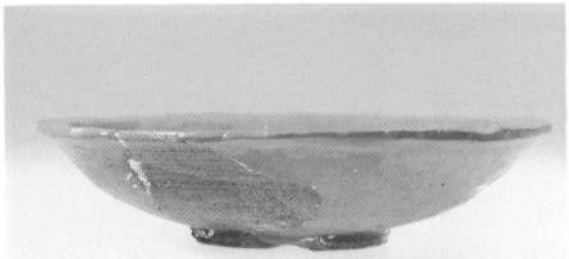
28



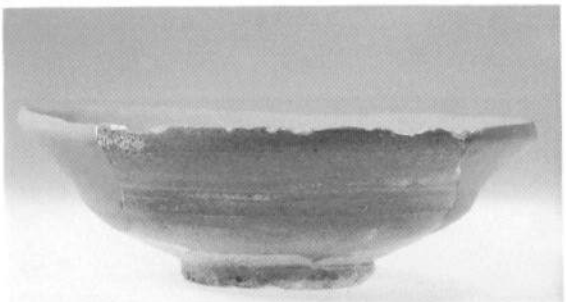
27



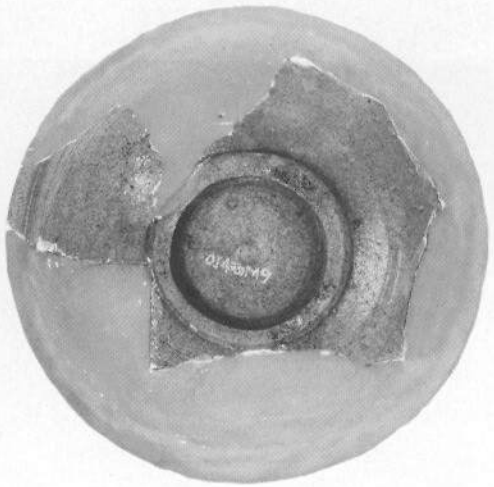
23



27

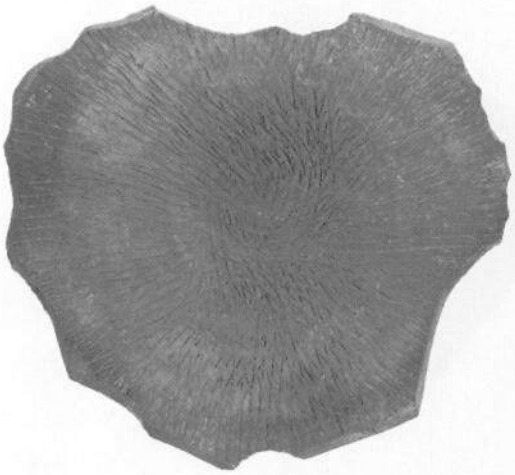


24

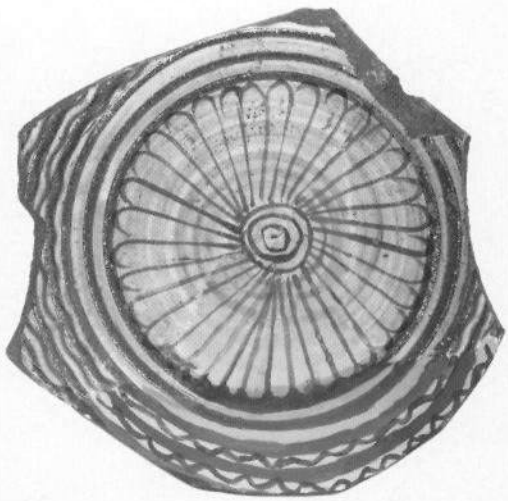


27

VI区西9号溝出土陶磁器⑤

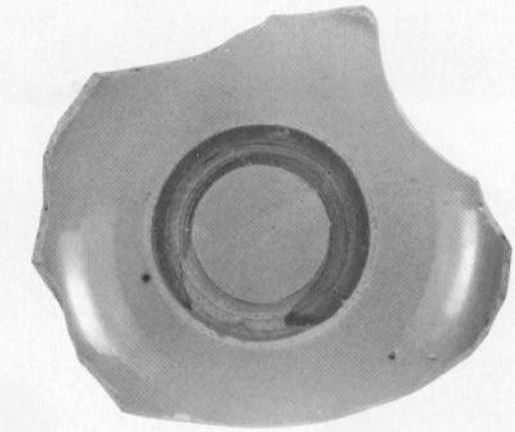


30



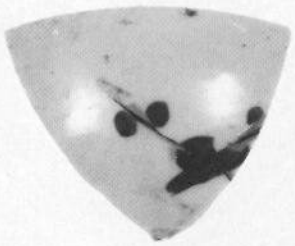
33

32

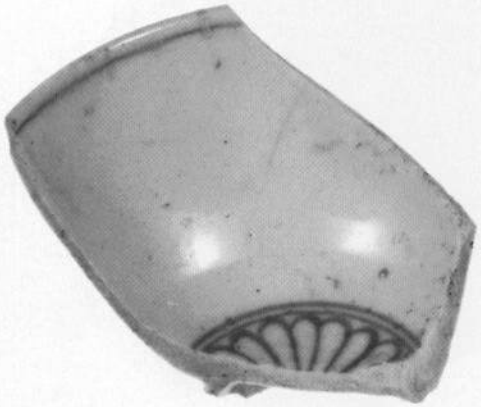


34

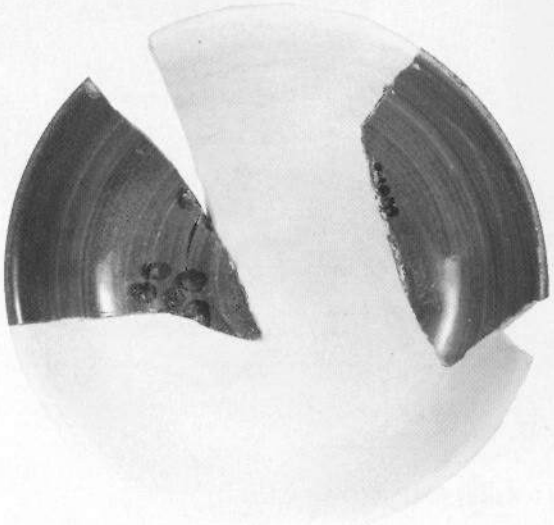
VI区西9号溝出土陶磁器⑥



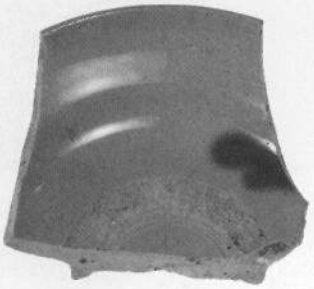
5



8

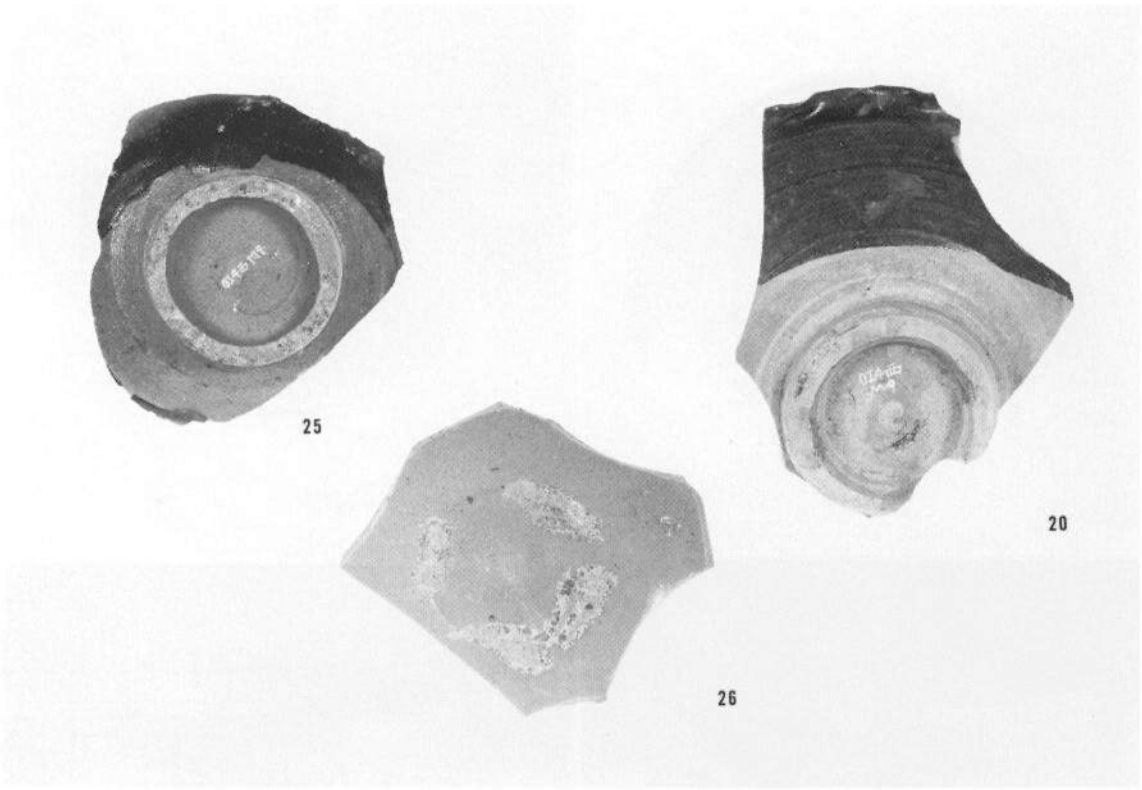


22

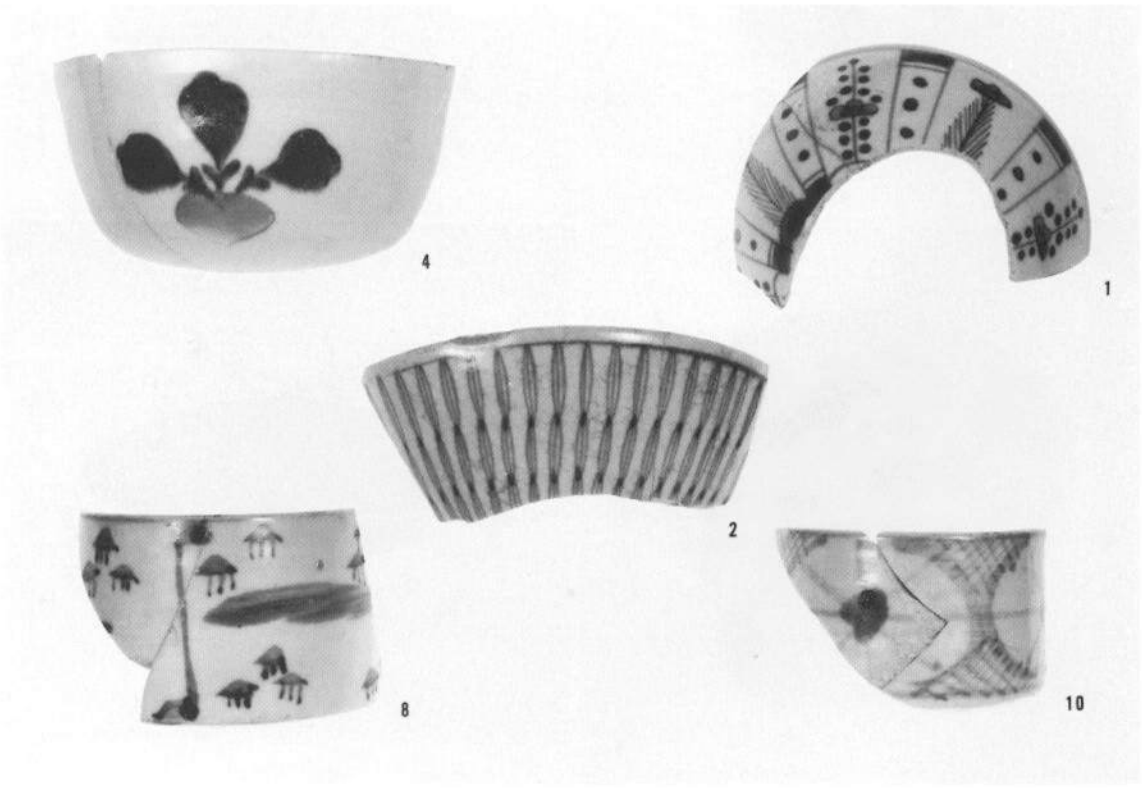


19

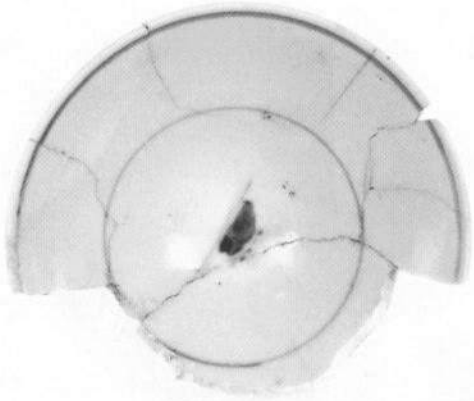
VI区西9号溝出土陶磁器⑦



(1)　Ⅵ区西９号溝出土陶磁器⑧



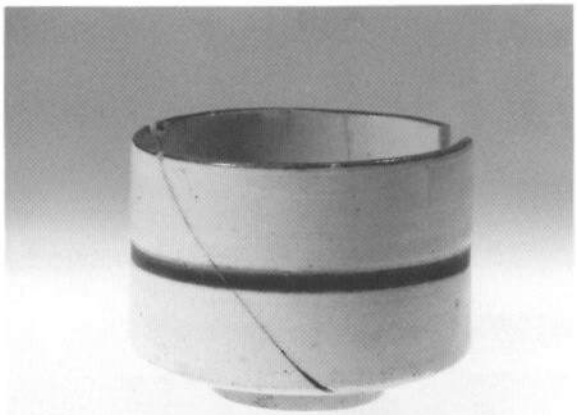
(2)　Ⅵ区西13号溝出土陶磁器①



3

5

3

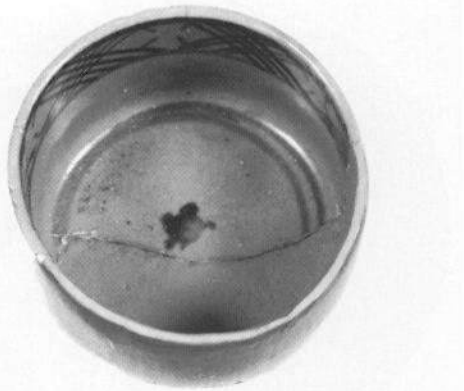


7

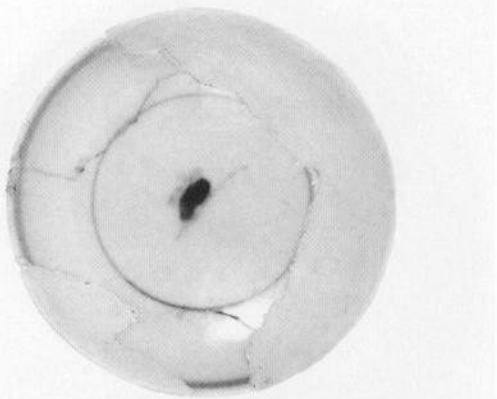
3

14

VI区西13号溝出土陶磁器②

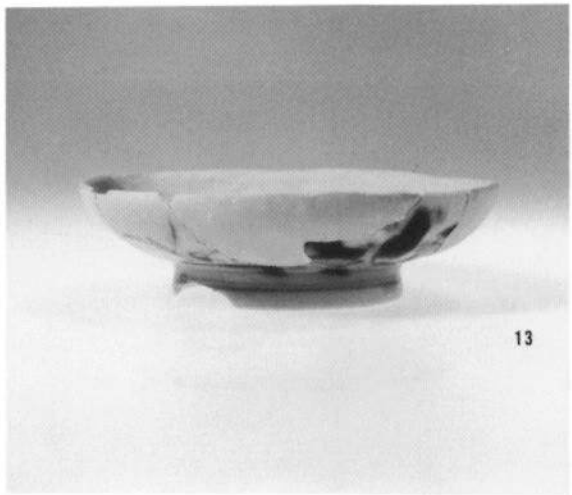


9



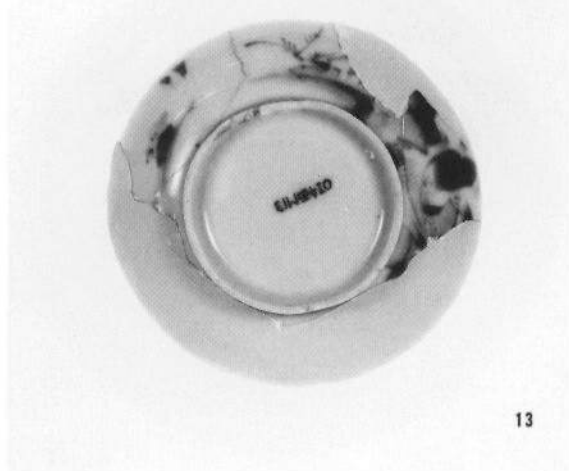
13

9



13

19



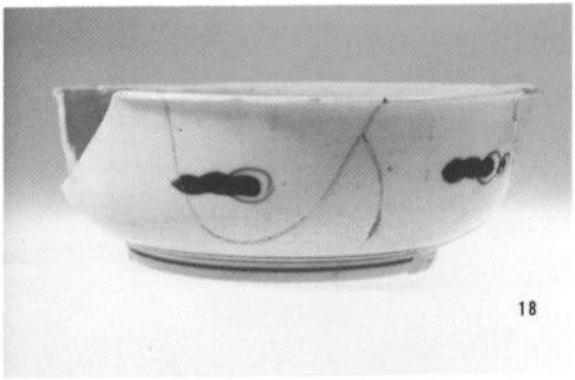
13

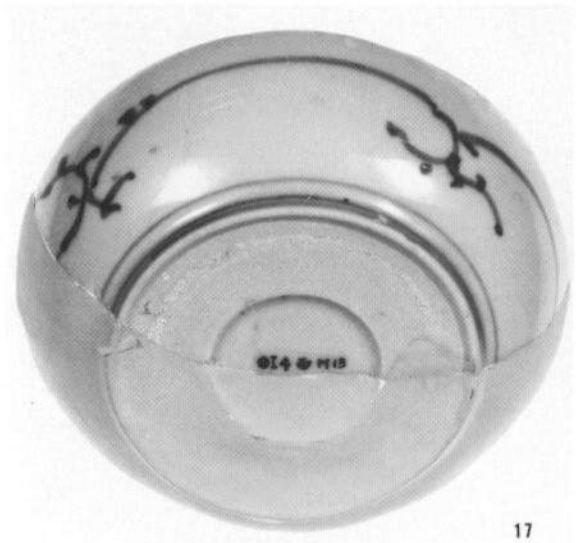
VI区西13号溝出土陶磁器③

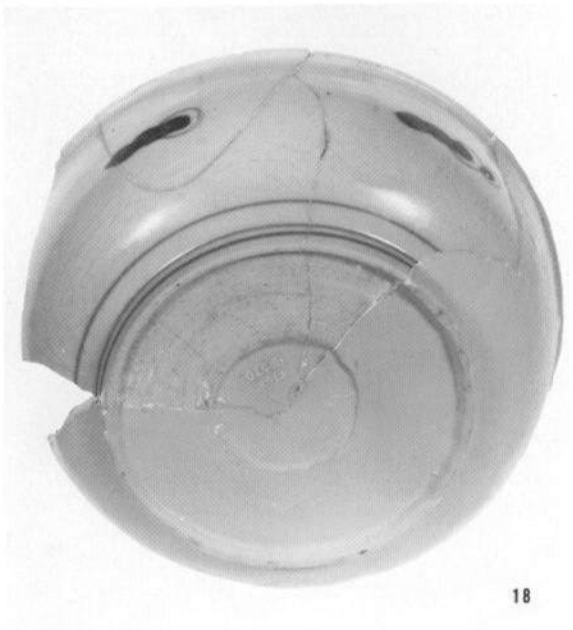
17

18

17

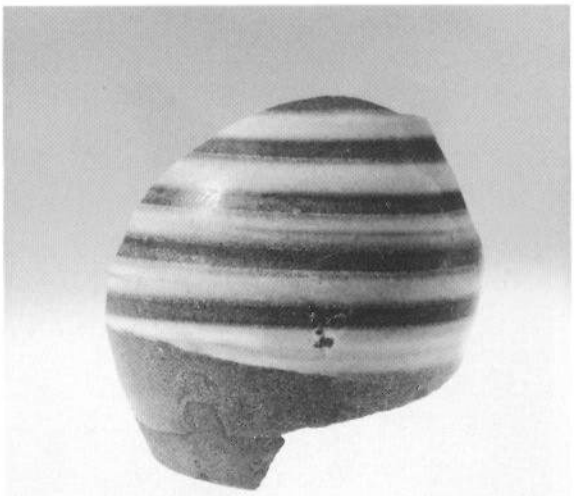

18


17


18

VI区西13号溝出土陶磁器④

16(M13)

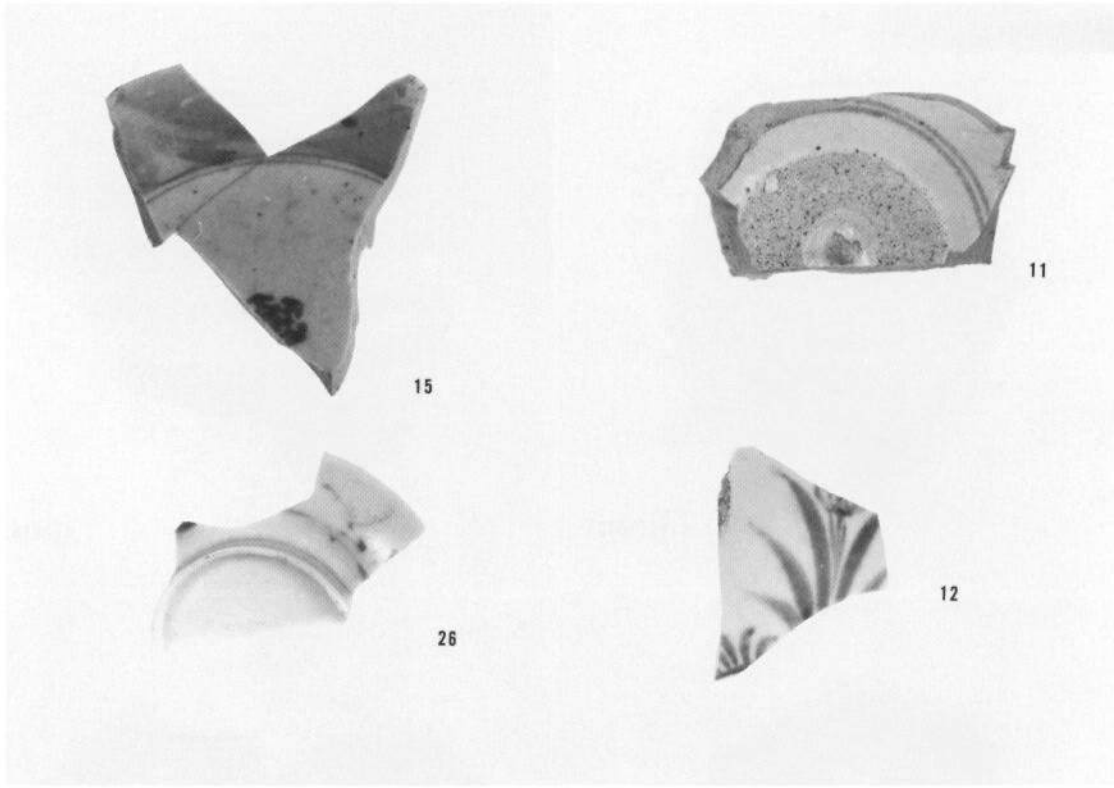


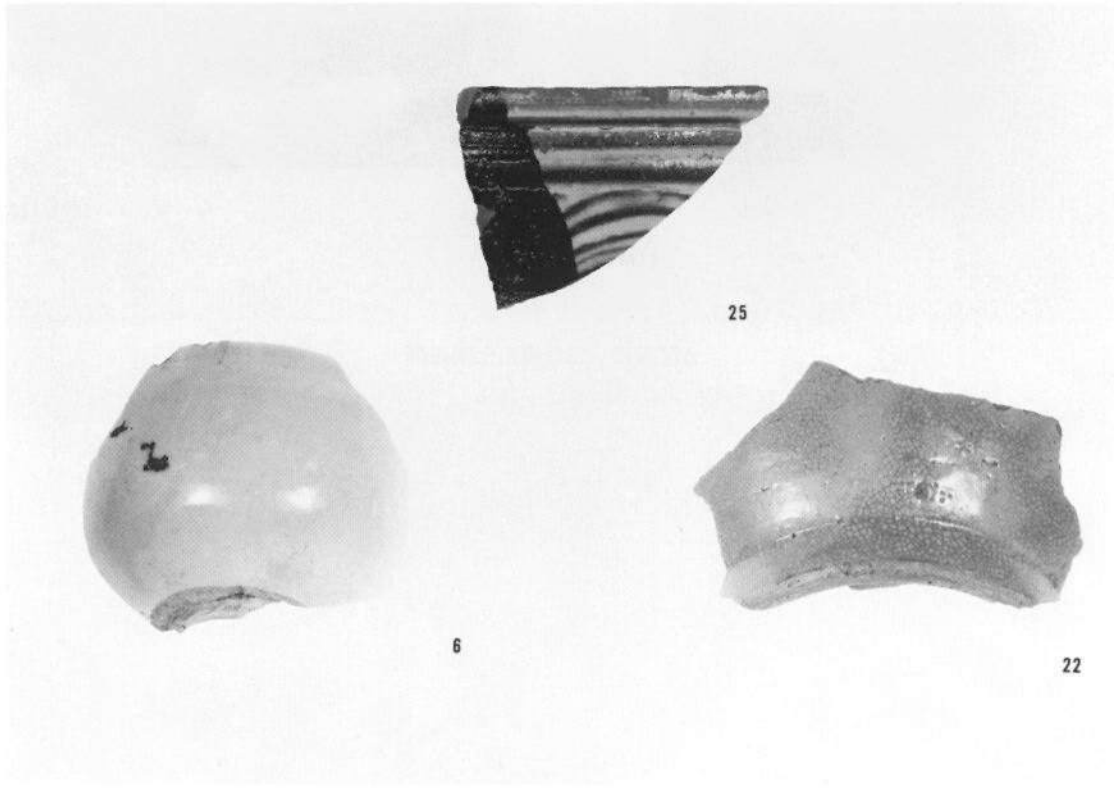
4(M15)

16(M13)

10(M18)

VI区西13、18号溝出土陶磁器

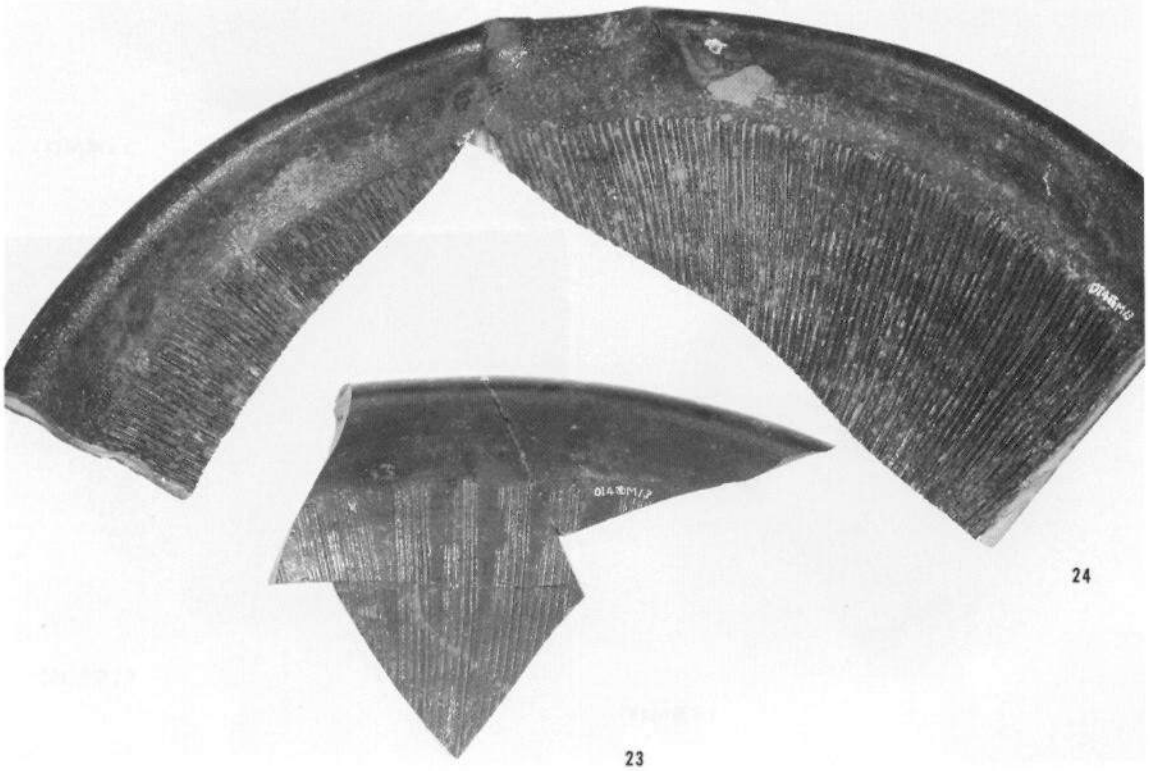




VI区西13号溝出土陶磁器⑤

20

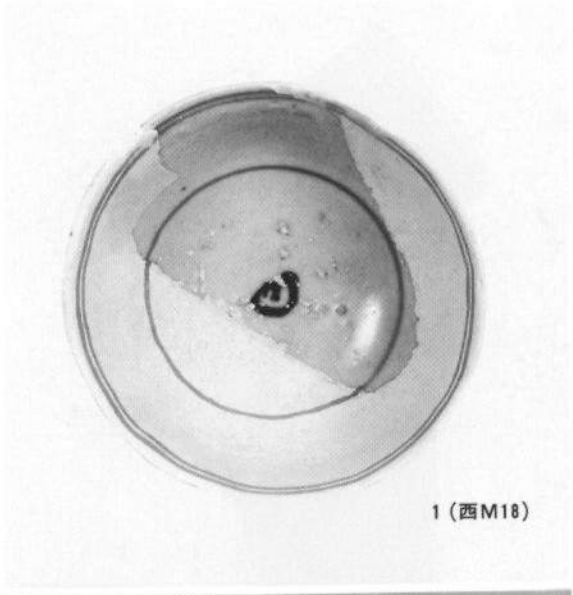
21



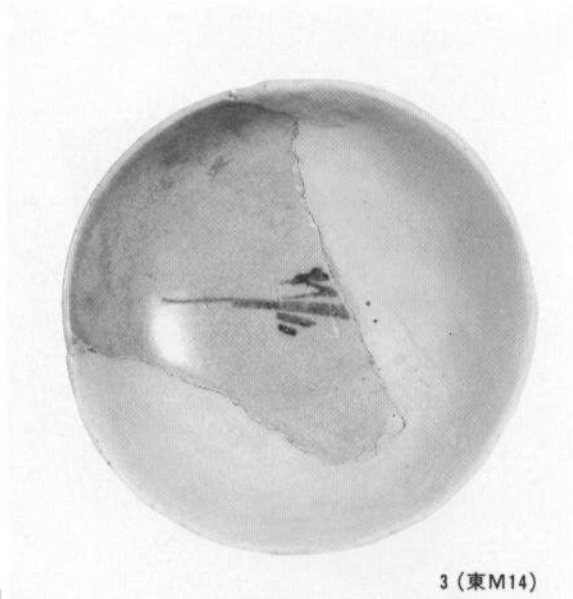
24

23

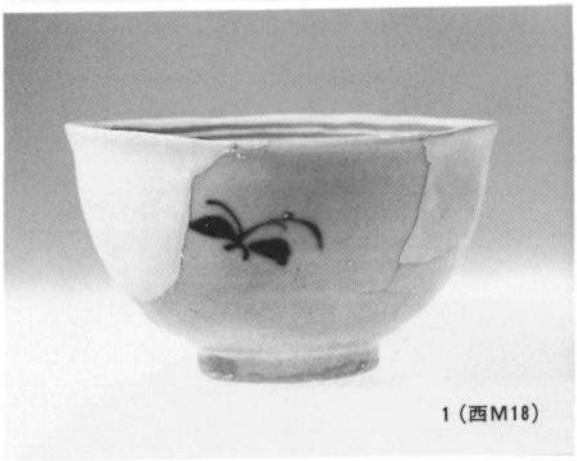
VI区西13号溝出土陶磁器⑥



1（西M18）



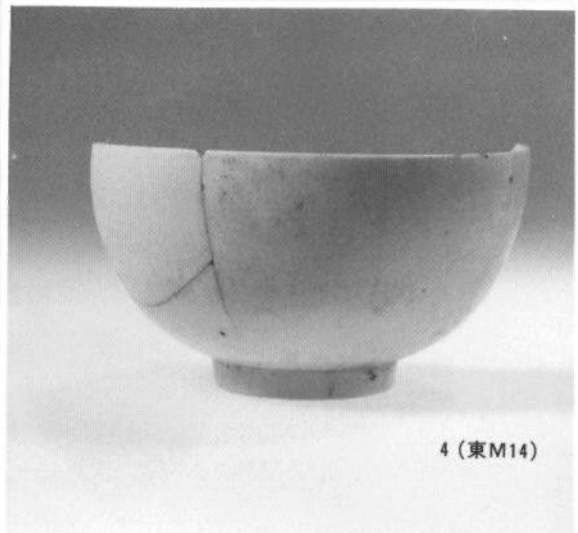
3（東M14）



1（西M18）

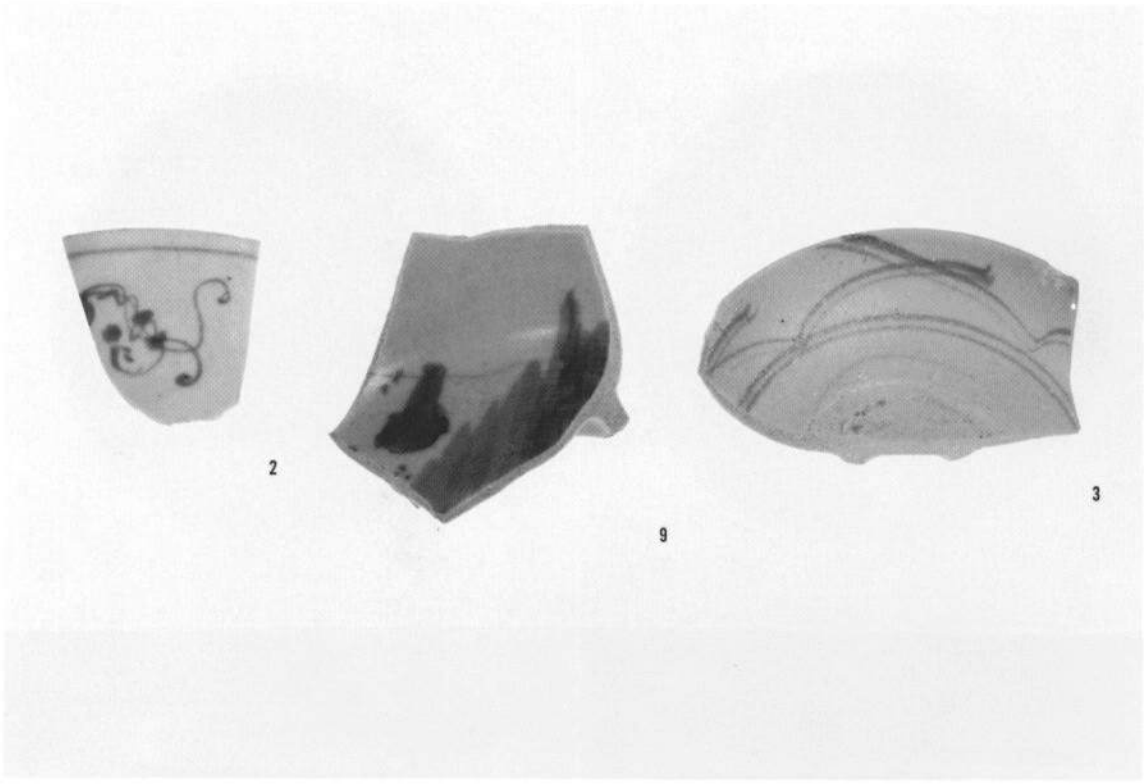
3（東M14）

1（西M18）



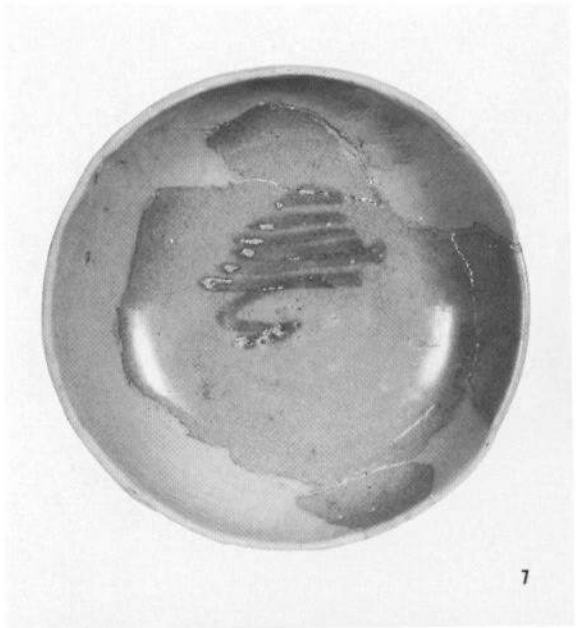
4（東M14）

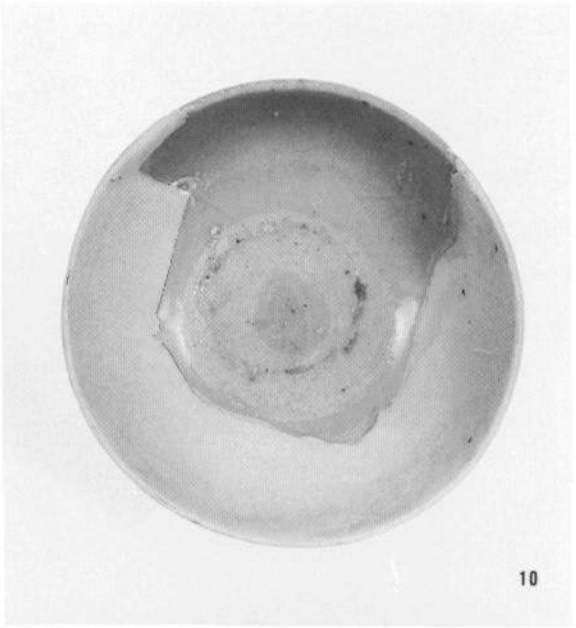
VI区西18号・VI区東14号溝出土陶磁器

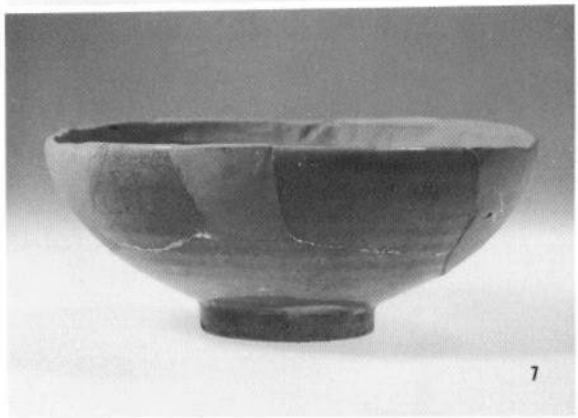


(1)　Ⅵ区西18号溝出土陶磁器

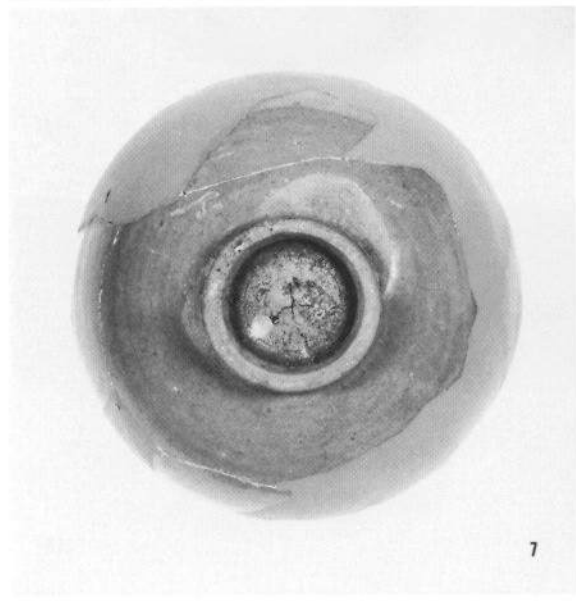
(2)　Ⅵ区東14号溝出土陶磁器

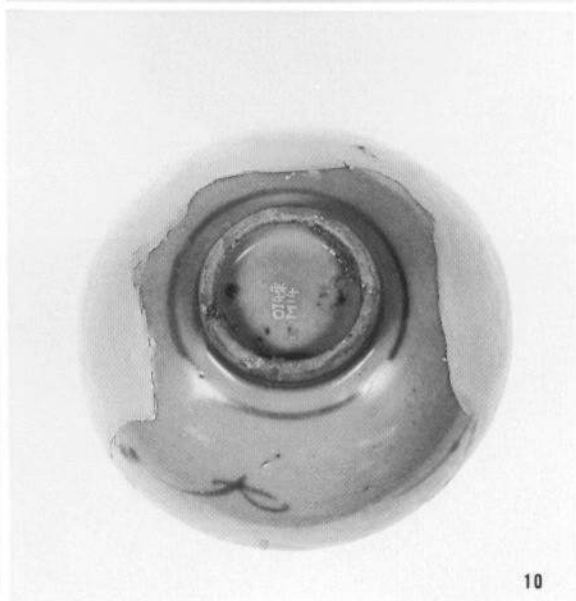

7


10

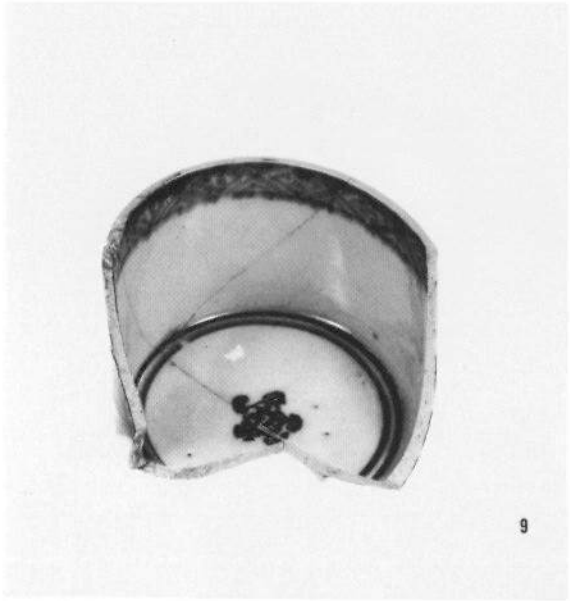

7

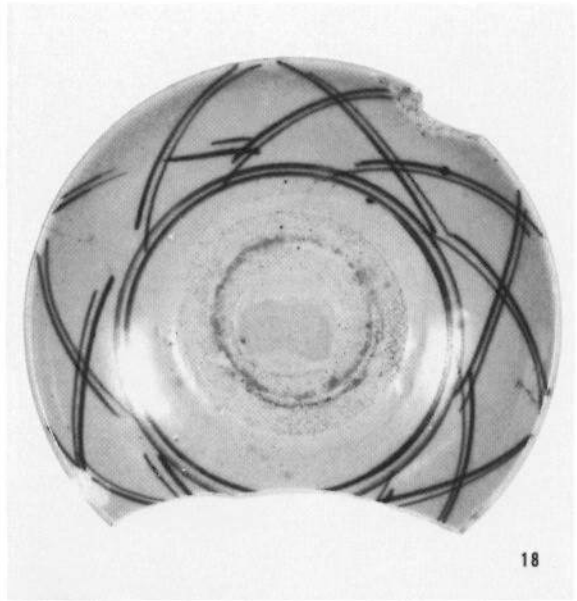
10

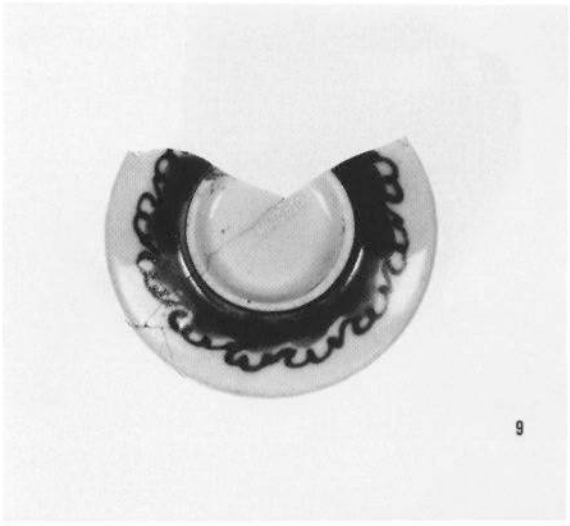

7

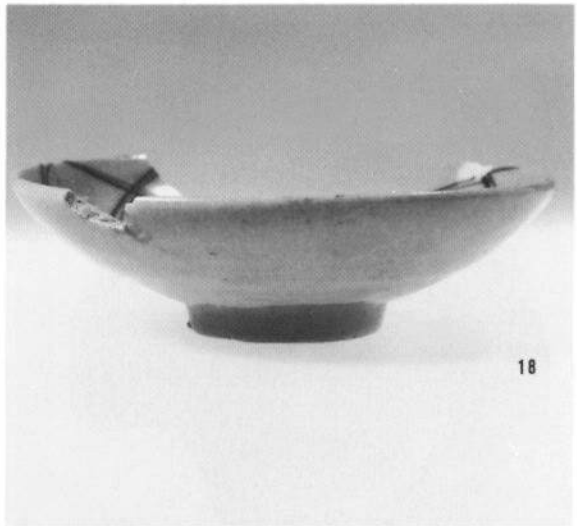

10

VI区東14号溝出土陶磁器①

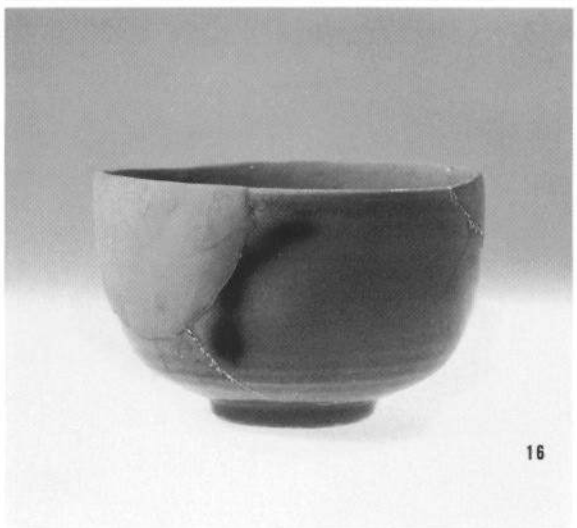

9


18

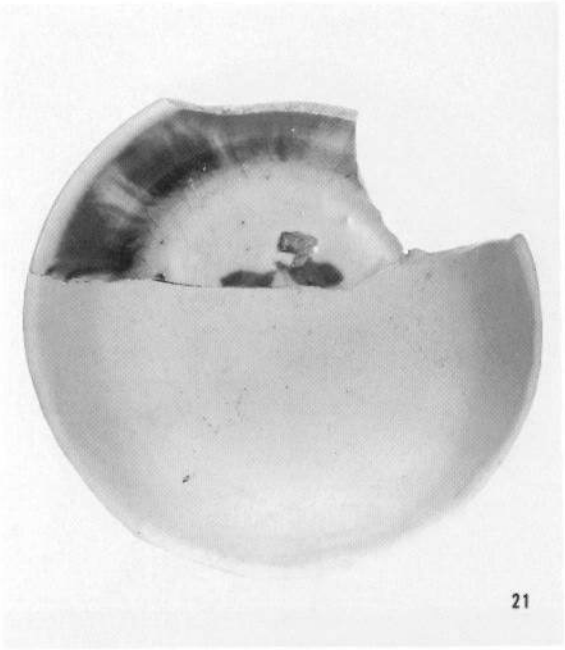

9

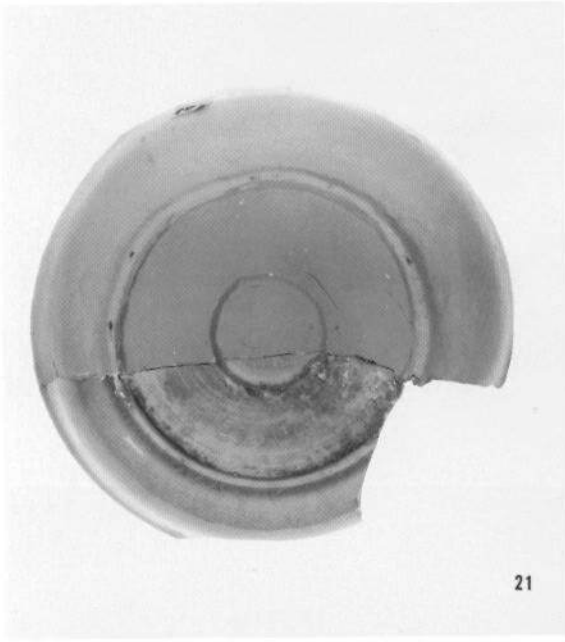

18

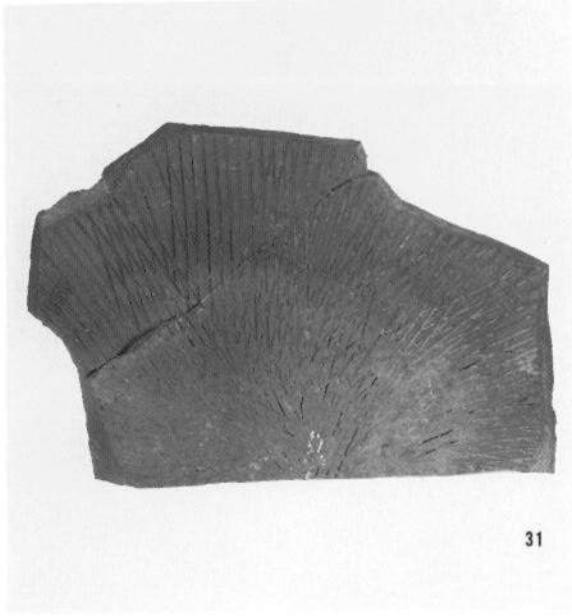
15


16

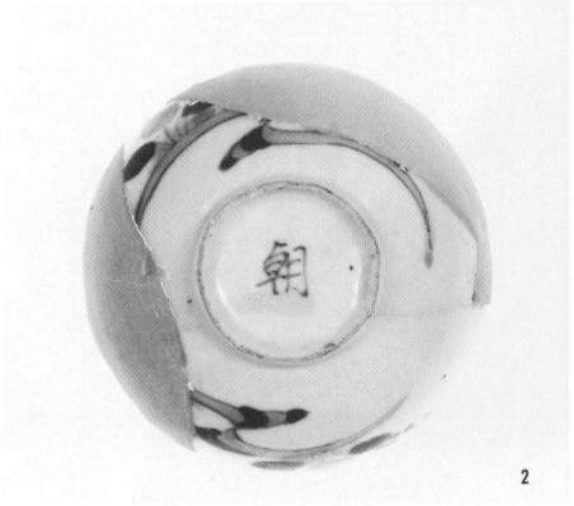
VI区東14号溝出土陶磁器②

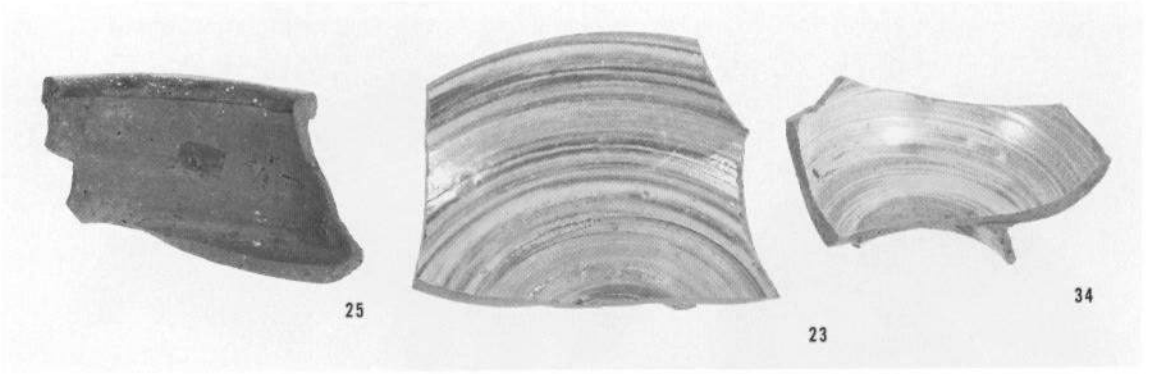


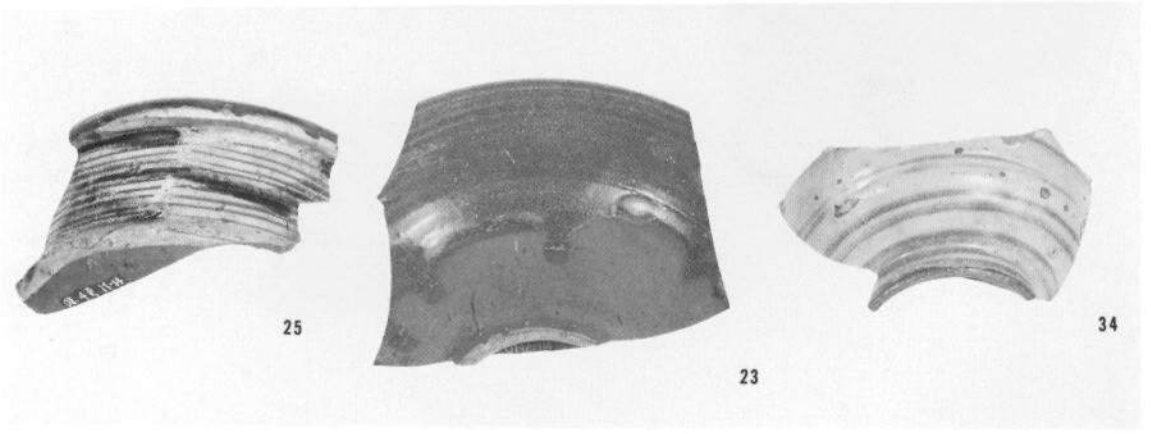




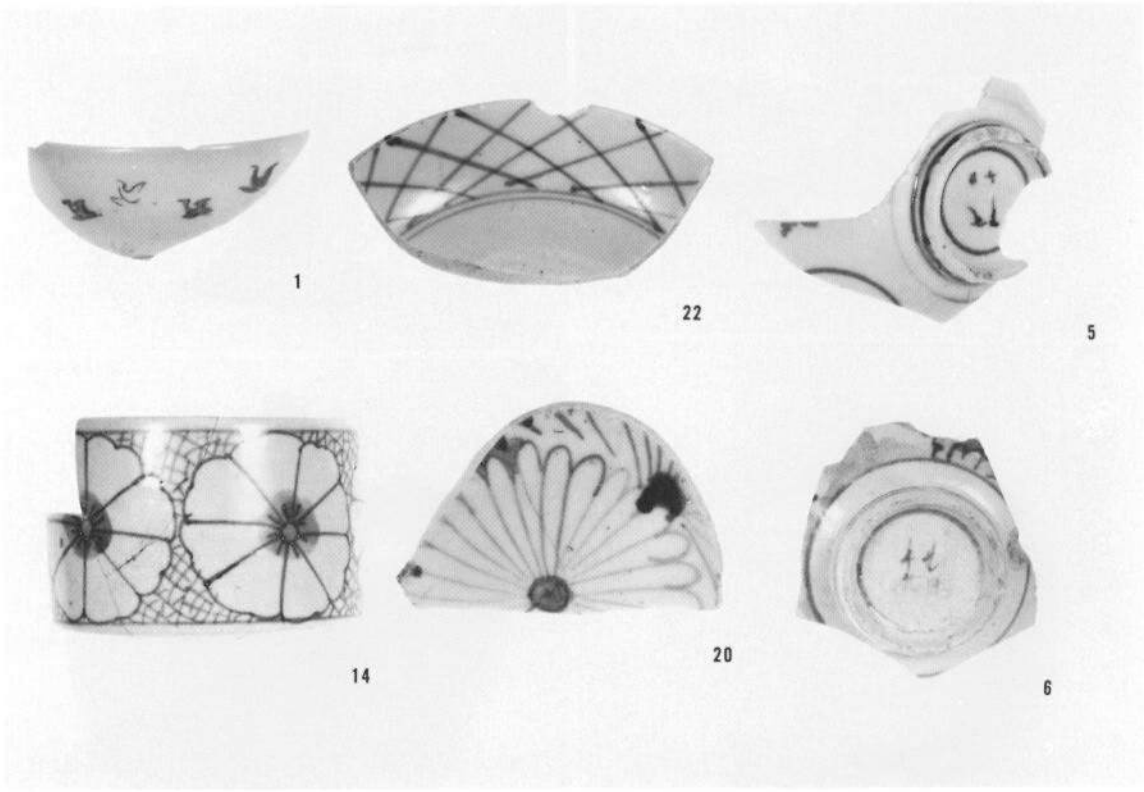
VI区東14号溝出土陶磁器③

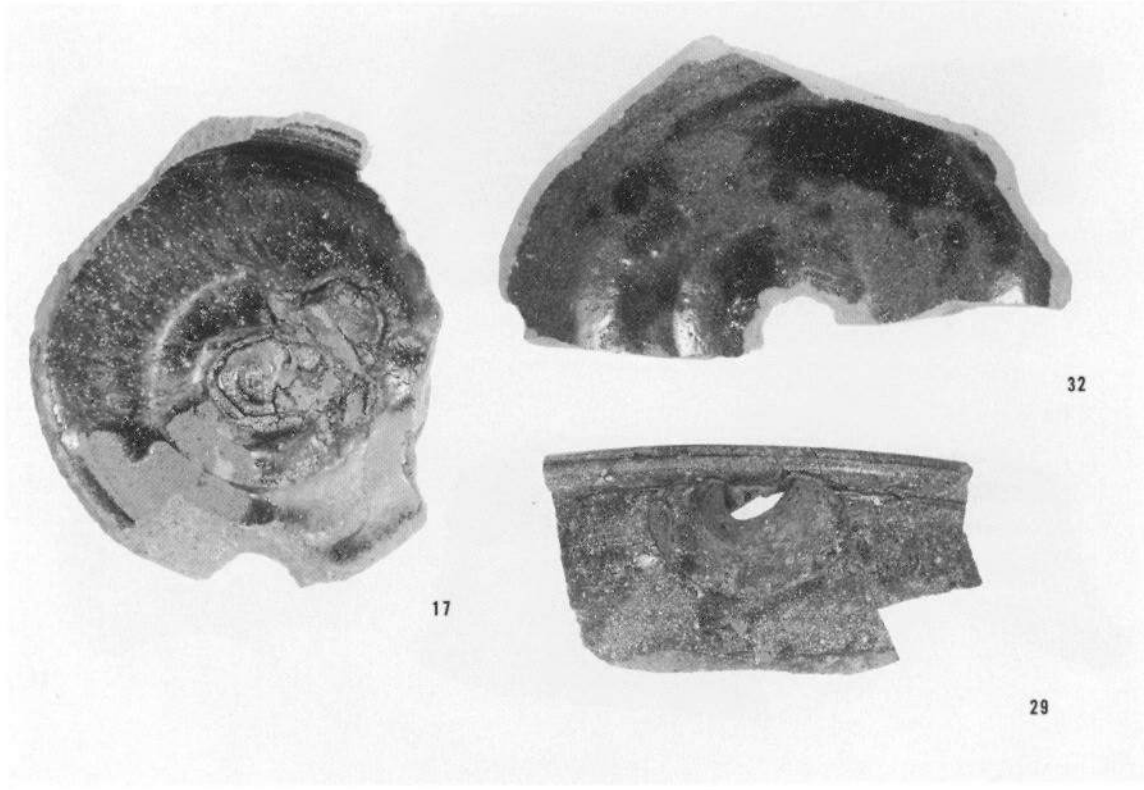




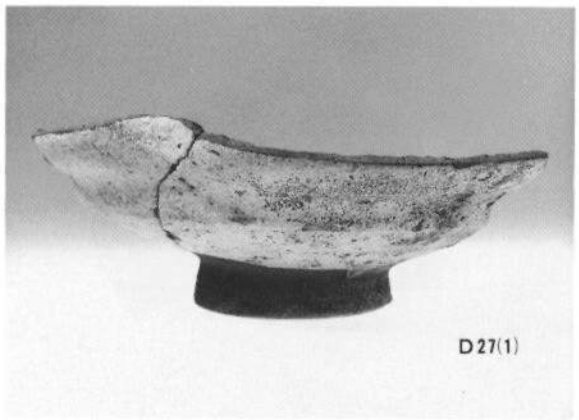


VI区東14号溝出土陶磁器④

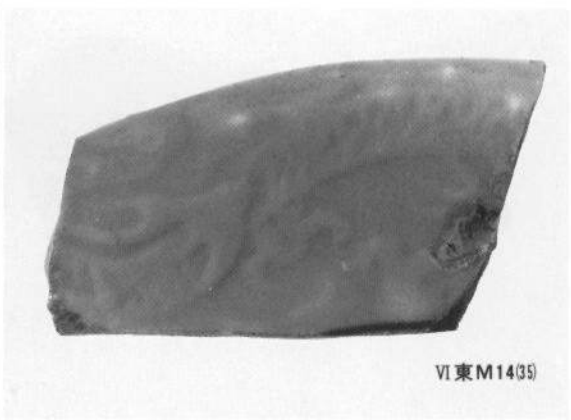




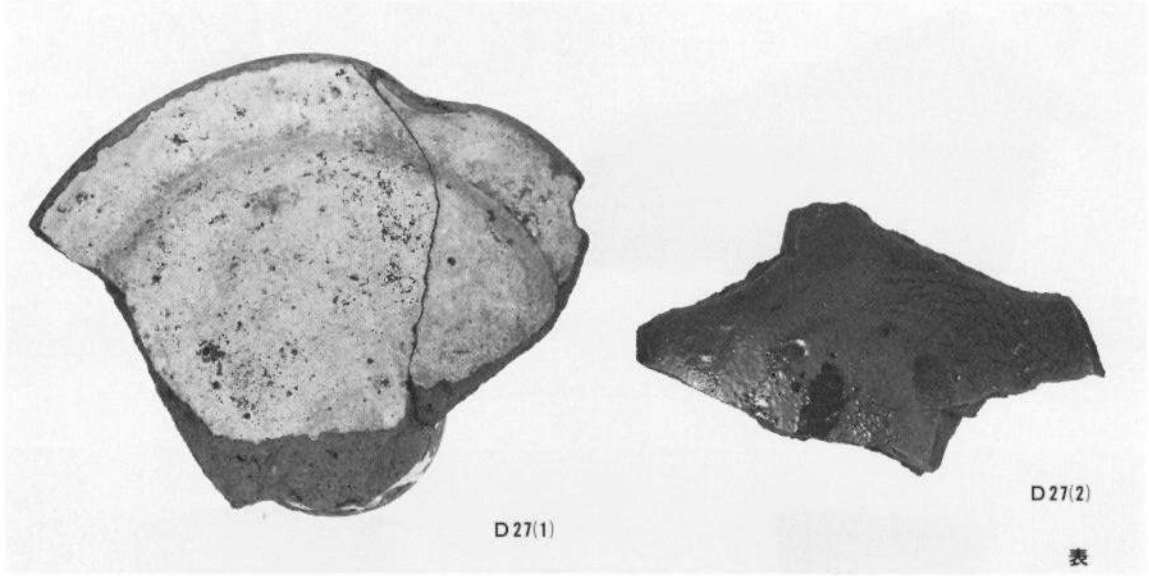
VI区東14号溝出土陶磁器⑤



D27(1)



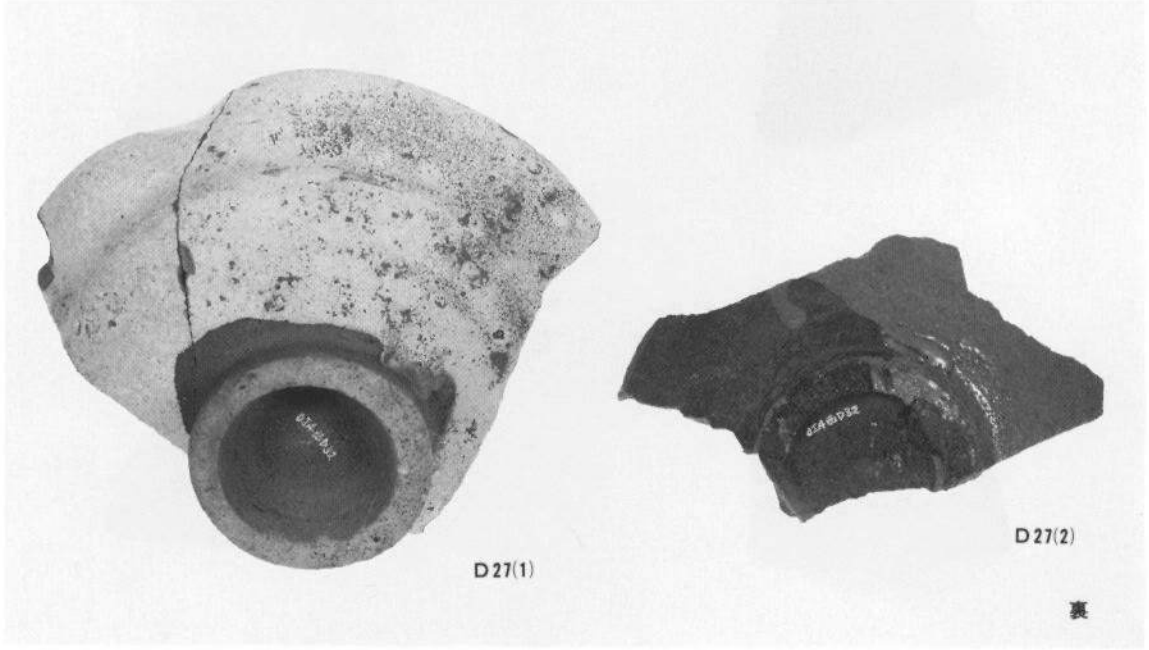
Ⅵ東M14(35)



D27(1)

D27(2)

表

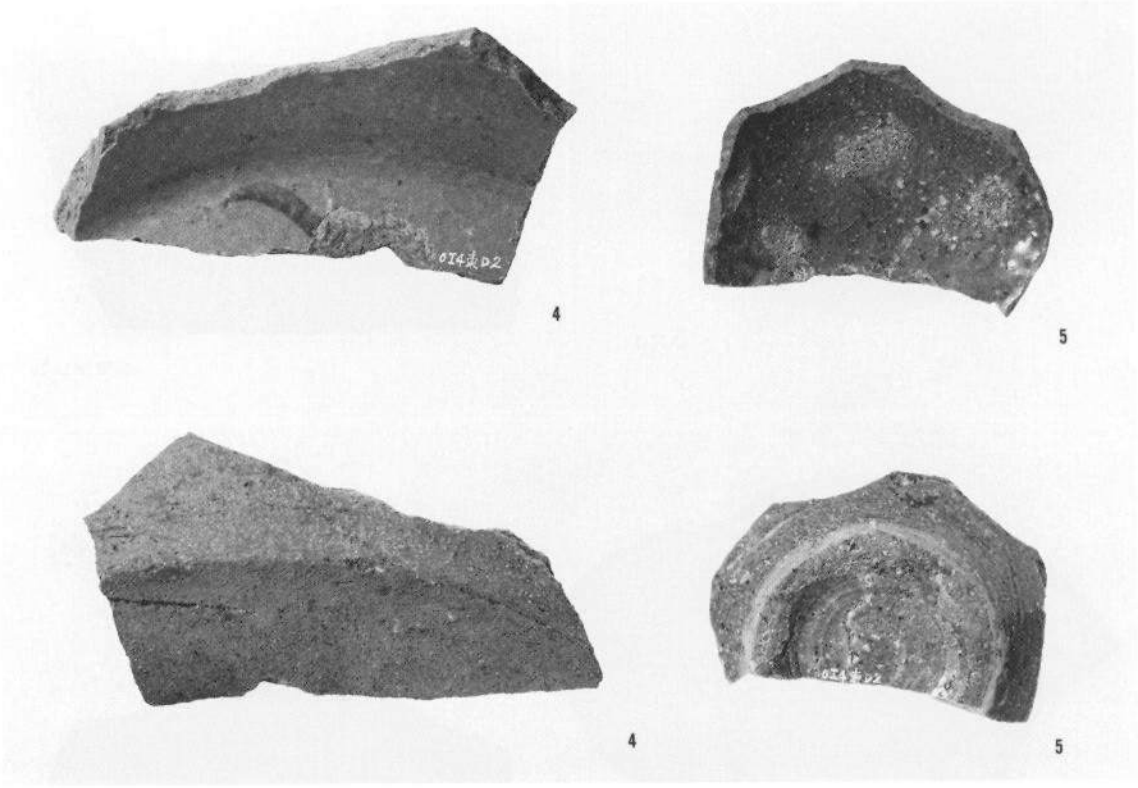


D27(1)

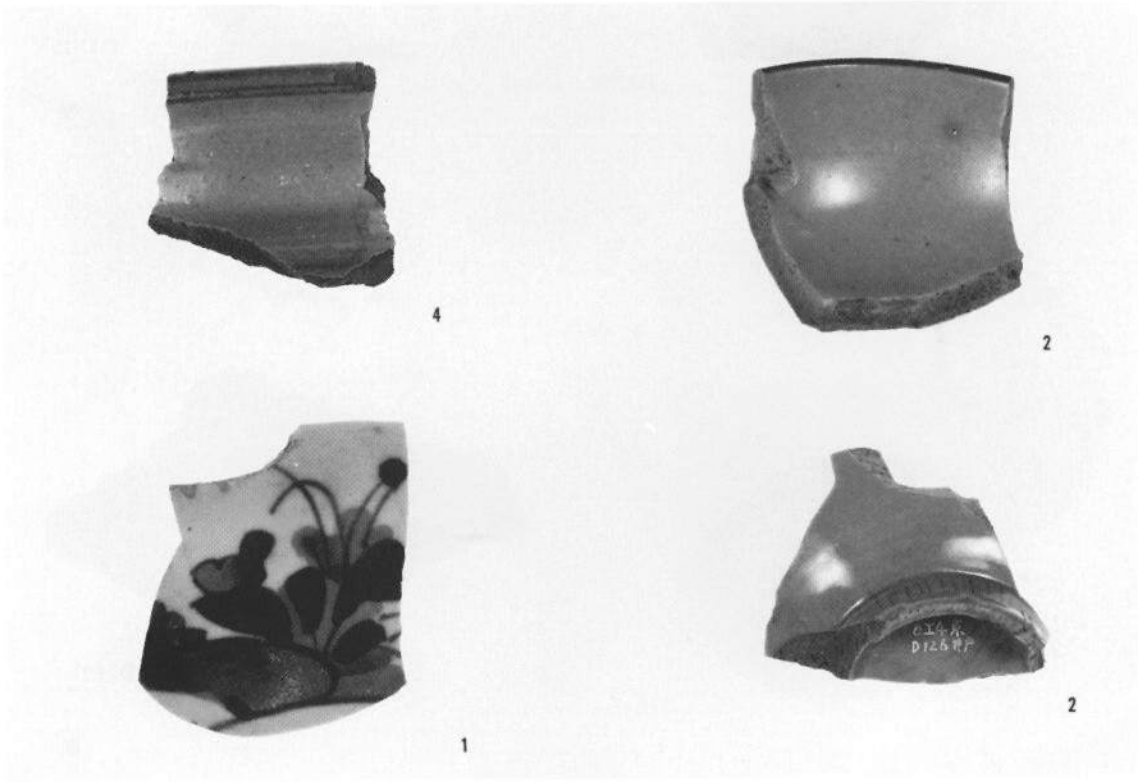
D27(2)

裏

Ⅵ区東14号溝出土磁器(柿右衛門)・Ⅵ区西27号土壙出土陶磁器



(1)　Ⅵ区東30号土壙出土陶器(上表　下裏)

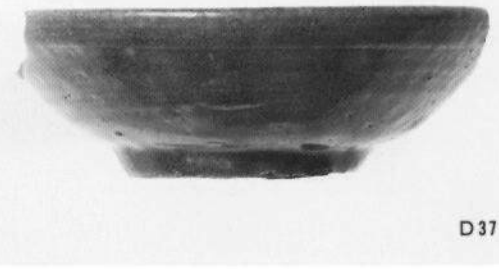


(2)　Ⅵ区東31号土壙出土陶磁器

D31(3)

D37

D31(5)

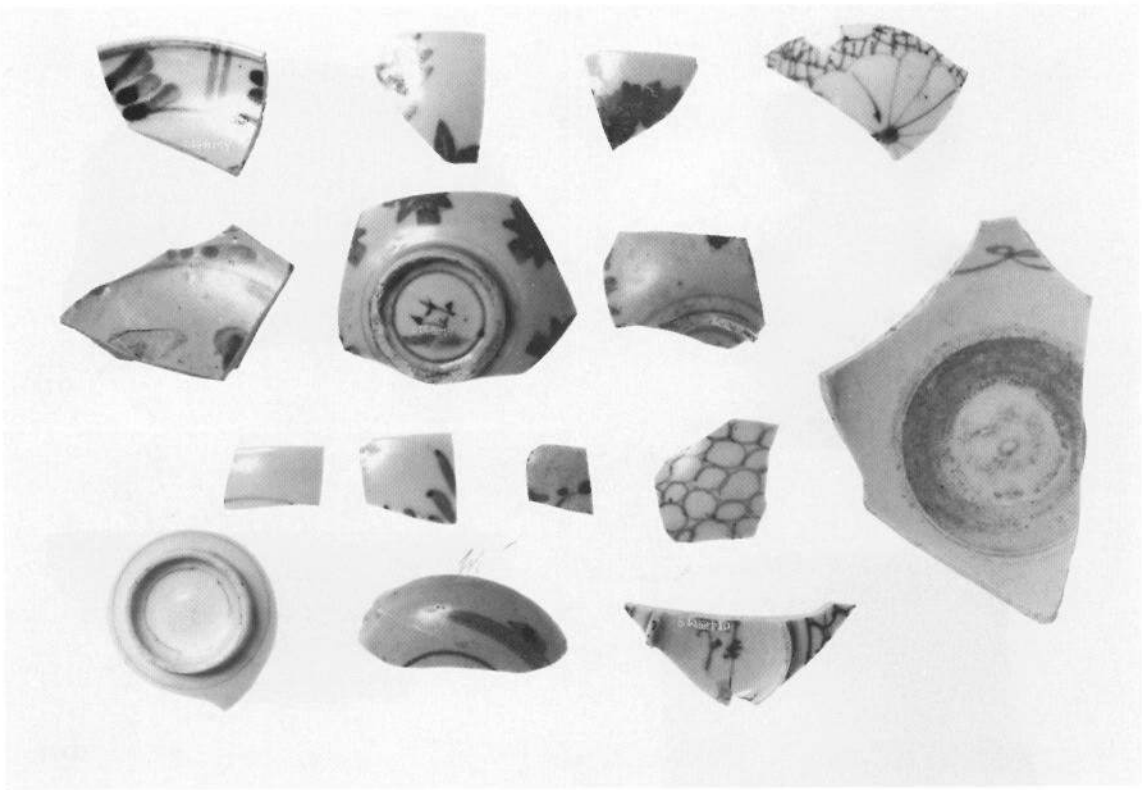


D37

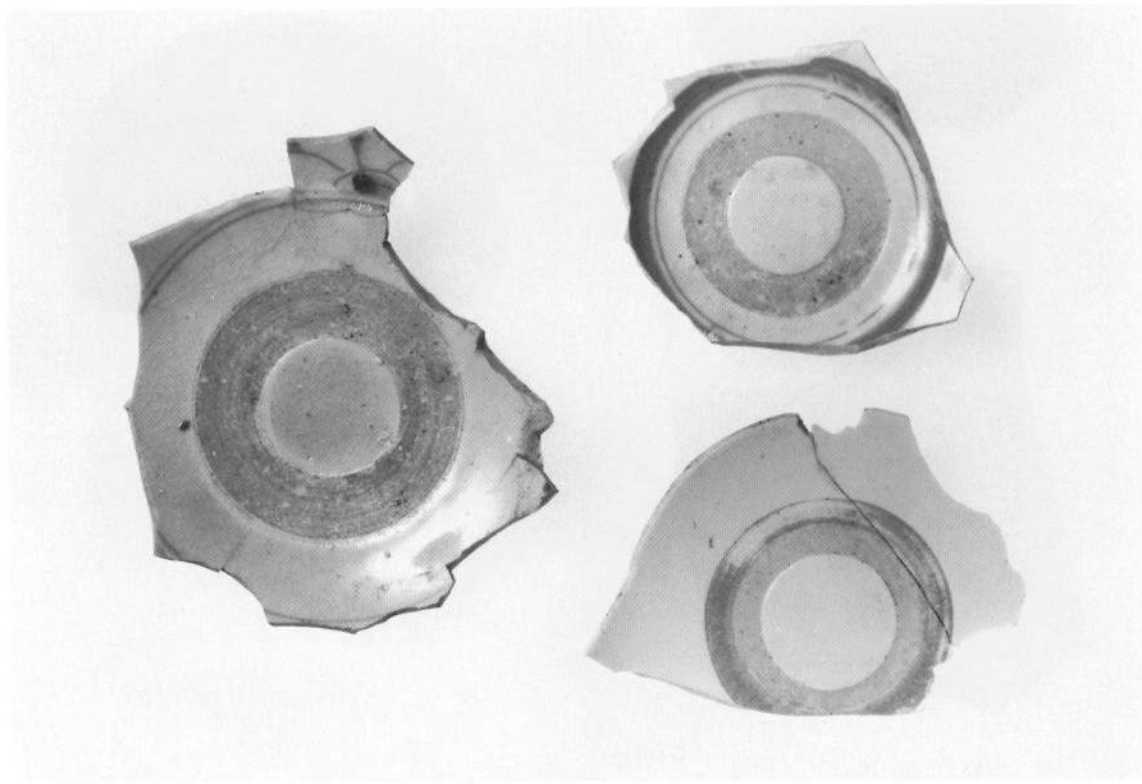
D31(5)

D37

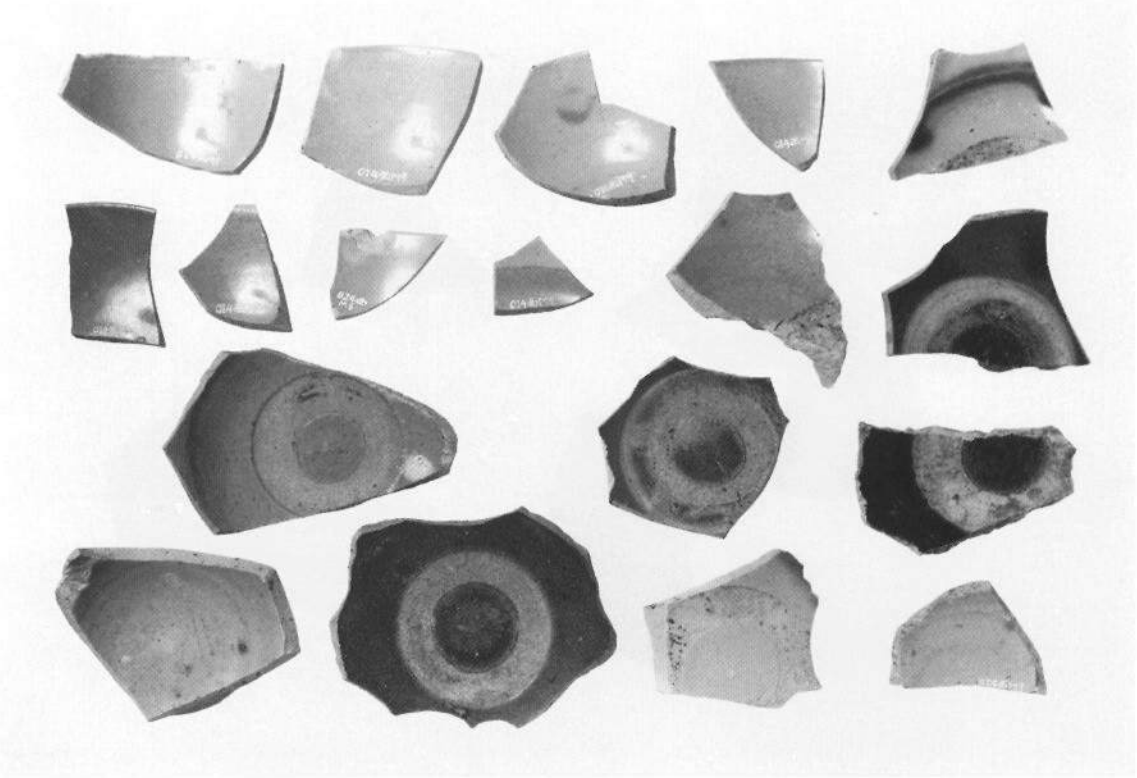
VI区東31号・37号土壙出土陶磁器



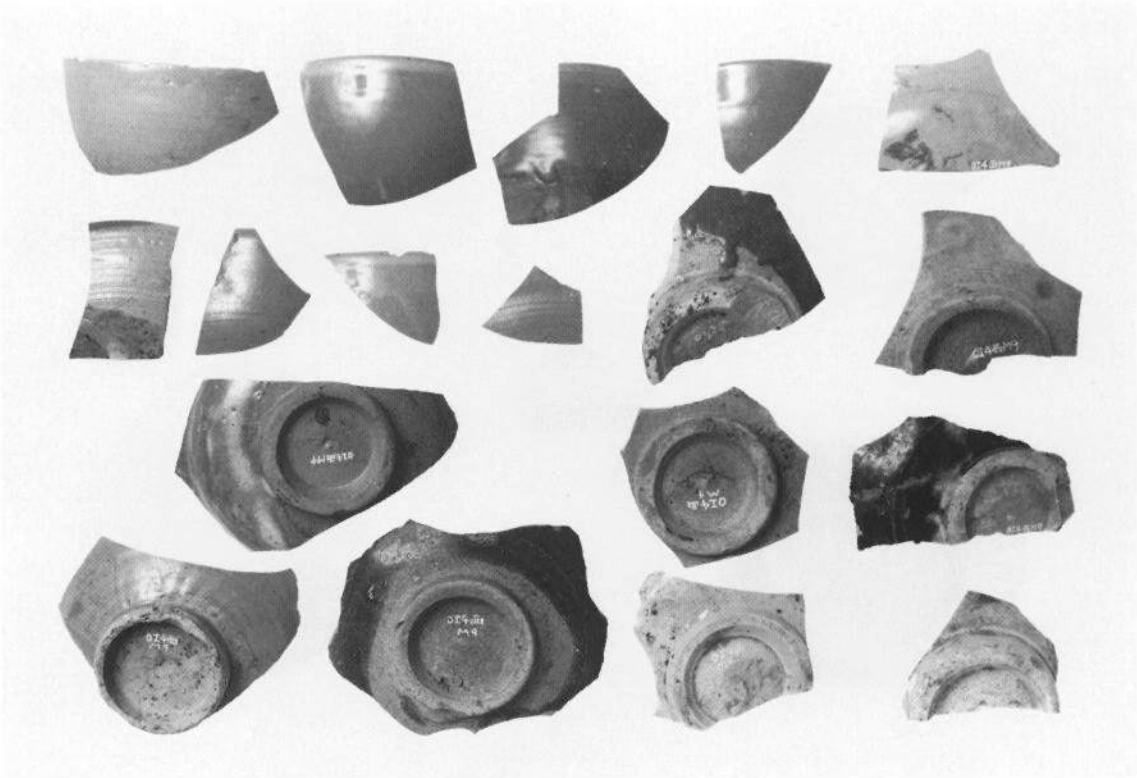
(1)　VI区西９号溝出土　肥前・肥前糸染付磁器（碗・皿類　17世紀中葉～19世紀中葉）



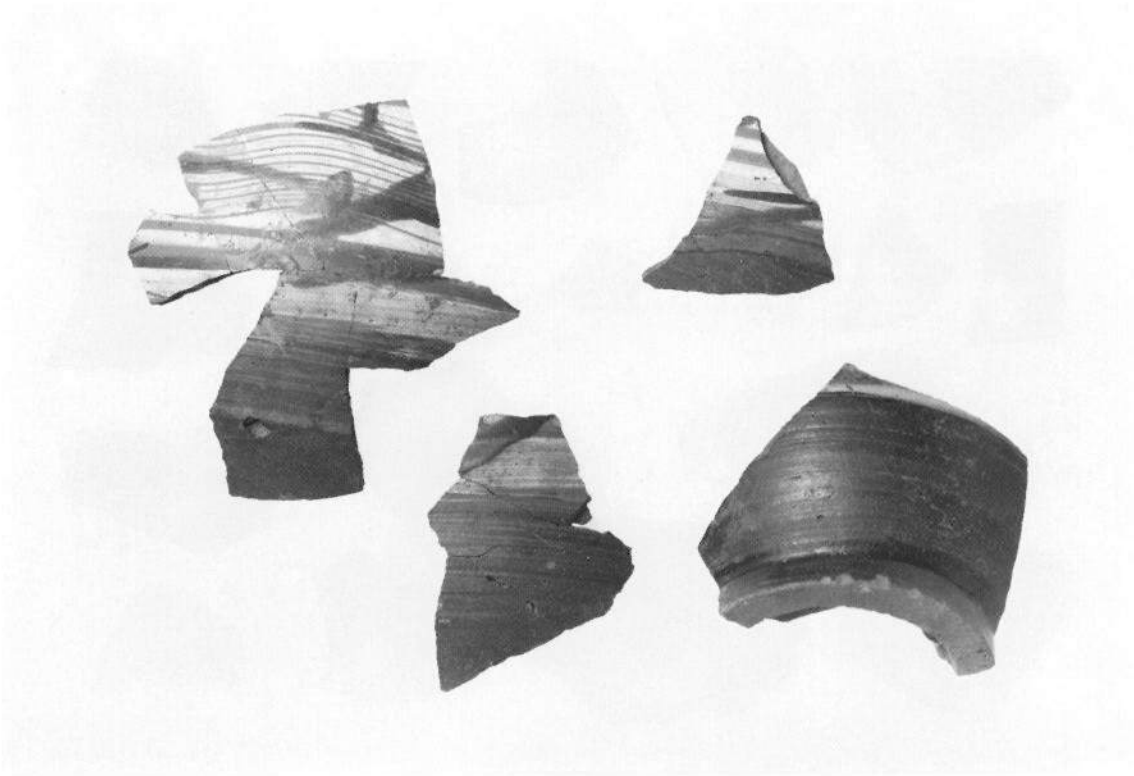
(2)　VI区西９号溝出土　肥前・肥前糸染付磁器（皿　17世紀後半）



(1)　VI区西９号溝出土　唐津内野山窯陶器（碗・皿　17世紀末～18世紀中葉）

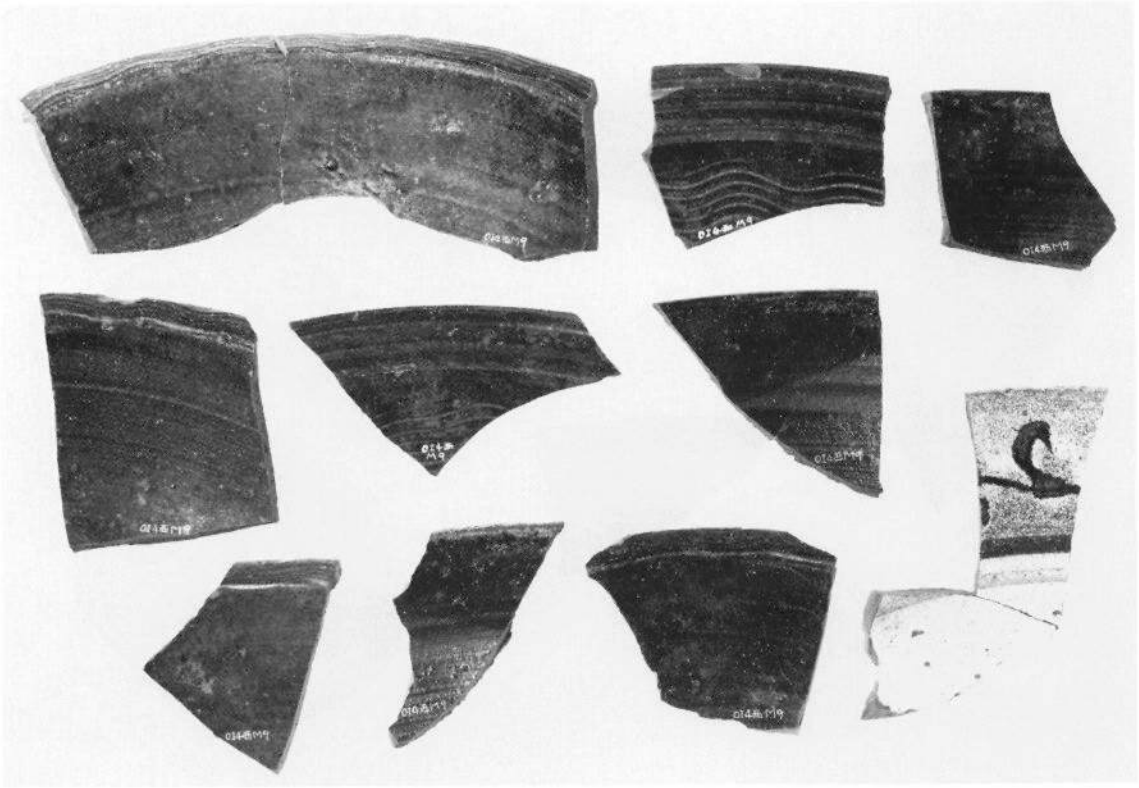


(2)　同　上（裏）

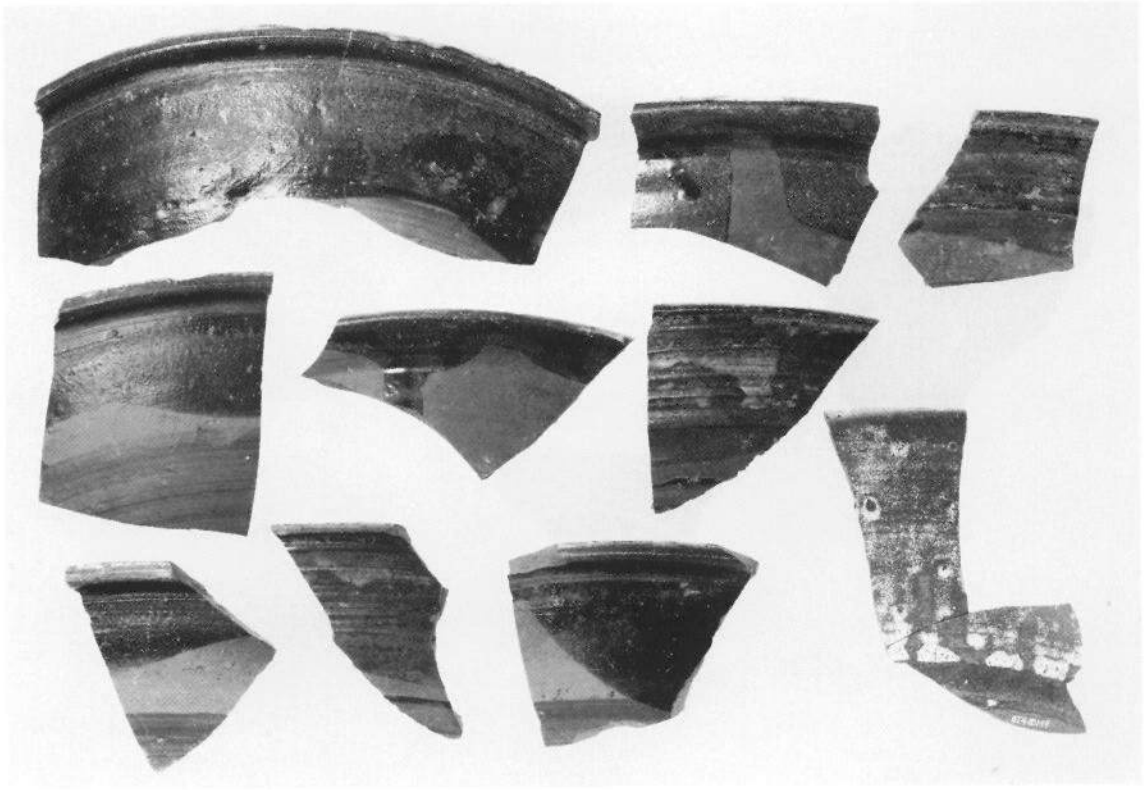


(1)　VI区西９号溝出土陶器　瓶（唐津）

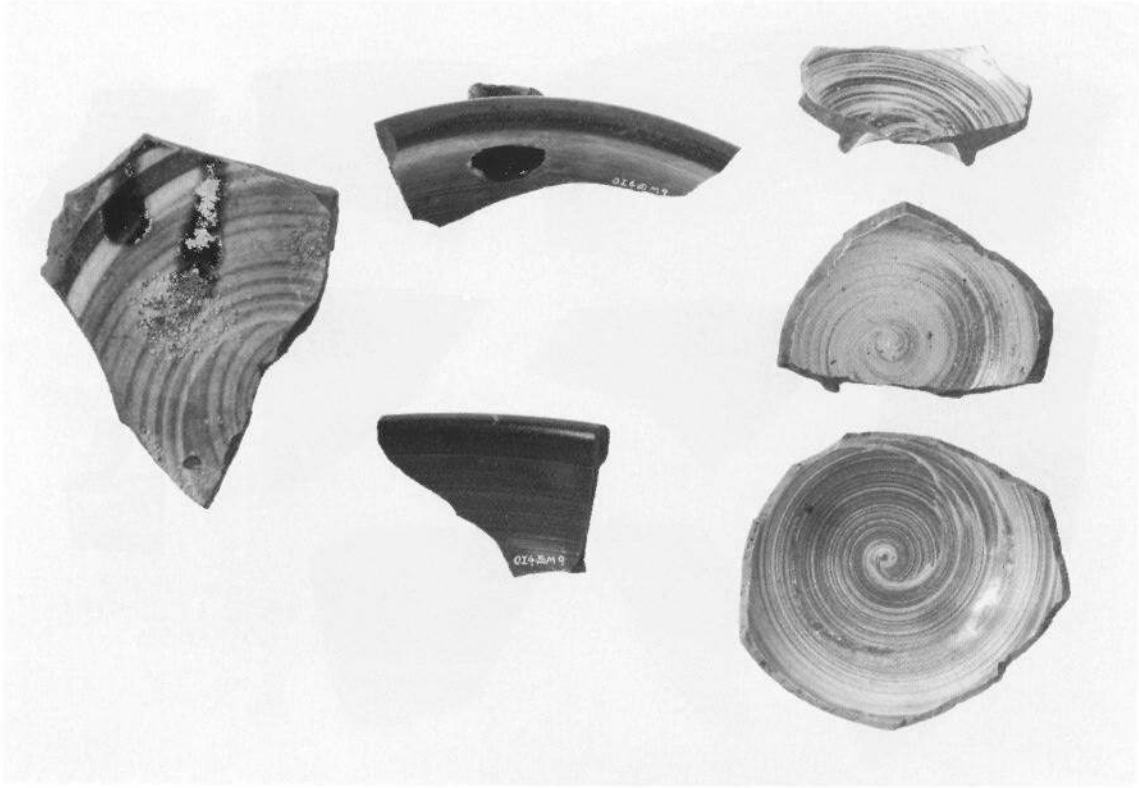
(2)　VI区西９号溝出土陶器　火入れ（唐津　17世紀～18世紀中葉）



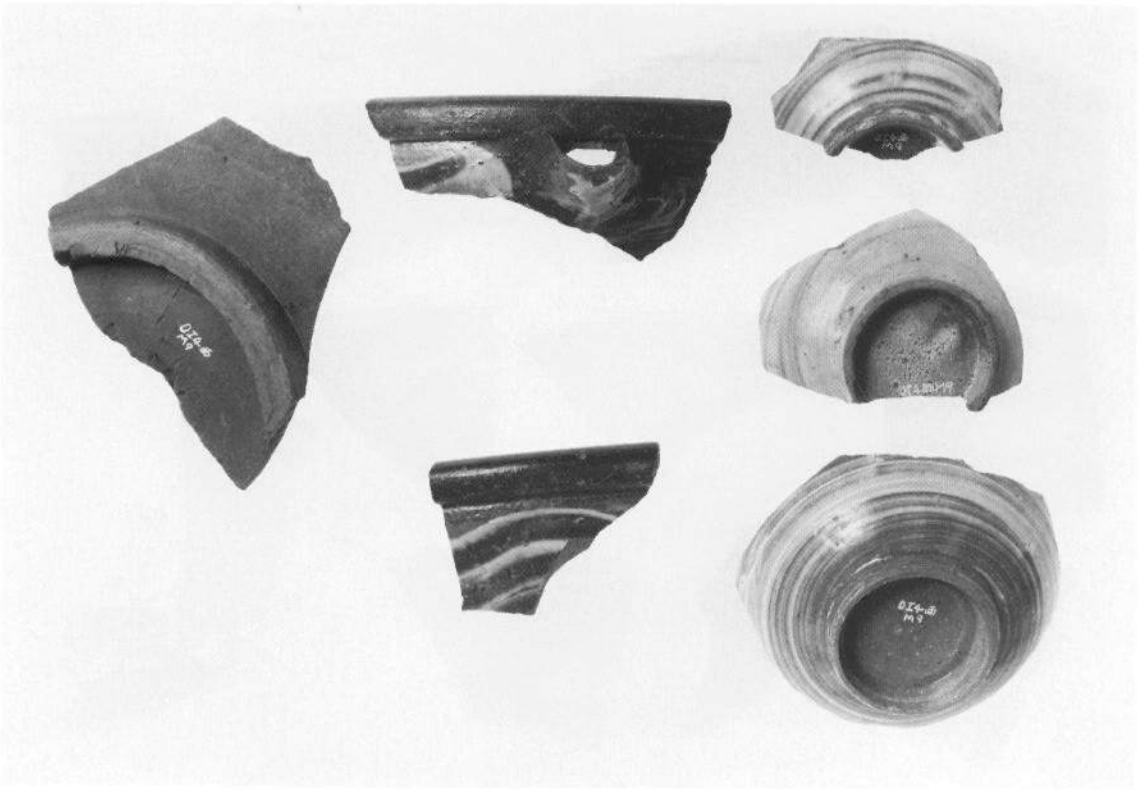
(1)　VI区西９号溝出土陶器　大皿・鉢（唐津　17世紀～18世紀中葉）



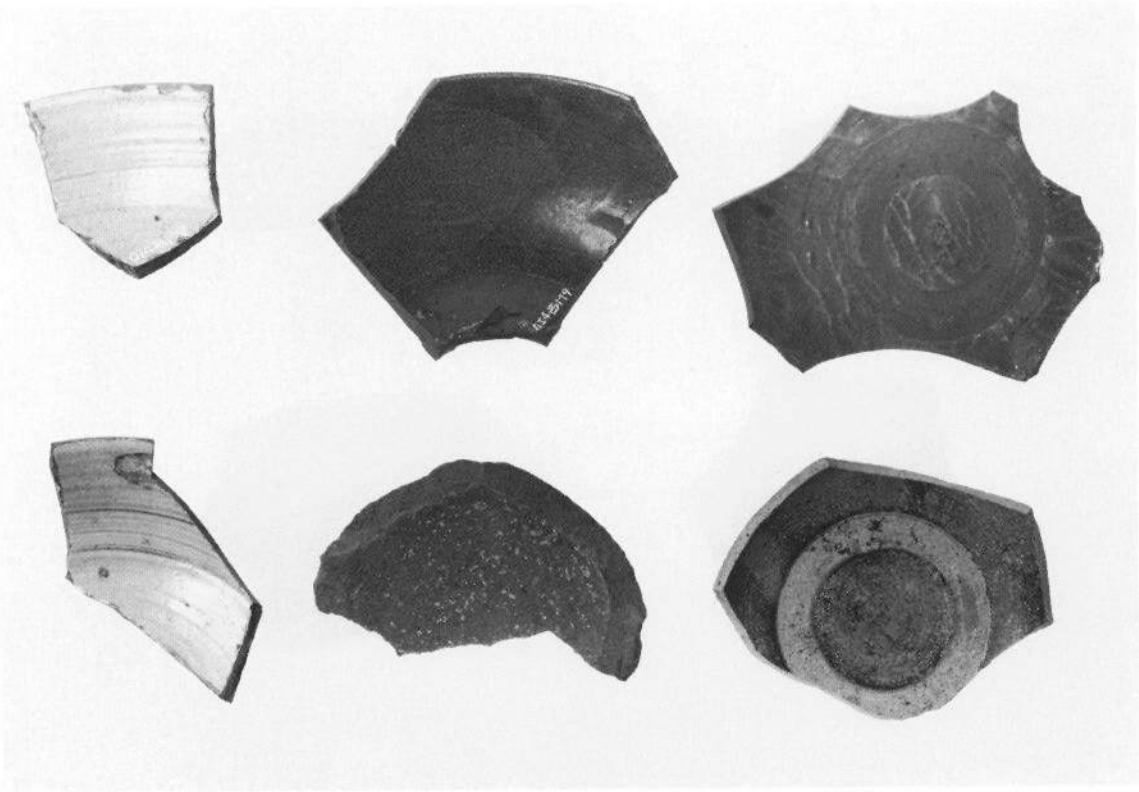
(2)　同　上（裏）



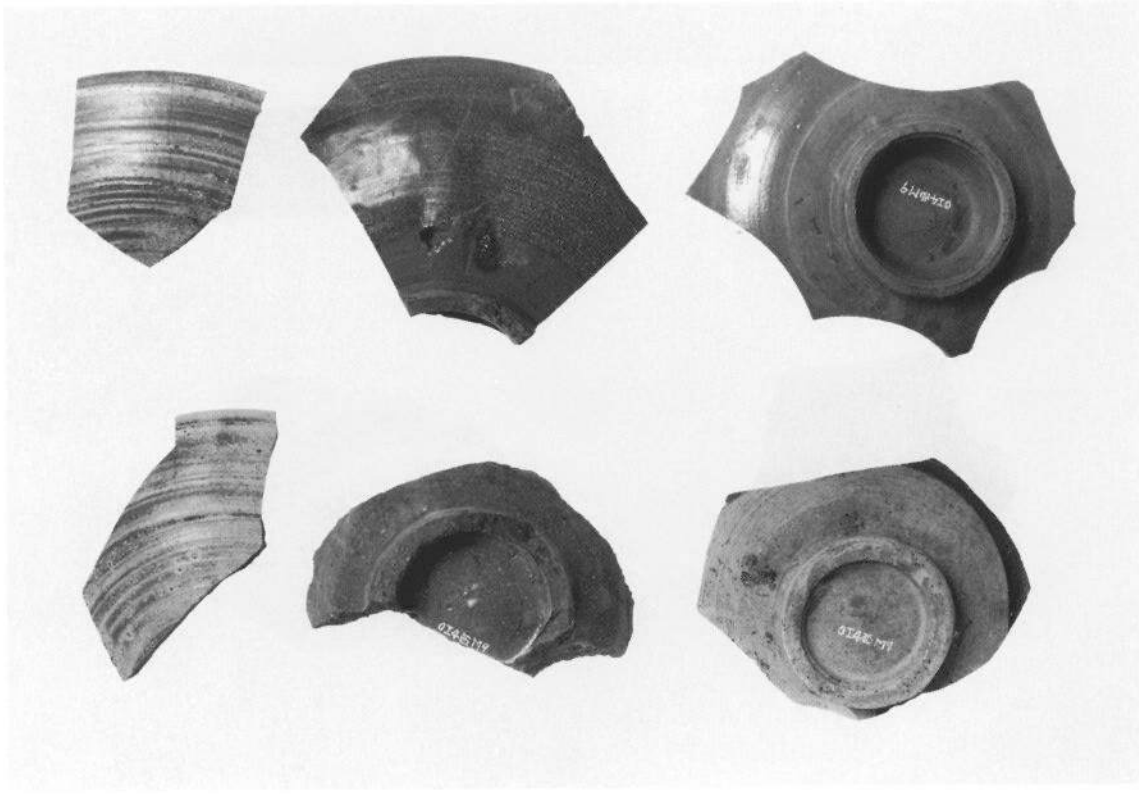
(1)　VI区西９号溝出土陶器　大皿・片口・碗（唐津・唐津系　17世紀～18世紀中葉）



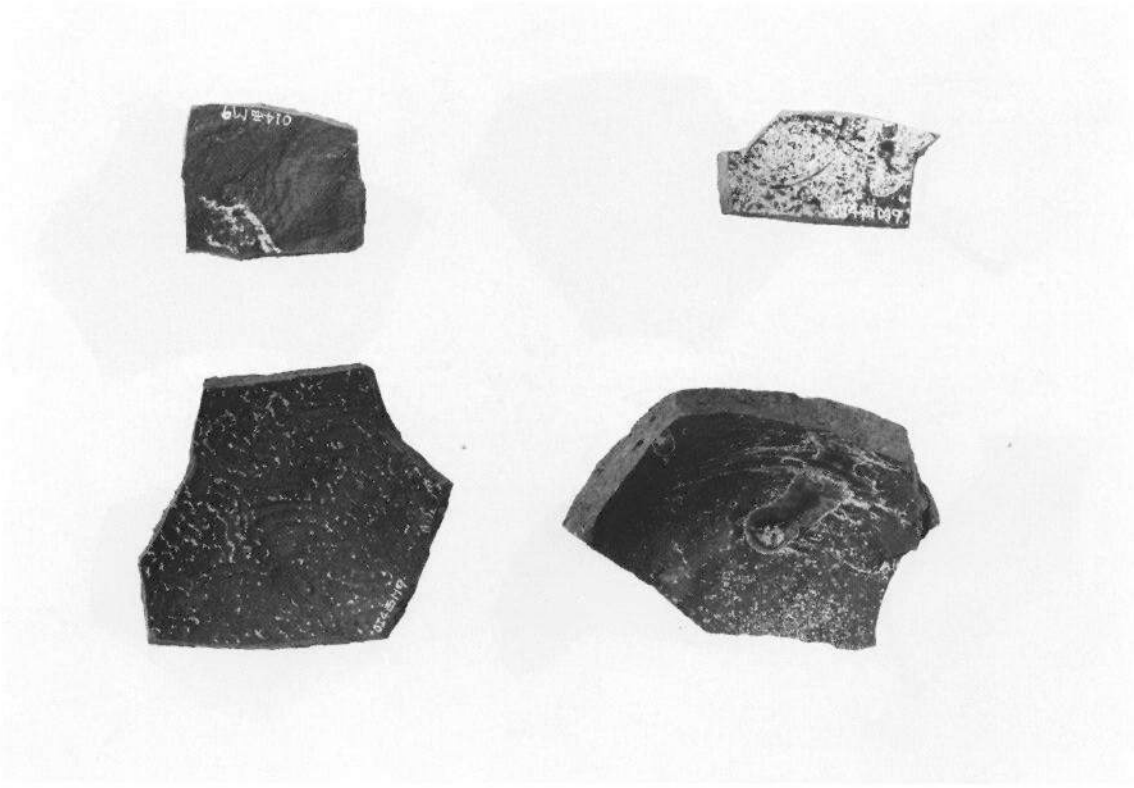
(2)　同　上（裏）



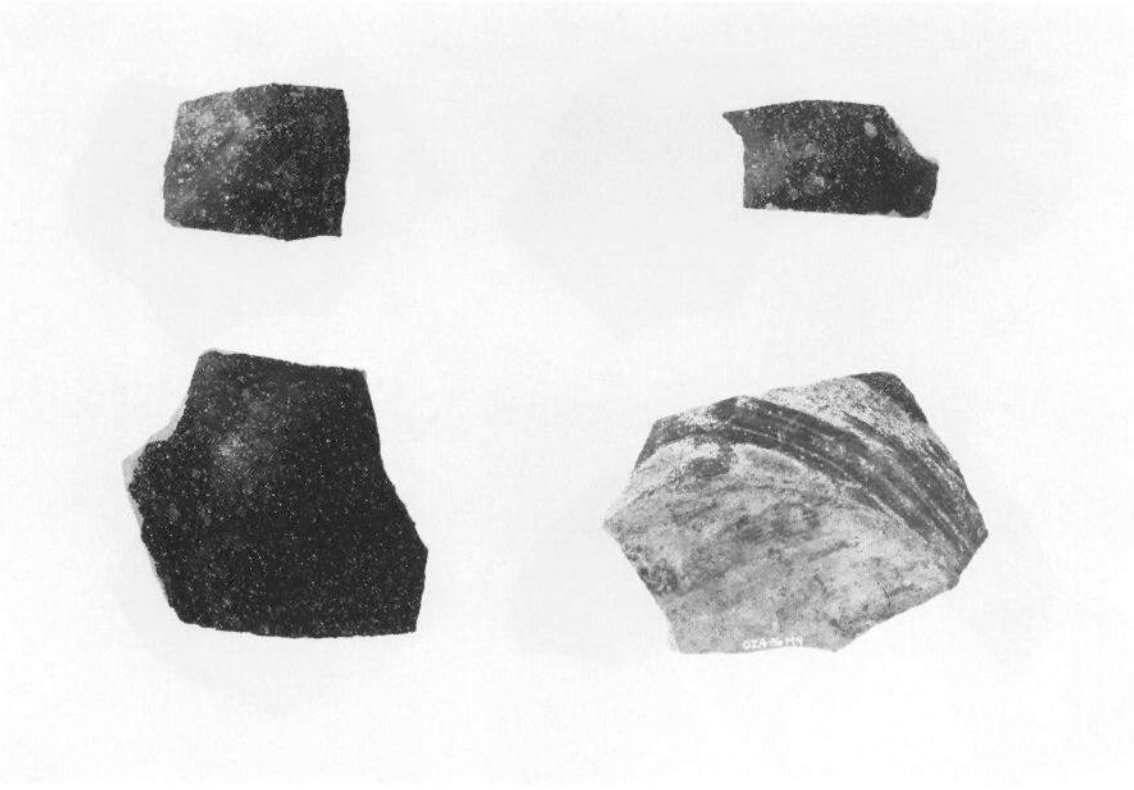
(1)　VI区西９号溝出土陶器　碗・皿（唐津系？　17～18世紀）



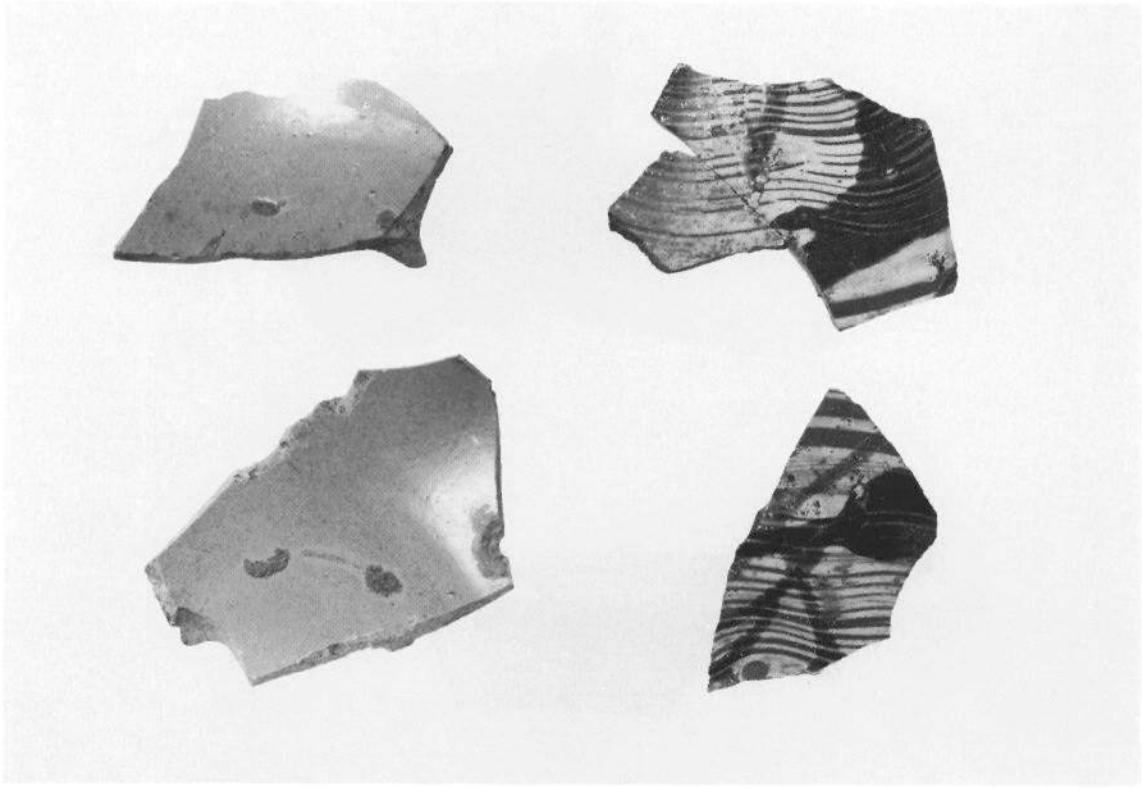
(2)　同　上（裏）



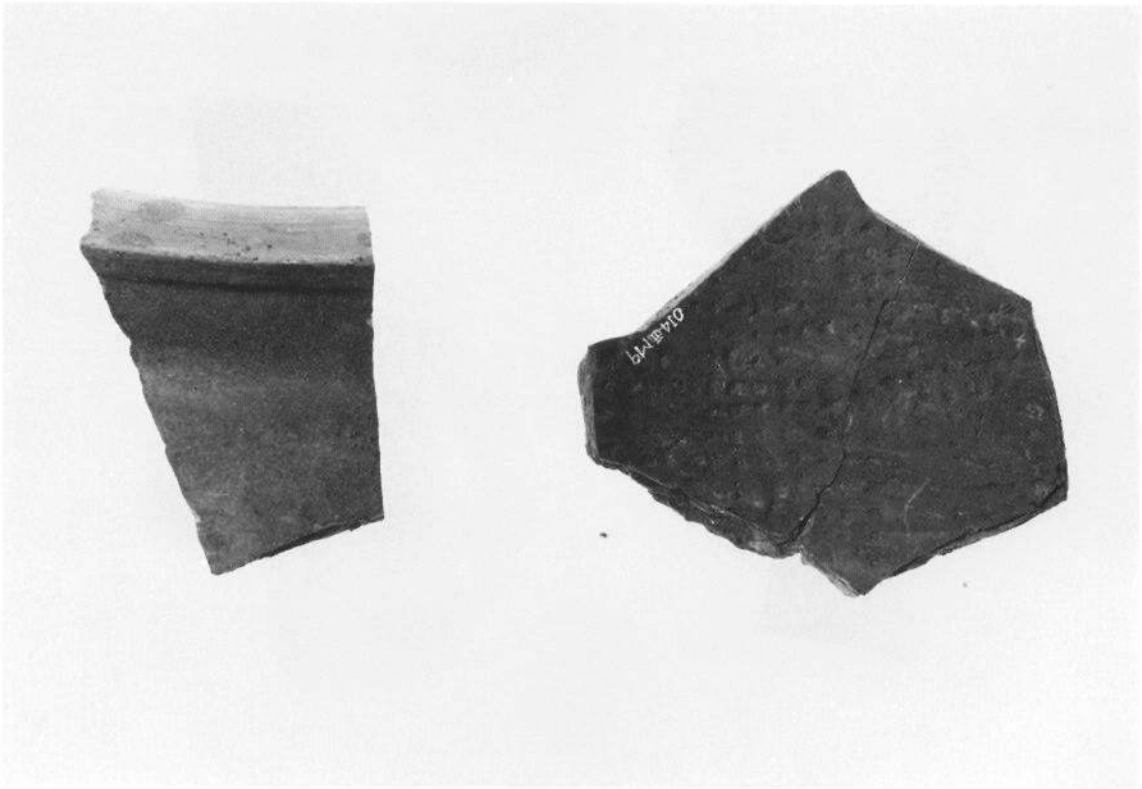
(1)　VI区西９号溝出土陶器　甕・壺？（唐津系　16世紀～17世紀初頭）



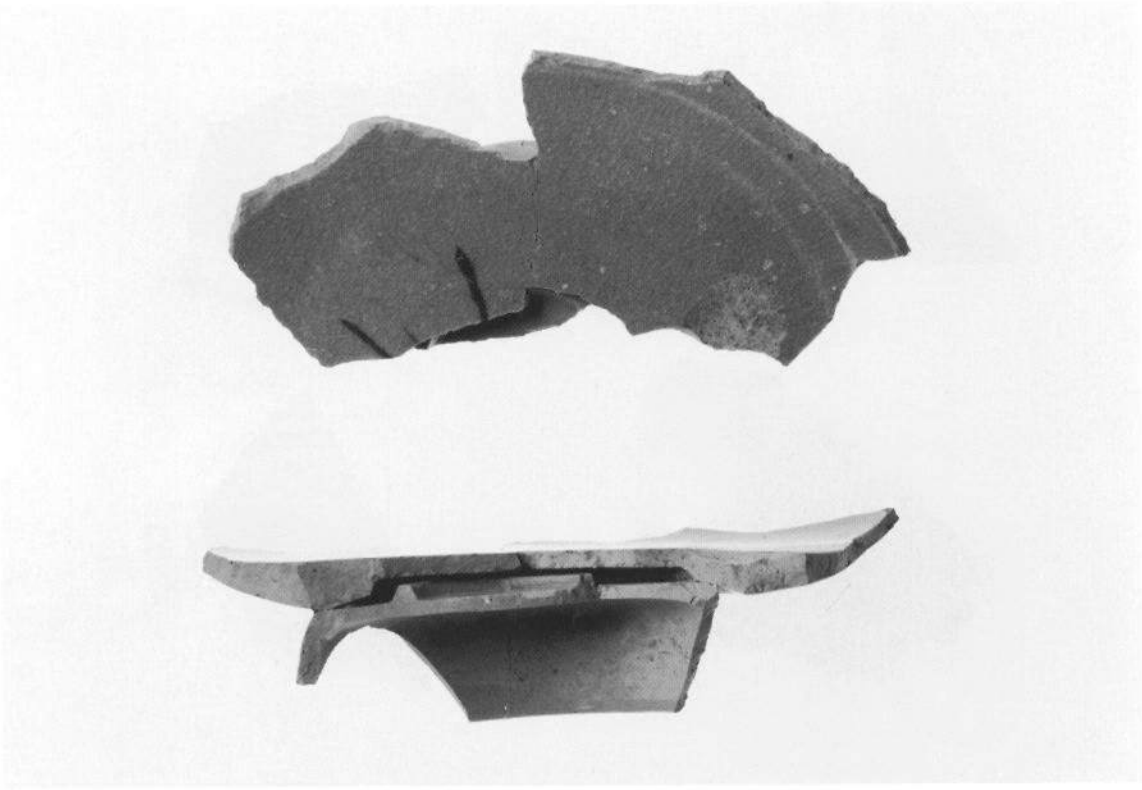
(2)　同　上（裏）



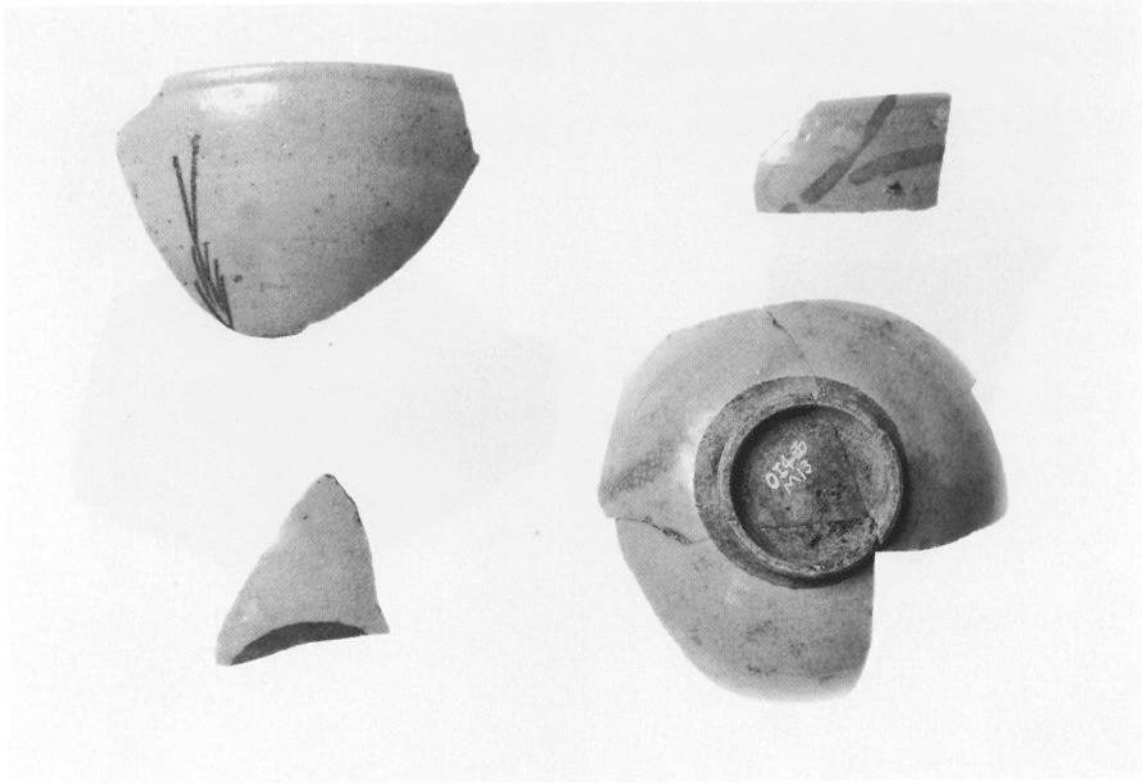
(1)　VI区西９号溝出土陶器　皿（左 唐津系？17世紀）瓶（右 唐津二彩）



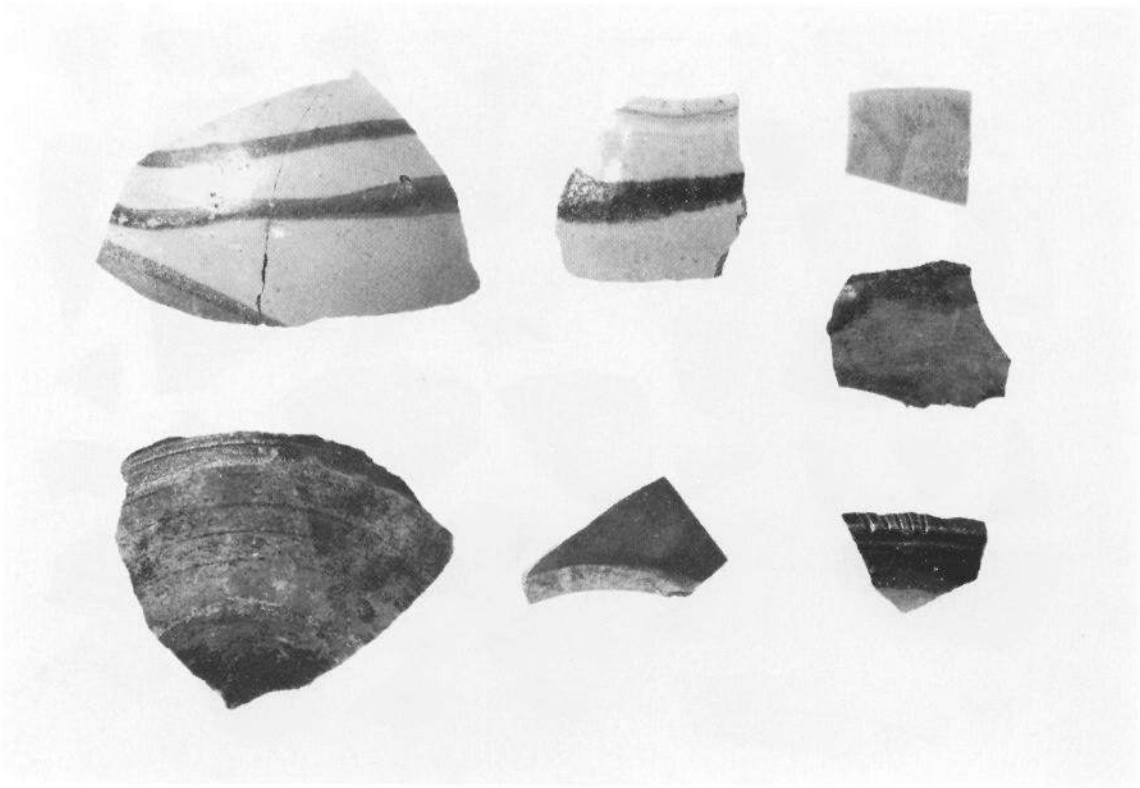
(2)　VI区西９号溝出土陶器　甕（唐津　17世紀）



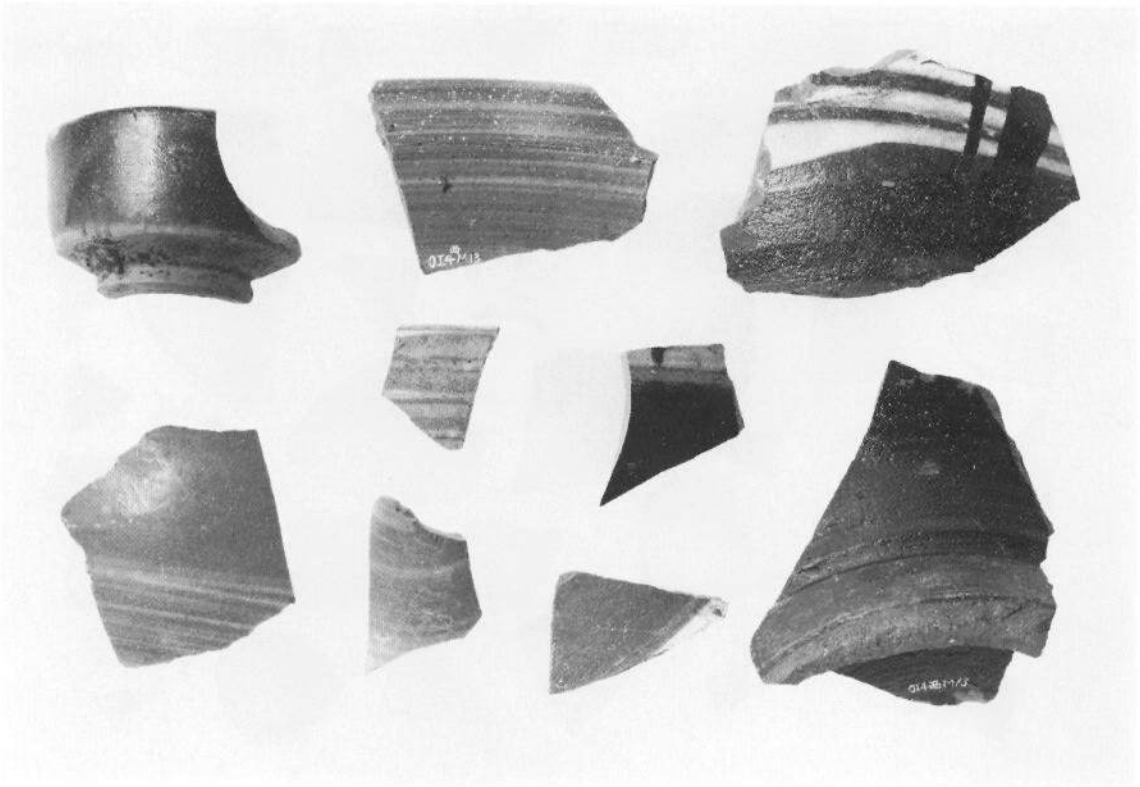
(1)　VI区西９号溝出土陶器　台付皿（京焼風陶器 呉須絵　17世紀末～18世紀中葉）



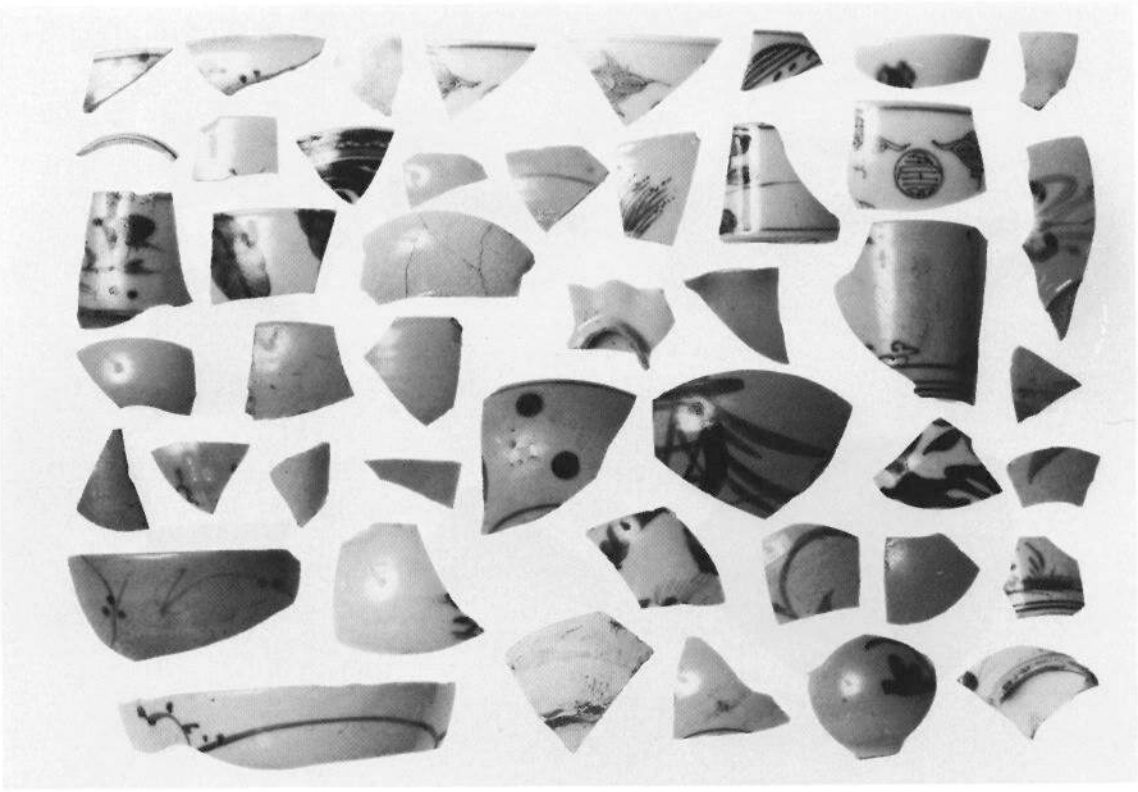
(2)　VI区西13号溝出土陶器　碗(関西系　18世紀後半～19世紀前半)



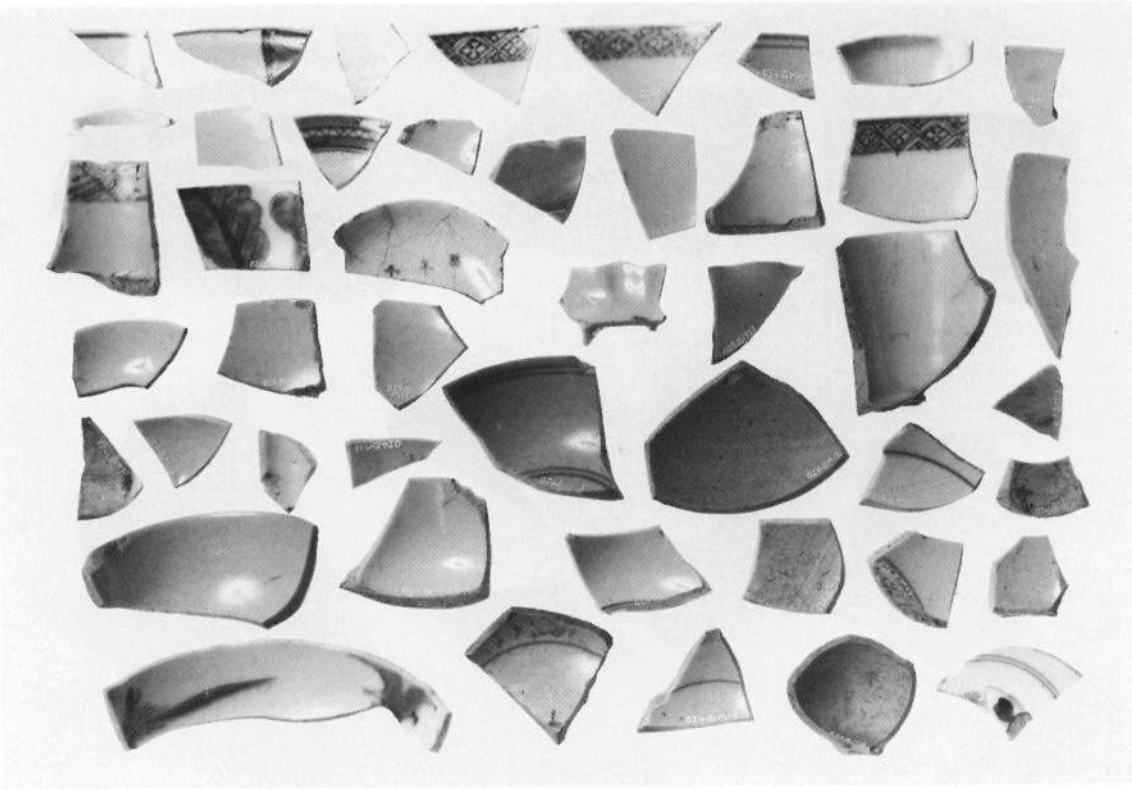
(1)　VI区西13号溝出土陶器　土瓶（九州系）



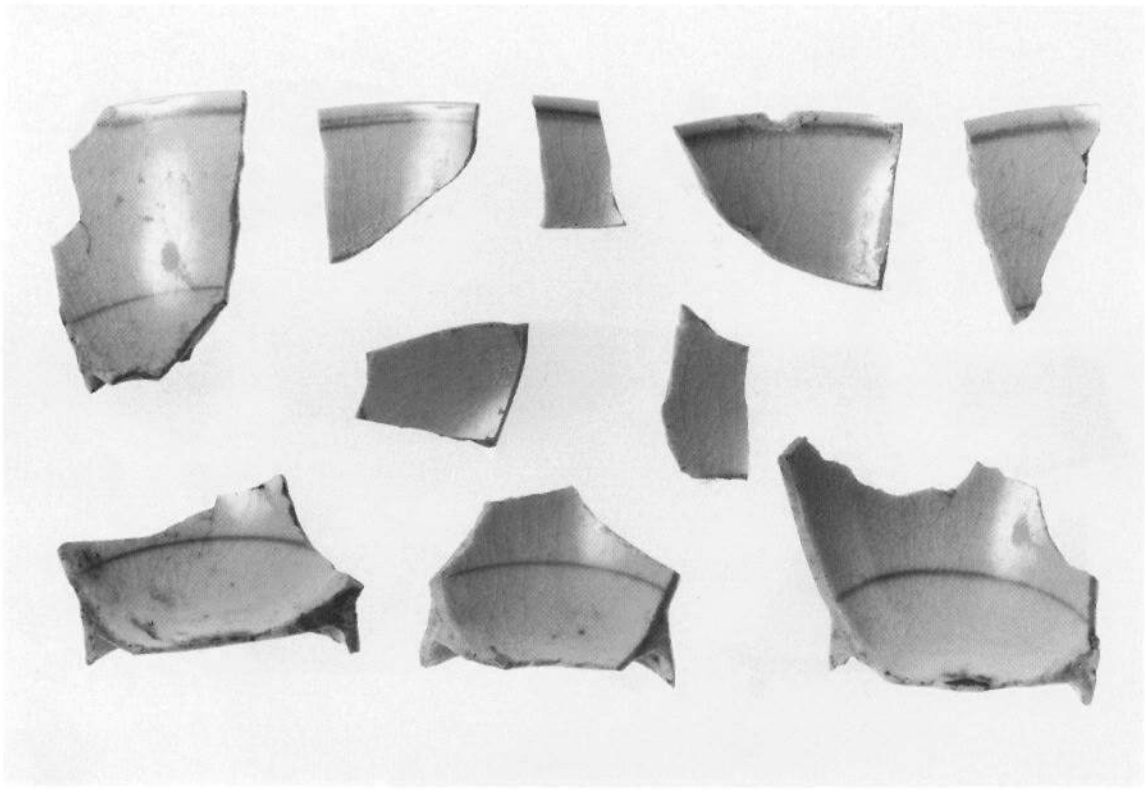
(2)　VI区西13号溝出土陶器　碗・大皿・瓶・その他(唐津)



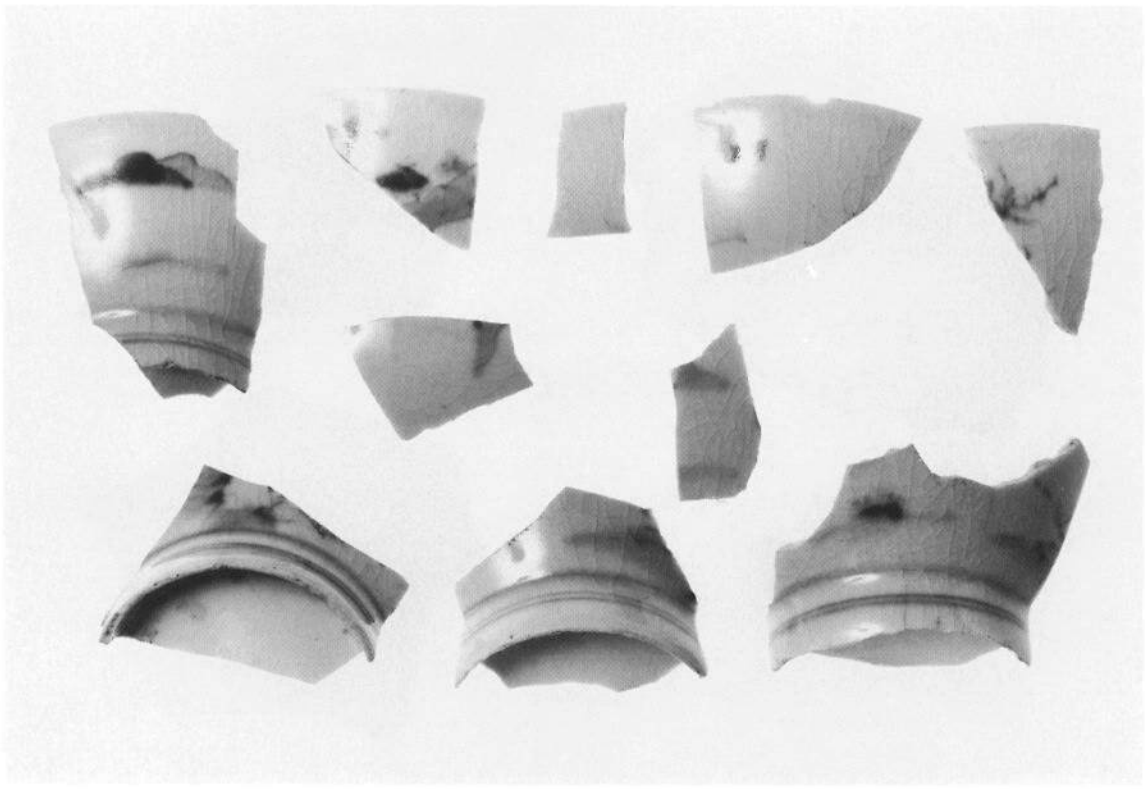
(1)　VI区西13号溝出土 肥前・肥前糸染付磁器(18世紀～19世紀前半)



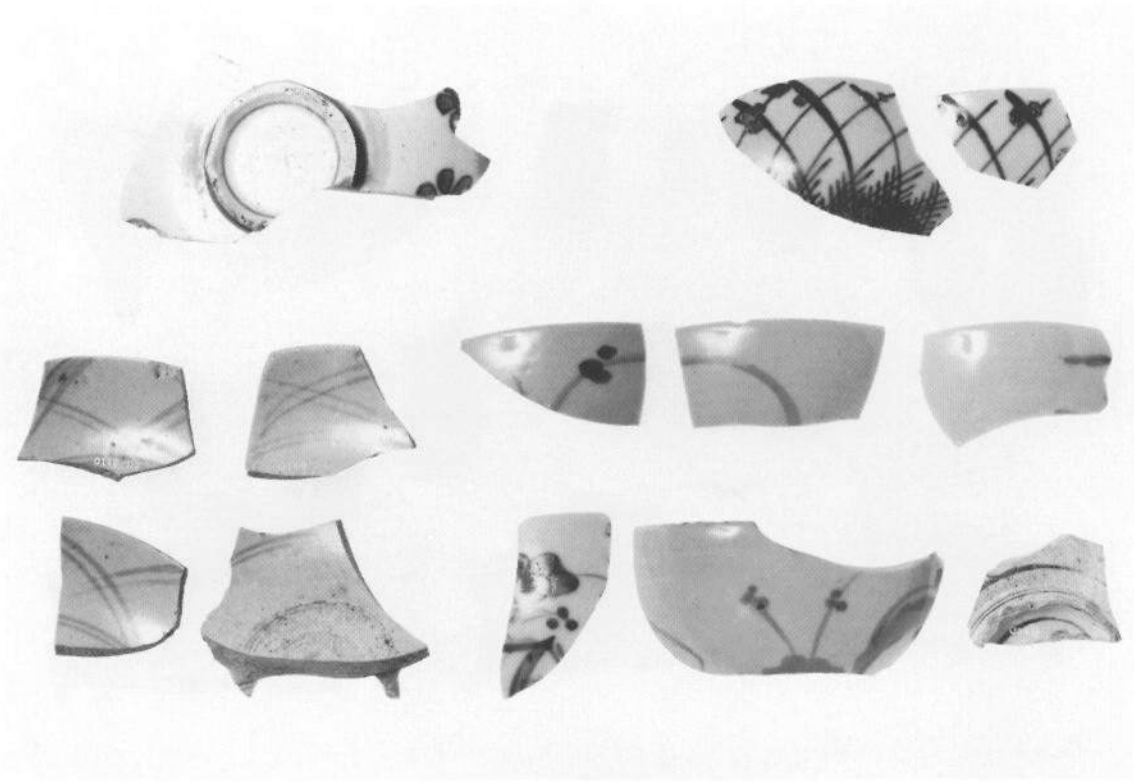
(2)　同　上(裏)



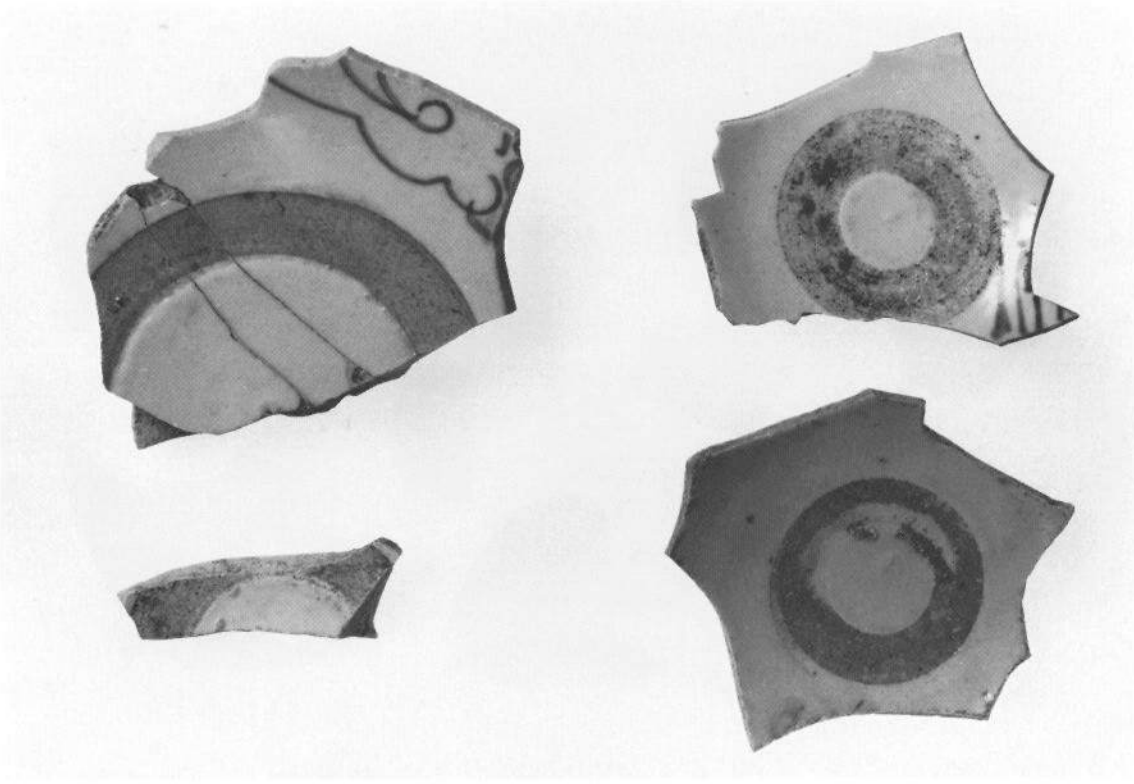
(1)　Ⅵ区西13号溝出土　肥前・肥前系染付磁器　広東碗(18世紀)



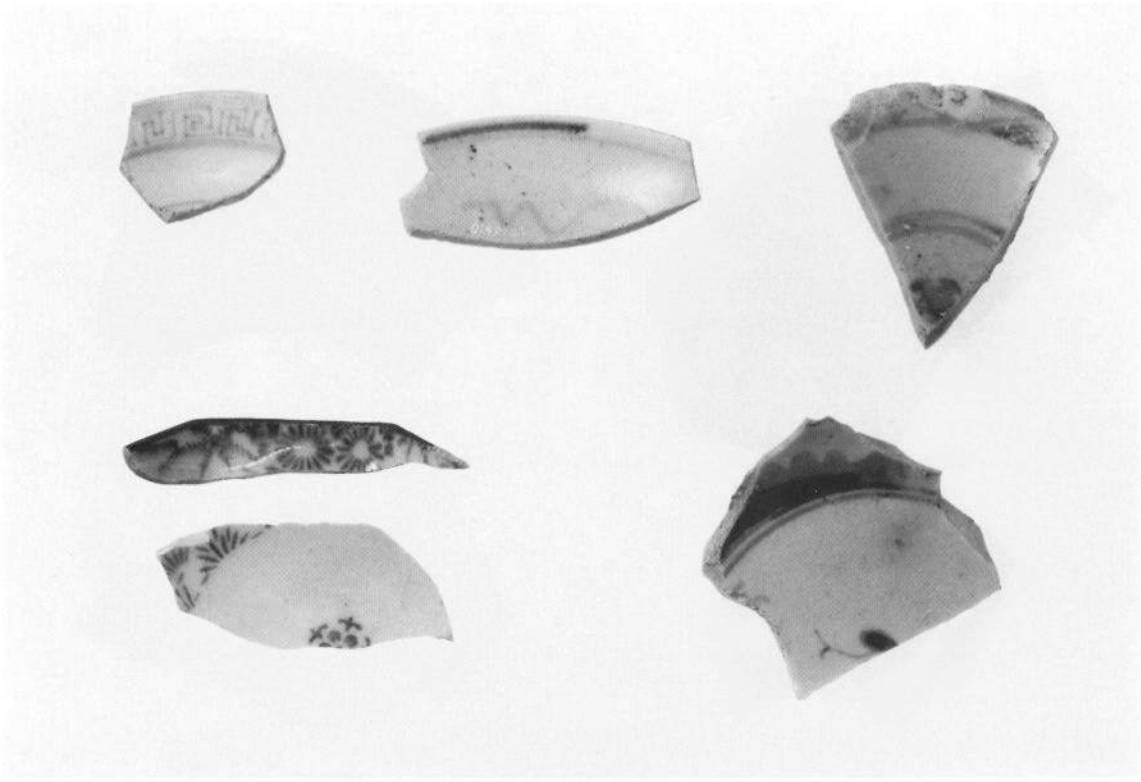
(2)　同　上(裏)



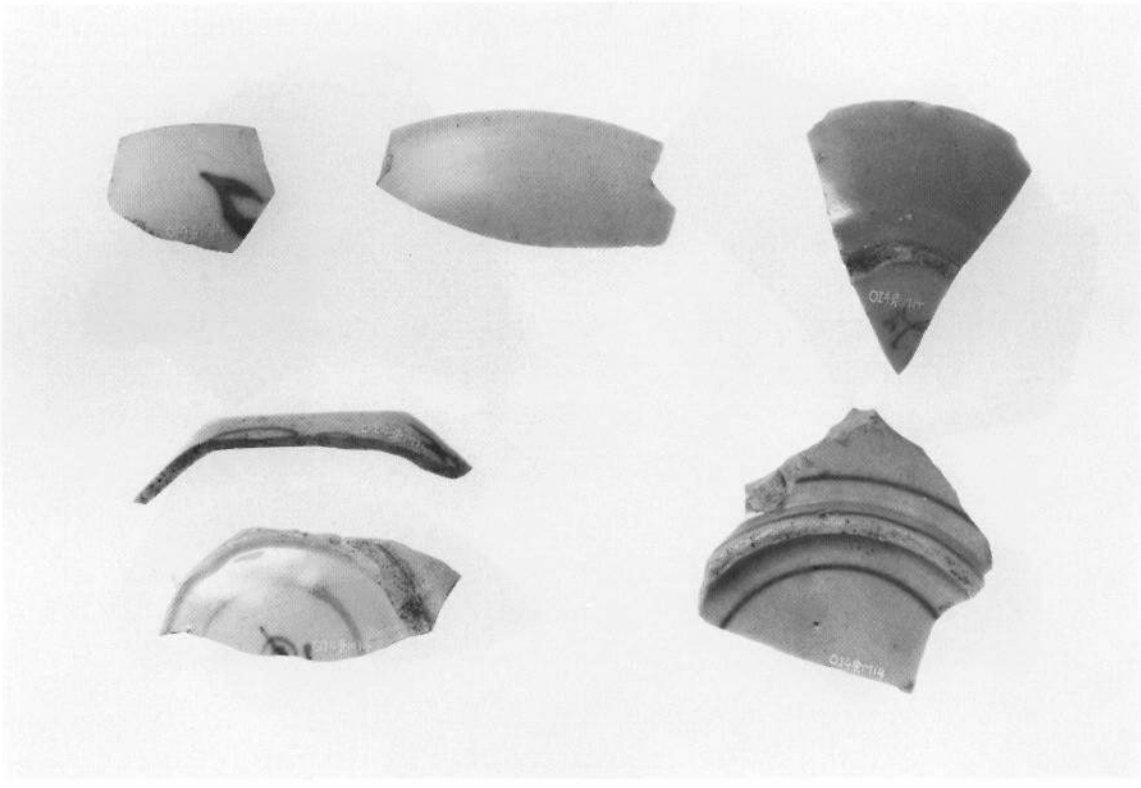
(1)　Ⅵ区東14号溝出土　肥前・肥前系染付磁器　碗・皿・蓋（18世紀～19世紀前半）



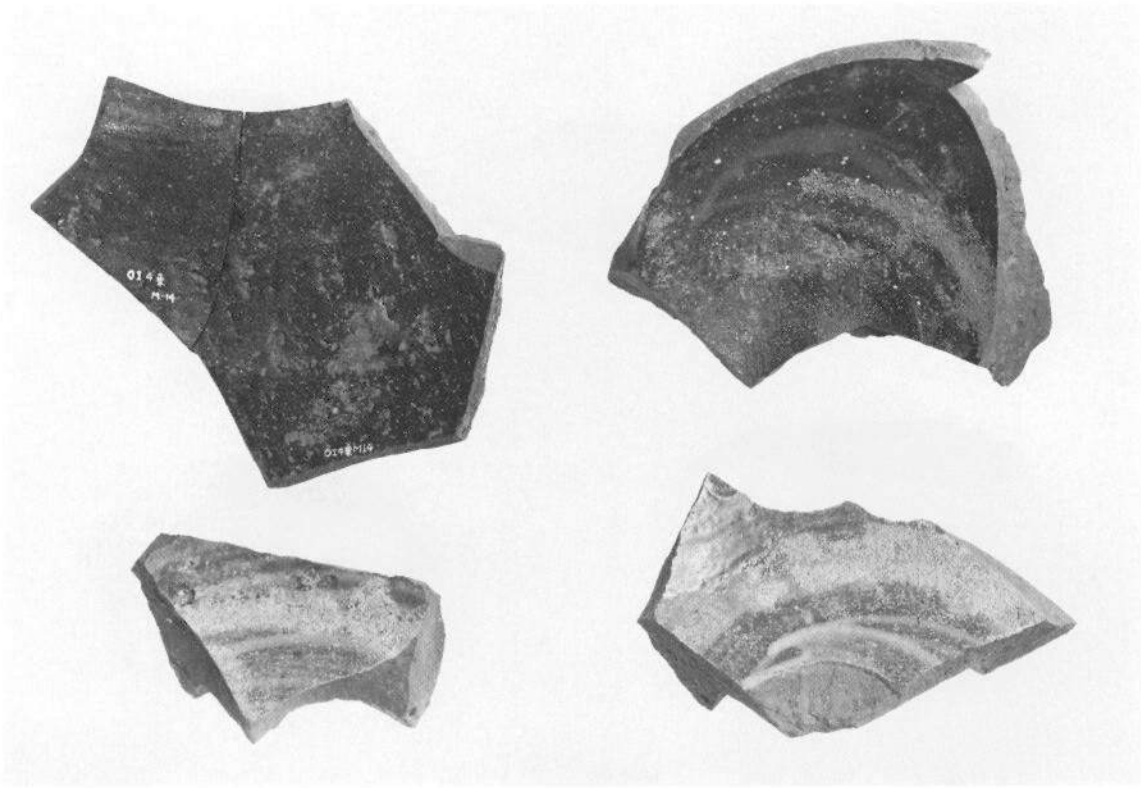
(2)　Ⅵ区東14号溝出土　肥前染付磁器　皿（17世紀後半～18世紀前半）



(1)　Ⅵ区東14号溝出土　肥前・肥前系染付磁器　皿・蓋類(17世紀中葉～幕末)

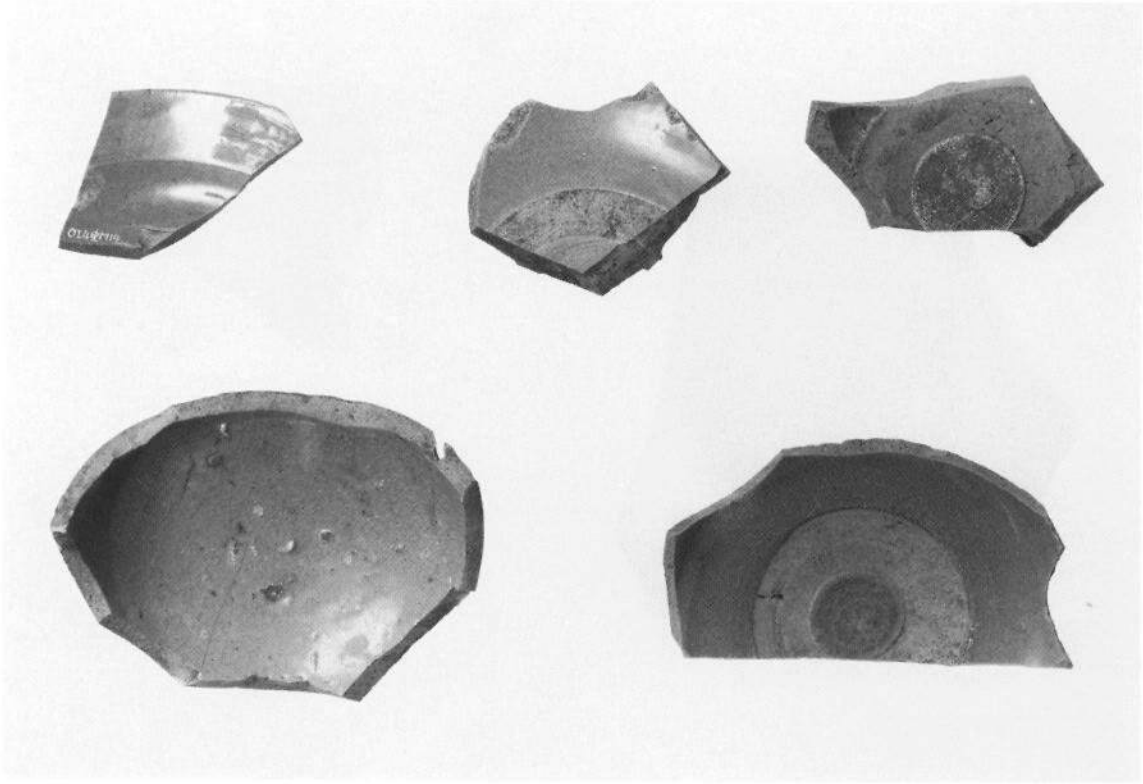


(2)　同　上（裏）

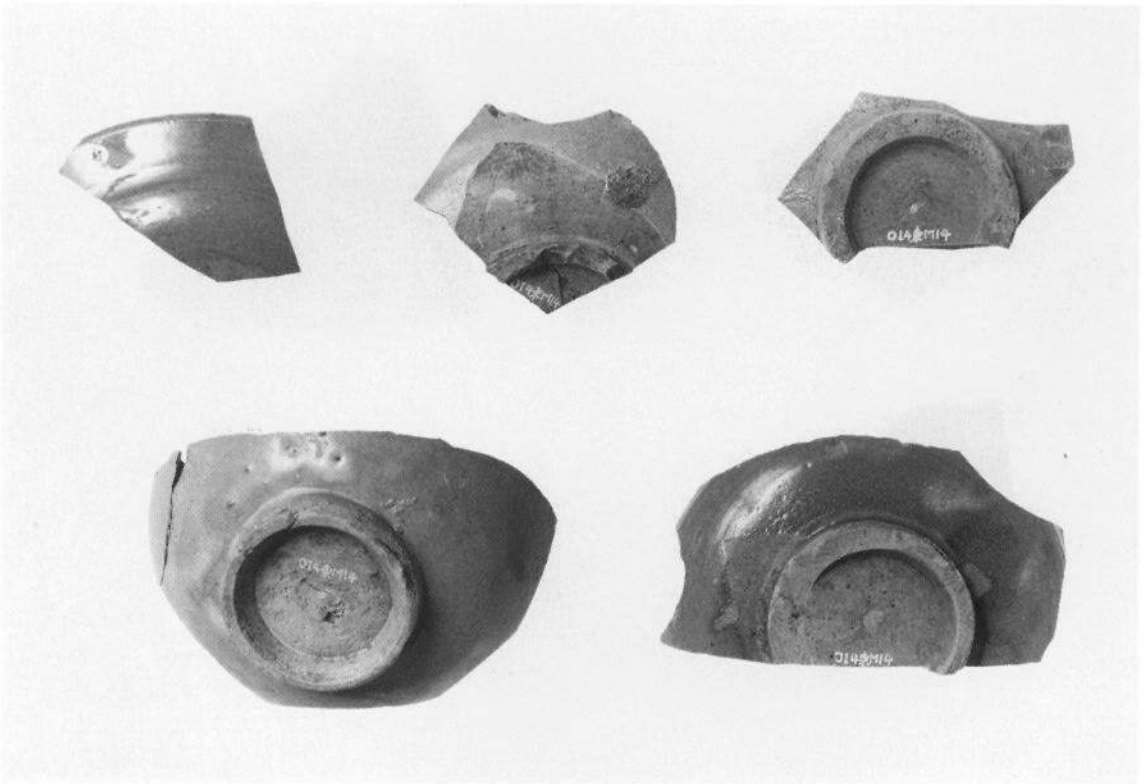


(1)　Ⅵ区東14号溝出土陶器　甕(唐津系　17世紀～幕末)

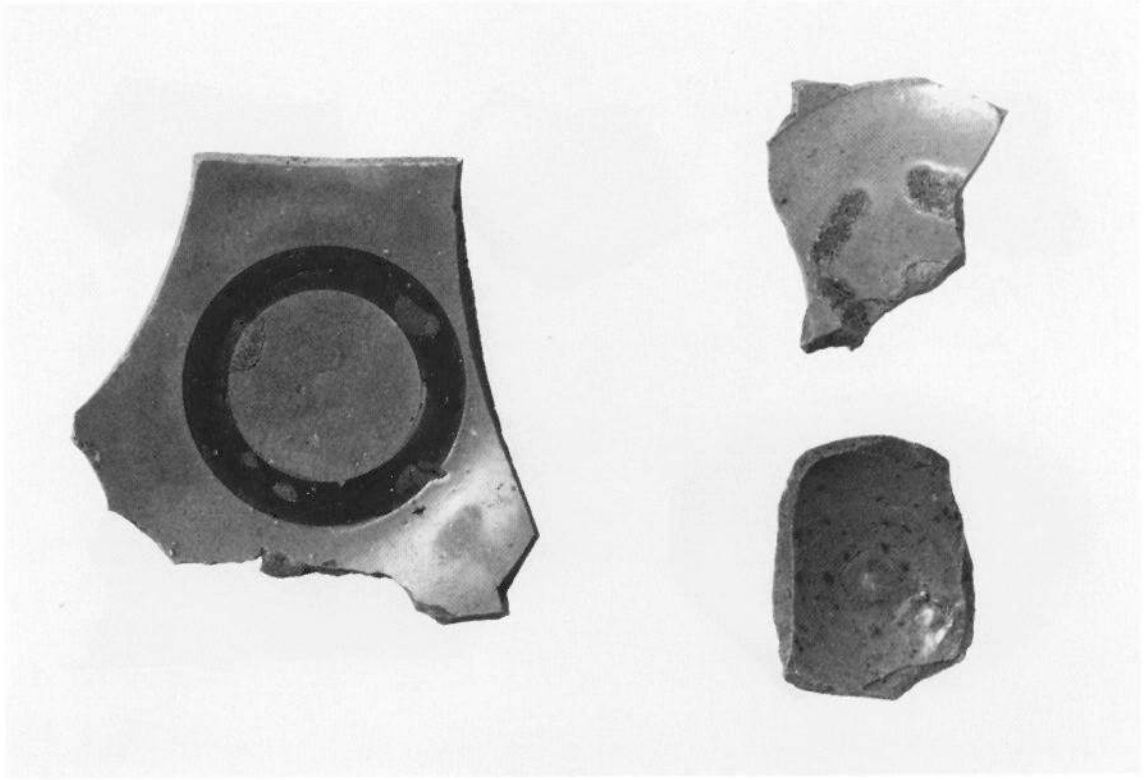
(2)　同　上(裏)



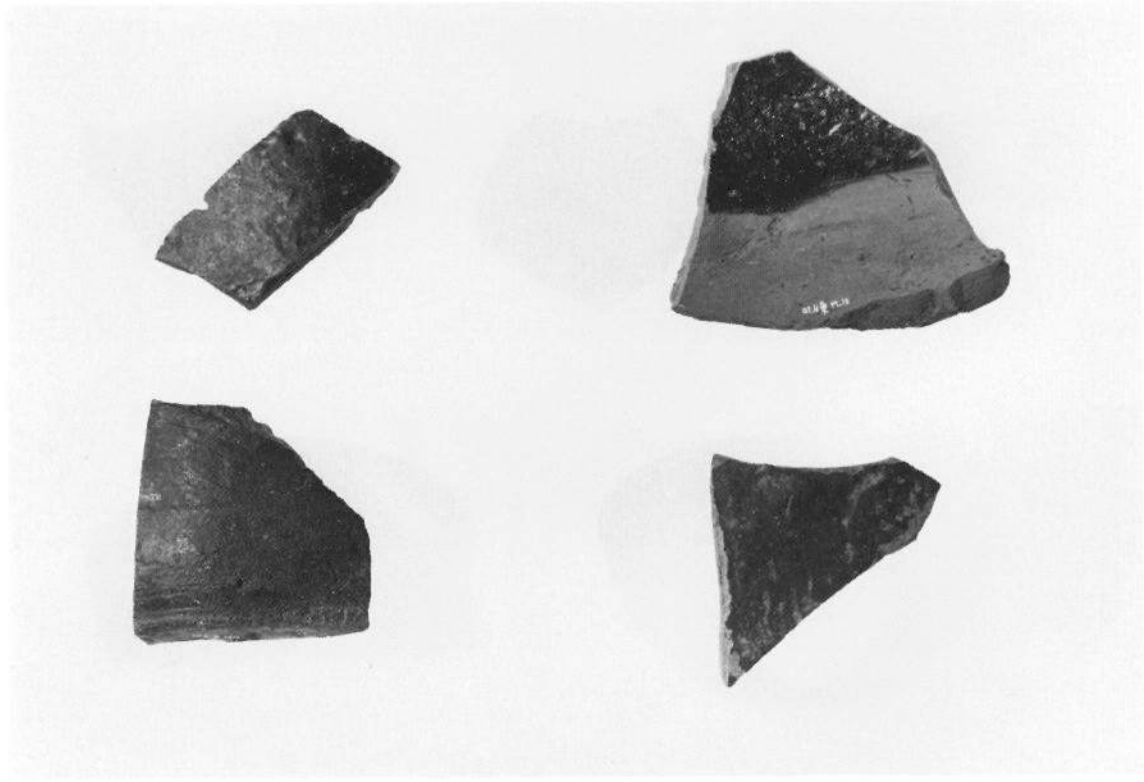
(1)　VI区東14号溝出土　唐津内野山窯陶器　碗（17世紀末～18世紀中葉）



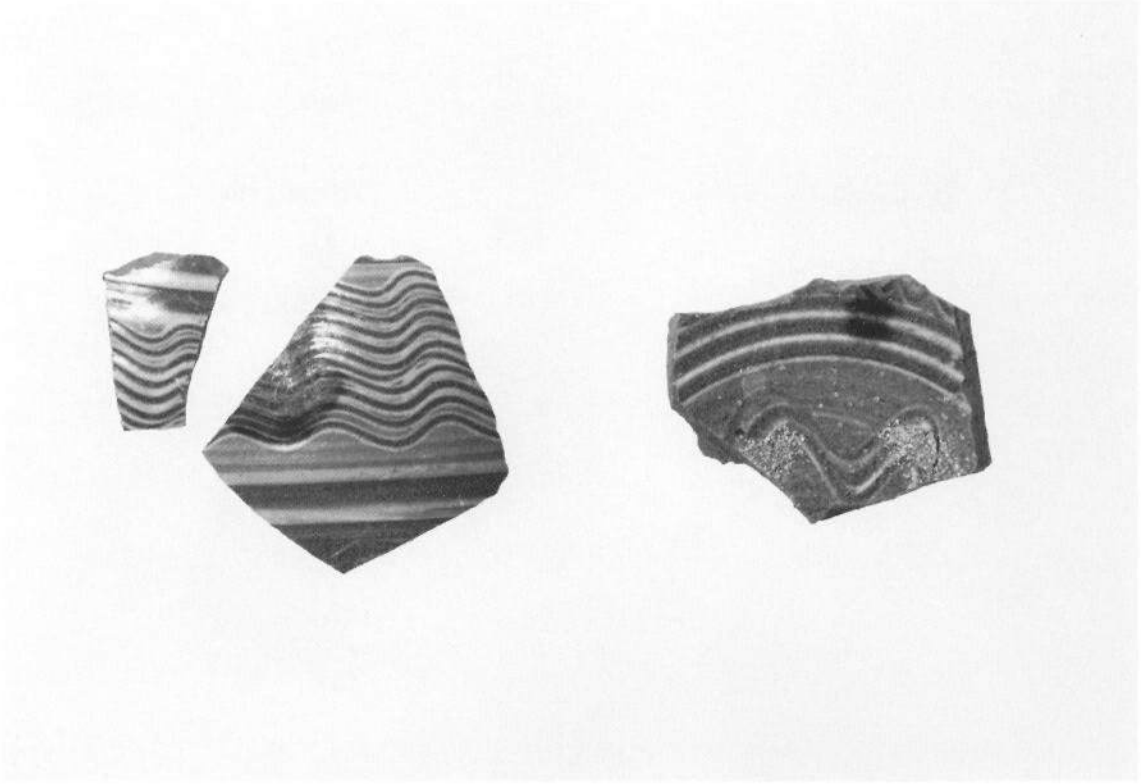
(2)　同　上（裏）



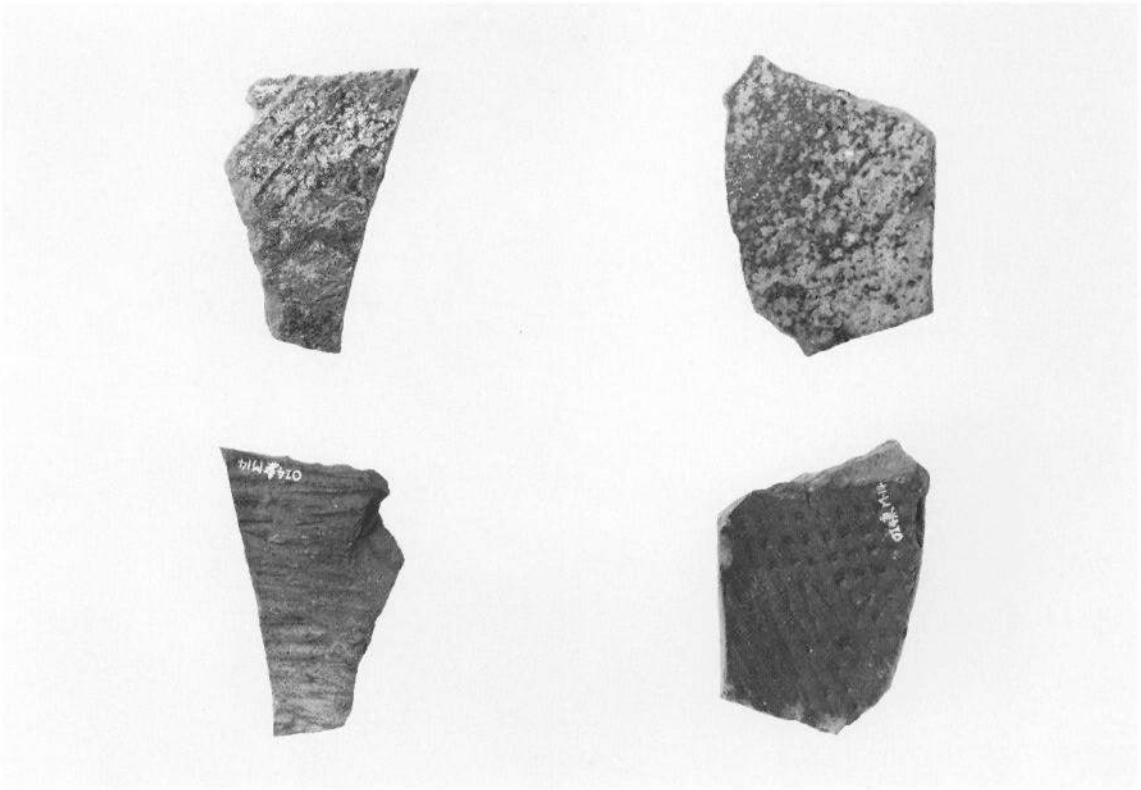
(1)　Ⅵ区東14号溝出土陶器　碗・皿(唐津・唐津系　17世紀)



(2)　Ⅵ区東14号溝出土陶器　甕類(唐津系　16世紀末～17世紀初頭)



(1)　Ⅵ区東14号溝出土陶器　瓶(左 唐津系　17・18世紀) 皿(右 唐津系　17世紀)



(2)　Ⅵ区東14号溝出土陶器　上(表)・下(裏)(常滑もしくは備前　12～14世紀)

福岡県行政資料	
分類番号 JH	所属コード 2133051
登録年度 62	登録番号 13

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 －15－

昭和63年3月31日

発行　福岡県教育委員会
福岡市博多区東公園7番7号

印刷　青柳工業株式会社　印刷部
福岡市中央区渡辺通二丁目9番31号